

平成 20 年度
神戸市埋蔵文化財年報



2011

神戸市教育委員会

平成 20 年度
神戸市埋蔵文化財年報

2011

神戸市教育委員会



fig.1 雲井遺跡第28次調査 3区第4遺構面（北から）



fig.2 雲井遺跡第28次調査 3区SD401（東から）



fig.3 雲井遺跡第28次調査 3区SD401出土遺物



fig.4 雲井遺跡第28次調査 玉作り関連遺物



fig.5 雲井遺跡第30次調査 SB301出土遺物



fig.6 雲井遺跡第30次調査 SK301・SD301出土遺物



fig.7 藤原遺跡第27次調査 SB01



fig.8 玉津・田中遺跡第37次調査
碧玉製管玉 ガラス小玉 滑石製有孔円板



fig.9 上沢遺跡第56次調査 瓦当（軒丸瓦・軒平瓦）



fig.10 出合遺跡第40次調査 36トレンチ拡張区1号墳（東から）



fig.11 出合遺跡第40次調査
35トレンチ4号墳（西から）



fig.12 出合遺跡第40次調査
36トレンチ拡張区2号墳（東から）



fig.13 出合遺跡第40次調査 40トレンチ3号墳（北から）

序

神戸は古来より、海路、陸路の要衝として栄えてまいりました。その痕跡は市内の随所で窺い知ることができ、多くの遺跡が知られております。

近年、開発に伴い消滅してしまう遺跡の記録保存を目的とした発掘調査が盛んに行われております。その成果は、地域の歴史・文化をより深く解明し、また、それを将来に伝える媒体として重要なものと言えるでしょう。

本年報におきましては、平成20年度に市内において実施いたしました発掘調査の成果を、概要として掲載いたしました。本書から、地中に刻まれた先人の足跡に想いを馳せ、埋蔵文化財への理解を深めていただければ幸いです。

最後に、発掘調査および本年報作成にあたり、ご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は、神戸市教育委員会が平成20年度に実施した埋蔵文化財発掘調査事業の概要である。事業に関わる発掘調査は、下記の調査組織によって実施した。

調査関係組織表

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）

塙上重光 前神戸女子短期大学教授 工学普通 大阪府狹山池博物館館長 和田晴吾 立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長	橋口秀志	事務担当学芸員	阿部敬生	中谷 正
社会教育部長	黒住卓久	調査担当学芸員	口野博史	西岡誠司
参事（文化財課長事務取扱）	柏木一孝	須藤 宏	佐伯二郎	浅谷誠吾
主幹（埋蔵文化財指導係長事務取扱）	丸山 潔	川上厚志	石島三和	阿部 功
事務担当学芸員	谷 正俊	斎木 嶽	中村大介	小林さやか
	松林宏典	井尻 格	主幹（埋蔵文化財センター所長事務取扱）	渡辺伸行
埋蔵文化財調査係長	千種 浩	文化財課主査		丹治康明
文化財課主査	安田 澄	担当学芸員	富山直人	池田 裕

（財）神戸市体育協会

会長	表 孟宏	総務課長	赤沢 徹
副会長（専務理事事務取扱）	小川雄三	総務係長	蓑輪龍男
常務理事	研弘四郎	調査担当学芸員 東喜代秀 内藤俊哉	藤井太郎

- 本書に記載した位置図は、神戸市発行5万分の1神戸市全図および2千5百分の1都市計画図を使用した。調査範囲が広域な遺跡や目標となるものが入らない地点の遺跡の位置図については、キャプションに縮尺を表記している。
- 本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当者が執筆し、「I.平成20年度事業の概要」の1～5については千種 浩・安田 澄が、6については渡辺伸行が、「III.平成20年度の保存科学調査・作業の概要」については、中村大介がそれぞれ執筆した。また、平成20年度神戸市埋蔵文化財調査地点図および調査地点位置図については丸山 潔が作成した。尚、編集については千種および池田 裕が行った。
- 本文中掲載の写真的撮影および遺構図・遺物実測図のトレースについては各調査担当者が行ったが、fig.88について丸山が、fig.211, 212, 255, 256, 263, 268については杉本和樹氏（西大寺フォト）が撮影を行った。また、空中写真的fig.184～186, 194, 195, 229の撮影については㈱G E Oソリューションズが、fig.49の撮影については㈱エムズ（東海アナース㈱委託）が行った。尚、「III.平成20年度の保存科学調査・作業の概要」のfig.255, 256, 263, 268以外については中村が、fig.205の光学顕微鏡写真については小林克也氏（㈱パレオ・ラボ）が撮影を行った。
- 巻頭カラー写真は、fig.1については丸山が、fig.2, 5～9については杉本和樹氏（西大寺フォト）が、fig.2, 10～13については調査担当者がそれぞれ行った。
- 本文中の「平水日向遺跡第35次調査」における出土木製品の樹種同定については、㈱パレオ・ラボに依頼し、同社の小林克也氏の執筆によるものである。
- 表紙写真および裏表紙写真は、いずれも「雲井遺跡第28次調査」の出土遺物で、杉本和樹氏（西大寺フォト）が撮影を行った。
- 各市内の調査次数については、引き続き改正作業中である。

目 次

序 例言

I.	平成20年度 事業概要.....	1
	平成20年度 埋蔵文化財発掘調査一覧.....	10
	平成20年度 神戸市埋蔵文化財調査位置図.....	13
II.	平成20年度の発掘調査.....	17
1.	出口遺跡第8次調査	17
2.	北青木遺跡第6次調査	19
3.	本山北畠遺跡第3次調査	22
4.	西岡本遺跡第7次調査	23
5.	住吉宮町遺跡第45次調査	25
6.	住吉宮町遺跡第46次調査	27
7.	六甲川上流域水干群第1次調査	29
8.	篠原遺跡第27次調査	33
9.	都賀遺跡第20次調査	37
10.	神ノ木遺跡第1次調査	39
11.	日暮遺跡第32次調査	42
12.	日暮遺跡第33次調査	47
13.	雲井遺跡第27次調査	49
14.	雲井遺跡第28次調査	51
15.	雲井遺跡第29次調査	60
16.	雲井遺跡第30次調査	61
17.	楠・荒田町遺跡第43次調査	65
18.	楠・荒田町遺跡第44次調査	67
19.	兵庫津遺跡第48次調査	69
20.	兵庫津遺跡第49次調査	72
21.	兵庫津遺跡試掘調査	80
22.	和田岬砲台上塁確認調査	87
23.	大開遺跡第13次調査	91
24.	上沢遺跡第56次調査	93
25.	口下部遺跡第12次調査	99
26.	中遺跡第23次調査	101
27.	中遺跡第24・25・26・27次調査	103
28.	若松町東遺跡第2次調査	106
29.	大橋町東遺跡第1次調査	109
30.	松野遺跡第41次調査	111
31.	松野遺跡第42-1・2次調査	112
32.	松野遺跡第43次調査	114
33.	垂水・日向遺跡第35次調査	116
34.	潤和遺跡第4次調査	120
35.	日輪寺遺跡第10・11・12次調査	121
36.	日輪寺遺跡第13次調査	123
37.	玉津・出中遺跡第37次調査	125
38.	出合遺跡第40次調査	129
39.	出合遺跡第41次調査	133
40.	出合遺跡第42次調査	134
41.	出合遺跡第43次調査	137
42.	垂水・日向遺跡第34次調査〔遺物整理作業〕	139
III.	平成20年度の保存科学調査・作業の概要.....	150

表 目 次

表1 文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧.....	1
表2 発掘調査面積.....	1
表3 発掘調査面積別件数.....	1
表4 写真・図面貸出一覧表（1）.....	3
表5 写真・図面貸出一覧表（2）.....	4
表6 平成20年度の企画展示.....	8
表7 講演会・神戸の歴史遺産と考古学（全8回）.....	8
表8 平成20年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（1）.....	10
表9 平成20年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（2）.....	11
表10 平成20年度出土遺物整理一覧表.....	12
表11 トレンチ（地区）別遺構面構成表.....	81
表12 垂水・日向遺跡第34次調査出土木製品の樹種同定結果	118
表13 樹種同定結果一覧.....	119
表14 種類・器種別破片数.....	147
表15 種類・器種別口縁部数.....	147
表16 刻法量一覧.....	156
表17 平成20年度出土金属製品.....	157
表18 平成20年度出土木製品.....	157
表19 平成20年度自然科学分析委託.....	157

挿 図 目 次

fig. 1	雲井遺跡第28次調査3区第4遺構面(北から)〔巻頭カラー〕	29
fig. 2	雲井遺跡第28次調査3区SD401(東から)〔巻頭カラー〕	30
fig. 3	雲井遺跡第28次調査3区SD401出土遺物〔巻頭カラー〕	30
fig. 4	雲井遺跡第28次調査工作り廻追遺物〔巻頭カラー〕	31
fig. 5	雲井遺跡第30次調査SB301出土遺物〔巻頭カラー〕	31
fig. 6	雲井遺跡第30次調査SK301・SD302出土遺物〔巻頭カラー〕	32
fig. 7	猿原遺跡第30次調査SB01出土遺物〔巻頭カラー〕	32
fig. 8	玉津田中遺跡第37次調査碑王製瓦 ・ガラス小玉・滑石製乳孔円板〔巻頭カラー〕	32
fig. 9	上沢遺跡第56次調査瓦当(軒丸瓦・軒平瓦)〔巻頭カラー〕	33
fig. 10	出合遺跡第40次調査36トレンチ拡張区 1号墳(東から)〔巻頭カラー〕	33
fig. 11	出合遺跡第40次調査35トレンチ4号墳(西から)〔巻頭カラー〕	33
fig. 12	出合遺跡第40次調査36トレンチ拡張区 2号墳(東から)〔巻頭カラー〕	33
fig. 13	出合遺跡第40次調査0トレンチ3号墳(北から)〔巻頭カラー〕	34
fig. 14	普及啓発事業	9
fig. 15	平成20年度埋蔵文化財年報掲載遺跡位置図	13
fig. 16	調査地点位置図(1) S = 1 : 50,000	14
fig. 17	調査地点位置図(2) S = 1 : 50,000	14
fig. 18	調査地点位置図(3) S = 1 : 50,000	15
fig. 19	調査地点位置図(4) S = 1 : 50,000	15
fig. 20	調査地点位置図(5) S = 1 : 50,000	16
fig. 21	調査地点位置図(6) S = 1 : 50,000	16
fig. 22	調査地位置図 S = 1 : 2,500	17
fig. 23	調査区北半部(東から)	17
fig. 24	調査区平面図・土層断面図	18
fig. 25	調査地位置図 S = 1 : 2,500	19
fig. 26	調査範囲図	20
fig. 27	II・III区平面図および土層断面模式図	20
fig. 28	II区SX02(西から)	21
fig. 29	SX02平面・断面図	21
fig. 30	SX02出土広口壺	21
fig. 31	調査地位置図 S = 1 : 2,500	22
fig. 32	調査区平面図・土層断面図	22
fig. 33	調査地位置図 S = 1 : 2,500	23
fig. 34	調査区平面図・土層断面図	24
fig. 35	調査区北半(南から)	24
fig. 36	調査区南半(北から)	24
fig. 37	調査地位置図 S = 1 : 2,500	25
fig. 38	I区第1遺構面(南東から)	25
fig. 39	第1遺構面平面図	26
fig. 40	第2遺構面平面図	26
fig. 41	調査地位置図 S = 1 : 2,500	27
fig. 42	調査区平面図・土層断面図	28
fig. 43	第2遺構面・古墳(南東から)	28
fig. 44	第2遺構面・古墳北周溝(東から)	28
fig. 45	調査地位置図 S = 1 : 2,500	29
fig. 46	石組遺構(南東から)	30
fig. 47	石材の矢穴	30
fig. 48	石組遺構平面図	31
fig. 49	石組遺構(空中から)	31
fig. 50	石組遺構(西から)	32
fig. 51	石組遺構内部(西から)	32
fig. 52	石組遺構内部(西から)	32
fig. 53	調査地位置図 S = 1 : 2,500	33
fig. 54	調査区平面図(第1遺構面)	33
fig. 55	調査区平面図(第2遺構面)	33
fig. 56	SB01出土遺物(1)	34
fig. 57	SB01出土遺物(2)	35
fig. 58	東半第1遺構面	36
fig. 59	東半第2遺構面	36
fig. 60	調査地位置図 S = 1 : 2,500	37
fig. 61	調査区平面図・土層断面図	38
fig. 62	調査区(北から)	38
fig. 63	調査地位置図 S = 1 : 2,500	39
fig. 64	調査区北半(東から)	39
fig. 65	出土遺物	40
fig. 66	調査区平面図・土層断面図	41
fig. 67	調査地位置図 S = 1 : 2,500	42
fig. 68	調査区平面図・土層断面図	43
fig. 69	第1遺構面(東から)	43
fig. 70	第2遺構面(東から)	43
fig. 71	出土遺物	44
fig. 72	SK201平面・断面図および出土遺物	44
fig. 73	SK201(東から)	45
fig. 74	SP249平面・断面図および出土遺物	45
fig. 75	SP249(南東から)	45
fig. 76	SX201(南東から)	46
fig. 77	調査地位置図 S = 1 : 2,500	47
fig. 78	調査区平面図・土層断面図	48
fig. 79	3区第2遺構面全景(南東から)	48
fig. 80	SP2110土師器皿出土状況	48
fig. 81	調査地位置図 S = 1 : 2,500	49
fig. 82	調査区平面図・土層断面図	50
fig. 83	2・3区(東から)	50
fig. 84	4・5区(東から)	50
fig. 85	調査地位置図 S = 1 : 2,500	51
fig. 86	調査地区剖面図	51
fig. 87	第3遺構面平面図	52
fig. 88	SB501・502(北西から)	52
fig. 89	第4遺構面平面図	52
fig. 90	SB301・302・303(南から)	52
fig. 91	出土遺物(1)〔逆L字口縁堀〕	53

fig.92	出土遺物（2）〔大和型甕〕	53	fig.141	2区第7遺構面（北から）	77
fig.93	出土遺物（3）〔紀伊型甕〕	54	fig.142	第6・7・8遺構面出土遺物	78
fig.94	出土遺物（4）	55	fig.143	調査地周辺推定復元図S=1:3,000	79
fig.95	出土遺物（5）〔牛駒西麓産〕	56	fig.144	調査地位位置図S=1:2,500	80
fig.96	出土遺物（6）	57	fig.145	I区中亘遺構面（西から）	82
fig.97	出土遺物（7）	58	fig.146	Ⅲ区石組水路〔4期〕（東から）	82
fig.98	出土遺物（8）	59	fig.147	Ⅲ区近世～近代遺構面〔南から〕	82
fig.99	武器形青銅器鑄型〔砥石〕実測図	59	fig.148	IV-2区石組水路〔4期〕（西から）	83
fig.100	磨製石剣実測図	59	fig.149	V-2区水路ほか〔2期〕（西から）	84
fig.101	調査地位位置図S=1:2,500	60	fig.150	V-3区近世地層〔東から〕	84
fig.102	調査区平面図・土層断面図	60	fig.151	V-4区近世石組水路〔5期〕（西から）	85
fig.103	調査地位位置図S=1:2,500	61	fig.152	VI-1区近世遺構面〔7期〕（西から）	85
fig.104	調査区平面図〔第1遺構面〕・土層断面図	61	fig.153	調査地位位置図S=1:5,000	87
fig.105	SK101出土遺物	61	fig.154	史跡と田畠台現況写真〔南内から〕	87
fig.106	調査区平面図〔第2遺構面〕	62	fig.155	土壠推定位置図S=1:2,500	88
fig.107	調査区平面図〔第3遺構面〕	62	fig.156	トレンチ配置図S=1:400	89
fig.108	第3遺構面南北半〔南から〕	62	fig.157	西トレント（西から）	90
fig.109	第3遺構面南北半〔北から〕	62	fig.158	調査地位位置図S=1:2,500	91
fig.110	SB301・SK301・SD302出土遺物	63	fig.159	調査区平面図・土層断面図	92
fig.111	SD301遺物出土状況	64	fig.160	調査区〔北から〕	92
fig.112	SB301遺物出土状況	64	fig.161	調査地位位置図S=1:2,500	93
fig.113	SB301遺物出土状況	64	fig.162	第3遺構面平面図	94
fig.114	SD301出土石礫	64	fig.163	第3遺構面〔西から〕	94
fig.115	調査地位位置図S=1:2,500	65	fig.164	出土遺物1	95
fig.116	調査区平面図	66	fig.165	出土遺物2	96
fig.117	第1遺構面〔南から〕	66	fig.166	出土遺物3	97
fig.118	第2遺構面〔南から〕	66	fig.167	出土遺物4	98
fig.119	調査地位位置図S=1:2,500	67	fig.168	調査地位位置図S=1:2,500	99
fig.120	調査区平面図・土層断面図	68	fig.169	調査区平面図・土層断面図	100
fig.121	調査区東半部〔西から〕	68	fig.170	調査区西半〔東から〕	100
fig.122	調査区西半部〔東から〕	68	fig.171	SK03〔南から〕	100
fig.123	調査地位位置図S=1:2,500	68	fig.172	調査地位位置図S=1:2,500	101
fig.124	調査区〔北から〕	69	fig.173	3区〔西から〕	101
fig.125	調査区平面図・土層断面図・石垣立面図	70	fig.174	調査区平面図・土層断面図	102
fig.126	石垣遺構および溝〔南から〕	70	fig.175	出土遺物	102
fig.127	SK01〔西から〕	71	fig.176	SK01〔西から〕	102
fig.128	SK02〔東から〕	71	fig.177	SP01〔西から〕	102
fig.129	調査地位位置図S=1:2,500	72	fig.178	調査地位位置図S=1:2,500	103
fig.130	調査区平面図（1）	73	fig.179	第24次調査・調査区平面図・土層断面図	104
fig.131	I区第1遺構面〔南から〕	73	fig.180	調査地平面図	105
fig.132	I区第2遺構面〔南西から〕	73	fig.181	調査地位位置図S=1:2,500	106
fig.133	調査区平面図（2）	74	fig.182	1~3・5~8区平面図	106
fig.134	SE301平面・断面図	74	fig.183	調査区平面図・土層断面図	107
fig.135	SE301井戸内出土遺物	74	fig.184	8-2区〔東から〕	107
fig.136	3区第3遺構面〔北から〕	74	fig.185	8-3区〔東から〕	107
fig.137	第4遺構面上面疊地層出土遺物	74	fig.186	8-1区〔北西から〕	108
fig.138	調査区平面図（3）	75	fig.187	8-1区SD801〔北西から〕	108
fig.139	I区第5遺構面〔南西から〕	76	fig.188	調査地位位置図S=1:2,500	109
fig.140	第5遺構面上面疊地層出土遺物	76	fig.189	調査区平面図	110

fig. 190 調査位置図 S = 1 : 2,500	111
fig. 191 調査区平面図・土層断面図	111
fig. 192 調査位置図 S = 1 : 2,500	112
fig. 193 調査区平面図	113
fig. 194 42 - 2 次調査第1遺構面（空中から）	113
fig. 195 42 - 1 次調査東半部（南から）	113
fig. 196 調査位置図 S = 1 : 2,500	114
fig. 197 1 区（東から）	114
fig. 198 2 区（北東から）	115
fig. 199 3 区（北西から）	115
fig. 200 調査区平面図・土層断面図	115
fig. 201 調査位置図 S = 1 : 2,500	116
fig. 202 調査区南半部（北西から）	117
fig. 203 SX01上層断面（北東から）	117
fig. 204 調査区平面図・土層断面図	117
fig. 205 垂水・日向遺跡第34次調査 出土木製品の光学顕微鏡写真	119
fig. 206 調査位置図 S = 1 : 2,500	120
fig. 207 調査区平面図・土層断面図	120
fig. 208 調査位置図 S = 1 : 2,500	121
fig. 209 調査区（北東から）	122
fig. 210 調査区平面図	122
fig. 211 SK08山被葉八角葉草文軒丸瓦	122
fig. 212 SK08出土十三葉花弁均窓唐草文軒平瓦	122
fig. 213 調査位置図 S = 1 : 2,500	123
fig. 214 調査区およびSB02平面図・土層断面図	124
fig. 215 調査区（北から）	124
fig. 216 SB02（北から）	124
fig. 217 調査位置図 S = 1 : 2,500	125
fig. 218 調査区平面図・土層断面図	126
fig. 219 2 区（北から）	126
fig. 220 4 区（南から）	126
fig. 221 出土遺物	127
fig. 222 SD01・SB01（北から）	127
fig. 223 SK05・06・07（北から）	128
fig. 224 SP99（山から）	128
fig. 225 調査位置図 S = 1 : 2,500	129
fig. 226 調査区平面図	130
fig. 227 36トレンチ拡張区・1号墳および2号墳（西から）	131
fig. 228 40トレンチ中央部（東から）	131
fig. 229 1号墳・2号墳（北側上空から）	131
fig. 230 出合遺跡発見の古墳の位置	132
fig. 231 調査位置図 S = 1 : 2,500	133
fig. 232 調査区平面図・土層断面図	133
fig. 233 調査位置図 S = 1 : 2,500	134
fig. 234 第1遺構面 SD101周辺（東から）	134
fig. 235 調査区平面図（第1遺構面）・土層断面図	135
fig. 236 SK101平面・断面図	135
fig. 237 SK101（北東から）	135
fig. 238 出土遺物	135
fig. 239 調査区平面図（第2遺構面）・SX201平面図	136
fig. 240 SX201（東から）	136
fig. 241 調査位置図 S = 1 : 2,500	137
fig. 242 2 区北側壁面上層断面図	137
fig. 243 3・4 区平面図・土層断面図およびSD07平面・断面図	138
fig. 244 4 区（西から）	138
fig. 245 調査位置図 S = 1 : 2,500	139
fig. 246 調査区平面図	139
fig. 247 土師器・須恵器・瓦器の径高分布	141
fig. 248 SD03出土遺物（土師器）	143
fig. 249 SD03出土遺物（須恵器）	144
fig. 250 SD03出土遺物	145
fig. 251 SD03出土遺物（瓦器）	146
fig. 252 垂水・日向遺跡内の組成比較	148
fig. 253 土層転写作業	150
fig. 254 転写作業完了後状況	150
fig. 255 調査対象資料 S - 1、2、4	151
fig. 256 同左	151
fig. 257 S - 1 - 1 頭部付着状況（60倍）	151
fig. 258 S - 1 - 1 落射光（125倍）	151
fig. 259 S - 1 - 1 SEM反射電子像（700倍）	151
fig. 260 S - 2 - 2 頭部付着状況（25倍）	151
fig. 261 S - 2 - 2 透過光（125倍）	151
fig. 262 S - 2 - 2 SEM反射電子像（3,500倍）	151
fig. 263 S - 3 土師器小型広口壺	152
fig. 264 S - 3 - 4 落射光（63倍）	152
fig. 265 S - 3 - 4 SEM反射電子像（1,050倍）	152
fig. 266 S - 4 - 2 落射光（125倍）	152
fig. 267 S - 4 - 2 SEM反射電子像（2,500倍）	152
fig. 268 S - 5 土師器壺	152
fig. 269 S - 5 - 1 落射光（125倍）	152
fig. 270 S - 5 - 1 SEM反射電子像（700倍）	152
fig. 271 SK201出土土師器壺	152
fig. 272 同左壺内埋納銅錢	154
fig. 273 SK201出土土師器壺底面	155
fig. 274 圧痕1～4（2.5倍）	155
fig. 275 圧痕4（7.5倍）	155
fig. 276 圧痕5（2.6倍）	155
fig. 277 圧痕5レプリカ（4倍）	155
fig. 278 粉粒長／幅散布図	156
fig. 279 炭化コムギ胚乳（8倍、左：腹面、右：背面）	156
fig. 280 炭化オムギ胚乳（8倍、左：腹面、右：背面）	156

I. 平成20年度 事業の概要

1. 開発指導

周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等については、文化財保護法第93条・第94条に基づく届出・通知が必要であり、各事業者に対して必要とされる保護措置を指示している。また、建築確認申請に伴う事前届出書の閲覧を実施し、周知の埋蔵文化財包蔵地内における建築行為については埋蔵文化財発掘届出書の提出を促している。

平成20年度の文化財保護法に基づく届出・通知件数は、694件（前年度770件）であり、このうち、民間事業者・個人による第93条の届出が629件（前年度724件）であった。

また、開発行為事前審査願130件（前年度170件）、試掘調査依頼は244件（前年度226件）であった。届出件数は前年度に比べて僅かに減少しているが、試掘依頼件数は前年度をわずかに上回っている。

表1 文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧

No.	内 容	件 数
1	発見・発掘届(保護法93・94条関係)	694件
i	民間の事業に伴う発掘届(93条)	629件
ii	公共の事業に伴う発掘通知(94条)	65件
iii	発掘届・発見通知(92条)	0件
2	発掘調査の報告(99条)	46件
3	開発行為事前審査等各種申請	130件
4	分布調査依頼書(埋蔵文化財分布の有無の検討依頼書・調査作成)	185件
5	試掘調査(依頼件数)	244件
6	発掘調査(大規模確認調査も含む)	51件
i	民間事業に伴う発掘調査	38件
ii	公共事業に伴う発掘調査	9件
iii	埋蔵文化財に伴う発掘調査	4件
7	工事立会	67件
8	整理作業(復興調査整理作業を含む)	10件

2. 埋蔵文化財事業

平成20年度に実施した埋蔵文化財調査事業は60件で、それに要した経費（出土品整理・保存処理を含む）の総額は、340,970千円であった。

国庫補助事業 文化財保護法の規程と国の補助事業の採択基準により採択を受けたものについて、調査事業と保存処理事業を実施している。埋蔵文化財緊急調査費国庫補助事業は、事業費78,000千円であった。

このうち、脆弱遺物の恒久的な保存を目的として八幡神社古墳群8号墳出土の鉄製品、青銅製品や兵庫津遺跡第21次調査出土の銅製品、鉄製品、端谷城跡第5次調査出土の鉄製胴丸などの保存処理を実施した。また、復興調査整理として、平成10年度に調査を実施した兵庫津遺跡の出土遺物整理を継続して行った。

表2 発掘調査面積

	民間関連事業	公共関連事業	合計
調査面積	14,863 m ²	7,523 m ²	22,386 m ²
延べ調査面積	36,427 m ²	7,548 m ²	43,975 m ²

表3 発掘調査面積別件数

調査面積	件数	%	調査面積	件数	%
100 m ²	18件	36	1,001~2,000 m ²	3件	6
101~300 m ²	19件	38	2,001~5,000 m ²	1件	2
301~500 m ²	5件	10	5,000 m ² 以上	1件	2
501~1,000 m ²	3件	6	合計	50件	100

市内発掘調査 発掘調査件数は昨年度（71件）と比較すると減少している。公共事業の減少、民間の景気動向の影響も受けている。さらに、試掘調査によって得られた情報を基に、可能な限り建物の基礎が遺跡に影響を与えないように、設計変更を求めていることによって、発掘調査に至らずに保存を行っている件数も多い。

発掘調査面積は22,386m²（延べ43,975m²）で、このうち民間関連事業によるものが14,863m²（延べ36,427m²）と昨年度と同様に6割強を占めている。面積別でみると、300m²以下の件数が37件と約7割を占めており、昨年度の6割から増加しており、より一層、小規模傾向が強まっている。一方件数は少ないが大規模な現場もあり、さらに2極化が進行している。

現地説明会 発掘調査の現場において、実際に遺跡を体感していただく機会として、現地説明会を4回開催した。9月13日の住吉宮町遺跡第45次調査に201名、10月9日の雲井遺跡第28次調査に370名、12月20日住吉宮町遺跡第46次調査に61名、雲井遺跡28次調査第2回に294名の参加があった。雲井遺跡は三宮駅に隣接する立地にあることと、調査が大規模な調査であったことから、調査について衆目を集めていたため、特に多くの参加者があった。

資料の活用 発掘調査によって保存された資料には、主に出土品と写真や図面の記録類があり、これらは他の機関等からの要望があれば、貸出等を行っている。写真・図面については、今年度は49件の依頼があり188点を貸出した。貸出資料としては、五色塚古墳関係が最も多く、19件、33点を数える。これらは主に学校教育関連図書、博物館等の展示図録等、歴史関係図書、情報誌などへの掲載を利用目的としている。写真・図面の貸出については、一覧表（表4・5）に示すとおりである。

出土遺物の貸出は12件、278点あり、塩田東古墳出土青銅鏡は文化庁主催の「発掘された日本列島2008」で全国を巡回し、端谷城や大開遺跡、新方遺跡、祇園遺跡などの資料は日本各地の博物館で展示された。

その他に、出土品について資料調査の依頼が21件約250点に対してあり、大学生、研究者が大開遺跡、祇園遺跡、新方遺跡などの資料を調査している。

3. 刊行物一覧

平成20年度に刊行物は下記のとおりである。

『平成18年度 神戸市埋蔵文化財年報』〔額価1,200円〕

『神戸市埋蔵文化財分布図』〔額価500円〕

『日輪守遺跡第10・11・12次発掘調査報告書』〔額価なし〕

『木山中野遺跡第三次発掘調査報告書』〔額価700円〕

『上沢遺跡第55次発掘調査報告書』〔額価1,100円〕

『長田神社境内遺跡第17次発掘調査報告書』〔額価500円〕

『西岡本遺跡第4・5・6次発掘調査報告書』〔額価1,000円〕

『水笠遺跡第26・27・28・29次発掘調査報告書』〔額価800円〕

『幕末の巨人プロジェクト 人阪湾防備と和田岬砲台』〔額価なし〕

『近代化遺産 神戸モダニズム探訪』〔額価なし〕

『名勝再度公園・再度山永久植生保存地・神戸外国人墓地保存管理計画策定報告書』

〔額価なし〕

表4 写真・図面貸出一覧表(1)

No.	申請者(団体名・個人名)	利用目的・内容	資料名	資料枚数
1	垂水区まちづくり推進市民課	区役所(主に市民課)来庁者用書類封筒に使用	五色塚古墳空中写真	1
2	株式会社 三推社 ベストカード編集部	『ベストカード』『クルマと旅』(仮名)掲載	五色塚古墳空中写真	1
3	産経新聞大阪本社編集局	産経新聞朝刊連載『日本人解剖』掲載	人間遺跡出土石碑写真	1
4	株式会社 あすなろ書房	吉川清行氏著『ジャニア版『日本の歴史』(仮題)』原稿の日本をぐるに掲載	市内遺跡出土鉄製農耕具・鉄製武器・馬具の各集合写真	3
5	産経新聞大阪本社	産経新聞朝刊連載『日本人解剖』掲載	新方遺跡 石礎と人骨の写真	1
6	香芝市二上山博物館	ふたかみ飛鳥馬台国シンボジウム『飛鳥馬台国時代の耕作・河内・和泉と大和』資料集の写真掲載	天王山4号墳土体部全貌・八禽城出土状況・八禽城・西求女塚占墳全貌・周南・ひれ前(IV-V)・丁井石輪出状況・後方部前面中央(Ⅲ区)埴生基底剝離・2号鏡・3号鏡・5号鏡・6号鏡・7号鏡・8号鏡・9号鏡・11号鏡・12号鏡・二重口鏡蓋・御附留台と有縫小丸丘底蓋・続鍾車形石製品・铁鏡・鍔刀・铁劍・铁鎗・壁・白水瓢箪古墳 関文帝門式系神獸鏡の写真	26
7	神戸市民参画推進局 広報課	神戸市広報テレビ番組「好き! 神戸」の番組内で使用	祇園遺跡 園池遺構・櫛磨系瓦・十郎器小皿と温泉產鹽の写真	3
8	㈱NJKエデュケーションナル 教育部 大学間連業務室	放送大学授業番組制作	西求女塚古墳堅穴式石室崩落状況写真	1
9	兵庫県立考古博物館	舞子会場プロムナードパネル展「海峡古代浪漫―明石海峡をめぐる考古学」における展示	五色塚古墳と明石海峡写真・五色塚古墳と小塙古墳写真・五色塚古墳後円部頂頭の復元埴輪列写真・舞子砲台第4次調査写真・舞子砲台3D復元図	5
10	神戸市立博物館	「第100回特別展コレクションの精華 伝えたし美と歴史」におけるデジタルコンテンツおよび展示に使用	櫻ヶ丘銅鏡山土手点付近空中写真・北青木銅鏡出土状況写真・平川和子氏作「北青木銅鏡埋納状況想像画」	3
11	坂井編集企画事務所	『PROSPECTUS - 神戸芸術工科大学』(仮称)中の項目「世界を俯瞰してきた街、神戸―その魅力」に掲載のため	五色塚古墳空中写真・五色塚古墳埴輪列と雲石の写真	2
12	品川区立品川歴史館	平成20年度特別展「東京湾と品川―よみがえる中世の港町―」における図録掲載、パネル展	兵庫津遺跡空中写真	1
13	兵庫県立考古博物館	兵庫県立考古博物館開館1周年記念展・発掘された日本列島2008 地域展「兵庫五ヶ国 の考古学」の展示	神戸臨港緑南木町架道橋第4橋台写真	1
14	兵庫県立考古博物館	兵庫県立考古博物館平成20年度夏季企画展「古代の魚楽」	高塚山6号墳全景写真・高塚山9号墳魚線刻写真	3
15	兵庫県立考古博物館	兵庫県立考古博物館ふるさと発掘裏・伊丹市立博物館秋季企画展「酒の考古学」展における展示およびパネル・解説図版掲載	西宮古酒蔵群第4次調査写真・御影郷古酒蔵群第4次調査写真・五輪溜水車跡調査写真・魚崎郡及び御影郷櫛航空写真	13
16	八多町史編纂委員会	『八多町史』に掲載	上小名田遺跡第2次・第15次調査発掘地位置図・上小名田遺跡第2次発掘地位置図・上小名田遺跡第16次調査1区遺構平面・下小名田遺跡第15次調査1区遺構平面図・神戸市埋蔵文化財分布図・八多町付近	6
17	尼崎市教育委員会 尼崎市立田能資料館	第38回尼崎市立田能資料館特別展「赤の技」の展示	戎町遺跡水田遺構写真 1点	1
18	有限会社キックオフプラス	『(仮)資料・日本の遺跡と遺産 第2巻 古墳』に掲載	五色塚古墳写真	5
19	クエストルーム鶴	カーナビゲーションシステム及び携帯電話・パーソナルコンピューター等の情報端末におけるナビゲーション用ソフトにおける観光スポット紹介として掲載	五色塚古墳空中写真	1
20	大阪府立弥生文化博物館	大阪府立弥生文化博物館 平成20年度冬季特別展「後人が見た龍一龍の船とかわらじ」における展示	郡家遺跡第36次調査 龍線刻弥生土器(壺)・大手町遺跡 龍線刻弥生土器(鉢)	8
21	藤浜鳥書店	『兵庫県 地域の歴史を調べよう(兵庫県の中学生対象郷土版歴史資料集)』に掲載	五色塚古墳全景写真及びその周辺復元CG	2
22	神戸市教育委員会指導課	中学生用音声教材CD『神戸ガイド』掲載	丸山衝上断層 写真	1

表5 真實・圖面算出一覽表(2)

No.	申請者(団体名・個人名)	利用目的・内容	資料名	資料形式
23	㈱NIKKIエデュケーション	放送大学校蔦番組ホームページ配信	西求女塚古墳乾穴式石室構造状況写真	1
24	兵庫六甲農業協同組合 六甲のめぐみ	「六甲のめぐみ」4周年記念行事におけるパネル展示	原野・津沢断出土土器文土器写真	1
25	兵庫区街づくり推進部	「兵庫津歴史講演会」会場でのパネル展示	兵庫津遺跡第14次調査・第33次調査・第35次調査の遺構・遺物写真	7
26	神戸市国際文化観光局観光課	神戸市役所24階ロビーにて展示する市内各所の紹介パネル	五色塚古墳空中写真	1
27	神戸大学人文学研究科	第14回国際歴史地理学会(京都開催)第2報に掲載	五色塚古墳空中写真	1
28	鶴東京美術	若狭 徹氏 著「はにわのヒミツ(仮題)」に掲載	五色塚古墳出土朝顔形埴輪と整備後写真	5
29	鳥取県埋蔵文化財センター	鳥取県埋蔵文化財センター発行「鳥取県の考古学 第5巻古墳時代 II」及びホームページ公開する開講のPDE上に掲載	西求女塚古墳出土土器写真	1
30	㈱東京美術	若狭 徹氏 著「はにわのヒミツ(仮題)」に掲載	五色塚古墳写真	1
31	株式会社 Z会	株式会社Z会 発行「エクリスタディ小3.6月号(2009年度・2010年度版)」に掲載	神戸市の空中写真	1
32	有限会社神戸つ子出版	有限会社神戸つ子出版発行「KOBICCO(日本版)神戸つ子」2009年3月分に掲載	五色塚古墳空中写真	1
33	株式会社 小学館サイリ編集部	株式会社小学館「サイリ」2009年11月号に掲載	紙面追跡出土 取締天目小鏡写真	1
34	神戸市教育委員会 生涯学習課	神戸市立青少年科学館「春の企画展 いい顔つくろい(平成21年3月20日～4月6日)」におけるパネル作成及び展示	舞子浜遺跡道輪棺人骨出土状況写真・良田寺跡出土遺物出土十二石馬写真・天神長連跡出土人面線刻複数写真・住吉町遺跡出土人物埴輪・西神ニュータウン内第10地点	5
35	大阪府立近づ飛鳥博物館	大阪府立近づ飛鳥博物館 平成21年春季手取別展「飛鳥呼び声」大にて「奈をくぐる」後方口掻きの域一における岡福昌毅・展示パネル及びPR資料への掲載	奈多北船形埴輪(飛鳥)、天井石枕山形灰陶(飛鳥)、伊士輪合掌形灰陶(飛鳥)、24歳、9歳、6歳男、女性成年可動出・直口罐、猪子頭頂当山形軽量筒形有壁小品・鹿島鹿、唐物新北山形灰陶出・直口罐、加賀白断口碗、铁製品	11
36	近畿文化会	『近畿文化』第712号に掲載	湯山遺跡 岩風呂遺構写真	2
37	株式会社小学館	株式会社小学館『週刊ポスト』2009年8号に掲載のため	五色塚古墳空中写真	1
38	株式会社 中京テレビ映像企画	学校法人河合鶴 河合サザライ講座「パークエフ日本史B①」の教材として利用	舞子浜遺跡出土埴輪写真	1
39	キックオフプラス	『日本の遺跡と遺産 第4巻 中世・近世の遺跡』に掲載	大輪田泊 石棹写真	1
40	株式会社 フクト	株式会社フクト発行『学習定着診断シート 稼かめシート』に掲載	五色塚古墳空中写真	1
41	株式会社 浜島書店	『兵庫県・地域の歴史を調べよう(兵庫県の中学生対象土郷歴史資料集)』に掲載	住吉宮町遺跡出土人物埴輪、市内出土勾玉集合写真	2
42	神戸市垂水区まちづくり推進部	垂水区まちづくり課発行『れんげまつり広報用チラシ』に掲載	五色塚古墳空中写真	1
43	株式会社 ポプラ社	株式会社ポプラ社発行 ポプラディア情報館『日本の歴史』第1巻に掲載	五色塚古墳空中写真	1
44	神戸市立博物館	神戸市立博物館年間展覧会予定表に掲載	五色塚古墳空中写真	1
45	株式会社 ブランドゥ六吹	穴吹彌生発行『』に掲載及びホームページ公開	五色塚古墳空中写真	1
46	兵庫県立考古博物館	兵庫県立考古博物館特別展「王朝国家の光芒—各港に花開く宮廷文化—」において展示	紙面追跡出土遺物・遺構写真、二ツ星遺跡出土遺物・遺構写真	12
47	葛飾区郷土と天文の博物館	葛飾区郷土と天文の博物館(又は横浜市立横浜郷土資料館)報告書(古墳編)への掲載	五色塚古墳空中写真	2
48	福岡市博物館	福岡市博物館平成20年度企画展「黒田長政と二十四勢一黒田武士の世界ー」の展示及びPR掲載	端谷城跡出土鬼瓦、甲の遺物写真	2
49	文化庁	「発掘された日本列島2008展」展示	塙田北山東古墳出土遺物・遺構写真	11

4. 史跡名勝天然記念物

国指定史跡等の管理

史跡五色塚古墳と大歳山遺跡の維持管理及び見学者対応は、特定非営利活動法人に委託した。日常的業務の他に、五色塚古墳から初日の出を見る会等の行事を企画し、地域での史跡の活用を図っている。他に、史跡処女塚古墳と天王山15号墳の植栽管理等を行った。

国指定史跡「和田岬砲台」保存修理事業

史跡和田岬砲台は、江戸幕府の浜海防備策の一つとして勝海舟の指導により元治元年（1864）に完成し、大正10年（1935）に国史跡に指定されている。昭和の初めに大規模な修理が行われ、その後、小修理が行われてきたが、近年石造部の一部が剥落し、内部木組みの腐食も進行した。そのため所有者である三菱重工業株式会社を事業主体とし、文化庁・兵庫県・神戸市の補助事業として平成19年度から5ヵ年計画で保存修理事業を行なっている。本年度は本格的解体修理工事に先立つ調査工事として、構造診断調査を行い、また現況図の作成を実施した。また並行して学識経験者や地元代表者、所有者による修理検討会を設置し、修理方針の検討を行った。

国指定名勝「再度公園・再度山永久植生保存地・神戸外国人墓地」保存管理計画策定事業

平成18年度に国名勝に指定された再度公園・再度山永久植生保存地・神戸外国人墓地は、学識経験者や市民代表による保存管理計画策定委員会を設置し、平成19年度から20年度にかけて保存管理計画を策定することとなった。今年度は委員会を2回開催して保存管理計画の最終策定を行った。合わせて無縫墓地地区・礼拝堂・積苗工の現状測量を行い、平成21年3月に『名勝再度公園・再度山永久植生保存地・神戸外国人墓地保存管理計画策定報告書』として刊行した。

5. 連携事業

淡河町白治協議会・神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターとの連携事業の取り組みとして、淡河歴史セミナー（第11回・12回）を共催した。第11回として平成20年11月29日に『フィールドワーク&地図づくり 淡河町の戦国を歩く』（参加者20名）、第12回として平成20年2月22日に『発掘！淡河の遺跡！（発掘調査出土品の展示）』（参加者43名）を淡河連絡所で行った。

兵庫区役所との共催事業としては、和田岬砲台の保存修理事業に関連して、平成20年11月22日に兵庫歴史講演会「幕末の巨大プロジェクト大阪湾防備と和田岬砲台」を兵庫公会堂で開催した。講演は、神戸市教育委員会学芸員松林宏典による『大阪湾の台場』、神戸市立博物館学芸員高久智広氏による『大阪湾の防備と砲台の築造に關った人々』で、102名の参加があった。

11月2日と3日に北区道場町の神戸市農村改善センターで行われた道場町文化祭に、展示の依頼があり、本年は『『道場町』最初の住人たち～道場町の縄文時代・弥生時代』をテーマとして塙田遺跡と宅原遺跡の出土品を中心として展示を行い、800人の見学者があった。

6. 普及啓発事業（埋蔵文化財センター）

学校連携、地域連携、各種講座、企画展示等を基軸とした事業を行った。平成19年度より準備を進めていたボランティアによる事業参加が、本年度より開始され、各種講座等を中心活動を行った。本年度の埋蔵文化財センターの入館者は38,486人であった。

学校連携事業

大学との連携

平成19年度に、神戸山手大学と大手前大学と連携協定を締結し、さまざまな事業を開始したが、本年度においては、2月28日（土）に、樋本誠一氏（大手前大学総合文化学部教授）、河上邦彦氏（神戸山手大学現代社会学部教授）を招き、「巨大古墳の築造と祭祀をめぐって」というテーマで講演会（於：埋蔵文化財センター研修室）を実施し、116名の参加を得た。さらに、神戸市西区役所と神戸学院大学との包括的連携協定に基づき、神戸学院大学との連携事業に着手し、地域学の講義（計3回）をはじめ、学内図書館（有瀬図書館）において、西区内の出土資料を紹介する出張展示を、夏と春の2回にわたって開催し、期間中44,154人の見学者があった。

啓明学院中学校・高等学校との連携

平成19年度より啓明学院中学校・高等学校が学内において実施する土曜講座の1プログラムを、埋蔵文化財センターで担当しており、本年度は教養講座「神戸の文化遺産を学ぶ」というカリキュラムで、前期と後期あわせて14回の講座を担当した。前期は考古学、後期は近代化遺産に関するテーマで、授業および学外の見学等を取り混ぜて行った。実物の出土資料を用いた授業や、学外の見学では、神戸港や旧外国人居留地、布引ダムなどを訪れた。中学生・高校生・保護者の計16名が受講した。

高等学校との連携

神戸市立六甲アイランド高校の学科目である『フィールドワーク』、兵庫県立須磨友が丘高校の設定科目である『考古学』のカリキュラムの中で、『フィールドワーク』の3回分、『考古学』の5回分について、埋蔵文化財センターが担当し、実物の出土資料を用いた授業や、拓本や勾玉作りなどの体験学習、さらに遺跡の現地見学などを行った。

神小研社会科部との連携

神戸市小学校教育研究会社会科部との連携については、毎年、コミスタこうべ（中央区）にて開催される『神戸市小学校社会科作品展』（9月13～21日）において、優秀作品約30点を選定し、「埋蔵文化財センター賞」を授与、表彰した。

小学校への出張講座・出張授業

小学校へ出張して勾玉作りや土器作りの体験考古学講座を、依頼のあった市内17校において行った。また、出張授業については、市内2校を行った。特に、出張授業については、実物資料の観察を中心に、その資料の時代を考察する内容で行った。出張講座・授業の利用者は、計19校1,917名である。

地域連携事業

地域行事への参加

『第26回みどりと太陽のまつり』（5月17日（土））（於：プレンティ広場）においては、

古代の衣服に関する展示ブースを設置し、衣服の試着体験などを行った。神出自然教育園（西区）で毎年開催される『リトルファーマー・ステイ』（7月25～27日）においては、体験メニューのひとつとして「石包丁作り」を行った。また、「櫛谷川まつり」（西区）〔9月7日（土）〕（見学者：2,292名）においては、櫛谷町の遺跡を紹介するパネル展示を行った。さらに、11月と3月には、『押部谷明石川リバーウォーク』（西区）〔参加者：2回で840名〕においては、木津の磨崖仏や性海寺などの地域文化財の紹介と解説を行った。

地域企業の公開行事である『インダストリアルパークフェア』（8月22日開催）〔西神工業団地（西区）〕においては、西神工業会館内にて西区内の出土資料の展示と埋蔵文化財センターの紹介を行った。参加者は500名を数えた。

その他、市内各公民館の夏休み行事である『サマースクール』に協力し、勾玉作りや土器作りなどの体験講座を行った。また、地域団体等が主催する地域史の学習会等において、講演等を行った。

西区地域学の開催

平成18年度より、西区内の史跡や文化財を訪ねる講座として、神戸市西区役所と連携して実施されているが、本年度（第3回）は『修驗道とその周辺』というテーマで、2月20日（金）に座学（於：埋蔵文化財センター）、2月27日（金）に現地見学会（太山寺・転法輪寺・石峯寺・伽耶院）の2本立てで行った。参加者は2回で179名であった。

大歳山まつりの開催

文化財保護強調週間の行事として、神戸市垂水区役所、舞子ふれあいまちづくり協議会と連携し、毎年、大歳山遺跡公園（垂水区）にて実施しており、本年度は11月2日（日）に開催した。恒例の復元竪穴住居公開をはじめ、火おこし、勾玉作り、土器作り、古代衣装試着、製塙土器を用いた塙作りなどの古代体験コーナーを設置、さらに、地域婦人会の協力を得て、古代米のおにぎりを試食も行った。参加者は530名を数えた。

各種講座の開催

体験考古学講座の開催

夏休みを中心に親子参加の体験考古学講座を埋蔵文化財センターにて実施した。メニューは例年通りで、勾玉作り、土器作り、火おこし器作り、古代編み携帯ストラップ作り、レプリカ作り、ガラス玉作りを行った。各回合計の参加者数は513名を数えた。

講座「神戸の歴史遺産と考古学」の開催

最新の考古学を中心とした文化財の調査成果を公表する講演会、『神戸の歴史遺産と考古学』を計8回開催した。開催日、テーマ、参加者数は別表（表7）のとおりである。

『文化体験プログラム—その道の達人に学ぶ—』の開催

神戸市教育委員会生涯学習課が主催する体験型文化講座で、本年度、埋蔵文化財センターは『江戸時代の庄屋で草木染め』（11月9日）、『竪穴住居をつくって古代の生活を体験しよう』（11月25日）の2講座を担当した。

草木染めについては、県指定重要有形文化財「内田家住宅」（北区）において実施し、染色に造詣の深い婦人団体の指導の下、タマネギの皮などを使って、実際の竈を使用し、木綿や絹の布に絞り染めを行った。参加者は30名であった。また、竪穴住居作りについて

ては、埋蔵文化財センターの野外スペースにおいて実施し、実際の住居の建て上げと復元土器を使用した赤米の炊飯等も行った。参加者は10名であった。

企画展示の開催

埋蔵文化財センター1F企画展示室において、年間3～4回の企画展示を行っているが、本年度においては、別表（表6）のとおり4回実施した。開催期間、テーマ、入館者数についてもこちらを参照されたい。

例年、4～6月は小学校6年生の歴史学習の一環で、学校からの団体見学が多い時期であるが、本年度の『ザ！発掘！—最近の調査成果から—』の開催期間中においても、多くの小学校団体の見学があった。また、冬季の『昭和のくらし・昔のくらし3』の開催期間中においても、小学校3年生の3学期のカリキュラムである「ちょっとむかしの暮らしだ」の学習の一環から、学校からの団体見学が多くみられた。

ボランティアの事業参加

平成19年度より準備・募集、さらに研修を行ってきたボランティア・スタッフ10名の本格的な活動が開始された。主な活動内容は、学校団体見学時の展示解説、各種講座（出張講座を含む）の指導サポートなどである。また、12月には、スタッフの第2次募集を行い、1～3月において、応募者13名に5回の研修を実施した。

表6 平成20年度の企画展示

展覧会名	開催期間	日数	入館者数
地下に眠る神戸の歴史展13 ザ！発掘！—最近の調査成果から—	4月15日～6月8日	52	9,919
邪馬台国時代の神戸	7月19日～8月31日	37	2,776
荒波を超えて -海を行き交う人と物-	10月11日～11月30日	44	3,361
昭和のくらし・昔のくらし3	1月17日～3月8日	51	9,158

表7 講演会 神戸の歴史遺産と考古学（全8回）

月 日	講演テーマ	参加者数
1 9月20日	神戸の縄文時代再発見	42
2 10月25日	神戸の弥生時代を語る	37
3 11月22日	後期古墳の時代を探る	23
4 12月13日	大輪田泊と未完の都	57
5 1月17日	江戸時代の兵庫津	59
6 1月24日	灘酒蔵の考古学	30
7 2月14日	居留地と異人館	63
8 3月14日	近代農業遺産 淡山疊水	45



講演会『巨大古墳の築造と祭祀をめぐって』



啓明学院土曜講座（北野・ラインの館）



西区地域学（太山寺）



大歳山まつり



体験考古学講座（勾玉作り）



文化体験プログラム「整穴住居をつくって古代の生活を体験しよう』



企画展『荒波を越えて一海を行き交う人と物』



企画展『昭和のくらし・昔のくらし3』（学校団体見学）

fig.14 開発普及事業

表8 平成20年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表（1）

No.	埋蔵文化財 番号	辯識名	所在地	調査主体	調査地番	調査期間 延長期間	調査内容	調査原因
1	1	山川遺跡 第8次調査 7-1	東京都江戸川区木下丁目	神戸市教育委員会	辰巳新町	45 cF 20, 06, 18- 22, 06, 11 95 m ²	古墳時代後期のピット、礫のほか、市壁の戸戸などを検出した。	発見事例 「加賀新町」
2	2	上川水道橋 第6次調査 7-1	東京都江戸川区木下丁目	神戸市教育委員会	辰巳三柳	120 m ² 20, 05, 21- 20, 06, 21 120 m ²	平安時代-鎌倉時代の礫の厚い山砂を4ヶ所発掘。そのうちの1ヶ所で各会社時代の瓦が検出された。また、土器の上に漆喰が残して中世の漆喰包装も確認した。	発見事例 「加賀新町」
3	3	東小川遺跡 第6次調査 7-1	東京都江戸川区木下丁目	神戸市教育委員会	辰巳鶴間町	100 m ² 20, 07, 28- 20, 08, 04 100 m ²	平安時代-鎌倉時代の瓦の堆积を検出した。	発見事例 解説
4	4	西小川遺跡 第6次調査 7-1	東京都江戸川区木下丁目	神戸市教育委員会	辰巳新町	60 m ² 20, 06, 05- 20, 06, 11 60 m ²	平安時代の鐵物の土壙、集落のみなどを検出した。また、古墳時代-奈良時代の瓦の堆积を含む遺構も確認した。	発見事例 「加賀新町」
5	5	辰巳空手堀 第6次調査 7-1	東京都江戸川区木下丁目	神戸市教育委員会	辰巳新町	427 m ² 20, 05, 22- 20, 06, 22 854 m ²	2ヶ所の遺構を確認。古墳時代後期-奈良時代の堅穴燃え柱跡、複数の瓦の堆积、ピット、瓦葺の廻廊跡など。瓦葺は「豊ヶ谷町空手堀周辺古墳群」（2010年刊行）に掲載。	発見事例 解説
6	6	辰巳空手堀 第6次調査 7-1	東京都江戸川区木下丁目	神戸市教育委員会	辰巳新町	370 m ² 20, 11, 21- 21, 01, 18 490 m ²	2ヶ所の遺構を確認。古墳時代-奈良時代の瓦の堆积、瓦葺の廻廊、瓦なぎ焼物など。瓦葺は「豊ヶ谷町空手堀周辺古墳群」（2010年刊行）に掲載。	発見事例 解説
7	7	八幡山1号墳 第1次調査 7-1	豊島区八幡山1丁目	神戸市教育委員会	豊島1号	1,00 m ² 20, 04, 03- 20, 04, 29 100 m ²	古墳時代-近世の母岩状石柱を検出した。	発見事例 建設
8	8	福住古墳 第7次調査 7-1	豊島区南大塚2丁目	神戸市教育委員会	豊島福住	280 m ² 20, 11, 10- 20, 12, 10 400 m ²	2ヶ所の遺構が確認され、平安時代後期の堅穴燃え柱1脚を検出した。	発見事例 「豊島福住」
9	9	相模原遺跡 第6次調査 7-1	相模原市南町4丁目	神戸市教育委員会	相模原町	131 m ² 20, 08, 18- 20, 09, 04 131 m ²	平安時代後期-八幡神社の堅穴燃え柱1脚、土坛2基、平安時代後期-中世の瓦の堆积を検出した。	発見事例 解説
10	10	相模原遺跡 第6次調査 7-1	相模原市南町4丁目	神戸市教育委員会	相模原町	211 m ² 20, 03, 19- 20, 08, 27 211 m ²	2ヶ所の遺構が確認され、平安時代後期の堅穴燃え柱1脚を検出した。	発見事例 「相模原町」
11	11	伊豆木根 第6次調査 7-1	相模原市南町4丁目	神戸市教育委員会	相模原町	270 m ² 20, 01, 19- 20, 02, 18 270 m ²	少しの量。土壙、瓦葺風などを使用した。また、平安時代-中世の瓦の堆积を確認した。	発見事例 「伊豆木根」
12	12	山田遺跡 第6次調査 7-1	中央区山田1丁目	神戸市教育委員会	山田	238 m ² 20, 10, 06- 20, 11, 12 470 m ²	2ヶ所の遺構を確認。ややの笠立付埴輪・柱頭のみ、ピット、陶、瓦などなどと、土壙の1/3から、既存1枚が入れられた土壙が確認された。瓦葺は「山田遺跡が伝承する昭和の瓦」（2010年刊行）に掲載。	発見事例 解説
13	13	日向畠跡 第6次調査 7-1	中央区山田2丁目	神戸市体育協会	山田代代木	715 m ² 21, 02, 02- 21, 03, 20 760 m ²	2ヶ所の遺構が確認され、中世のピット、底、土壙、廻廊の跡込みなどを確認した。瓦葺は「日向畠の跡」（2010年刊行）に掲載。	発見事例 解説
14	14	御前畠跡 第6次調査 7-1	中央区御前畠1丁目	神戸市教育委員会	御前畠	130 m ² 20, 08, 03- 20, 09, 06 130 m ²	少しの量。土壙、瓦葺風などを使用した。また、平安時代以降の瓦の堆积などを確認した。	発見事例 建設
15	15	豊島首筋 第6次調査 7-1	中央区豊島1丁目	神戸市教育委員会	豊島首筋	7,050 m ² 20, 06, 07- 21, 03, 21 25, 050 m ²	8箇の墓壙が確認され、滅文時代初期-近世の瓦張・廻廊が軽く確認された。瓦葺は「豊島首筋が伝承する昭和の瓦」（2010年刊行）に掲載。	発見事例 解説
16	16	豊島首筋 第6次調査 7-1	中央区豊島2丁目	神戸市教育委員会	豊島首筋	78 m ² 20, 10, 06- 20, 13, 15 78 m ²	8箇の瓦張が確認された。	発見事例 「豊島首筋」
17	17	筑前畠跡 第6次調査 7-1	中央区筑前畠1丁目	神戸市教育委員会	筑前畠	200 m ² 20, 12, 08- 21, 03, 23 800 m ²	3ヶ所の遺構が確認され、平安時代初期の堅穴燃え柱のほか、ピット、底、土壙、瓦葺の廻廊や瓦張風などと、瓦葺風の内側瓦張跡を検出した。瓦葺は「筑前畠の瓦」（2010年刊行）に掲載。	発見事例 解説
18	18	篠山遺跡 第6次調査 7-1	中央区篠山1丁目	神戸市教育委員会	篠山	300 m ² 20, 04, 07- 20, 15, 26 300 m ²	3ヶ所の瓦張が確認され、中世の瓦の堆积を検出した。また、平安時代以降の瓦の堆积などを確認した。	発見事例 「篠山」
19	19	篠山遺跡 第6次調査 7-1	中央区篠山2丁目	神戸市教育委員会	篠山新町	30 m ² 20, 02, 17- 21, 02, 27 60 m ²	8箇の瓦張が確認され、中世の瓦の堆积を検出した。瓦葺は「篠山新町の瓦」（2010年刊行）に掲載。	発見事例 解説
20	20	篠山遺跡 第6次調査 7-1	中央区篠山3丁目	神戸市教育委員会	篠山新町	30 m ² 20, 04, 25- 20, 05, 20 30 m ²	古墳時代-近世の瓦の堆积を検出した。また、平安時代の瓦の堆积が確認される。	発見事例 解説
21	21	篠山遺跡 第6次調査 7-1	中央区篠山4丁目	神戸市教育委員会	篠山花	27 m ² 20, 05, 12- 20, 05, 28 170 m ²	8箇の瓦張が確認され、中世の瓦の堆积を検出した。瓦葺は「篠山花の瓦」（2010年刊行）に掲載。	発見事例 解説
22	22	丸山遺跡 第6次調査 7-1	中央区丸山1丁目	神戸市教育委員会	丸山三沢	555 m ² 20, 01, 14- 20, 02, 25 555 m ²	堅穴燃え柱。中世-近世の瓦の堆积が確認された。	発見事例 解説
23	23	自由碑台 第6次調査 7-1	兵庫県川西町1丁目	神戸市教育委員会	自由 碑台 自由碑台	28 m ² 20, 01, 25- 20, 03, 21 28 m ²	石造物以外の土壙の森庭調査。	発見事例 「自由碑台」
24	24	人見畠跡 第6次調査 7-1	兵庫県人見1丁目	神戸市教育委員会	人見 畠	100 m ² 20, 05, 21- 20, 05, 26 100 m ²	中世の瓦の堆积を検出した。	発見事例 建設
25	25	人見畠跡 第6次調査 7-1	兵庫県人見2丁目	神戸市教育委員会	人見 宮	900 m ² 20, 04, 30- 20, 05, 14 1,300 m ²	4ヶ所の瓦張が確認され、古墳時代-奈良時代の堅穴燃え柱、廻廊の瓦の堆积などを確認した。また、平安時代以降の瓦の堆积などを確認した。	発見事例 解説
26	26	下ノ越畠跡 第6次調査 7-1	北区星生町下ノ越畠 上ノ越畠	神戸市教育委員会	下ノ越 畠	100 m ² 20, 05, 19- 20, 06, 12 100 m ²	中世の瓦の堆积を検出した。	発見事例 「下ノ越畠」
27	27	小也篠跡 第6次調査 7-1	芦屋市八幡町下ノ也篠 上ノ也篠	神戸市教育委員会	小也 篠	80 m ² 20, 01, 27- 20, 01, 30 80 m ²	小也の瓦の堆积を検出した。	発見事例 「小也篠」

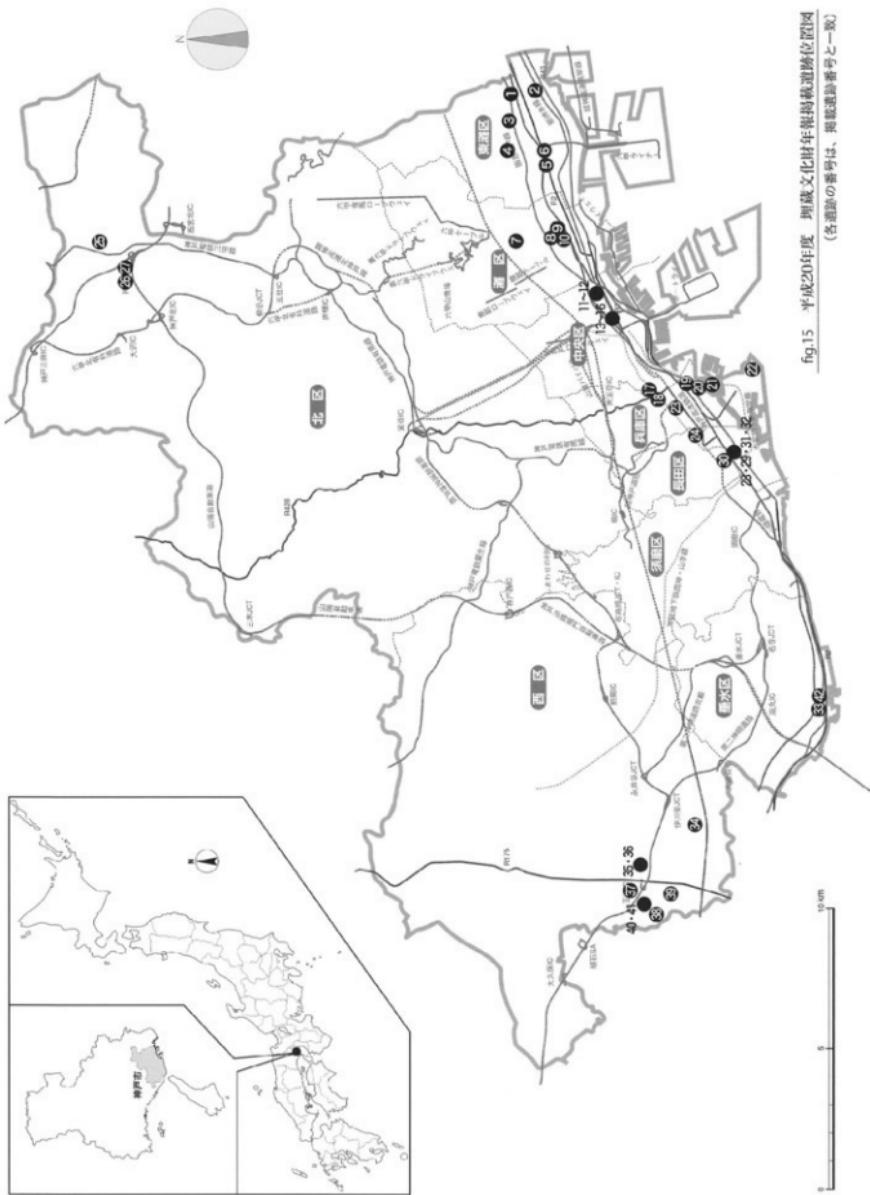
表9 平成20年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表(2)

年	地区 番号	地名	所在場	調査主体	調査担当者	調査実績	調査期間	調査内容	調査範囲
28	11-01	宇佐八幡町中央字 ノ元110番	神戸市教育委員会	阿部 勝	113 m ²	平成20.02.07～ 08, 11.02, 03	「竹の根立柱跡4脚のほか、ビット、三枚などを使出した。」	個人宅地跡 〔山陽別邸跡〕	
29	11-02	宇佐八幡町中央字 ノ元110番	神戸市教育委員会	阿部 勝	61 m ²	平成20.02.05～ 06, 03, 04	「竹の根立柱跡4脚のほか、ビット、三枚などを使出した。」	個人宅地跡 〔山陽別邸跡〕	
27	11-03	宇佐八幡町中央字 ノ元110番	神戸市教育委員会	阿部 勝	45 m ²	平成20.02.05～ 06, 03, 04	「竹の根立柱跡4脚のほか、ビット、三枚などを使出した。」	個人宅地跡 〔山陽別邸跡〕	
30	11-04	宇佐八幡町中央字 ノ元110番	神戸市教育委員会	阿部 勝	45 m ²	平成20.02.05～ 06, 03, 04	「竹の根立柱跡4脚のほか、ビット、三枚などを使出した。」	個人宅地跡 〔山陽別邸跡〕	
31	11-05	宇佐八幡町中央字 ノ元110番	神戸市教育委員会	阿部 勝	11 m ²	平成20.02.05～ 06, 03, 04	「竹の根立柱跡4脚のほか、ビット、三枚などを使出した。」	個人宅地跡 〔山陽別邸跡〕	
32	28	山田町新和田2丁目 第2水路跡	神戸市住生活局	藤井丈矩	650 m ²	平成20.04.16～ 20, 05.02	「後期古墳時代～中期の標石陸續物、ビット、磯、土坑のほか、中量の 骨などを出土した。」	個人宅地跡 〔山陽別邸跡〕	
33	29	山田町新和田3丁目 第1水路跡	神戸市住生活局	内藤敏弘	1,250 m ²	平成20.04.14～ 21, 05.11	「後期古墳時代～中期の標石陸續物（山内側有隠）、および中期の標石の 陸續物のほか、土坑内に中量のビット、磯、土坑などを出土した。」	個人宅地跡 〔山陽別邸跡〕	
34	30	山田町新和田3丁目 第1水路跡	神戸市住生活局	内藤敏弘	65 m ²	平成20.04.16～ 20, 05.12	「中量の火葬灰を出土した。」	個人宅地跡 〔山陽別邸跡〕	
35	31	山田町新和田3丁目 第4水路跡	神戸市住生活局	内藤敏弘	1,400 m ²	平成20.07.29～ 21, 08.24	「後期古墳時代～中期の標石のほか、中量のビット、磯、土坑などを 出土した。詳記は第2-3水路跡とともに、「山陽別邸跡第4-5水路跡 全般を覽む」（2004年度市道整備企画）に所載。」	山陽別邸跡	
36	32	山田町新和田3丁目 第4水路跡	神戸市住生活局	内藤敏弘	2,100 m ²	平成20.07.27～ 21, 08.21	「後期古墳時代～中期のほか、中量のビット、磯、土坑などを出土した。 詳記は第2-3水路跡とともに、「山陽別邸跡第4-5水路跡全般を 見る」（2004年度市道整備企画）にて、個人宅地跡の土坑からの 骨を含めて発見した。」	山陽別邸跡	
37	33	山田町新和田3丁目 第4水路跡	神戸市住生活局	内藤敏弘	380 m ²	平成20.08.16～ 20, 09.20	「後期古墳時代の標石1条のほか、中量のビット、磯、土坑などを出土し た。」	山陽別邸跡	
38	34	山田町新和田3丁目 第4水路跡	神戸市住生活局	内藤敏弘	200 m ²	平成20.08.17～ 20, 09.17	「後期古墳時代～平成時代の標石のほか込みを発見した。」	山陽別邸跡 〔山陽別邸跡〕	
39	35	西山町山口1丁目575	神戸市教育委員会	西岡誠二	13 m ²	平成20.08.23	「中量の標石遺物を2箇所出土した。」	山陽別邸 〔山陽別邸跡〕	
40	36	西山町山口1丁目575	神戸市教育委員会	西岡誠二	460 m ²	平成20.08.24～ 21, 09.21	「後期古墳時代～中期の標石、ビット、磯、土坑のほか、中量のビット、 磯、土坑、瓦込みなどを出土した。詳記は「山陽別邸跡第4-5- 12水路跡全般を覽む」（2004年度市道整備企画）に所載。」	山陽別邸跡 〔山陽別邸跡〕	
41	37	西山町山口1丁目575	神戸市教育委員会	西岡誠二	463 m ²	平成20.08.24～ 21, 09.21	「後期古墳時代～中期の標石、ビット、磯、土坑のほか、中量のビット、 磯、土坑、瓦込みなどを出土した。詳記は「山陽別邸跡第4-5- 12水路跡全般を覽む」（2004年度市道整備企画）に所載。」	山陽別邸跡 〔山陽別邸跡〕	
42	38	西山町山口1丁目575	神戸市教育委員会	石原一和	254 m ²	平成20.08.24～ 21, 09.31	「後期古墳時代～中期の標石、瓦、ビット、磯、土坑のほか、中量のビット、 磯、土坑、瓦込みなどを出土した。詳記は「山陽別邸跡第4-5- 12水路跡全般を覽む」（2004年度市道整備企画）に所載。」	山陽別邸 〔山陽別邸跡〕	
43	39	西山町山口1丁目575	神戸市教育委員会	小林圭子	130 m ²	平成20.08.26～ 20, 09.15	「後期古墳時代～中期の標石のほか、中量のビット、磯、土坑などを出土し た。」	個人宅地跡 〔山陽別邸跡〕	
44	40	西山町山口1丁目575	神戸市教育委員会	小林圭子	130 m ²	平成20.08.26～ 20, 09.15	「後期古墳時代～中期の標石のほか、中量のビット、磯、土坑などを出土し た。」	個人宅地跡 〔山陽別邸跡〕	
45	41	西山町山口1丁目575	神戸市教育委員会	草薙代也・ 森木一純	1,640 m ²	平成20.04.16～ 21, 07.17	「後期古墳時代標石（小口御車・方陣車・出云御車等）・上玉置のほか、 瓦、土坑、瓦込みなどを出土した。詳記は「山陽別邸跡第4-5- 12水路跡全般を覽む」（2004年度市道整備企画）に所載。」	山陽別邸跡 〔山陽別邸跡〕	
46	42	西山町山口1丁目575	神戸市教育委員会	草薙代也・ 森木一純	1,695 m ²	平成20.04.16～ 21, 07.17	「後期古墳時代標石（小口御車・方陣車・出云御車等）・上玉置のほか、 瓦、土坑、瓦込みなどを出土した。詳記は「山陽別邸跡第4-5- 12水路跡全般を覽む」（2004年度市道整備企画）に所載。」	山陽別邸跡 〔山陽別邸跡〕	
47	43	西山町山口1丁目575	神戸市教育委員会	草薙代也	70 m ²	平成20.04.16～ 21, 07.16	「後期古墳時代の標石のほか、瓦、土坑などを出土した。」	山陽別邸跡 〔山陽別邸跡〕	
48	44	西山町山口1丁目575	神戸市教育委員会	草薙代也	80 m ²	平成20.04.16～ 21, 07.17	「後期古墳時代の標石のほか、瓦、土坑などを出土した。」	山陽別邸跡 〔山陽別邸跡〕	
49	45	西山町山口1丁目575	神戸市教育委員会	草薙代也	160 m ²	平成20.04.16～ 21, 07.17	「後期古墳時代の標石のほか、瓦、土坑などを出土した。」	山陽別邸跡 〔山陽別邸跡〕	
50	46	西山町山口1丁目575	神戸市教育委員会	草薙代也	160 m ²	平成20.04.16～ 21, 07.17	「後期古墳時代の標石のほか、瓦、土坑などを出土した。」	山陽別邸跡 〔山陽別邸跡〕	
51	47	西山町山口1丁目575	神戸市教育委員会	草薙代也	80 m ²	平成20.04.16～ 21, 07.17	「後期古墳時代の標石のほか、瓦、土坑などを出土した。」	山陽別邸跡 〔山陽別邸跡〕	
52	48	西山町山口1丁目575	神戸市教育委員会	草薙代也	44 m ²	平成20.04.16～ 21, 07.17	「後期古墳時代の標石のほか、瓦、土坑などを出土した。」	山陽別邸跡 〔山陽別邸跡〕	
53	49	西山町山口1丁目575	神戸市教育委員会	草薙代也	44 m ²	平成20.04.16～ 21, 07.17	「後期古墳時代の標石のほか、瓦、土坑などを出土した。」	山陽別邸跡 〔山陽別邸跡〕	
54	50	西山町山口1丁目575	神戸市教育委員会	草薙代也	160 m ²	平成20.04.16～ 21, 07.17	「後期古墳時代の標石のほか、瓦、土坑などを出土した。」	山陽別邸跡 〔山陽別邸跡〕	
55	51	西山町山口1丁目575	神戸市教育委員会	草薙代也	160 m ²	平成20.04.16～ 21, 07.17	「後期古墳時代の標石のほか、瓦、土坑などを出土した。」	山陽別邸跡 〔山陽別邸跡〕	
56	52	西山町山口1丁目575	神戸市教育委員会	草薙代也	80 m ²	平成20.04.16～ 21, 07.17	「後期古墳時代の標石のほか、瓦、土坑などを出土した。」	山陽別邸跡 〔山陽別邸跡〕	
					22,386m ²				
					43,975m ²				

表10 平成20年度 埼藏文化財出土遺物整理一覧表

No.	編番 番号	地名	調査山体	調査担当者 監視担当者	調査実績 監視実績	調査期間 監査期間	調査内容	調査原因
A	-	本山牛の瀬跡 跡・伏見区	東京都教育委員会	奥山吉三郎、 中村大介、 中村大介	0 m 0 m	20.03.01～ 21.03.21	出土遺物整理・報告書作成	当回事宅建設
B	-	西側本塩原 跡・伏見区	(財)神戸市所有施設	藤井大輔	0 m 0 m	20.04.01～ 21.03.30	出土遺物整理・報告書作成	本山牛の瀬跡建設
C	-	上伏見跡 跡・伏見区	神戸市教育委員会	中村大介、 小林さくら	0 m 0 m	20.04.01～ 21.03.29	出土遺物整理・報告書作成	当回事宅建設
D	-	兵庫県立男爵 跡・伏見区	神戸市教育委員会	黒田一也、 田中和義、 中村	0 m 0 m 0 m	20.03.01～ 20.03.30	出土遺物整理・報告書作成	当回事宅建設
E	-	本塩原 跡・伏見区	(財)神戸市体育協会	奥山吉三郎、 中村二郎、 藤井大輔	0 m 0 m 0 m	21.03.01～ 21.03.21	出土遺物整理・報告書作成	本塩原開発
F	以降	伏見区伏見跡 跡・伏見区	神戸市教育委員会	中村二郎、 小林さくら	0 m 0 m	20.04.04～ 21.03.31	出土遺物整理	美術品老健
G	-	生田川流域 跡・伏見区	神戸市教育委員会	奥山吉三郎、 中村大介	0 m 0 m	20.03.01～ 21.03.21	出土遺物整理	出土遺物保存
H	-	伏見塩原跡 跡・伏見区	神戸市教育委員会	中村大介	0 m 0 m 0 m	20.03.31～ 21.03.31	出土金属製品保存整理	(公庫社事務)
I	-	八幡野代水門 跡・伏見区(塩 原・伏見区) (塩原)	神戸市教育委員会	中村大介	0 m 0 m	20.04.01～ 21.03.31	出土鉄製品・骨頭類・木棺材保存化粧	(公庫社事務)
J	-	伏見塩原 跡・伏見区	神戸市教育委員会	中村大介	0 m 0 m	20.04.01～ 21.03.31	出：漆塗竿(削丸)保存化粧	(公庫社事務)
K	-	山鹿寺塩原 跡・伏見区 (塩原)	神戸市教育委員会	黒田一也、 田中和義、 中村	0 m 0 m 0 m	20.03.01～ 21.03.21	出土漆塗器皿調査の漆物復元(平成10・11年度・兵庫府高崎)	当回事宅建設 (公庫社事務)

fig.15 平成20年度 横浜文化財年報掲載測量位置図
(各道路の番号は、測量點番号と一致)



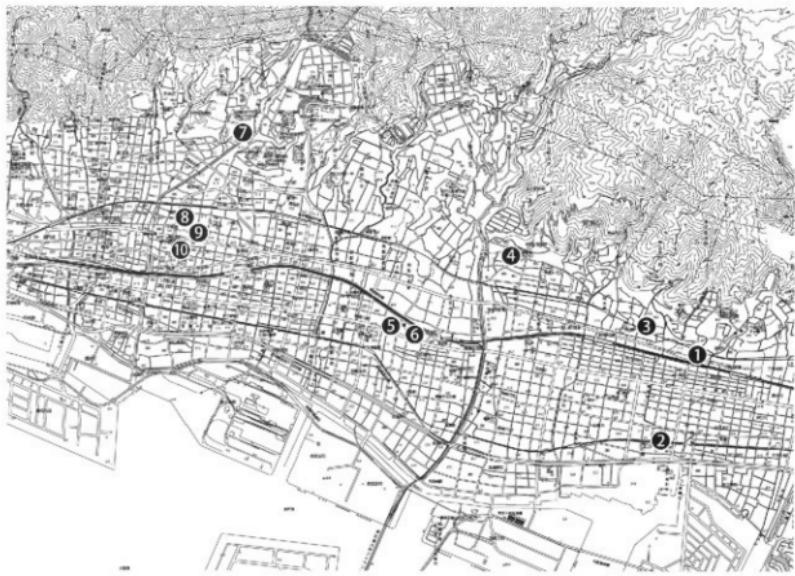


fig.16 調査地点位置図（1） 1/50,000

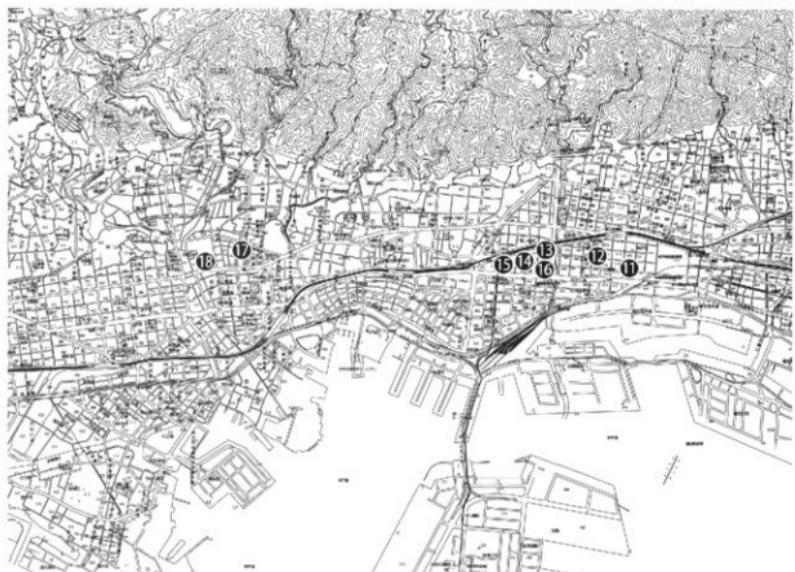


fig.17 調査地点位置図（2） 1/50,000



fig.18 調査地点位置図 (3) 1/50,000

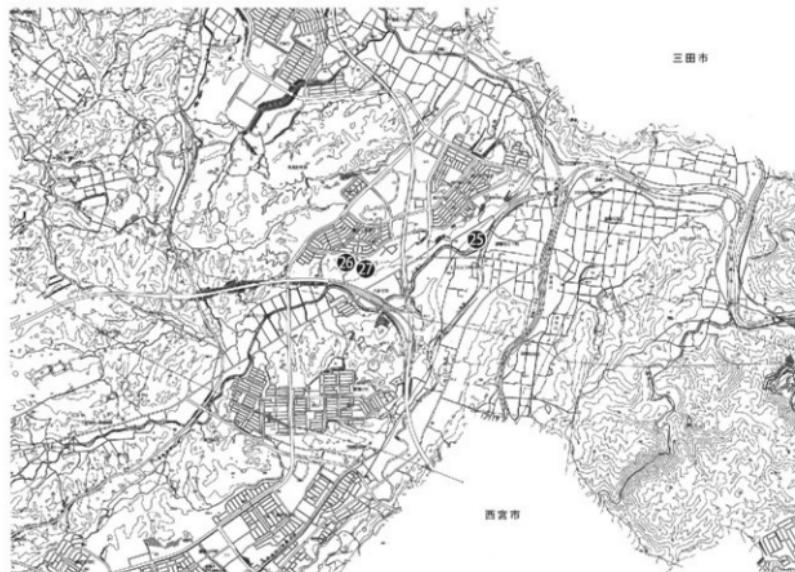


fig.19 調査地点位置図 (4) 1/50,000

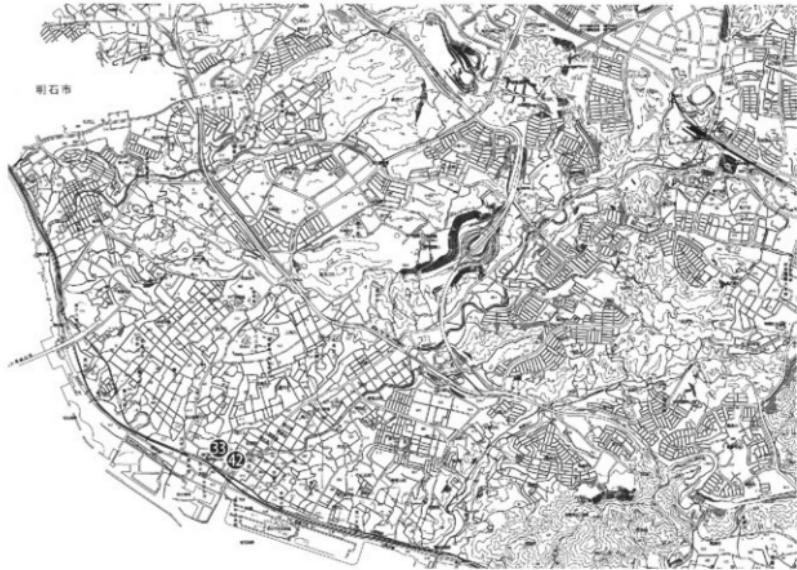


fig.20 調査地点位置図(5) 1/50,000



fig.21 調査地点位置図(6) 1/50,000

II. 平成20年度の発掘調査

1. 出口遺跡 第8次調査

1. はじめに

出口遺跡は、六甲山南麓の扇状地上に位置し、過去の調査においては、弥生時代～中世の遺構・遺物が検出されている。

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、古墳時代後期～中世の遺構・遺物を検出した。

2. 調査の概要

調査は敷地内の掘削工事を実施する箇所において行った。

基本層序

上層より、表土、淡灰褐色砂質土、灰茶褐色砂質土（中世遺物包含層）、黄褐色砂質土（遺構面基盤層）の順となっている。

井戸（SE01）

円形で石組みにて構築されている。調査区南東隅において検出したため、規模等の詳細は不明である。中世前期に属するものと考えられる。

溝

数条検出したが、いずれも幅0.2～0.4m、深さ約0.1m程度の小規模なものである。出土遺物は少量で、時期を確定にくいが、凡そ中世前期に属するものと考えられる。

ピット

数基検出されているが、調査区の北半部に多い。規模にバラツキがあるものの、凡そ径0.2～0.3m、深さ0.1～0.25m程度である。数箇所の埋土より、土器の小破片が出土し、中世前期のものが中心であるが、古墳時代後期～奈良時代のものも含まれる。しかしながら、埋土の状況等から中世前期に属する可能性が高い。

出土遺物

中世前期に属するものが多く、井戸（SE01）より土師器皿、須恵器塊、瓦器塊、溝より瓦器塊、ピットより土師器皿、須恵器塊、瓦器塊の破片が確認された。遺物包含層からの出土もみられ、中世前期の土器片に混じって、古墳時代後期～奈良時代のものも確認された。



fig.22 調査位置図 S=1:2,500



fig.23 調査区北半部 (東から)

3.まとめ

今回の調査では、限られた範囲内において、ピット等中世前期に属する遺構を多数検出したことから、当該地が集落居住域に含まれる事が確認できた。また、遺構内、遺物包含層には、古墳時代後期～奈良時代に属する土器片も混在することから、周辺における同時期の集落の存在を窺わせるものである。

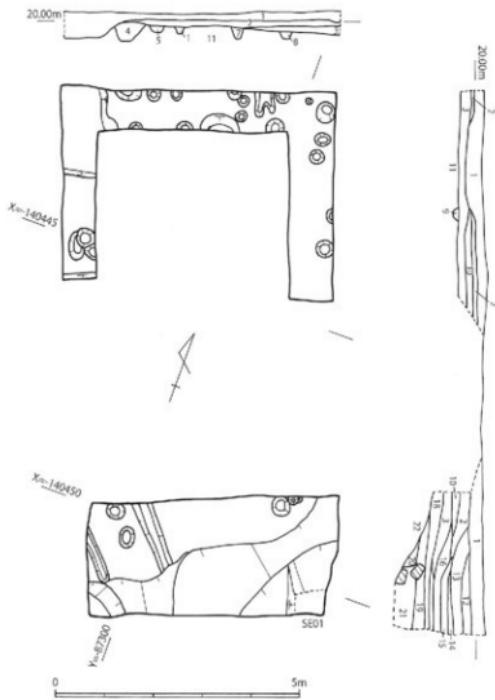


fig.24 調査区平面図・土層断面図

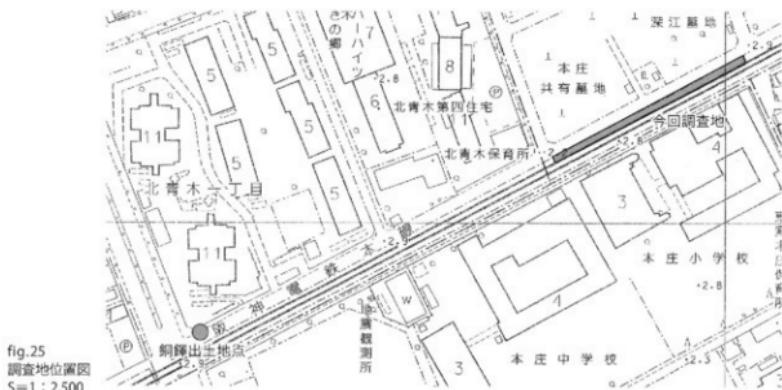
- | | | |
|--------------------|----------------------|--------------------------|
| 1. 表土 | 12. 黄褐色砂質土 (SED1堆土) | 18. 黄褐色糞土 (SED1堆土) |
| 2. 淡灰褐色砂質土 | 13. 淡灰褐色砂質土 (SED1理土) | 19. 淡褐色砂質土 (SED1理土) |
| 3. 灰褐色砂質土 (遺物包含層) | 14. 淡灰褐色砂質土 (SED1堆土) | 20. 淡灰褐色砂質土 (SED1堆土) |
| 4～9. 灰褐色砂質土 (遺構堆土) | 15. 淡灰褐色糞土 (SED1堆土) | 21. 淡黄褐色糞土埋り砂質土 (SED1堆土) |
| 10. 灰色砂質土 | 16. 淡褐色砂質土 (SED1堆土) | 22. 淡黄褐色砂質土 (深質) |
| 11. 黄褐色砂質土 (遺構堆土) | 17. 淡褐色砂質土 (SED1理土) | |

2. 北青木遺跡 第6次調査

1. はじめに

六甲山南麓の沖積地および砂丘上に位置する北青木遺跡は、これまでに5回にわたって調査が行われ、縄文時代後期～平安時代末の集落遺跡であることが判明している。

現在、阪神電鉄軌道沿いの北青木1丁目から深江北町5丁目にかけての地区は、風性堆積層（風が運んだ砂の堆積）によって構成された砂丘が数列存在し、それらの砂丘と砂丘の間の低地部分は滞水して広範な湿地を形成していたことが、過去の調査によって明らかにされている。



同遺跡から出土した最も古い時代の遺物は、元住吉II式と呼ばれる縄文時代後期の土器だが、数量はごくわずかである。多くみられるのは、縄文時代晚期～弥生時代前期初め頃の土器などである。いわゆる、「突蒂土器」と呼ばれる縄文土器と、「弥生I式（多条沈線）」と呼ばれる弥生土器が、同じ遺構から出土した例も確認されている。もともとこの地に住み、半栽培や狩猟を中心とした生活様式をとっていた縄文人たちが、水田経営などの新しい情報を受け入れて弥生化し、農耕集落を形成したことが理解でき、弥生時代の始まりの実態を知るうえで欠かせない集落遺跡として、高い価値をもつものと考えられる。

また、平成18年に実施された第5次調査においては、弥生時代中期のものと考えられる銅鐸が、土中に埋納された状態で発見されるなど、近年、注目を集めている遺跡のひとつでもある。

今回の調査は、第5次調査地点に近接し、阪神電鉄の軌道を高架化する事業を原因とするもので、弥生時代中期および中世の遺構・遺物を検出した。

2. 調査の概要

高架工事用擁壁を設営する幅約1.0～1.4m、総延長約100mの範囲に対して実施し、便宜上、調査区を4箇所（I～IV区）して進めた。

全体的に攢乱が著しく、I区およびIV区については、遺構面が遺存する箇所が無く、IV

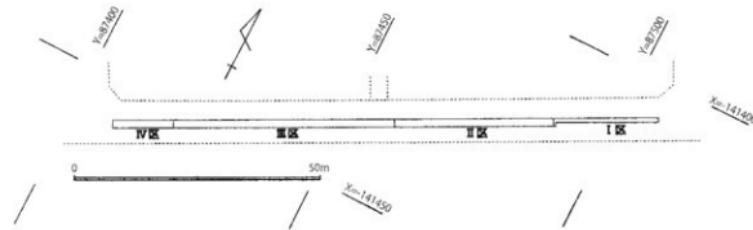


fig.26 調査範囲図

区に関しては、テストピットにて状況を確認したのみである。

II区 幅1m未満、長さ22m程度の部分において、遺構面の遺存箇所を確認した。遺構面（砂丘面）標高は0.80m前後で、弥生時代前～中期の遺構が検出された。遺構面の上面には、弥生時代～中世の遺物を包含する層が堆積する。

遺構・遺物 検出した遺構は、いずれもごく一部分であることから、詳細は不明であるものの、満または落ち込みと考えられる。その他、ピット状の小規模な嵌も検出しており、高い密度での遺構の存在を確認している。

検出された遺構のうち、遺物が出土したものは3箇所で、SX01・02より弥生時代前期（I-4段階）、SX03より弥生時代中期（III-1段階）の土器が確認されている。特に、SX02より出土した赤彩円形文を施した広口壺は注目すべき遺物である。また、SX03からも赤彩のある土器片が出土したが、弥生時代中期の範疇と考えられる。

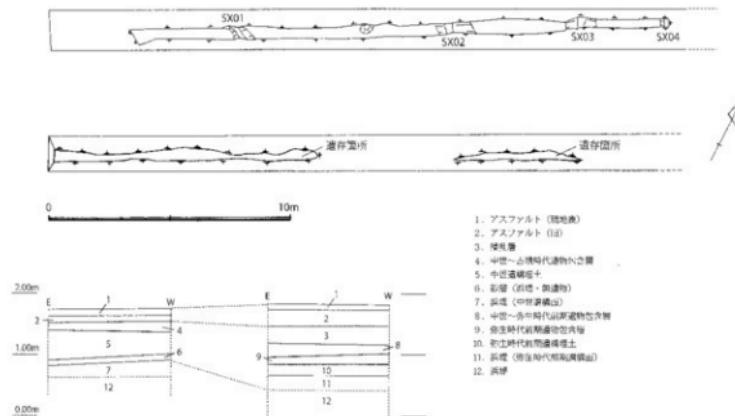


fig.27 II、III平面図および土層断面拡大図

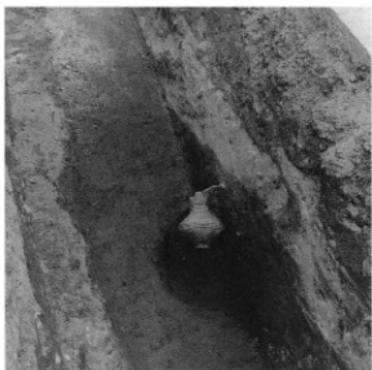


fig.28 II区 SX02 (西から)

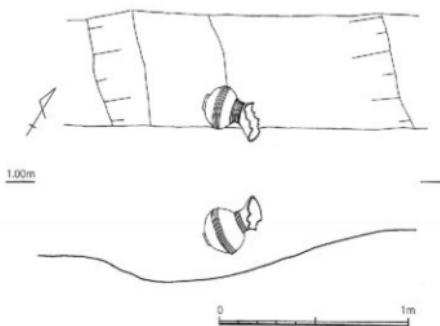


fig.29 SX02 平面・断面図

III区

遺構面が遺存する箇所はごくわずかであることから、詳細は確認しにくいため、標高1.50m付近が遺構面で、遺存箇所が中世の遺構の一部にあたる可能性が考えられる。

3.まとめ

今回の調査においては、ごく一部ではあるが、弥生時代前～中期の遺構・遺物を検出し、集落の拡がりや諸相を窺い知ることができた。特に、SX02より出土した赤彩円形文壺は、類例も少なく貴重な発見と思われ、当該地が墓域もしくは祭祀空間である可能性を示唆するものである。

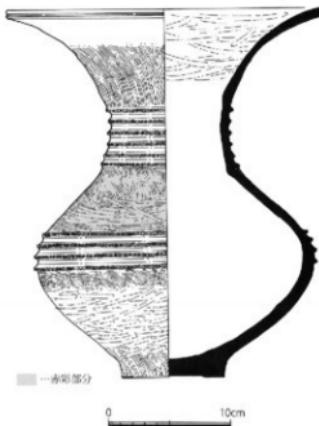


fig.30 SX02出土広口壺

3. 本山北畠遺跡 第3次調査

1. はじめに

本山北畠遺跡は六甲山南麓の丘陵先端部に位置し、弥生時代～中世の集落遺跡として周知されており、平成16年までは東灘区No22地點遺跡と呼称されていた。

今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、中世以降の開墾痕跡などが確認された。

2. 調査の概要

調査は擁壁工事が行われる箇所において実施した。便宜上、南北方向の調査地を1区、東西方向の調査地を2区とした。

基本層序

上層より、盛土（碎石）、盛土（擾乱土）、旧耕土層、暗灰褐色砂礫土、淡茶褐色砂礫土、暗茶褐色粘質土（遺物包含層）、淡灰褐色砂礫土（遺構面）となっており、遺構面は現地表面から-0.5m～1.9mを測る。

遺構

明確な遺構は検出されなかったが、1区において、南側へと下がる段差が2箇所で確認された。段差はいずれも10cm～20cmを測り、中世以降の開墾等に伴うものと考えられる。

出土遺物

遺物包含層等から弥生時代後期～中世の土器の小破片が出土した。種類としては、弥生土器・土師器・須恵器・陶器などである。

3.まとめ

今回の調査においては、中世以降の開墾痕跡、弥生時代後期～中世頃の遺物を検出した。これらの遺物の出土は、近接地においての集落の存在を示唆するものである。



fig.31 調査地位図 S=1:2,500

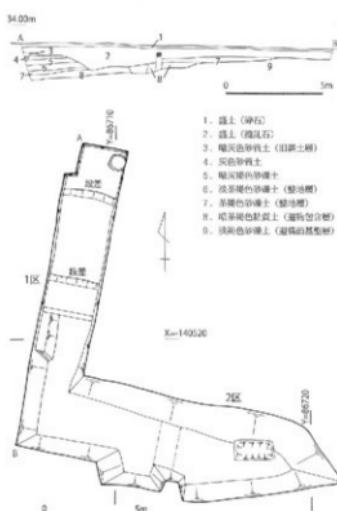


fig.32 調査区平面図・土層断面図

4. 西岡本遺跡 第7次調査

1. はじめに

西岡本遺跡は、住吉川中流域左岸の扇状地に位置し、過去の調査において、縄文時代早期～中世の遺構・遺物が検出されているが、特に、古墳時代中期～後期の古墳群、平安時代の集落遺跡としてよく知られている。

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、弥生時代後期の遺構・遺物を検出した。

2. 調査の概要

敷地内において、掘削工事によって遺構面が破壊される箇所についての調査を行い、土坑（SK01～07）、落ち込み（SR01ほか）などの遺構を検出した。尚、調査区は、便宜上、2分割（北半・南半）に区分した。

基本層序

上層より、表土、淡黄灰褐色砂質土、旧表土、黄灰褐色砂質土、暗灰色砂質土、暗褐色砂質土（弥生時代後期遺物包含層）、暗黃褐色砂質土（遺構面基盤層）、黄褐色シルト混じり砂質土の順となっている。

土 坑

7基（SK01～07）検出したが、いずれも平面形状が梢円もしくは不整円形を呈する。SK01が径 0.64×0.48 m、深さ0.22m、SK02が径 0.84×0.72 m、深さ0.20m、SK03が径 0.18×0.16 m、深さ0.08m、SK04が径 0.52×0.72 m、深さ0.19m、SK05が径 1.00×0.78 m、深さ0.23m、SK06が径 0.58×0.64 m、深さ0.15m、SK07が径 1.28×0.98 m、深さ0.12mを測る。出土遺物が確認できたのは、SK02・05のみで、数量的にも少なく、弥生時代後期の土器の小破片のみである。

落ち込み

SR01は幅1.3～1.6m、深さ0.12mを測る溝状の落ち込みである。埋土より、土器の小破片が少量出土した。弥生時代後期のものと考えられる。また、調査区の東端部においても、落ち込み状の遺構が検出されているが、SR01と同様に性格は不明である。

3.まとめ

今回の調査においては、土坑、落ち込みなどを検出し、それらの埋土や遺物包含層より、土器片などが出土した。これらの遺物から、概ね弥生時代後期の遺構面と推察される。同時期の集落の一部と考えられるものの、調査区域が限定されていたため、検出遺構の詳細等は推測にくい。今後の調査事例の積み重ねにより、明らかにできるものと考えられる。



fig.33 調査地位図 S=1:2,500

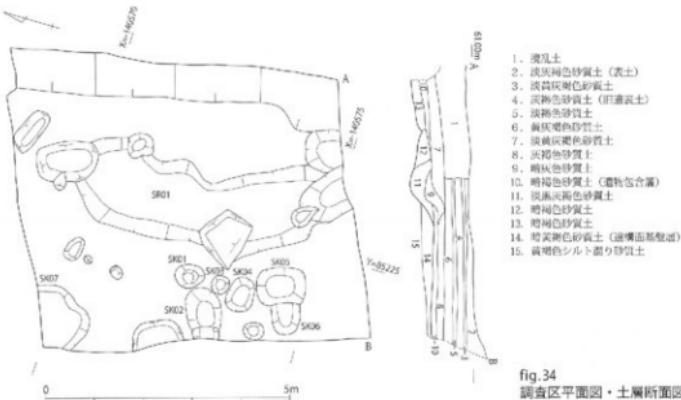


fig.34
調査区平面図・土壌断面図



fig.35
調査区北半(南から)



fig.36
調査区南半(北から)

5. 住吉宮町遺跡 第45次調査

1. はじめに

住吉宮町遺跡は、六甲山から流れる石屋川と住吉川により形成された標高20m前後の複合扇状地上に位置する。昭和60年にJR住吉駅の南西部において、第1次調査が実施され、弥生時代～中世の複合遺跡であることが判明した。また、特徴として、古墳群の存在をあげることができ、これまでに約70基の古墳が検出されている。

今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、古墳時代中期～奈良時代の竪穴建物、掘立柱建物、水田状遺構などを検出した。尚、平成21年度に『住吉宮町遺跡第45次発

掘調査報告書』を刊行しており、詳細については参照されたい。

2. 調査の概要

敷地内において、工事による掘削が行われる箇所について調査を実施した。対象地は2箇所に分かれており、便宜上I区・II区とした。2面の遺構面が確認され、古墳時代中期の水田状遺構、古墳時代後期～飛鳥時代の竪穴建物9棟・掘立柱建物3棟などが検出された。

基本層序

上層より現代盛土層、旧耕土層、黄褐色砂層（中世以前の洪水砂）、茶褐色泥砂層（遺物包含層1）、暗褐色泥砂層（遺物包含層2）、黄褐色混疊泥砂層となる。概ね、遺物包含層1、2を除去したそれぞれの面が第1遺構面、第2遺構面となる。

第1遺構面

竪穴建物9棟、掘立柱建物3棟、土坑17基、落ち込み状遺構4基、溝状遺構3条、ピット200基以上などが検出された。

竪穴建物

I区で8棟、II区で1棟検出された。いずれも方形で、SB105のみで竪状遺構が確認された。出土遺物は土器類が多いが、鉄製品、鉱滓、砥石、有孔円板などもみられる。出土遺物から古墳時代後期と古墳時代末期～飛鳥時代の2時期のものに区分できる。

掘立柱建物

I区で3棟検出された。柱穴内の出土遺物から、いずれも古墳時代末期～飛鳥時代のものと考えられる。



fig.37 調査位置図 S=1:2,500
(薄い網かけ部分は過去の調査地で、数字は次数を示す)



fig.38 I区第1遺構面 (南東から)

第2遺構面 水田状遺構（畦畔状遺構など）、土坑6基、溝状溝構3条、ピット30基以上などが検出された。出土遺物などから古墳時代中～後期のものと考えられる。

3.まとめ

今回の調査では、2面の遺構面が確認され、竪穴建物9棟、掘立柱建物3棟をはじめとする多くの遺構を検出し、同時期の集落の一端を窺うことができた。検出した遺構の大半は、古墳時代後期～飛鳥時代に属するもので、第1遺構面において、奈良時代の遺構（SK115ほか）も確認された。

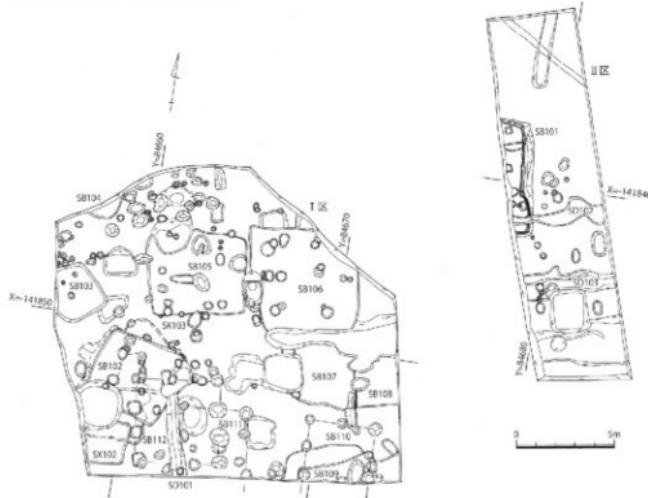


fig.39
第1遺構面平面図

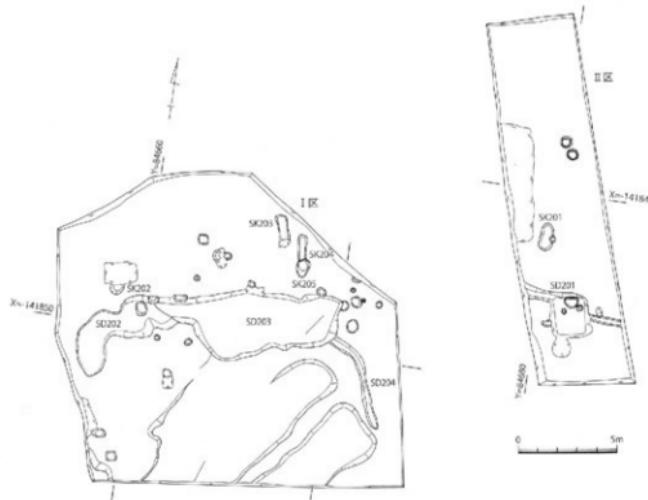


fig.40
第2遺構面平面図

6. 住吉宮町遺跡 第46次調査

1. はじめに

住吉宮町遺跡は、六甲山から流れる石屋川と住吉川により形成された標高20m前後の複合扇状地上に位置し、弥生時代～中世の複合遺跡であることが周知されている。

今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、3面の遺構面が確認され、弥生時代～奈良時代の遺構・遺物を検出した。

2. 調査の概要

今回の調査地は、古墳が数多く検出された第1・4次調査の東側にあたる箇所で、古墳（方墳）1基をはじめ、弥生時代中期～奈良時代の土坑、落ち込み状遺構、ピットなどを検出した。

基本層序

上層より現代盛土層、淡灰色砂泥層（旧耕土）、赤褐色泥砂層（旧床土）、褐色泥砂層（中世以前の洪水砂）、茶褐色泥砂層（奈良時代から中世の堆積）、黄色粗砂（古墳時代から奈良時代の洪水砂）、黒灰色泥砂層（弥生時代遺物包含層）、黄褐色混礫粗砂層（弥生時代以前の堆積土）となっており、茶褐色泥砂層、黄色粗砂、黒灰色泥砂層を除去したそれぞれの面が、第1遺構面、第2遺構面、第3遺構面となる。

第1遺構面

溝状遺構（SD101・102）、土坑（SK101ほか）、ピット（P101ほか）、落ち込み状遺構（SX101ほか）などを検出した。時期を判明できたものは、概ね奈良時代に属し、同時期を中心とした遺構面と考えられる。

第2遺構面

古墳（方墳）1基のほか、溝状遺構（SD201）、土坑（SK201）、ピット（P201）が検出された。出土遺物から、古墳以外は奈良時代に属するものと考えられる。

古 墓

過去の調査においては、75基の古墳が検出されており、同墳で76基日（方墳では73基日）となった。また、墳丘裾に列石がみられ、列石もしくは葺石をもつ方墳では18基日となつた。墳丘上面は削平されており、埋葬施設等の詳細は不明である。古墳の規模は、北辺周溝裾から南辺周溝裾で10m、全体規模で11.5mを測る。周溝内より、6世紀初頭頃の須恵器が出土したが、古墳の築造時期を示すものか否かは不明である。また、第1遺構面のSX103より、家形埴輪の破片が出土したが、同墳との因果関係は不明である。

第3遺構面

土坑2基、ピット6基、落ち込み状遺構3基などを検出した。いずれも弥生時代中期～後期に属するものと考えられる。また、土坑のひとつ（SK302）より、弥生中期頃の土器片に混じって、サヌカイト剥片、磨石などが出土しており、石器製作等に関わる遺構である可能性が考えられる。

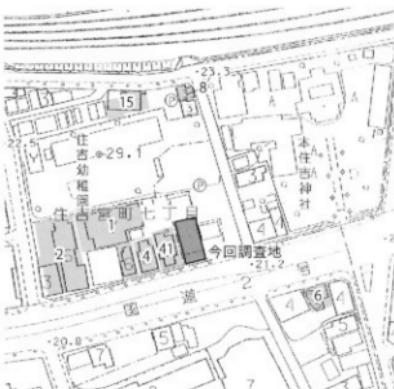
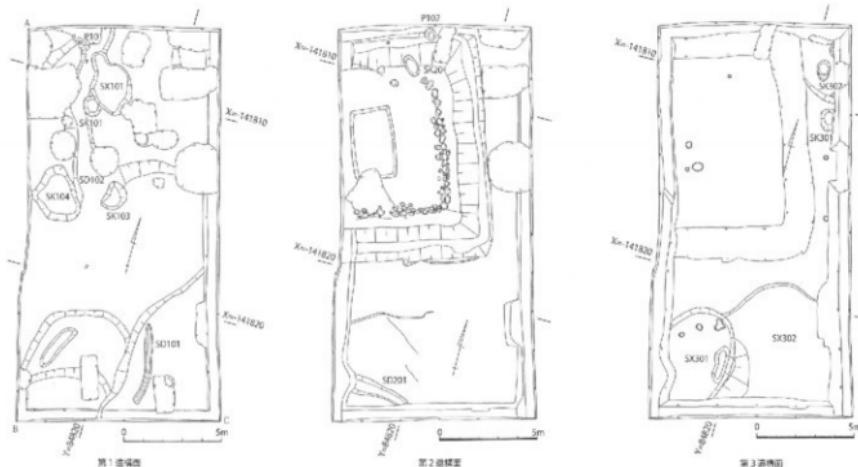


fig.41 調査位置図 S=1:2,500
(薄い網かけ部分は過去の調査地で、数字は次数を示す)

3. まとめ

今回の調査では、3面の遺構面を確認した。第1遺構面においては、弥生時代中～後期、第2遺構面においては、古墳時代後期～奈良時代、第3遺構面においては、奈良時代以降の遺構をそれぞれ検出した。同遺跡は、特に古墳時代～奈良時代にかけて、周辺地域にはみられないような盛行期を迎える。僅かではあるが、このような様相の一端を窺うことができたことは、大きな成果と言えよう。



1. 墓地の解説
2. 調査の特徴
3. 古墳の特徴
4. 地下鉄道の解説 (古墳時代の地下水)
5. 丹南古墳群 (古墳時代から5世紀の古墳群)
6. 水系と水文 (古墳時代から奈良時代の水路・第1・第2遺構面の水路)
7. 古墳北側の水路 (古墳時代遺構付近・第2遺構面の水路)
8. 丹南古墳群の特徴 (古墳時代以後の埋蔵土・第3遺構面の特徴)

fig.42 調査平面図・土層断面図



fig.43 第2遺構面・古墳（南東から）



fig.44 第2遺構面・古墳北辺周溝（東から）

7. 六甲川上流域水車群 第1次調査

1. はじめに

六甲山南麓地域はその大半が斜面地で、河川は急流となって海へと注ぐ。かつてこの地域では、この急流を利用した数多くの水車が設けられていたことが伝えられている。芦屋川上流部には「水車谷」、六甲川上流部に「水車新田」などの地名が現存する。

今回の調査地は、六甲川により形成された急峻な谷の東側斜面、標高約120m付近に立地する。共同住宅の事業地内において、建設工事中に暗渠状の石組遺構が発見されたことから、緊急に発掘調査を実施した。

2. 調查概要

暗渠状の石組遺構は、事業地の南西隅付近で検出された。調査は石組遺構とその周辺の約110mにおいて実施した。

基本層序

石組造構天井部石材の0.6～1.0m上部に旧耕土と考えられる灰色細砂が存在し、この上面が旧表土となる。これより上層には、土石流に伴うものと推定される堆積層が厚く堆積する。また、東半部においては、旧耕土と天井部石材との間に、暗灰褐色細砂、茶褐色混礫粗砂、灰色混礫細砂などが堆積する。

石組遺構

石組造構は東西方向に長さ23mを検出した。石組内法での幅は1.2m前後、石列の南北幅は3.5m前後である。掘形の幅は北側の片が壁面内であるため不明であるが、南側での石列と掘形の間の距離から推定すると幅4.5m前後と考えられる。天井部石材上面から底までの深さは2.4m前後である。石組の南側には中央部付近の一部に0.3m大の石材を東西方向に並べて石列としている。石組に並行する通路の片とも考えられる。

石組は南壁が7~8石、北壁は6~7石の石材を積み上げている。調査区西端から東へ16m程までは上から2石目の石材が、内側へ庇状に張り出す様に長さ1m前後、幅0.5~0.7m前後のやや扁平な石で組まれ、天井部石材を受けて支える構造となっている。天井部石材は長さ1.5m前後、幅0.5~1.0m前後の石材の長辺を南北方向にして並べている。西から17m付近ではこの天井部上にさらに石材の長辺を東西方向にして並べている箇所が認められる。この部分の石材はやや小ぶりである。庇状の張り出しへは石組の東側では存在しない。庇状の張り出しから下の石材の積み方には、南北の壁に差異があり、南壁は高さ0.3~0.4m程の方形の切石状石材の、面取りをした側を揃えるように積み上げている。北壁は南壁同様に加工した切石状石材や、自然面を利用した石材など種類、大きさ



fig.45 調査地位置図 S=1:2,500



fig.46
石組造構
(南東から)

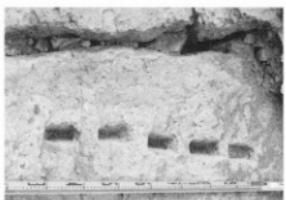


fig.47
石材の矢穴

3.まとめ

今回の調査では、水車に関連するものと考えられる東西方向の暗渠状石組遺構を検出し、石組内の埋土からは、陶器、磁器、土師器焰烙、瓦、銅製鏡、鉄製品などが出土した。

六甲山南麓地域における水車の建設は、小林 茂氏の研究によれば、江戸時代の元禄末～宝永年間（1688～1711）における住吉川水系の摂津国菟原郡野寄村（現神戸市東灘区）の水車6軸が初源とされる。近世の水車は、綿実を原料として油を絞る油車、瀧の酒造と大きく関連する精米を目的とする米車の他、粉車が存在した。近代に入って、石油ランプ等の普及に伴い油車は衰退するが、米車は明治～大正期に全盛期を迎え、大正2年（1913）頃には夙川水系から生田川水系までに277場が存在した。しかし、第1次世界大戦後小型電動機による電力精米機の普及により衰退、以後は特殊な製品の粉車として稼動したとされる。また、昭和13年（1938）の阪神大水害により壊滅的な打撃を受け、最後の住吉川水系の線香粉車が昭和54年（1979）に火災により終焉を迎えた。

調査地の立地する六甲川（都賀川）水系では、古くは摂津国菟原郡河原村（現神戸市灘区）の宝永8年（1711）明細帳に村で支配する3軸の水車の記録が認められる。調査地一帯に所在した「水車新田」は、享保年間（1716～1736）に成立した水車を専業とする集落とされている。都賀川水系には天明8年（1788）に33（米車8・油車25）、明治18年（1885）に水車場13、昭和6年（1931）には米車場7が存在したとされている。

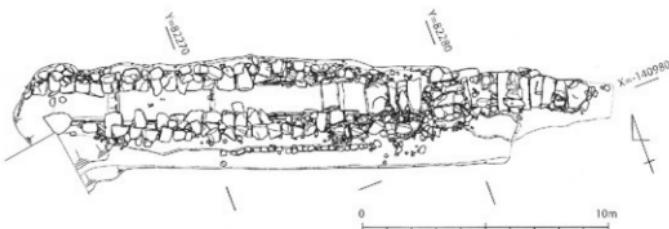


fig.48 石組遺構平面図

遺構の性格 六甲山南麓地域では、これまでに水車関連遺構の調査例として、昭和63年度～平成元年度にかけて実施された六甲山麓遺跡調査会による神戸市東灘区西岡本遺跡の住吉川水系水車遺構の調査、また、平成18年度の芦屋市教育委員会による芦屋市芦屋川水車場跡の芦屋川水系水車遺構の調査がある。両者では近世～近代の水車場遺構の中心部の調査が実施されており、水車が回転する部分である滝壺遺構や、これに付随する排水遺構や作業場などの水車関連遺構が確認されている。これらの成果と今回検出の石組遺構を比較すると、「シャク」と呼称される水車本体は、高低差を利用して流路からの水を受けることから、西岡本遺跡の滝壺遺構は斜面に対して直交しており、斜面を横切る状態の本例とは状況を異にする。また、発見時の状況も天井部に石材を伴う暗渠状であり天井部は開口していない。このことから、今回確認された暗渠状石組遺構は、水車本体に伴う滝壺遺構とは考えられない。また、前後の接続部分も不明であるため、全体構造のどの部分にあたるかは、不明であると言わざるをえない。しかし、内面の南北両壁には、底部から約0.5m前後の高さまで鉄分の付着が確認でき、これは鉄分を多く含む六甲山系の水に由来するものと考えられる。この点から石組内には一定量の水流が想定でき、水路の一部であると考えられる。西岡本遺跡例の滝壺からの排水路部分は天井部に石材を伴う点や、全体形状から本例と類似するが、側壁の石組は3石程で、石材も小ぶりである。また、深さも1m弱とやや小規模である。これに対して本例では旧地表からの深さが2.5m以上あり、多量の石材を使用した石組や、長さ1.5m前後の天井部石材を伴う点、さらに、この石材を受ける張り出し部をもつ規模と構造は、単に水路としては考えがたい疑問点もある。これが地形による制約に由来するものか、水路部分ではなく水車小屋及びこれに関連する施設の別の部分を構成するものであるかの検証は、類



fig.49 石組遺構 (空中から)

例の増加を待って行いたい。

遺構の時期 検出した暗渠状石組遺構の時期は、出土遺物が少なく、また、石組掘形部分ではなく、石組内埋土からの出土であるため、遺構の築造時期及び廃絶の時期の特定は困難である。しかし、石組内出土遺物の中には肥前系磁器碗の見込み部に印判による五弁花文、高台内に「渦福」の銘隸をもち、概ね18世紀後半に位置づけられるもののが存在するものの、これ以外の遺物はいずれも小片で、詳細な時期は不明である。しかし、18世紀後半に位置づけられる遺物の存在と、文献等における六甲川（都賀川）流域の水車群の稼動時期がほぼ一致する点、また、石組に見られるモルタルによる補修痕の存在などから、概ね18世紀代から近代にかけて機能したものと推定される。また、改修や補修を行なながら使用されていたことも考えられる。

石組の使用石材には、石材を削るために穿たれた矢穴痕が確認できるものが複数存在することを先述したが、採石に関わる検証は、西宮市から神戸市東部にかけて所在する六甲山南東麓の採石場の石材データや本例以外の調査例との詳細な比較検討が必要となるものの、調査完了時の所見としては、矢穴の間隔には統一的なまとめは見られない点、また、矢穴の形状と大きさは藤川祐作氏、森岡秀人氏の分類によるAタイプ（近世中頃以降、現在までに見られるタイプ）類似するものが多く含まれている点が挙げられる。このような点から、出土遺物の時期と大きな差異はないものと考えられる。

今回の調査では、暗渠状石組遺構の性格を明確にできなかったが、水車に関連する遺構であることは、ほぼ間違いないであろう。かつて六甲山南麓地域に特徴ある風景を形成し、近世～近代にかけての神戸の発展の一翼を担った水車場に関連する遺構として、重要な資料となりうるものと言えよう。



fig.50 石組遺構 (西から)



fig.51 石組遺構内部 (西から)



fig.52 石組遺構内部 (西から)

8. 篠原遺跡 第27次調査

1. はじめに

篠原遺跡は、六甲山南麓の松谷川と六甲川の合流部付近の扇状地上に位置し、過去の調査において、縄文時代中期～平安時代の遺構・遺物が検出されている。

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、2面の遺構面が確認され、弥生時代後期および古墳時代後期の遺構・遺物が検出された。

2. 調査の概要

敷地内において、掘削工事を実施する箇所について調査を行った。便宜上、調査区を2分割（西半・東半）して進めた。

基本層序

上層より、現代盛土、表土、淡黄褐色細砂、黒褐色砂質土（第1遺構面基盤層、弥生時代後期遺物包含層）、黒褐色礫混り砂質土（第2遺構面基盤層）の順となっている。

第1遺構面

溝や浅い落ち込み状遺構などを検出した。溝はその形状等から、鍛溝の可能性が高い。この鍛溝の一部より、古墳時代後期の須恵器の破片が出土していることから、同遺構面の遺構の時期は、概ね同時期と考えられる。

第2遺構面

竪穴建物1棟（SB01）を検出した。このSB01は、一辺が約8.0m、深さ約0.5mを測り、



fig.53 調査位置図 S=1:2,500

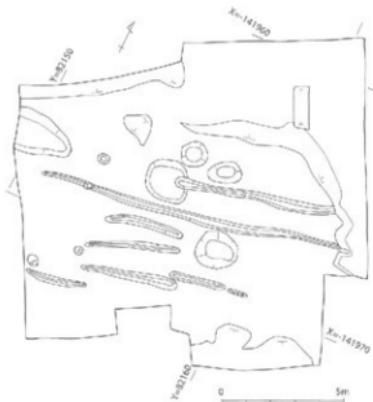


fig.54 調査区平面図 (第1遺構面)

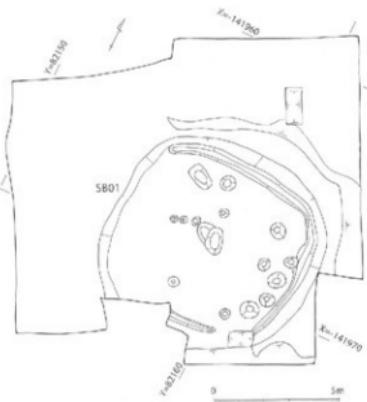


fig.55 調査区平面図 (第2遺構面)

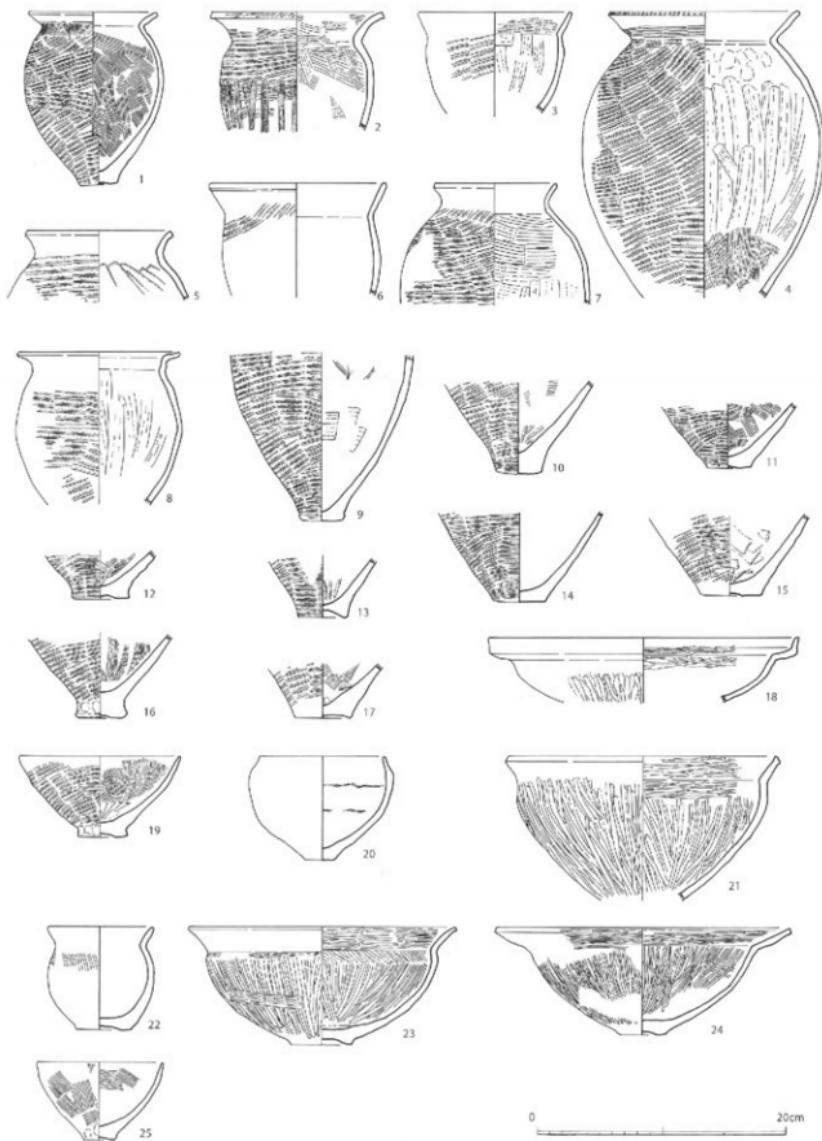


fig.56 SB01出土遺物 (1)

焼土を含む中央土坑を配し、周壁溝をめぐらせている。また、主柱穴は4本と考えられる。中央土坑は幅0.8×1.35m、深さ0.27m、周壁溝は幅約0.4m、深さ約0.15m、主柱穴は径0.4～0.6m、深さ0.2～0.35mをそれぞれ測る。埋土中より、弥生時代後期後半に属すると考えられる遺物が出土した。図化したものすべて（fig.56・57、1～37）がSB01より出土したものである。2、4は調整手法の特徴から、いわゆる「淡路型甕」の範疇に入るものと考えられる。さらに、24はやや体部が直線的なタイプの鉢で、淡路市禿山遺跡をはじめ、淡路市楠本下林遺跡、洲本市寺中遺跡、下内膳遺跡などで類例がみられ、神戸市域においては、垂水区東石ケ谷遺跡、兵庫区上沢遺跡、中央区熊内遺跡、やや時期が下がるが、須磨区戎町遺跡などで確認されている。その他、18は高環と考えられ、山陰系に属する可能性が高い。



fig.57 SB01出土遺物（2）

3.まとめ

今回の調査においては、古墳時代後期（第1造構面）および弥生時代後期（第2造構面）の造構を検出し、同時期の集落の抜がりを確認できた。弥生時代後期後半に属すると考えられるSB01は、やや規模の大きい竪穴建物で、内面に赤色顔料の付着する鉢（fig.56・24）や高坏（fig.57・31）が確認されている他、他地域からの搬入または影響を受けたもの（図示し得なかったものも含む）も数点含まれ、その特殊性が窺える。



fig.58
東半第1造構面（西から）



fig.59
東半第2造構面（西から）

9. 都賀遺跡 第20次調査

1. はじめに

都賀遺跡は、六甲山南麓都饗川東岸の標高40m前後の微高地上に立地し、過去の調査において、弥生時代中期の方形周溝墓、弥生時代後期末～古墳時代前期の竪穴建物などをはじめ、縄文時代早期～室町時代の遺構・遺物が確認されている。

今回の調査は、会館建設に伴うもので、弥生時代後期～中世の遺構・遺物を検出した。

2. 調査の概要

事前の試掘調査において、弥生時代後期末～古墳時代前期の遺構・遺物を検出したことから、敷地内の工事影響範囲についての調査を実施した。

基本層序

上層より、表土および盛上・攪乱土、暗灰色砂礫土（近世頃の整地土）、暗褐色砂質土（遺物包含層）、褐色砂礫土～褐色砂質土（遺構面）となる。

遺構・遺物

弥生時代後期末～古墳時代前期の竪穴建物1棟（SB01）・土坑2基（SK01・02）、弥生時代後期～中世のピット11基を検出した。

SB01

調査区域の南西隅で検出された隅丸方形の竪穴建物で、西及び南側は調査区外にのびている。南北4.0m以上×東西1.3m以上、深さ0.1～0.2mを測る。埋土内より弥生時代後期末～古墳時代前期の土器が出土した。

SK01

調査区域の南側で検出した土坑で、南半部は削平されている。南北0.6m以上×東西1.3m以上、深さ0.1～0.2mを測る。埋土内より弥生時代後期末～古墳時代前期の土器片が出土した。

SK02

調査区域の西側で検出した楕円形の土坑で、南北1.0m×東西0.7m以上、深さ0.1～0.2mを測る。埋土内より弥生時代後期末～古墳時代前期の土器片が出土した。

ピット

11基検出され、直径0.3～0.8m、深さ0.1～0.2mと規模がさまざまである。いずれも出土遺物が小破片のため、詳細な時期は不明であるが、弥生時代後期末～古墳時代前期または中世頃のものと推察される。

3. まとめ

今回の調査地においては、特に、竪穴建物をはじめとする弥生時代後期末～古墳時代前期の集落の一部を形成する遺構が検出され、集落の拡がりや様相がかなり明らかにすることができた。今後の周辺地域における調査によって、さらに諸相解明が進むものと推察される。



fig.60 調査地位図 S=1:2,500

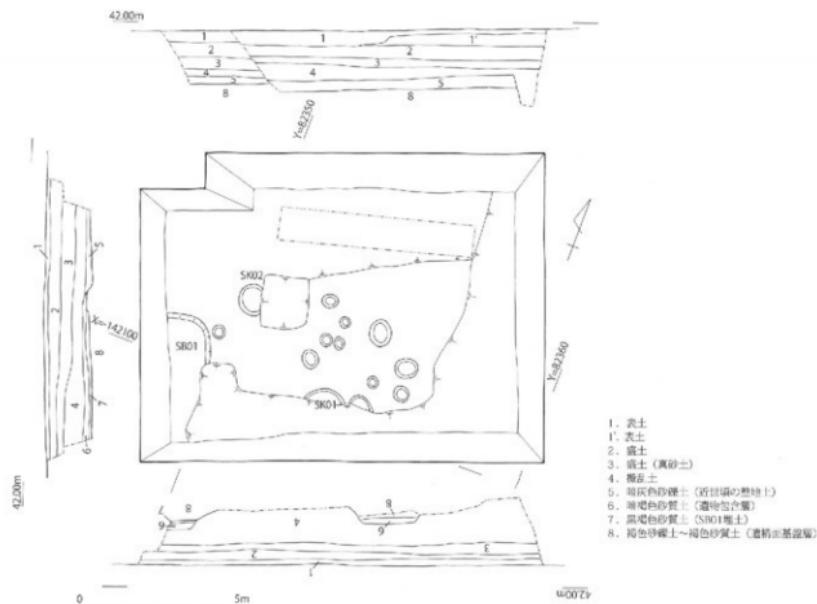


fig.61 調査区平面図・土層断面図



fig.62
調査区（北から）

10. 神ノ木遺跡 第1次調査

1. はじめに

神ノ木遺跡は灘区神ノ木通に所在する遺跡で、都賀川左岸の沖積地上に立地する。周辺には都賀遺跡、篠原遺跡など、神戸を代表する遺跡も存在する。

今回の調査は、個人住宅の建設工事に先立つもので、工事によって遺跡が損壊を受ける部分について実施した。

2. 調査の概要

調査区の南西部から中央部にかけては、大きく攢乱を受けていたが、北部および南東部などは、良好な状態で遺物包含層、遺構面が残存していた。

基本層序

調査地は北西から南東への傾斜地で、現地表面の標高は、調査地の北部で33.0m、南部で32.2mである。調査の対象となる4a層は、弥生時代から中世の遺物などを含む遺物包含層で、その下層上面において遺構が検出された。遺構検出面の標高は、北部で32.1m、南部で31.2mである。

遺構

SR01

自然流路（SR01）・溝（SD01）・土坑（SK01～12）などの遺構を検出した。

調査区の東部で検出された北から南に流下する流路で、幅9m以上、深さ約0.7mを測る。埋土の堆積状況は、砂層と土壤化した砂質シルトが互層になっており、遺物の多くは、この層位中から出土した。その大半が平安時代後期～鎌倉時代の土器片であるが、サヌカイト製の石錐も1点確認した。

SD01

調査区の北部で検出された溝で、幅約1m、深さ約0.2mを測る。埋土は砂で、遺物包含層（4a層）のような土は含まれない。土器の小破片が少量出土した。

土坑

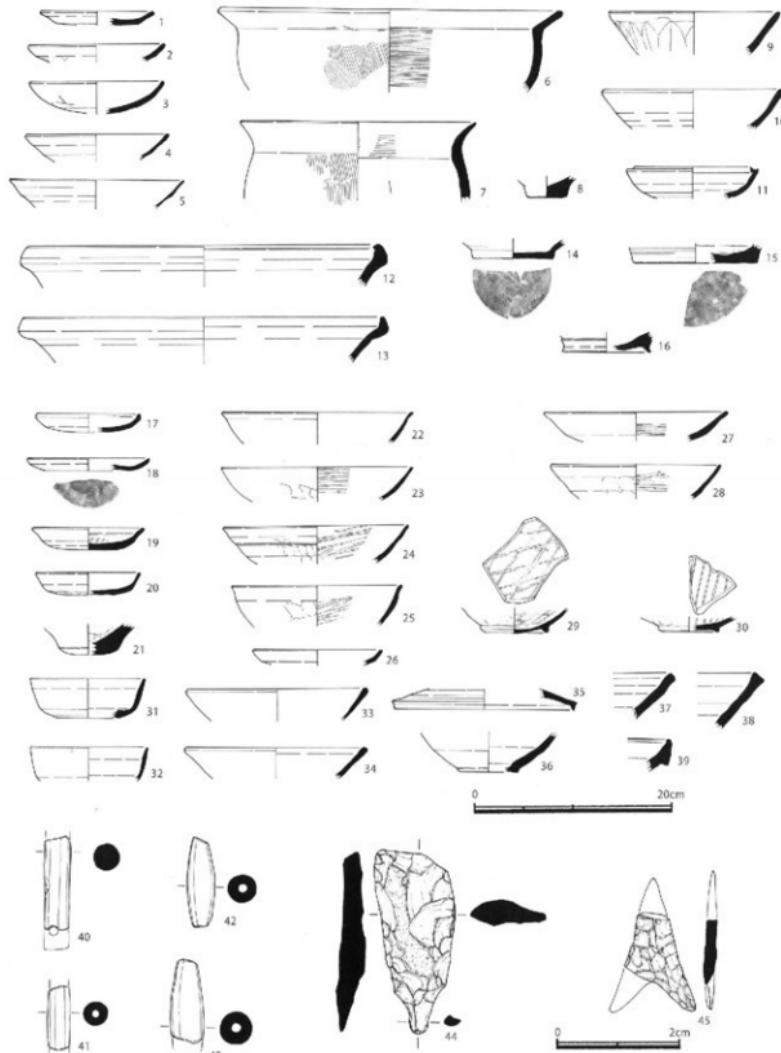
径1m前後の不整円形ものを11基、2×3.5mの不整楕円形のものを1基（SK08）検出した。埋土の状況から、倒木跡と認められるもの（SK02）が存在し、遺物が僅少な点から考えると、ほとんどが倒木跡である可能性が高い。僅少な遺物は、中世に属するものと推測される。



fig.63 調査地位図 S=1:2,500



fig.64 調査区北半（東から）



1 ~ 4 : 3a層、5 ~ 16 + 40 ~ 43 + 45 : 4a層、17 ~ 39 + 44 : SR01
 (1 ~ 7 + 17 + 18 : 土頭器、8 + 21 : 強生土器、9 : 青磁、
 10 ~ 15 + 30 ~ 39 : 陶器器、19 + 20 + 22 ~ 30 : 瓦器)

fig.65 出土遺物

3.まとめ

今回の調査においては、攪乱の影響もあり、建物跡等の顕著な遺構は確認できなかつたが、遺物包含層である4a層より、弥生時代の石鐵のほか、平安時代～鎌倉時代の土器類が主体的に出土しており、中国製の青磁の破片などもみられる。このような状況から、調査区に近い位置に、同時代の人々の居住地が存在するものと思われる。

北に隣接する都賀遺跡は縄文時代早期・弥生時代中期・同後期・古墳時代・奈良時代末～平安時代初頭、さらに中世・近世の遺構・遺物が確認されている。今回、同遺跡確認された遺構・遺物についても、都賀遺跡とほぼ同様で、立地の点からも、一体（一連）である可能性も考えられる。

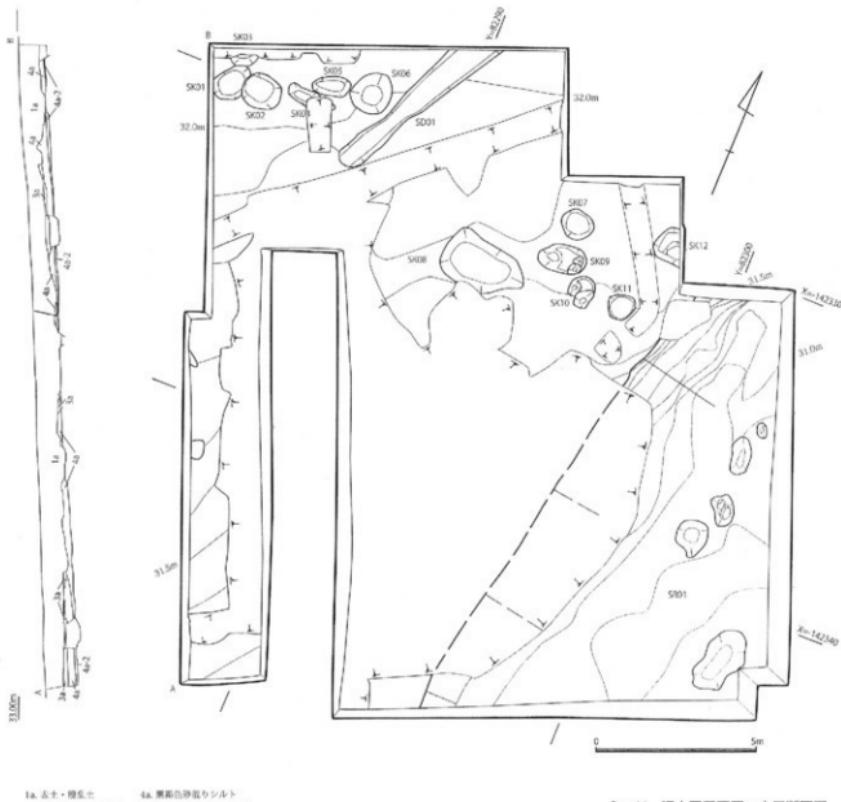


fig.66 調査区平面図・土層断面図

11. 日暮遺跡 第32次調査

1. はじめに

日暮遺跡は、六甲山系を源とする旧生田川や都賀川などの中小河川によって形成された扇状地上に位置する遺跡で、過去の調査においては、弥生時代～近世の遺構・遺物が検出されており、特に、古墳時代～平安時代のものが多くみられる。

今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、掘削工事によって埋蔵文化財が影響を受ける範囲について実施し、2面の遺構面を確認した。

2. 調査の概要

おおよそ平安時代～鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。

基本層序

現地表面から0.05～0.55mの範囲は、盛土及び擾乱層である。その下層に数面の旧耕土・旧床土が存在し、その下層の暗褐色砂質シルトの上面が第1遺構面となる。この暗褐色砂質シルトは第2遺構面直上の遺物包含層で、平安時代の遺物を含む。その下層の黒褐色シルトおよび褐灰色砂質シルトの上面が第2遺構面となる。さらに下層において、暗茶褐色シルト、淡黄灰色細砂が存在するが、遺構・遺物は確認されなかった。

第1遺構面 捩立柱建物2棟（SB101・102）、ピット30基を検出した。

SB101 南北2間分を検出した。東側調査区外に続くものと考えられる。柱穴は径0.35m前後、深さ0.42～0.58m、柱間は約1.7mを測る。また、径約0.15mの柱痕を確認した。埋土中より、土師器、瓦器の小破片が出土した。

SB102 東西1間分、南北3間分を検出した。擾乱等により、全体規模は不明である。柱穴は径0.2～0.3m、深さ0.12～0.62mを測り、一部の柱穴では、径0.15～0.2mの柱痕を確認した。埋土中より、土師器、須恵器の小破片が出土した。

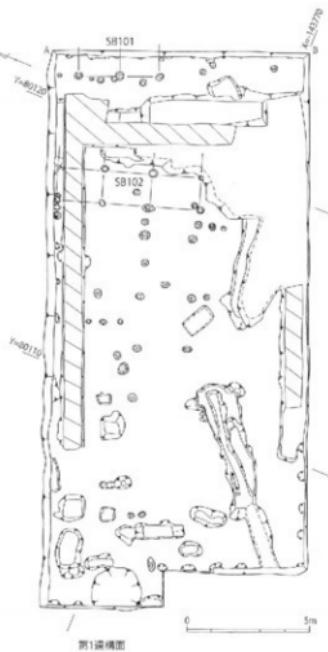
ピット 調査区の東半部を中心に検出されたが、SB101・102以外でも建物等のまとまりを確認することはできなかった。規模はさまざまで、径0.1～0.4m、深さ0.08～0.46mを測り、径0.15m前後の柱痕を確認したものもある。

第2遺構面 溝1条、土坑10基（SK201ほか）、落ち込み状遺構1基（SX201）、ピット90基（SP249・226・285など）を検出した。

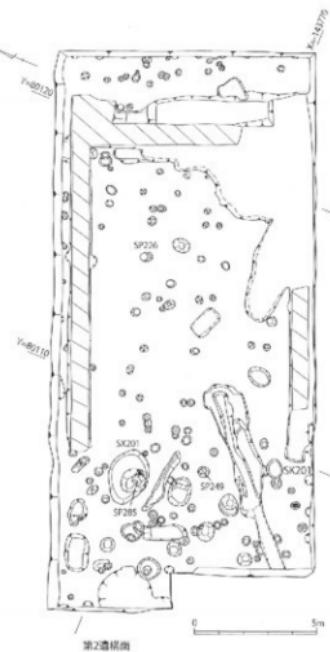
土 坑 SK201は長径0.78m、短径0.6m、深さ0.2mを測る。内部には、完形の土師器壺1点（fig.72・37）が口縁部を上にして据えられており、壺内に銭貨1点が納められていた。銭貨は銅錢で、腐食により銭文は不明であるが、銭径が19.5mmである点から、皇朝十二銭



fig.67 調査地位図 S=1:2,500



第1遺構面



第2遺構面

1. 未トマ窓
2. 未仕上シルト (壁面)
3. 黄褐色シルト (壁面)
4. 緑褐色地質シルト (壁面)
5. 灰色地質シルト
6. 灰色斜面シルト
7. 灰色泥質シルト
8. 灰色砂質シルト (ピット壁)
9. 灰色泥質シルト (遺物包含層・第1遺構面基盤)
10. 灰色シルト (ピット壁)
11. 灰色シルト (ピット壁)
12. 灰色シルト (第2遺構面基盤)
13. 緑褐色シルト
14. 灰色泥質シルト

fig.67 調査区平面図・土層断面図



fig.69 第1遺構面 (東から)



fig.70 第2遺構面 (東から)

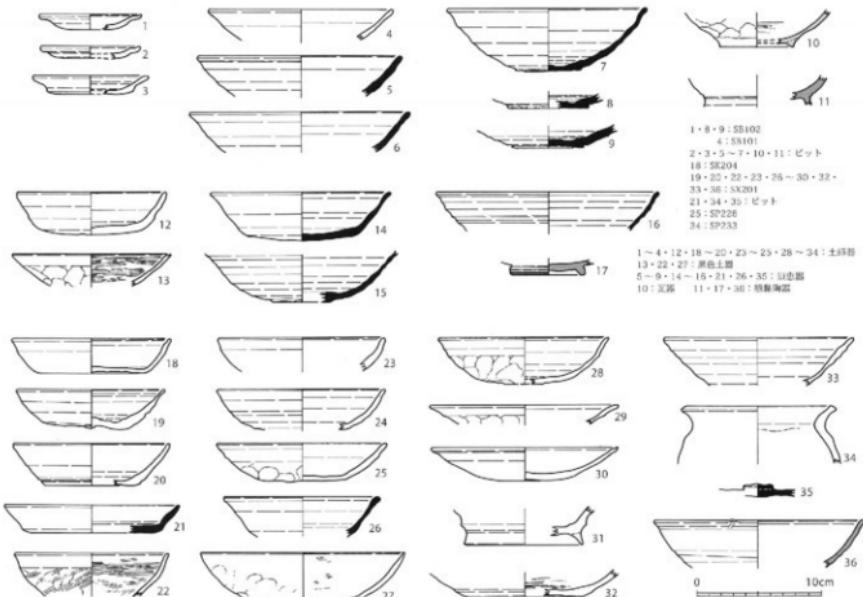


fig.71 出土遺物 (1～11: 第1遺構横面、12～17: 遺物包含層、18～36: 第2遺構面)



fig.72 SK201
平面・断面図
および出土遺物

のひとつである承和昌寶(初鑄承和2年[835])の可能性がある。土師器甕の外面にはイネ類圧痕5箇所が確認され、甕内面下半には有機物の付着が認められた。また、埋土中より、土師器、須恵器の小破片とともに、オオムギおよびコムギの炭化した種子が各1点出土した。種子類については「III. 平成20年度の保存科学調査・作業の概要」を参



fig.73
SK201 (東から)

照されたい。その他に、土坑状遺構が9箇所検出されており、径0.6m前後の円形のものと、長径0.7～1.2m、短径0.55～0.9mの橢円形状のものが確認されている。いずれも、深さ0.2～0.6mを測る。

ピット 大小さまざまなものが検出され、径0.2～0.5m、深さ0.05～0.58mを測り、径0.1～0.28mの柱痕が確認できたものもある。埋土中より、土師器、須恵器、黒色土器などの小破片が出土しており、SP226、SP285のように、底部に土師器皿や壺を据えているものも確認された。また、SP249（長径0.47m、短径0.45m、深さ0.5m）の下層部分より、径0.05～0.2mの数個の石の上に、須恵器壺1点が口縁部を下に向けたかたちで検出された。その他、上層の埋土より、土師器皿も出土した。

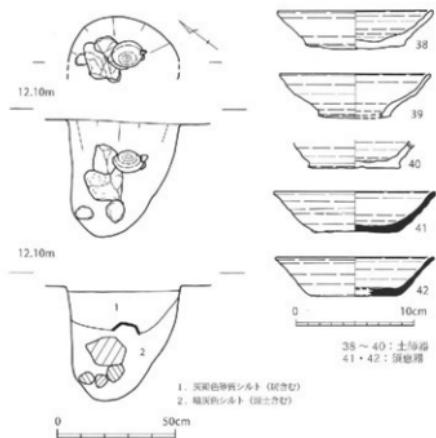


fig.74 SP249平面・断面図および出土遺物

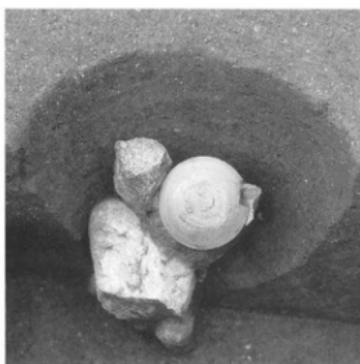


fig.75 SP249 (南東から)

SX201 長径2.3m、短径1.7m、深さ0.3mを測る。中央部に土器類が集中する箇所を有し、土師器皿・壺、須恵器壺、黒色土器壺、綠釉陶器壺などが確認された。

3.まとめ

今回の調査では、平安時代末～鎌倉時代初頭（第1遺構面）と平安時代（第2遺構面）の遺構・遺物を検出した。

第1遺構面において検出された掘立柱建物2棟（SB101・102）は、集落の拡張を示唆するもので、過去の調査においても平安時代末～鎌倉時代初頭の遺構の検出例が少ないとから、重要な成果と言えよう。

第2遺構面において、平安時代の遺構が数多く検出されたが、過去の調査においても、特に9～10世紀に属する遺構・遺物が多くみられ、同遺跡の特徴とも考えられる。今回の調査において、特筆されるものにSK201が挙げられる。SK201は、土坑内に土師器の壺1点を埋納しているが、これは第1次調査（1986年）にて検出されたP-193・P-194と形状、時期共、共通するものである。その他、SP226、SP285、SX201からの遺物の出土状況は、祭祀に関わる可能性もあり、SK201も含めて興味深い事例である。

同時期の祭祀に関わると考えられる埋納遺構は、第1次調査において6箇所確認されているが、埋納方法等から以下の4パターンを想定している。

- ①土師器壺を納めたもの。
- ②土師器壺と銭貨（皇朝銭）を納めたもの。
- ③土師器鍋に土師器壺・銭貨（皇朝銭）を入れ、納めたもの。
- ④柱穴の掘形内に銭貨（皇朝銭）・土師器壺を納めたもの。

また、③のパターンの事例においては、銭貨（皇朝銭）に粟・稗と考えられる穀物種子の付着がみられ、銭貨と共に入れられたと可能性が高い。今回の調査のSK201は、上記の①のパターンに該当すると考えられるが、壺内より銭貨のほか、コムギ、イネ科植物の炭化種子も確認されており、③のパターンの要素も含まれる。

祭祀の内容については確証がなく、断定はしにくいが、いずれも柱穴や建物付近への埋納であることから、地鎮に関わる可能性が窺える。一方で、壺等の容器の埋納事例について、胞衣埋納の可能性も想起できるが、神戸市域においては律令期～中世の事例がほとんどなく、須磨区大田町遺跡（1994年・第5次調査）で8世紀末頃の須恵器壺を使用した事例がみられる程度である。SK201や第1次調査のP-193・P-194が、胞衣埋納に関わるものか否かは留意すべき点であるが、事例・類例の増加を待ちたい。



fig.76 SX201 (南東から)

12. 日暮遺跡 第33次調査

1. はじめに

日暮遺跡は六甲山南麓の沖積地に位置し、過去の調査において、弥生時代後期～中世の遺構・遺物が確認されている。

今回の調査は、市営住宅の建て替え工事に伴うもので、平安時代末期～鎌倉時代初頭の集落の一部を検出した。尚、平成21年度に『日暮遺跡第33・34次発掘調査報告書』を刊行しており、詳細については参照されたい。

2. 調査の概要

今回の調査は、市営住宅の建築工事により、埋蔵文化財が影響を受ける範囲について実施した。調査地は3ヵ所に区分し、便宜的に1区～3区とした。

基本層序

擾乱上・盛土を除去すると、近世・近代の耕土が数層堆積し、その下層に暗褐色～黒褐色砂質土の遺物包含層が部分的に存在し、さらに風化した花崗岩の砂粒を含む褐色～茶褐色バイラン土と続き、調査地東半部では、10～15cmの礫を多量に含む。遺物包含層上面とその下層上面が遺構面となるが、3区のみで2面の遺構面が確認された。

1 区

溝2条、ピット2基が検出され、溝の埋土から、12世紀代の須恵器が出土した。

2 区

近世・近代の耕作による削平が著しく、遺構は検出できなかった。

3 区

遺物包含層（遺物包含層）の上面とその下層（褐色～茶褐色バイラン土）上面において遺構が確認され、上層より第1遺構面、第2遺構面とした。

第1遺構面

溝を15条（SD11他）、土坑1基、ピット3基を検出した。SD11の埋土より、12世紀代の須恵器、土師器の小破片が出土した。

第2遺構面

溝数条、土坑18基、ピット数基、湿地状落ち込み1基を検出した。

SK205

短辺0.8m、長辺2.0mの長方形の土坑で、埋土に焼土と炭が多量に認められ、床面は固く焼けている。この土坑から東方向に、幅0.2mの溝が派生するが、焼土や炭は認められない。埋土から中世に属する須恵器、土師器の小破片が出土した。

SK206

SK205の東側で検出された深さ0.4mの土坑である。埋土に焼土と炭を含むが、床面は焼けていないため、SK205で排出された焼土と炭を廃棄した可能性が考えられる。

SP2110

直径約0.2mの小規模なピットで、土師器皿を3枚重なるように出土しており、地鎮等に関わるものと推測される。

湿地状落ち込み

幅約8～11m、深さ約0.4～0.8mを測り、埋土は、概ね上層が砂質シルト層、下層が

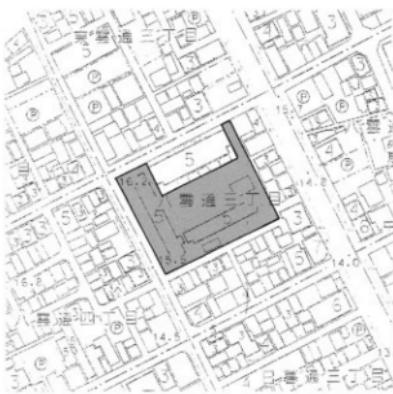


fig.77 調査地位置図 S=1:2,500

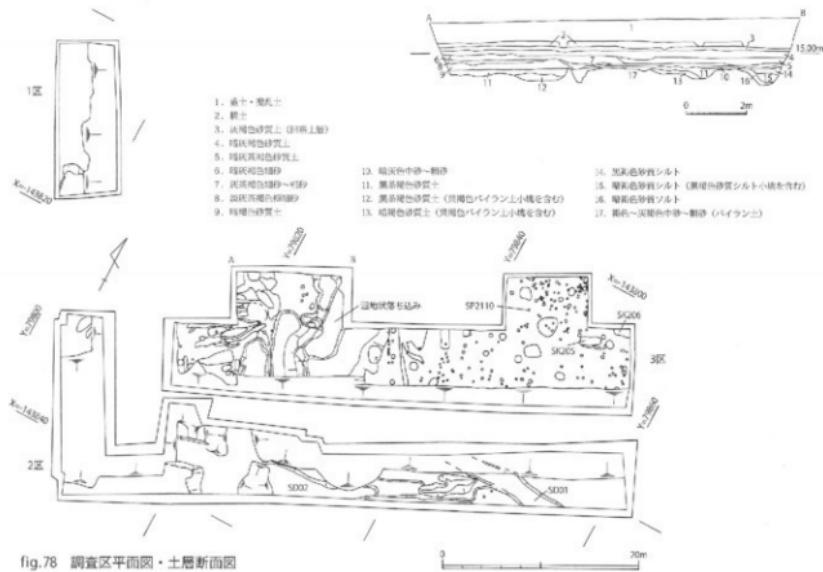


fig.78 調査区平面図・土層断面図

砂層で、元々流路状のものから、土砂の堆積によって湿地状に変化していったことが窺える。埋土より中世に属する須恵器、土師器の小破片が多く出土したが、土師器皿の完形品も確認された。

出土遺物 遺構および遺物包含層から、土師器、須恵器のほか、少量ではあるが青磁、白磁、平瓦、丸瓦、鰐羽口、石鍋、土錘の小破片が出土した。いずれも12世紀末～15世紀前半の範疇ものと考えられる。

3.まとめ

今回の調査では、中世のピット、土坑、溝などを検出し、12世紀末～15世紀前半に属する遺物が出土した。調査地は日暮遺跡の西端に位置するものの、集落の拡張が同地域にまで及ぶことが確認された。同遺跡は奈良時代に栄えた「敏馬浦」に程近く、交通の要衝地であることから、成果の意義は大きい。



fig.79 3区第2遺構面全景（南東から）



fig.80 SP2110 土師器皿出土狀況

13. 雲井遺跡 第27次調査

1. はじめに

雲井遺跡は、六甲山南麓を南に流れる生田川によって形成された複合状地の端部に立地する。過去の数次にわたる調査において、縄文時代早期～中世の遺構・遺物が検出されている。

今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、弥生時代中期および奈良時代以降遺構・遺物を検出した。

2. 調査の概要

敷地内の建物基礎工事において埋蔵文化財に影響を及ぼす箇所について調査を実施し、便宜上、1～6区に調査区を区分して進めた。

基本層序

上層より、盛土（表土）、盛土（擾乱土）、黄灰褐色シルト（または淡灰褐色シルト）、灰褐色シルト、暗灰褐色シルト（遺物包含層）、茶灰色砂質土（遺構面）となる。

遺構・遺物

弥生時代中期頃の溝状遺構1条、土坑2基、奈良時代以降の溝状遺構（鋤溝）11条のほか、時期不詳のピット9基を検出した。

SD01～10・12は、いずれも北西から南東方向にのびる溝状遺構で、3～5区において検出した。いずれも幅0.25～0.5m、深さ0.05～0.15mを測り、SD07以外ほぼ約1.8m間隔（ほぼ1間隔）で平行していることから、耕作に伴う鋤溝の可能性が高い。埋土より土師器・須恵器の小破片が出土したが、奈良時代かもしくはそれ以降のものと考えられる。

SD11は、1～3区において検出した溝状遺構で、幅0.45～0.7m、深さ0.15～0.38mを測る。埋土より弥生時代中期頃の土器片が出土した。また、縄文時代晚期頃の突唇文土器も1点出土した。

SK01は、3区の西側において検出した土坑で、長径1.25m、短径1.05m、深さ0.1mを測る。埋土より弥生時代中期頃の土器片が出土している。また、SK02は、1区の南側において検出した土坑で、長径0.6m、短径0.3m、深さ0.05mを測る。埋土より土器の小破片が出土したが、詳細な時期は不明で、弥生時代中期頃の可能性が考えられる。

その他、3・4区においてピットを9基検出したが、いずれも建物としてまとまらなかった。直径0.2～0.55m、深さ0.05～0.36mを測る。弥生時代以降のものと考えられるが、詳細な時期は不明である。

3. まとめ

今回の調査においては、弥生時代中期と奈良時代以降の遺構・遺物を検出し、同時期における集落の拡張が確認できた。しかしながら、西側に隣接する第10次調査におい



fig.81 調査地位図 S=1:2,500

て検出された古墳時代後期の遺構については、今回確認できず、削平等によって失われた可能性が高い。

以上のことから、同地域においては、長期間にわたって連続と集落が営まれていたことが理解でき、同遺跡の諸相解明に大きく進展した感がある。

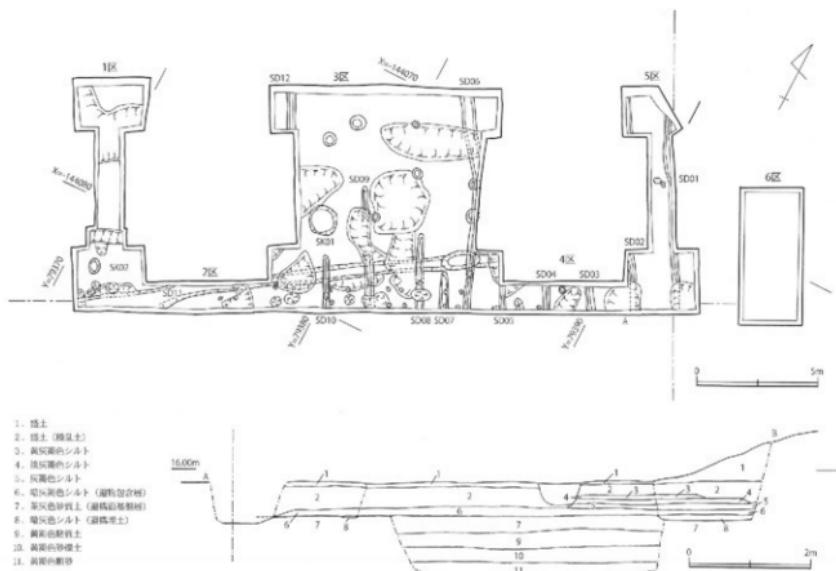


fig.82 調査区平面図・土層断面図



fig.83 2・3区(東から)



fig.84 4・5区(東から)

14. 雲井遺跡 第28次調査

1. はじめに

雲井遺跡は、六甲山南麓の複合扇状地末端部に位置し、過去の数次にわたる調査において、縄文時代～中世の複合遺跡であることが判明している。

今回の調査は、旭通4丁目地区第一種市街地再開発事業に伴うもので、8面の遺構面が確認され、縄文時代早期～中世の遺構・遺物を検出した。尚、平成21年度に『雲井遺跡第28次発掘調査報告書』を刊行しており、詳細については、こちらを参照されたい。

2. 調査の概要

調査区を5分割（1～5区）区分し、順次進めた。平成19年度に1・2区、平成20年度に3～5区の調査を行った。

基本層序

上層より、現代盛土・整地層（焼土含）、旧耕土・床上、茶褐色粗砂・淡灰橙色シルト質細砂（中世洪水砂層）、淡灰色シルト質細砂（上面が第1遺構面〔鎌倉時代～室町時代頃〕）、灰褐色シルト質極細砂（上面が第2遺構面〔古墳時代後期～飛鳥時代頃〕）、暗灰褐色シルト質細砂（上面が第3遺構面〔弥生時代後期末～古墳時代前期頃〕）、暗黃灰色シルト質細砂（上面が第4・5遺構面〔弥生時代前期～中期頃〕）、乳灰褐色シルト質細砂・淡黃灰色シルト質細砂・乳褐色シルト質極細砂・淡乳褐色シルト質極細砂（第7・8遺構面相当層〔縄文時代早期〕）となっており、箇所によって若干の差異がみられる。また、5区の北辺部においては、第6遺構面相当層（縄文時代後期）が存在する。

第1遺構面

鎌倉時代～室町時代頃の遺構面と考えられ、掘立柱建物1棟、溝4条、自然流路1条を検出した。また、第2次世界大戦時の簡易防空壕などの痕跡も確認された。

第2遺構面

古墳時代後期～飛鳥時代頃の遺構面と考えられ、溝2条、ピット19基、流路2条のほか、数条の鰐溝とともに圃場の段差や畦畔なども検出した。

第3遺構面

古墳時代前期頃の河道、弥生時代後期末～古墳時代前期（庄内式併行期）の竪穴建物5棟、土坑、溝、ピットなどを検出した。遺構面が削平をうけている箇所が多く、密に遺構が存在した可能性が高い。



fig.85 調査地位図 5=1:2,500

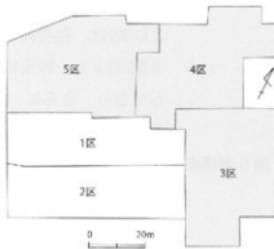


fig.86 調査地区割図（網かけ部分は平成20年度調査）

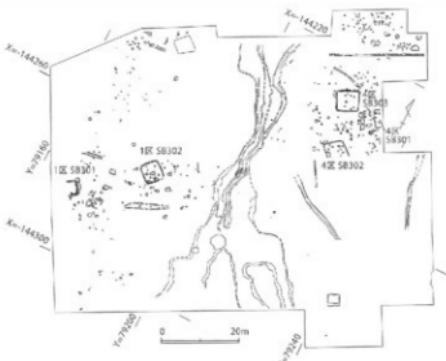


fig.87 第3遭橋面平面圖



fig.88 SB 501・502 (北西から)

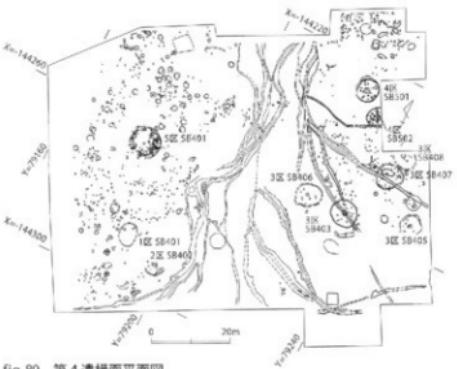


fig.89 第4遺構面平面図



fig.90 SB 301・302・303 (南から)

第4遺構面 弥生時代中期の遺構面と考えられる。竪穴建物11棟、貯蔵穴の可能性が高い土坑39基のほか、土坑・溝・ピットなどを多数検出した。調査区中央において、河道が検出され、この河道を挟み、貯蔵穴群と竪穴建物群が分かれていることが窺える。遺構の大半が、中期前半（畿内第II様式）～中期中頃（畿内第III様式）に属すると考えられるが、3区のSD401は、弥生時代中期後半（畿内第IV様式）に属すると考えられる。また、4区のSB502より、碧玉材や菅玉未製品、石針、紅臘片岩など、玉作りに関連する遺物が出土しており、さらに、遺構面を覆う遺物包含層（暗灰褐色シルト質極細砂）中より、砥石として転用された武器形青銅器の鋳型が出土したほか、磨製の石剣も確認された。

第5遺構面 弥生時代前期末～中期初頭の遺構面と考えられる。河道、貯蔵穴の可能性が高い土坑、土坑、溝、ピットなどを検出した。5区のSK505（貯蔵穴）より、50個体以上の炭化した種実が出土しており、中には土器の器面に付着したものも存在する。恐らく土器とともに、廃棄されたと考えられる。分析の結果、この種実はイチイガシに類似しており、ブナ科コナラ属アカガシ亜属と同定された。また、イネの種子も確認されている。

第6遺構面 5区の北辺部のみで確認された。縄文時代後期（北白川上層式3期）の遺構面と考えられ、土坑10基、ピット7基、不明遺構2基、流路1条を検出した。5区のSK605は、径1.1×1.0m、深さ約0.2m測る楕円形の土坑で、埋土より、縄文土器、耳栓（土製耳飾）、石鎌、サヌカイト剥片などが出土した。

第7・8遺構面

調査区中央にて検出した河道を境に、西側の1・2・5区において調査を実施した。層

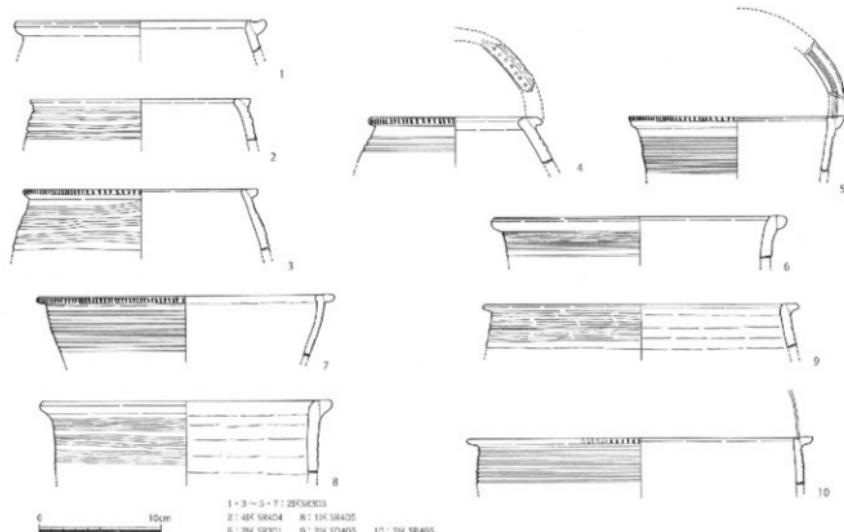


fig.91 出土遺物（1）(逆L字口縁型)

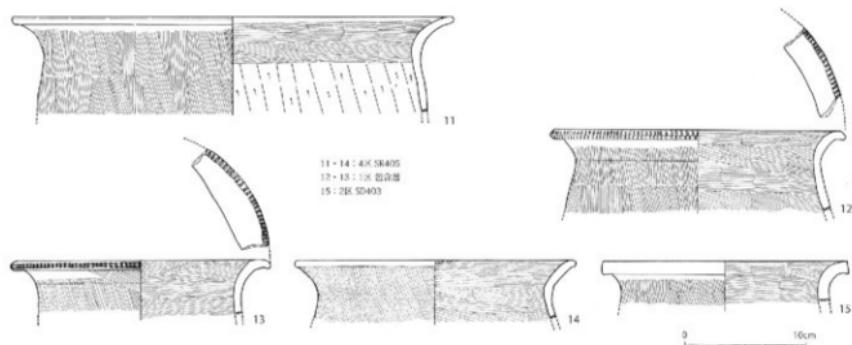
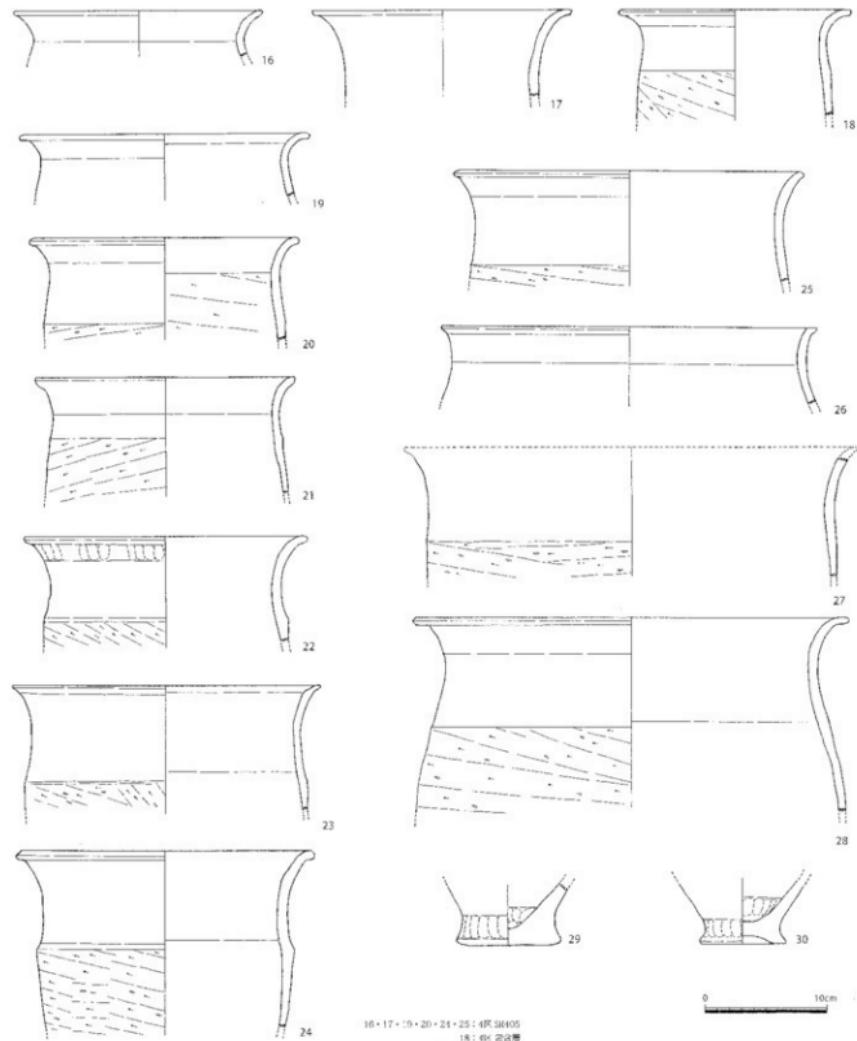


fig.92 出土遺物（2）(大和型窓)



16・17・19・20・21・25 : 4区 SR405
 18 : 4区 空器
 21・26 : 4区 SR504
 22・23 : 2区 SR302
 27 : 5区 SR301
 28 : 28区 202
 29 : 1区 SR4135
 30 : 28区 303

fig.93 出土遺物（3）（紀伊型壺）

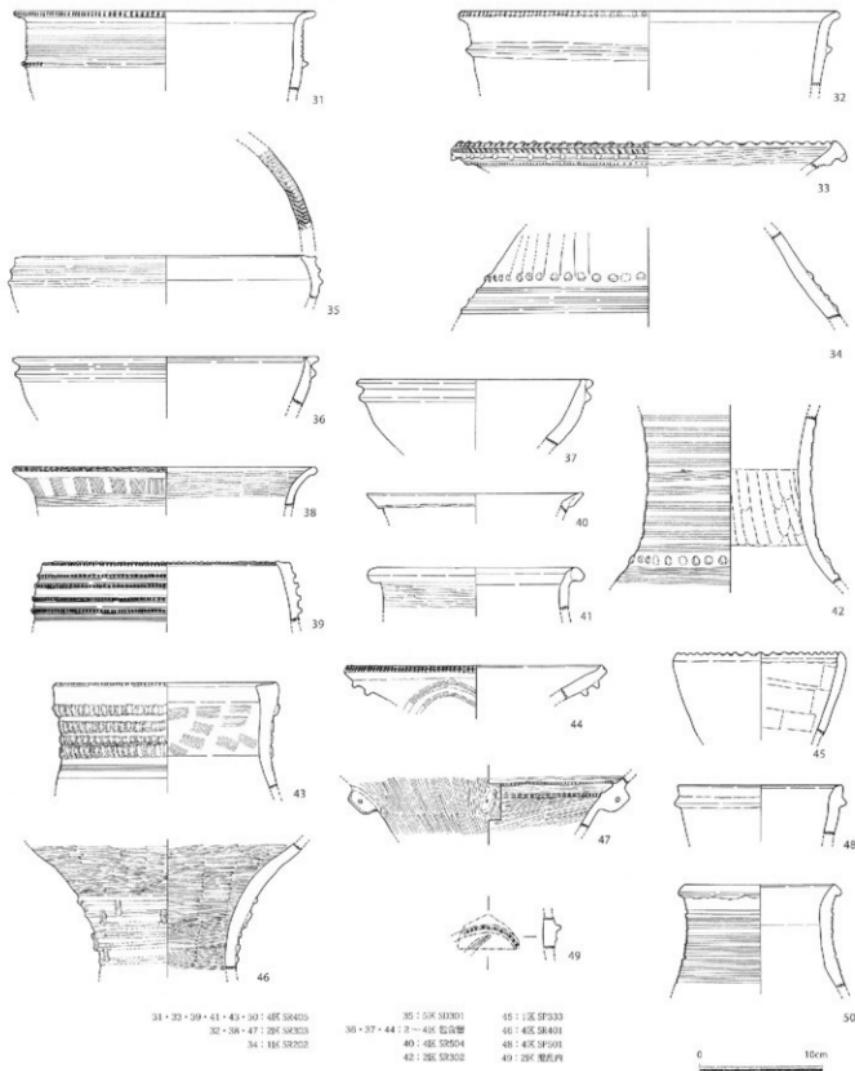


fig.94 出土遺物（4）

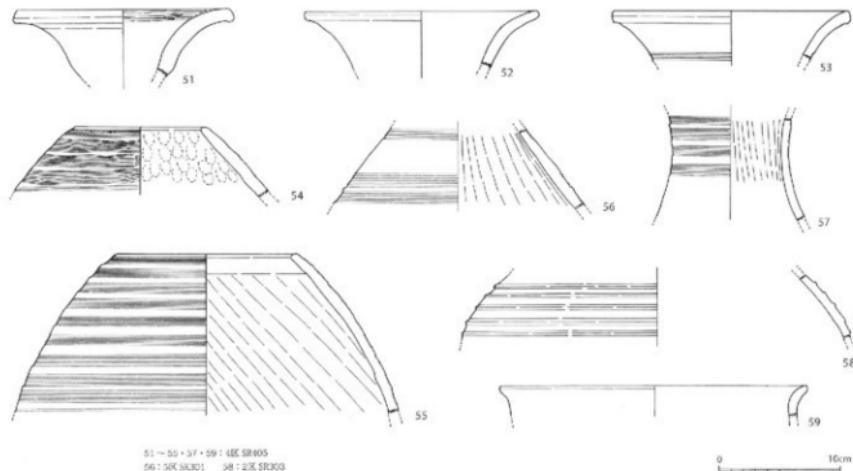


fig.95 出土遺物（5）(生駒西竪窯)

位の違いにより、第7遺構面と第8遺構面とに区別して行ったが、明確な遺構が検出されず、面的な相違も不明瞭であった。縄文時代早期（神宮寺式～神並上層式）の土器片と石器、サヌカイト片が出土した。

弥生時代前 第4・5遺構面出土遺物が対象となるが、第2・3遺構面においても混在がみられる。

～中期の遺物 先述の『雲井遺跡第28次発掘調査報告書』において、その大半は掲載されているが、紙面等の都合から、未掲載ものも多く存在しており、ここでは報告書未掲載資料について報告しておく。（fig.91～98）

これらは、概ね前期末～中期中葉に属すると考えられるが、量的には中期の範囲のものが大半で、中期前半～中期中葉古相のものが多い。文様構成も多種多様で、主として、流水文・擬似流水文・波状文・竹管文・刺突文（fig.96～98など）などが施されたものが多くみられる。

また、他地域からの搬入あるいは影響を受けたもの（fig.91～95）も多くみられ、生駒西竪窯（中河内地域）〔51～59〕のものから、紀伊型甕〔16～30〕、大和型甕〔11～15〕のほか、中期初頭に属すると考えられる逆L字口縁甕〔1～10〕なども含まれる。

3.まとめ

今回の調査においては、縄文時代早期、後期、弥生時代前期～中期初頭、中期前半～後半、弥生時代後期末～古墳時代前期、古墳時代後期～飛鳥時代、鎌倉時代～近代の8面の遺構面を確認した。

その中で盛行期にあたる時期が弥生時代中期で、調査区の中央を流れる河道を挟んで、竪穴住居が集中する東側と、貯蔵穴が集中する西側に分かれており、集落内での土地利用の区別が見える資料が得られた。また、竪穴建物の1棟（SB502）からは、玉作り関連の遺物が出土したほか、遺構面を覆う遺物包含層より、武器形青銅器の鋳型と考えら

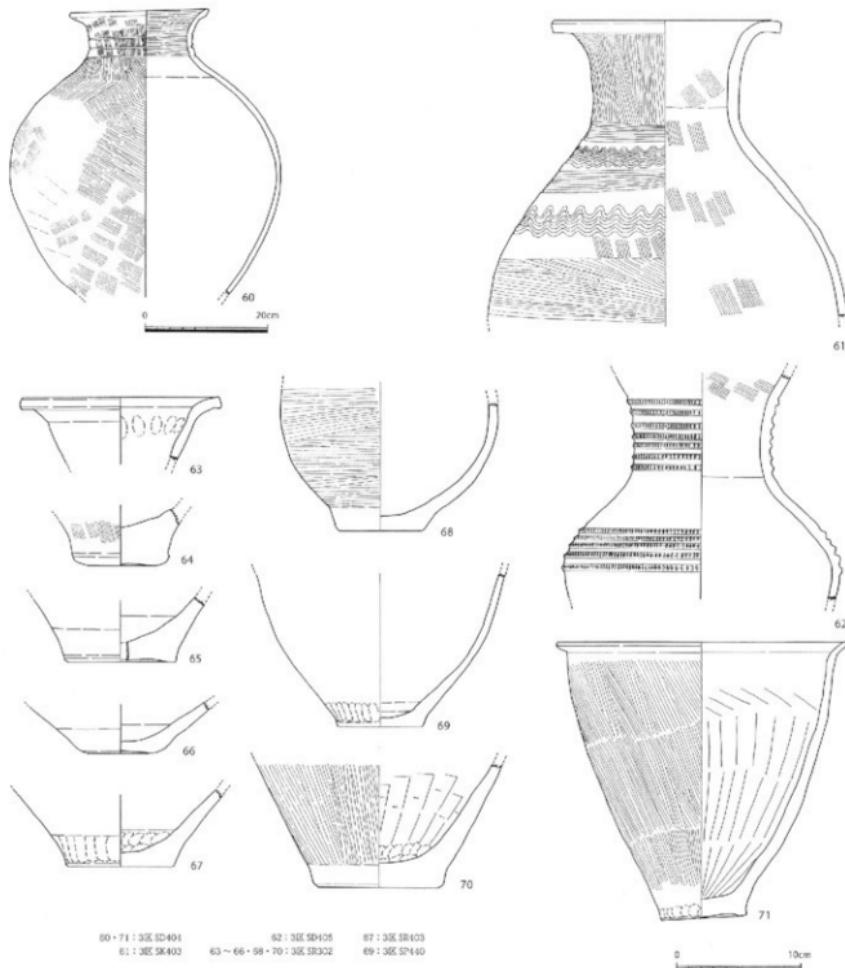


fig.96 出土遺物（6）

れる石製品を砥石に転用したもの（fig.99・91）や、磨製石剣（fig.100・92）などが出土し、集落の特殊性が窺える。一方、土器資料についても、弥生時代前期末～中期に属するものの中に、他地域から搬入あるいは影響を受けたものも数多くみられることから、拠点集落の様相も呈しており、六甲山南麓地域の中核集落のひとつに位置づけられよう。

縄文時代の資料としては、後期の土坑から耳栓が出土し、稀少な資料と言えよう。また、早期の遺構面においては、調査地中央を流れる河道を境に西側において遺物が出土して

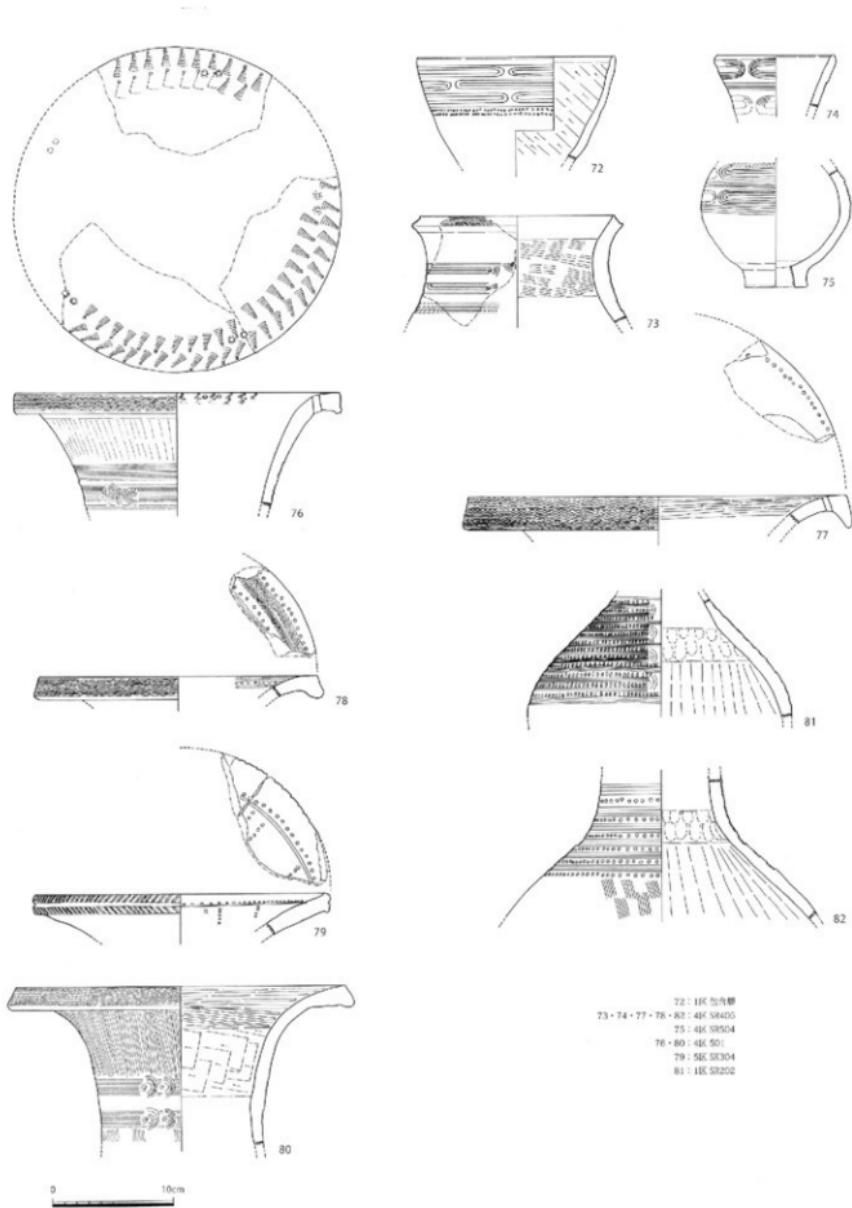


fig.97 出土物 (7)

72 : HK 加内带
 73・74・77・78・82 : 4K SK405
 75 : 4K SK504
 76・80 : 4K SK01
 79 : 5K SK304
 81 : 1K SK202

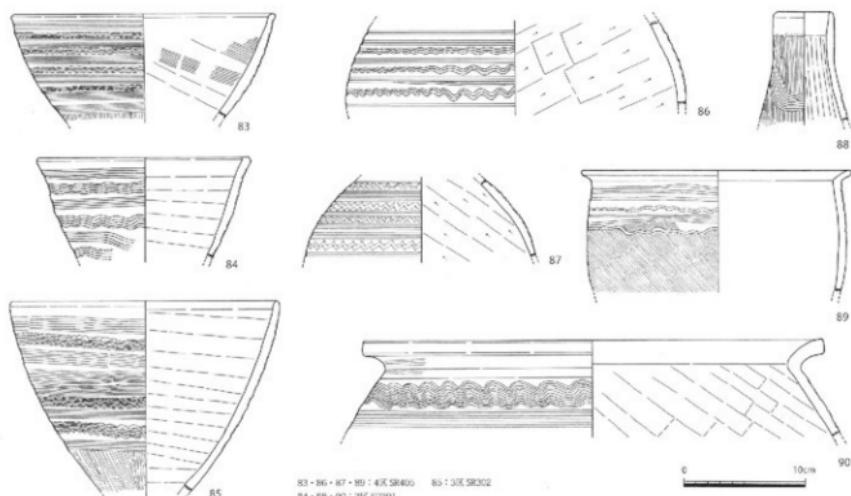


fig.98 出土遺物 (8)

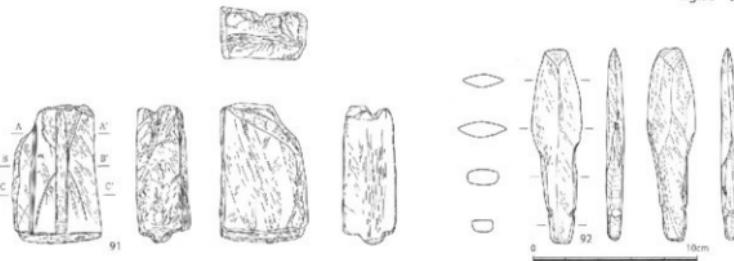


fig.100 磨製石剣実測図

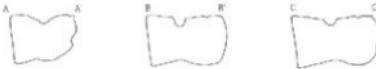


fig.99 武器形青銅器鉄型（砥石）実測図

おり、同時期における生活圏（集落？）の拡がりがある程度確認でき、過去の調査成果と合わせた検討が必要と考えられる。

その他、さまざまな所見、実証等が得られているが、詳細は『雲井遺跡第28次発掘調査報告書』に掲載していることから割愛しておく。

15. 雲井遺跡 第29次調査

1. はじめに

雲井遺跡は、六甲山南麓を南に流れる生田川によって形成された複合扇状地の先端部に立地する。これまでの調査において、縄文時代早期～中世の遺構・遺物が検出されている。

今回の調査は、店舗ビル建設に伴うもので、弥生時代中期～中世頃の遺構・遺物を検出した。

2. 調査の概要

調査区を便宜上、南北に2分割（1区・2区）して進めた。溝3条（SD01～03）を検出し、溝埋土と遺構面直上層より弥生時代中期～中世頃の遺物が出土した。

基本層序

上層より、表土・盛土・攢乱土の下層に黒灰色細砂（遺物包含層）が存在し、その下層、現地表面下約0.4mで遺構面となる暗茶褐色細砂層を検出した。

遺構・遺物

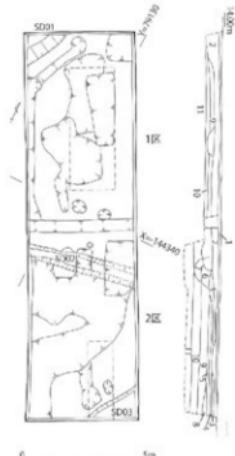
SD01は、全長・幅不明、深さ0.5m以上、SD02は、幅0.6～0.7m、深さ0.3～0.5m、SD03は、全長・幅不明、深さ0.5m以上をそれぞれ測る。いずれも、埋土より弥生時代中期のものと考えられる土器片が出土した。

3. まとめ

今回の調査においては、限られた範囲ながら、弥生時代中期頃の遺構・遺物を検出した。同成果は、同遺跡の拡がりや諸相を知る上で、重要な資料となりうると言えよう。



fig.101 調査地位置図 S=1:2,500



1. 表土
2. 盛土
3. 攢乱土
4. 黒灰色細砂（遺物包含層）
5. 暗茶褐色細砂
6. 黑褐色シルト（SD02埋土）
7. 深黒褐色シルト（SD02埋土）
8. 深褐色シルト（SD03埋土）
9. 墓地褐色細砂（墓地頂部層）
10. 深褐色細砂
11. 深灰褐色細砂

fig.102 調査区平面図・土層断面図

16. 雲井遺跡 第30次調査

1. はじめに

雲井遺跡は、旧生田川により形成された扇状地の先端部付近に位置し、縄文時代～中世の複合遺跡として周知されている。

今回の調査は、介護福祉施設の建設に伴うもので、3面の遺構面を確認し、弥生時代中期～古墳時代後期の遺構・遺物を検出した。

2. 調査の概要

調査区を便宜上、2分割（北半・南半）して行った。

基本層序

上層より、攪乱土、淡黒灰褐色砂質土（古墳時代後期遺物包含層）、淡黒褐色砂質土（第1遺構面基盤層）、黒褐色砂質土（弥生時代遺物包含層、第2遺構面基盤層）、黒灰褐色砂質土（第3遺構面基盤層）、黄灰褐色砂質土の順となっている。

第1遺構面

溝（鋪溝）、土坑、ピットを検出した。土坑（SK101）は、径約1.1m×0.92mで、深さ約0.25mを測る。出土遺物から古墳時代後期に属すると考えられる。鋪溝は数条確認されており、幅0.2～0.3m、

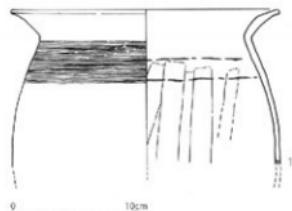
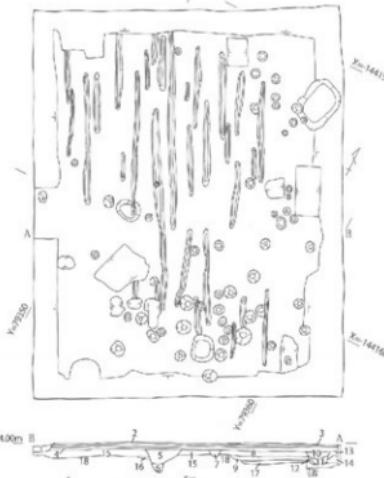


fig.105 SK 101 出土遺物



fig.103 調査地位置図 S=1:2,500



1. 磨丸土
2. 淡黒灰褐色砂質土（古墳時代後期遺物包含層）
3. 黒灰褐色砂質土（第1遺構面基盤層）
4. 黒褐色砂質土（第2遺構面基盤層）
5. 黑灰褐色砂質土（第3遺構面基盤層）
6. 黑灰褐色砂質土（鋪溝）
7. 黑褐色砂質土（第1遺構面）
8. 黑褐色砂質土（第2遺構面）
9. 黑褐色砂質土（第3遺構面）
10. 黑褐色砂質土（黒色の鉢）
11. 黑灰褐色砂質土（黒色の鉢）
12. 黑褐色砂質土（SK301埋土）
13. 黑褐色砂質土（SK301埋土）
14. 黑灰褐色砂質土（黒色の鉢）
15. 黑灰褐色砂質土（鉢が倒れ、第3遺構面側面）
16. 黑褐色砂質土
17. 黑灰褐色砂質土
18. 黑灰褐色砂質土

fig.104 調査区平面図 (第1遺構面)・土層断面図



fig.106 調査区平面図（第2遺構面）

深さ0.05～0.1mを測る。ピットは大小さまざまな規模のものが確認されており、径0.2～0.5m、深さ0.15～0.2mを測る。埋土中より、古墳時代後期の土師器・須恵器の小破片が出土したが、遺構の時期を示すものは不明である。

第2遺構面 第1遺構面と同様に溝（鋤溝）、ピットなどを検出した。検出した鋤溝の規模は、第1遺構面のものと大きく差がなく、幅0.15～0.3m、深さ0.05～0.1mを測る。ピットについても同様で、径0.2～0.5m、深さ0.15～0.3mを測る。埋土中より、古墳時代後期の土師器・須恵器の破片が出土した。

第3遺構面 竪穴建物2棟（SB301・302）、方形周溝墓（SD302）、溝（SD301）、落ち込み状遺構（SX301）ピットなどを検出した。

SB301 平面形状は多角形状を呈し、径約8.0m、深さ約0.4mを測る。主柱穴は6本の可能性が高く、壁際



fig.107 調査区平面図（第3遺構面）



fig.108 第3遺構面北半（南から）



fig.109 第3遺構面南半（北から）

には周壁溝（幅約0.2m、深さ0.05～0.1m）、ベッド状遺構を有する。また、炉跡の可能性が高い土坑（径0.75～1.1m、深さ0.12m）も検出した。埋土中より、弥生時代中期の土器片などが出土したが、特に、北半部において、中期後半に属する壺形土器4個体等を確認した。

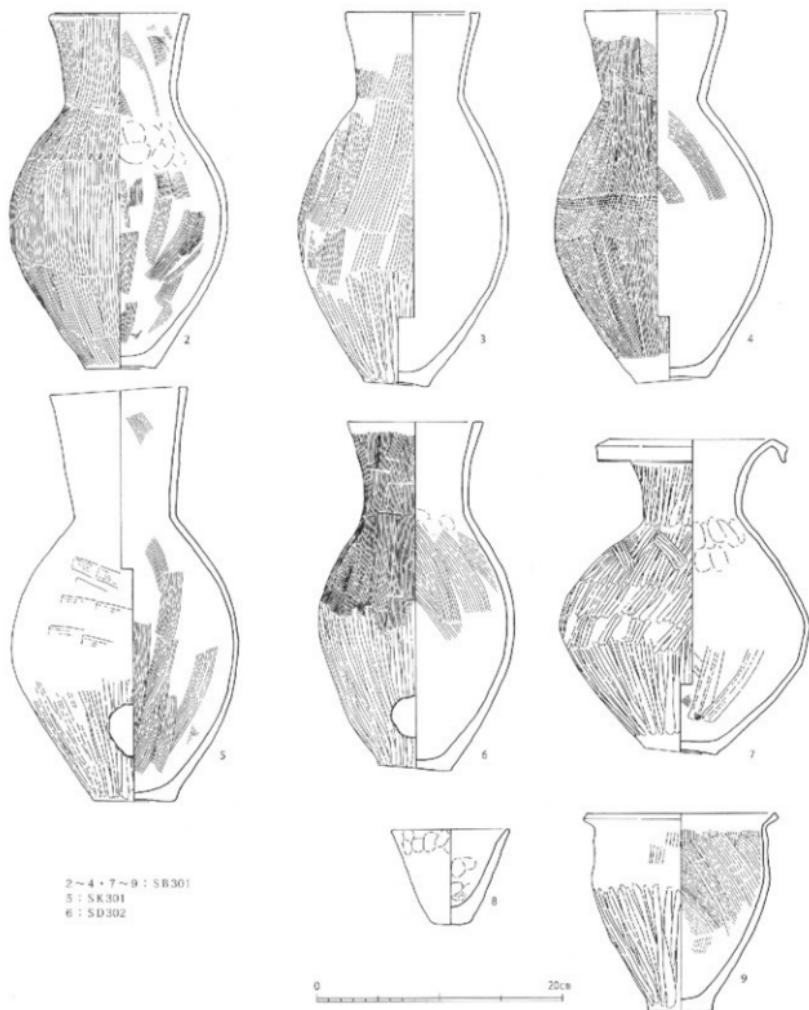


fig.110 SB301・SK301・SD302出土遺物



fig.111 SD301 遺物出土状況

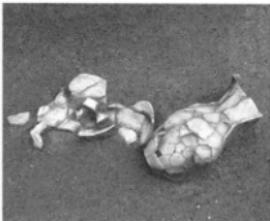


fig.112 SB301 遺物出土状況



fig.113 SB301 遺物出土状況

SB302 平面形状は多角形を呈し、径約6.0m、深さ0.15～0.2mを測る。主柱穴は4本と考えられ、周壁溝（幅約0.2m、深さ0.05～0.1m）を有する。遺物は弥生時代中期上器の細かな破片ばかりであり、SK301、SD302を削平する事から、それより新しい時期だと理解できる。

SD301 調査区の北東端において検出した。幅2.8m以上、深さ約0.65mを測る。埋土中より、弥生時代中期葉～後半の土器片が数多く出土した。

SD302 SB302に削平される。幅約0.9m、深さ約0.9mで南北方向に伸びた後、ほぼ直角に屈曲し、幅約0.6m、深さ約0.1～0.3mで東西方向に伸びる溝である。胴部下半に穿孔のある壺形土器も出土しており、方形周溝墓である。

SK301 SB302に削平される。径約0.64m、深さ約0.4mを測る。胴部下半に穿孔のある壺形土器が1個体出土し、周溝墓等が削平され、遺構底部付近だけが遺存していた可能性がある。

SX301 SB301を切るようなかたちで検出された落ち込み状遺構である。幅約2.0m以上、深さ約0.5mを測るが、大部分が調査区外へと続くことから、その詳細は不明である。埋土中より、弥生時代中期後半の土器片とともに、焼土塊も出土した。

ピット 第1・2遺構面に比べて検出数は多いが、建物等としてのまとまりは確認できなかった。比較的小規模なものが多く、径0.2～0.4m、深さ0.3～0.6m程度である。一部の埋土中より、弥生時代中期の土器の小破片が出土した。

第3遺構面下層

周辺の調査においては、弥生時代前期の遺構面が確認されている。黒灰褐色砂質土（第3遺構面基盤層）の下層において確認された黄灰褐色砂質土の上面が同遺構面に該当する可能性が高いが、遺構・遺物は検出されなかった。

3.まとめ

今回の調査においては、古墳時代後期および弥生時代中期後半の遺構を検出した。特に、弥生時代中期後半に関しては、過去の調査における堅穴建物の検出がみられなかつたため、新たな知見となった。また、検出遺構も多く、集落の中核部である可能性も高い。

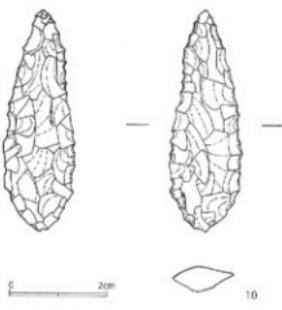


fig.114 SD301出土石器

17. 楠・荒田町遺跡 第43次調査

1. はじめに

楠・荒田町遺跡は、旧湊川東岸の段丘上に位置する遺跡である。これまで42次におよぶ調査において、縄文時代～中世の複合遺跡であることが明らかになっている。特に、弥生時代前期～中期にかけては、地域の中核的集落であったことが窺える。また、近年の調査において、平安時代末期～鎌倉時代初頭の建物、濠などが検出されており、福原京との関連も窺い知ることができる。

今回の調査は、学舎建設に伴うもので、2面の遺構面が確認され、平安時代前期～中世の遺構・遺物が検出された。



fig.115
調査地位置図
 $S=1:2500$

2. 調查概要

今回の調査地は、攪乱が多く、また、西半部は明治19年の假製地形図に記載のある溜池の一部と考えられ、限られた範囲にのみ遺構が検出された。

基本層序 上層より、盛上・攪乱土、茶褐色小礫混細砂、淡灰色シルト混細砂、灰茶色～灰褐色小礫混細砂（第1遺構面）、黄灰色細砂混シルト（第2遺構面）で、第1遺構面ベース層の灰茶色～灰褐色小礫混細砂が遺物包含層となっている。

第1遺構面 中世（13世紀代）の溝、土坑、ピットなどを検出した。

SD101～104は南北方向の溝で、幅0.7～0.9m、深さ0.1～0.3mを測る。

SK 101・102は、いずれも小規模な土坑で、攪乱により平面形状・規模は不明で、深さ0.2～0.3mを測る。埋土より、土師器・瓦器の皿が出土した。

ピットは13基検出したが、いずれも小規模で、径0.2～0.4m、深さ0.2～0.4mを測る。埋土より十師器および須恵器の小破片が出土したものもある。

調査区の西で確認された溜池は、明治19年頃の假製地形図にも記載されており、埋没時期はそれ以降と考えられるが、掘削時期については、池の最下層の埋土から、中世の遺物しか出土しておらず、また、池斜面に位置するSK201を切っていることから、中世後半以降としか認識できない。

第2遺構面 中世（11世紀代）の溝、土坑などを検出した。

SD201は東西方向の溝で、幅約6.4m、深さ約0.2mを測る。埋土より、古墳時代～中世の土器片、サヌカイト片、大型蛤刃石斧の一部などが出土した。また、北西側では、平安時代前期の土師器環・甕の破片がまとめて出土した。

SK201は溜池の肩部に位置し、溜池の掘削時に大きく削平されているため、詳細な規模・形状は不明である。埋土より、中世後半頃の土師器・須恵器の破片が出土した。

SK203は、SD201の底で検出された長辺1.8m、短辺1.2m、深さ0.5mを測る長方形状の土坑である。埋土より、土器の小破片が出土したが、時期は不明である。

3.まとめ

今回の調査では、2面の遺構面が確認され、中世頃の遺構が検出された。これらの遺構の性格や詳細な時期等は、遺物整理が進んだ段階で言及できるものと考えられるが、当該地が福原京に関連する可能性もあることから、その意義が重要視されるように思われる。

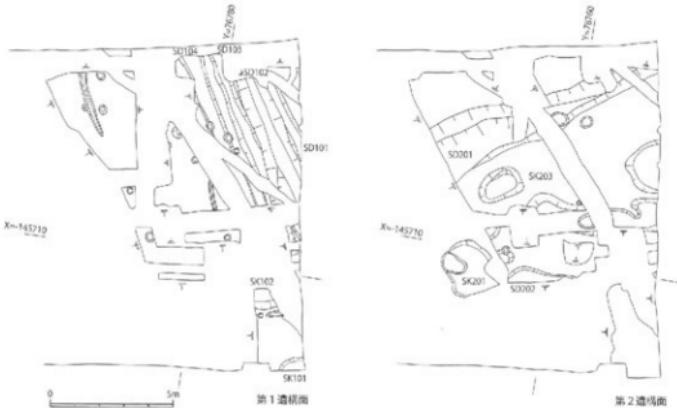


fig.116 調査区平面図



fig.117 第1遺構面（南から）



fig.118 第2遺構面（南から）

18. 楠・荒田町遺跡 第44次調査

1. はじめに

楠・荒田町遺跡は、昭和52年に発見された遺跡で、その後、数次にわたる調査で、縄文時代～中世の複合遺跡であることが明らかになった。

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、弥生時代中期頃の遺構・遺物などを検出した。

2. 調査の概要

敷地内において、掘削工事を行う箇所について調査を実施し、残土置場の関係上、調査区を2分割して進めた。

基本層序

東半部では、上層より現代盛土層、淡灰色泥砂（旧耕土層）、黄褐色砂泥（旧床土層）、灰色泥砂、黄橙色砂泥、淡黒褐色泥砂（弥生時代遺物包含層）、濁黃褐色混疊泥砂（弥生時代遺構面）で、西半部では、現代盛土層、淡灰褐色泥砂、灰色泥砂、黃灰色砂泥、灰褐色泥砂、淡褐色泥砂、濁黃褐色混疊泥砂（弥生時代遺構面）となる。

遺構・遺物

検出した遺構は、落ち込み状遺構3基（SX01～03）、ピット9基（P01～09）で、埋土からの出土遺物などから、いずれも弥生時代中期頃のものと考えられる。また、遺物包含層（淡黒褐色泥砂）から、弥生土器とともに鉄製品1片とサヌカイト片多数が出土した。

SX01

平面形状および規模不明、深さ約0.5m以上を測る。埋土より、土器片とサヌカイト片が出土した。

SX02

西半部を搅乱によって削平されており、平面形状および規模不明、深さ約0.2m以上を測る。埋土より土器片、サヌカイト片、敲石が出土した。土器片の形状から、SX01よりも新しい時期のものと考えられるが、弥生時代中期の範疇に入る。

SX03

東半部を搅乱によって削平されており、平面形状および規模不明、深さ約0.4m以上を測る。埋土より少量の土器片が出土した。

P01～09

いずれも径0.2～0.5m、深さ0.2～0.6mで、ややばらつきがあるが小規模なものである。出土遺物としては、P02より径約5cmのサヌカイト片、P06より磨石、P07・08より弥生土器片が検出された。

3.まとめ

今回の調査では、搅乱により遺構面が著しく削平されていたが、弥生時代中期頃の遺構が検出され、集落の一部を確認するに至った。調査地を西南約10mに近接する第20次調査地（平成6年度）においては、弥生時代中期の方形周溝墓が4基検出されており、関連性が窺えるものと同時に、異なる生活空間の可能性も示唆できる。



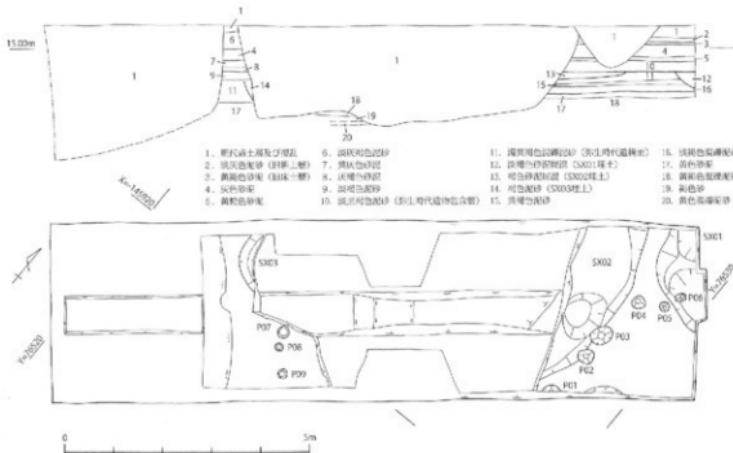


fig.120 調査区平面図・土層断面図



fig.121 調査区東部（西から）



fig.122 調査区西部（東から）

19. 兵庫津遺跡 第48次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、兵庫区の南部に位置し、南北約2km、東西約1kmにおよぶ広範囲の遺跡である。平安時代の文献である「行基年譜」によると、奈良時代に同地域にあたる「大輪田船息」という港湾施設を整備したという記述がみられ、第32次調査（平成15年度）においても、奈良時代の遺構が検出され、港湾施設の可能性が高いと考えられる。

中世における平清盛による大輪田泊の修築は、よく知られている出来事であるが、日宋貿易やその後の日明貿易の拠点となり、国際港湾都市としての発展をみる。し

かしながら、平安時代後期～室町時代前期の遺構・遺物がほとんど検出されておらず、増加をみるのは、室町時代後期以降である。

近世における兵庫津の繁栄はめざましく、物資流通等の要衝として発展を続け、18世紀に入ると、人口約2万の大都市となった。それゆえに、近世の遺構・遺物の検出量は多く、町屋跡なども確認されている。

今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、18世紀以降の遺構・遺物を検出したが、工事掘削影響深度までの調査で、下層には、18世紀以前の遺構面が残されている。また、当該地は『摂州八部郡福原庄兵庫津絵図』〔元禄9年（1696）〕によると、小物屋町に位置することが確認されている。

2. 調査の概要

敷地内において、掘削工事を実施する箇所について、調査を行った。工事掘削影響深度までの調査であることから、1面のみの調査となった。石組遺構、土坑（SK01～04ほか）などを検出した。

基本層序

上層より、アスファルト、碎石、灰褐色小礫混り砂質土（現代盛土）、赤褐色砂質土（レンガを多く含む整地層）、褐色砂質土（黄色を帯びる）、淡褐色細砂～中砂、灰褐色小礫混り砂質土、暗灰褐色砂質土（近世陶磁器を含む遺物包含層）、黄褐色



fig.123 調査地位置図 S=1:2,500



fig.124 調査区 (北から)

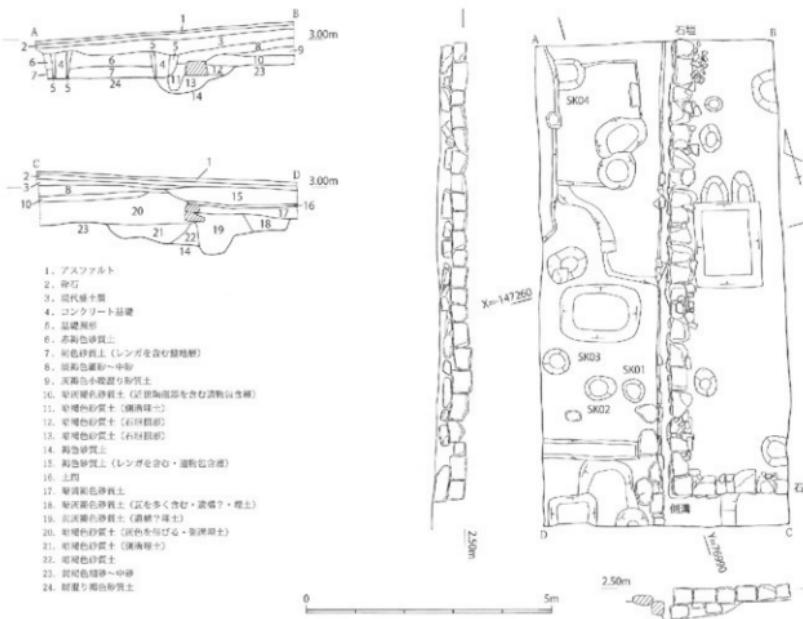


fig.125 調査区平面図・土層断面図・石垣立面図

細砂～中砂および炭混り褐色砂質土（とともに18世紀以降の遺構面基盤層）、褐色砂質土となっている。遺構面の標高は約2.5mで、その下層においても遺構面が存在するが、工事の影響深度以下であるため、現状保存とした。

石組遺構

町屋等の建物敷地を区画する石組と考えられ、南西角を含む、西面と南面を確認した。また、石組西面に側溝状の溝が存在する。

石組はその基礎となる根石も含めて2段分が確認され、高さ約0.5mを測る。西面の側溝は、幅約0.3m、深さ約0.5mを測る。

また、西面の側溝対面（東面）の一部で、石組みの残存が確認されており、石による護岸が施されていた可能性が高い。この石組と側溝は、掘形を含めると幅約3.0mを測る。

側溝下層および掘形より、遺物の出土がみられるが、コンニャク印判、簡略化した二重線の網目模様、見込みに五弁花、渦「福」の銘の特徴のある肥前磁器碗、蛇の目凹形高台の肥前磁器



fig.125 石組遺構および側溝（南から）

皿、内面に染付け外面に青磁を掛け分ける染付け青磁碗などが多くみられる。また、銅製キセルの雁首と吸口も確認された。

遺物の時期から考えると、概ね18世紀後半～19世紀初頭に設置された石組遺構・側溝の可能性が高く、側溝上層において検出された遺物についても、時期差はほとんどみられないことから、存在時期はかなり短かったように推測される。

SK01 不整円形を呈し、径約0.45m、深さ約0.20mを測る。甕を伏せた状態で据えられていて、その用途は不明である。

SK02 不整円形を呈し、径0.55×0.52m、深さ0.34mを測る。内部に陶器製火鉢が据えられており、用途は不明であるものの、胞衣甕の可能性も考えられる。

SK03 不整円形を呈し、径0.53m、深さ0.22mを測る。埋土に炭が若干混じるが、性格は不明である。18世紀後半～19世紀初頭の染付け青磁碗が出土した。

SK04 不整円形を呈し、径0.54m、深さ約0.20mを測る。埋土中より、高台に「富貴長春」銘の肥前磁器皿、簡略化した二重線の網目模様の肥前磁器碗などが出土した。概ね、18世紀代に属するものと考えられる。

3.まとめ 今回の調査においては、18世紀代以降の遺構・遺物が検出され、特に、石組を伴う方形の区画を確認できたことは、当時の都市構造を検証する上で、重要な成果と言えよう。また、時期は遡るが、『摂州八部郡福原庄兵庫津絵図』との照合も重要視されよう。

石組遺構の西側においては、建物の礎石となる可能性の高い石や、土間と考えられる部分などが確認されており、また、多くの土坑（SK01～04ほか）などを検出した。これらは石組遺構と大きな時期差は認められず、建物の付帯施設である可能性が高い。

今回、検出された遺構は、必ずしも遺存が良好とはい難いが、建物および敷地区画の復原や町並み構造の検討の一助となるものと考えられる。

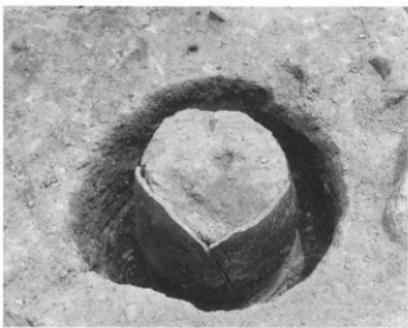


fig.127 SK01 (西から)



fig.128 SK02 (東から)

20. 兵庫津遺跡 第49次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、兵庫区南部一帯に広範囲に拡がり、奈良時代～近世の複合遺跡である。昭和60年度に第1次調査が実施されて以来、これまでに48次の調査が実施され、その様相が次第に明らかになりつつある。

今回の調査は、事務所建設に伴うもので、掘削工事により、埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲について調査を実施した。調査においては、8面の遺構面が確認され、室町時代～江戸時代の遺構・遺物が検出された。さらに、近年の発掘調査



fig.129 調査位置図 5=1:2,500

成果と『元禄絵図』との対比から、

現在の地形図上での復元（推定復元図は、「3.まとめ」において掲載）を行った。調査地の位置を『元禄絵図』から推定すると、湊口惣門から南下してきた西国街道が、西へと向きを変えて柳原惣門へと向かう「札場の辻」の西側に近接した西国街道に面する北側に位置し、「北仲町」と「小廣町」の境付近に所在すると可能性が高い。

2. 調査の概要

調査区は7箇所に区分されることから、それぞれを、便宜上、1～7区として調査を進めた。いずれも8面の遺構面が存在するが、工事掘削影響深度までの調査にとどめた箇所もある。

基本層序

現地表面から深さ1m～1.2m前後までが攪乱及び盛土層で、これらを除去した層位面が第1遺構面となる。第1遺構面以下は整地と盛土が複数にわたり行われており、現地表面から深さ2.3m～2.5mまでに8面の遺構面を検出した。これより下層については、現地表面から2.8m～3.0m付近まで確認を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。尚、最下層である第8遺構面の標高は1区で0.95m～0.8m、3区が0.57mで、北側へ向かって高くなる状況が確認された。

第1遺構面

1区で径0.5m～2.3m、深さ0.1m～1.1m以上の8基の土坑、2・7区から落ち込み状遺構各1基、3区で溝1条を検出したほか、4～6区で建物礎石と推定される石材を検出した。礎石については、建物としてのまとまり、配列等は確認できなかった。

1区で検出した土坑の中で、SK102は径2.3m前後、深さ1.1m以上の大型であるが、工事影響深度を超える深さであるため、完掘することはできなかった。

各遺構からは土器・陶器・磁器・瓦などが出土した。いずれも、近世（江戸時代）のものと考えられる。

第2遺構面 遺構面の上層の整地層に焼土、炭が多く含まれていたことから、火災を受けた可能性も考えられる。1区でピット3基、6区からピット1基を検出した他、4区と5区から建物礎石と推定される石材を検出したが、いずれも、建物としてのまとまり、配列等は確認できなかった。

SP201より陶器片が出土し、また、第2遺構面上層の整地層より土師器、陶器、磁器、瓦、銅製品（煙管吸口）などが出土した。いずれも、近世（江戸時代）のものと考えられる。

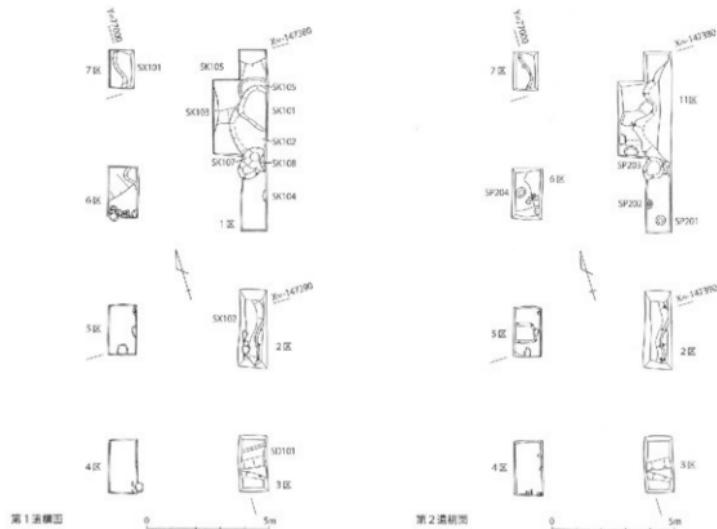


fig.130 調査区平面図（1）



fig.131 1区第1遺構面（南から）



fig.132 1区第2遺構面（南西から）

第3遺構面 遺構面の上層の整地層の一部に焼土、炭が含まれており、第2遺構面と同様に、火災に見舞われた可能性が考えられる。5区で井戸1基、6区からピット1基を検出した。

SE301 5区で検出した井戸(SE301)で、径1.3m前後の円形と推定される掘形内に、内法径0.65m前後を測る石積の井戸側が設置されている。

井戸側内と掘形内からは多くの土師器、陶器、磁器、瓦のほか、容器状の石製品1点が出土した。fig.135の1・2は土師器皿(灯明皿)で、外部底面が糸切りである。1の内外面の一部に煤の付着が認められ、また、2の底面中央には穿孔部があり、ここを中心にして煤の付着が認められることから、穿孔部に灯芯が取り付けられていた可能性が高い。3は丹波焼の火入である。これらは17世紀中葉～18世紀前半頃のものと考えられる。

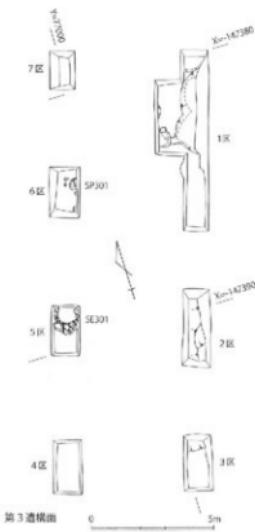


fig.133 調査区平面図 (2)

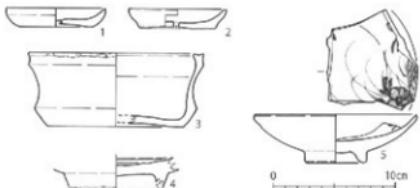


fig.135 SE301 井戸側内出土遺物



fig.136 3区第3遺構面 (北から)

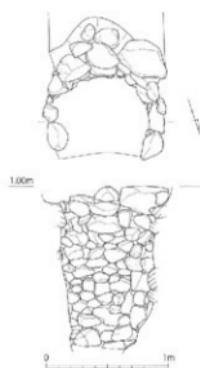


fig.134 SE301 平面・断面図



fig.137 第4遺構面上面整地層出土遺物

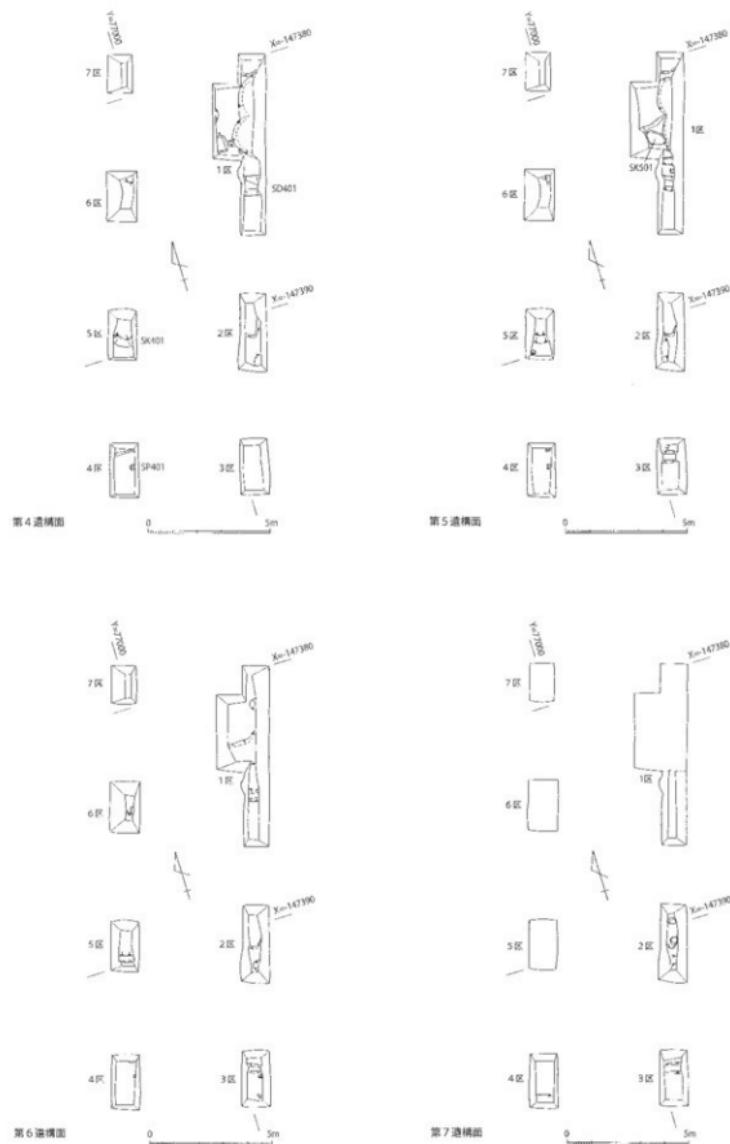


fig.138 調査区平面図（3）

第4遺構面 1区で溝1条、4区でピット1基、5区で土坑1基を検出した。

SD401は、1区南半部で検出した幅0.9m、深さ0.37mを測る東西方向の溝である。埋土より、瓦の小片が出土している。

上層の整地層より、土師器、陶器、磁器、瓦、石造物（五輪塔）などが出土した。fig.137の6・7は共に土師器皿で、6の体部外面には指頭圧痕が認められ、外面の口縁部下にはヨコナデが施されている。概ね、17世紀中葉～18世紀前半頃のものと考えられる。

第5遺構面 1区で礎石の可能性のある長さ0.6m、幅0.4mを測る石を据えた土坑（SK501）のほか、もう1点、礎石の可能性のある石を検出した。埋土より、陶器、瓦などが出土した。また、5区からも礎石と考えられる石2点を検出した。

上層の整地層より、土師器、陶器、磁器、瓦が出土した。fig.140の9は備前焼大甕の口縁部である。14は白磁皿で、森田勉氏の分類によるE類の皿に分類されるものと考えられる。16は備前焼の擂鉢である。これらは16世紀頃のものと考えられる。



fig.139 1区第5遺構面 (南西から)

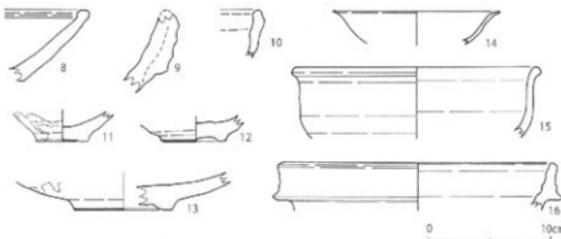


fig.140 第5遺構面上面整地層出土遺物

第6遺構面 3・6区で礎石と考えられる石をそれぞれ2点検出したが、建物としてのまとまり、配列を確認することはできなかった。

上層の整地層より、土師器、陶器、瓦などが出土した。17・18は土師器皿で、17の体部外面には指頭圧痕が顕著に認められる。18は体部外面に指頭圧痕跡が認められ、外面の口縁部下にはヨコナデが施されている。19は備前焼の擂鉢である。20は土師器の鍋で、長谷川真氏の分類による羽釜タイプ播磨型B系列に分類されるものと考えられる。これらは概ね、15世紀後半～16世紀にかけてのものと考えられる。

第7遺構面 1区南半部、2～4区でのみで調査を行った。1区北半部は、工事影響深度までの調査を完了しており、また、5～7区は壁面の崩落の危険性があり、掘下げを実施しなか

った。2区で礎石と考えられる石2点を検出したのみである。

上層の整地層より、土師器、瓦器、瓦質土器、瓦、白磁、青磁などが出土した。21～26は土師器皿で、底部近くから内面の強いナデにより立ち上がった体部が外反して口縁部へと向かって延びるタイプである。体部外面には指頭圧痕が認められ、外面の口縁部下にはヨコナデが施されている。27・28の白磁皿は、いずれも、森田勉氏の分類によるD類の皿に分類されるものと考えられ、28は高台の置付に抉りが認められる。破片のため不明確ではあるが、抉りが4ヶ所施されるものと推察される。33は瓦器塊で、底部に貼り付けによる高台を有するが、断面三角形で、わずかに高さを保つ程度のものである。37・38は瓦質土器で、37は鍋で、神戸市西区玉津田中遺跡出土の12世紀後半後葉に属する鍋に類似する。38は奈良火鉢で、口縁部の外面に突帯を2条巡らし、その間に花形スタンプの押捺が認められる。これらの特徴から、立石堅志氏の分類による深鉢Iに分類されるものと考えられる。39の土師器鍋は、体部外面にはタタキ痕、内面にはハケメが認められる。また、口縁部外面にはヨコナデを施す。口縁部が内側に肥厚し、口縁部の断面が三角形状である特徴から、長谷川眞氏の分類による鍋形タイプ鉄かぶと形I類に分類されるものと考えられる。これらは概ね、15世紀中葉頃のものと考えられる。

第8遺構面

第7遺構面と同様に、1区南半～4区でのみ確認されたが、遺構は検出されなかった。

上層の整地層より、土師器、須恵器、瓦器、瓦、陶器、青磁などが出土している。48は瀬戸・美濃系の陶器と考えられるが、詳細は不明である。50は瓦質土器羽釜で、鋤部はやや上方に向いて付く。体部外面はヘラケズリ整形、内面はハケメ調整が認められる。これらは概ね、15世紀前半のものと考えられる。

3.まとめ

調査成果

今回の調査においては、室町時代～江戸時代にかけての8面の遺構面を確認した。

第1遺構面では、調査地北半部（1・2・6・7区）において、土坑が切合っている状況や、落ち込みなどが検出された。一方、調査地南西部（4～6区）において、貼土状の整地面や礎石などが検出されたことから、建物が存在する可能性が考えられる。つまり、西国街道に面した南半部には建物が存在し、その北側には空閑地として利用されたものと推定される。

第2遺構面では、1区南半部、4～7区でピットや礎石が、また、第3遺構面では、6区でピットと礎石、3区から石積の井戸が検出されたものの、全体的な様相は不明である。上層の整地層に混入する焼土と炭の存在から、火災を受けた可能性が考えられる。

第4～6遺構面では、上層の遺構との錯綜する切り合いなどの影響から、全体的な様相を把握するには困難であった。わずかに確認された礎石などから、1区南半部と7区



fig.141 2区第7遺構面（北から）

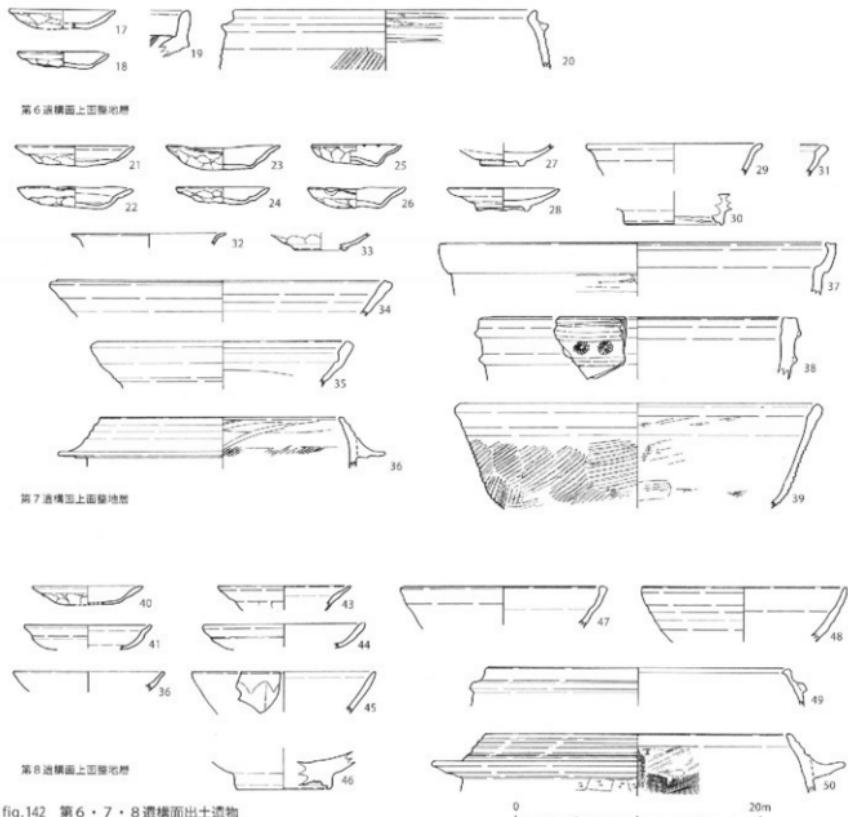


fig.142 第6・7・8遺構面出土遺物

付近から南側に建物の存在が想定できる。この場合、ほぼ同じ場所での建物の存在が窺われる。また、SK501に伴う大型の礎石の存在から、比較的大規模の存在の可能性も考えられる。

第7遺構面では、2区で貼土状の整地面が検出され、礎石と推定される石が検出されているものの、建物の状況は不明である。

第8遺構面は一部で検出したのみであり、遺構は検出されなかった。第8遺構面の検出は、標高0.57m～0.95mであるが、これより下層は湧水が著しく、遺構面の確認はできなかった。

『元禄絵図』との検討

今回の調査地は、南側に面した道路が、かつての西国街道と考えられるが、調査範囲が道路沿いに及ばないため、街道そのものに伴う遺構については確認できなかった。また、調査地付近は、『元禄絵図』における西国街道の「札場の辻」のやや西方に位置し、西国

街道の北側の北仲町と西側の北半が鳥屋町、同じく南半が小廣町との境付近に位置するものと推定されるが、その町境などを示す遺構は確認されなかった。

兵庫津では多くの屋敷地割が道路に直交する短冊形であるとされる。近世の兵庫津は、『元禄絵図』などの絵画資料、多数の文書や、近年の調査データから多方面からの総合的な研究が進展しているものの、未だ不明な部分も多い。

また、今回の調査では、多くが整地層からであるが、15世紀前半～16世紀の遺物が多く出土した。瓦類を多く含むことから、調査地付近に瓦葺建物の存在が推測され、中世における兵庫津中心部の様相を考える上で、貴重な資料となった。



fig.143 調査地周辺推定復元図 (S=1:3,000)
〔播州八部郡福原庄兵庫津絵図〕(元禄9年(1696)を元に作成)

21. 兵庫津遺跡 試掘調査

1. はじめに

兵庫区南部一帯に所在する兵庫津遺跡は、江戸時代の港湾都市として広く知られる遺跡であるが、近年の発掘調査の成果により、近世都市のみならず、古代、中世、戦国時代にわたって、繁栄していたことが判明している。

今日、兵庫津遺跡は、代表的な近世港湾都市遺跡として位置づけられており、過去の発掘調査成果においても、近世に関するデータが多く蓄積されているが、一方で古代および中世期集落の実態や、戦国時代における池田恒興による「兵庫城」築城の詳細、明治初年、初代県知事伊藤博文を擁した兵庫県庁の所在地であった点など、多岐に渡る時代それぞれの詳細については、未知数の部分が多いという側面も窺える。

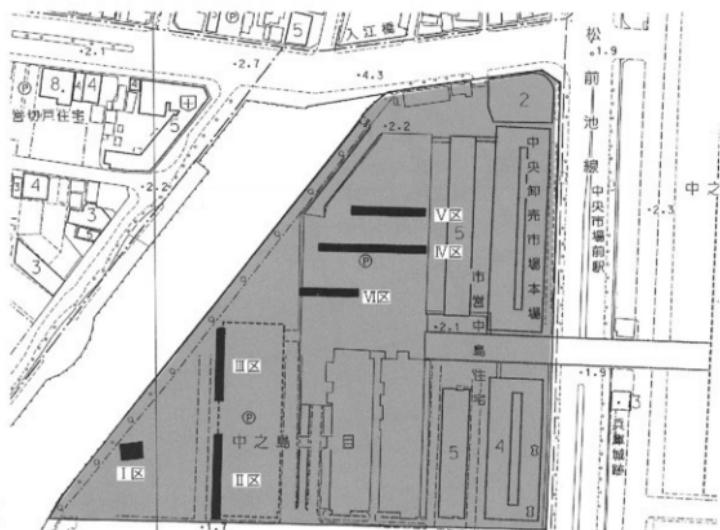


fig.144
調査地位図
S=1:2,500

2. 調査の概要

今回の試掘調査対象となった中之島2丁目一帯は、神戸市中央卸売市場が所在した地域であるが、その移転に伴い現在跡地の再開発計画が検討されている。この再開発計画に先立ち、開発エリア（fig. 144参照）内における遺跡の残存状態を把握する目的で、平成17年度より試掘調査が暫時実施されてきたが、今年度はfig. 144に示した計6区（I～VI区）14ヶ所〔IV区～VI区については、便宜上、IV区は5分割（IV-1～5区）、V区は4分割（V-1～4区）、VI区は2分割（VI-1・2区）にて調査を進めた〕に、試掘トレントを設定して試掘調査を行った。また、当該地は、「兵庫城」推定地も含まれており、その実態把握と遺構の残存状況の確認を目指した。

基本層序 今回の調査においては、さまざまな制約があったものの、新しい年代ものから時系列順に列挙すると、以下のとおりである。

- 1期：昭和20年神戸大空襲にともなう焼土が堆積した層
- 2期：土葺および煉瓦を用いた排水施設が敷設されていた時期（明治中期～昭和初期）
- 3期：石組の水路をセメント等で補修して使用していた時期（明治初頭～中期）
- 4期：石組の水路を使用していた時期1（幕末～明治初頭？） 近代および近世遺構面
=近世第1面
- 5期：石組の水路を使用していた時期2（18世紀以降） 4期の石組とは別のものが下
層に存在する。/兵庫城堀埋上上面（近世第2面）
- 6期：江戸時代の火災に伴う焼土が堆積した層
- 7期：江戸時代の遺構面=近世第3面（17世紀以前江戸時代？）
- 8期：中世の遺構面=中世第1面（16世紀頃？）
- 9期：中世の洪水砂
- 10期：洪水砂より下層の遺構。標高0.00m以下に存在する可能性が残されるも、今回
は未確認。

以上10段階の時期的変遷が確認できたが、調査区によってはその限りではなく、詳細は別表1の通りとなる。ゆえに、さまざまな要因を踏まえた上で、遺構の面数としてカウントした場合、1期の堆積層を指標として、2～3期まで1面（明治中期～昭和初期）、4期で1面（明治初期～幕末？）、5期で1面（18世紀以降の江戸時代）、7期で1面（17世紀？）、8期（16世紀？）で1面の計5面と数えられる。また上層の削平により、4・5期が同一検出面をなす場合がある可能性も大きい。また、標高0.00m以下に遺構面が

表11 トレーナ（地区）別遺構面構成表

	1期	2期上層	3期水路（セメント）	4期木路	4期遺構面	5期木路	6期遺構面	7期上層	7期遺構面	8期遺構面	9期水砂	10期遺構面	兵庫城面
I区	有	●	無	無	●*	無	●*	無	●	無	無	無	無
II区	无	無	無	無	●	無	●	無	●?	●	無	無	無
III区	●	●	●	●	●	成層で有り 成層で有り	不確 成層で有り	無	成層で有り 成層で有り	●?	●	無	●
IV-1区	●	●	●	●	●	無	無	●	●	●	●	●	無
IV-2区	無	無	●	●	●	無	無	無	無	無	無	無	無
IV-3区	無	無	●	●	●	無	無	無	無	無	無	無	無
IV-4区	●	無	●	●	●	無	無	無	無	無	無	無	無
IV-5区	●	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	●
V-1区	不確	無	無	無	無	無	無	無	無	●	●	●	無
V-2区	●	●	●	●	●	無	無	無	無	●?	●?	無	無
V-3区	●	●	●	●	●	有りで有り 有りで有り	有りで有り 有りで有り	無	有りで有り 有りで有り	●?	●?	無	無
V-4区	●	無	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
VI-1区	●	無	無	無	無	無	無	無	無	●	●	無	無
VI-2区	無	無	無	無	無	無	無	無	無	●	●	無	無

*一層・二層=各層の可能性が高い切妻な跡形に構造で有り

確認できず=前回(或る)の事例で、遺構面、遺構層も復原できなかつたが、存在する可能性が残る

不明=上記のうちのどちらも有り難い状況

1期：昭和20年神戸大空襲による堆積した厚土層

2期＝第一の江戸時代～明治初期の石葺瓦葺で有りで用いていたことを考慮して、この時期の構造物である可能性が高、と考える。

3期水路=常に同じ高さの水路を保つべく整備して使用している。

4期水路=4期の水路の、セメント接着面の2面側面、端面等に見いだせるもの。

4期遺構面=4期～5期で見られる遺構が、一層上に西寄りで、その状態、木路の時期としては3期水路も含む。今岡調査では近世第1層とする。

5期水路=4期～5期の水路の、最も下に位置する水路を用いたもの。4期～5期で見られる遺構が無い。近世第2層とする。

6期遺構面=17世紀の初期で見られる遺構で、火薬室より上位に位置する遺構とする。

7期遺構面=17世紀の後半の底の2面側面、火薬室より下位に位置する遺構とする。

8期遺構面=18世紀後半の底の2面側面、火薬室より下位に位置する遺構とする。今岡調査では近世第3層とする。

9期水路=18世紀の初期で見られる水路を用いたもの。

10期遺構面=19世紀以前の沿岸のやせ遺構を有し、木路のため、今岡調査では「海浜」地盤。

兵庫城面=17世紀より18世紀に渡る間に、利用が律法で有られた。

存在する可能性については、湧水の問題からがあり今回の調査では判定不能であるが、兵庫津遺跡の性質上、存在する蓋然性が高いと考えられる。

I 区

標高0.00m付近まで掘削を行った。2期、3期あるいは4期、8期の3時期3面の遺構面を確認したが、2、3あるいは4期の面に関しては、平面精査では遺構プランが不明瞭で、最終的には断面観察の結果と総合して判断した。特筆すべきは、調査区中央で検出した井戸であるが、径1.7m程度の円形で、16世紀を中心とした遺物を確認した。

II 区

標高1.00m付近まで掘削を行い、4期と推測される遺構面1面を確認した。部分的に標高1.00mより下層への掘り下げを行ったが、9期と考えられる中世洪水砂の堆積を確認した。また、その洪水砂上面において、中世遺構の可能性が高い土坑状の断面形を1ヵ所確認しており、8期の遺構面が存在する可能性も考えられるが、湧水が著しく、詳細は確認できなかった。

III 区

標高0.50m付近まで掘削を行った。3期、4期、5期の3時期を同一面上で確認し、一部で下層に9期の洪水砂を確認した。また、3期、4期に該当するものとして、石組水路および兵庫城堀が埋没後に形成された近世遺構を確認した。さらに、石組水路の直上に、同じ位置、同じ走方向で2期の土管排水施設を確認した。特筆すべきは、調査区南半の堀埋土であるが、平成17年度の南側隣接地の調査にて確認された平面形と合わせると、堀の幅が約20mであることが確認できる。粘質系堆積層で埋没しており、その上面に4あるいは5期の可能性が高い土坑、ピットなどを確認した。石組水路は、内寸幅約50cm、ほぼ南北方向に走るが、素掘り状の溝が直交して付随する。この素掘り溝も本来は石組だった可能性が高い。石組水路底には粘土床が貼られ、その上に瓦を敷



fig.145 I区中世遺構面 (西から)



fig.146 III区石組水路【4期】(東から)



fig.147 III区近世～近代遺構面 (南から)

き詰めている。

IV- 1区

標高1.50m付近まで掘削を行った。また、攪乱断面にて標高0.00m付近までの堆積層を調査した。標高1.50m付近で、3期（石組水路など）と5期の2時期を同一面上で確認している。また、攪乱断面にて7期近世第3面と、8期中世第1面の2時期2面と9期中世洪水砂を確認した。水路は幅15cm程度の細い御影石の切石で補修されたもので、内部に土管を設置しており、2期の可能性が高い。

IV- 2区

標高1.00m付近まで掘削を行った。また、攪乱断面にて標高0.50m付近までの堆積層を確認した。標高1.50m付近において、3期と4期の石組水路をほぼ同一面上で確認している。3期水路は、4期水路の上にセメントおよび煉瓦補修を行ったものと理解しているものの、2期の可能性もある。水路は東西方向に走る内寸幅60cm程度の方形の御影石組構造だが、最下層の1段のみを残しそれより上の段の石組は、2あるいは3期補修時に取り去られてセメントと煉瓦に置換されていた。水路底には粘土床が貼られ、その上に瓦を敷き詰めており、構造的には、III区のものとほぼ同様である。また、攪乱断面にて9期中世洪水砂を確認した。

IV- 3区

標高1.00m付近まで掘削を行い、3期と4期の石組水路をほぼ同一面上で確認した。3期水路は、4期水路の上にセメント補修を行ったものである。3期水路直下で、水路の残滓を確認したため、これを4期と推測した。また、同一面上で近世遺物を出土する整地層を確認したが、ごく一部のみで、後述するV区においても同様の層位が確認されている。同層の詳細は不明であるが、4期相当の時期の可能性が高い。

IV- 4区

標高1.50m付近まで掘削を行った。また、攪乱断面にて標高0.50m付近までの堆積層を確認した。標高1.50m付近において、4期の可能性が高い遺構面を確認し、攪乱断面にて5あるいは6期の遺構面、あるいは該当時期に近い遺物包含層状の堆積層を確認したが、IV- 3区の整地層の続きの可能性が高い。

IV- 5区

標高1.00m付近まで掘削を行った。また、攪乱断面にて標高0.00m付近までの堆積層を確認した。IV- 4区と同様に、標高1.50m付近において、4期の可能性が高い遺構面を確認している。攪乱断面にて推定4期遺構面より下層の堆積層の状況の確認調査を行ったが、IV- 1～4までの堆積状況と異なり、近世遺物を含む細かい粘質系の層位が近世遺物を含む層が連続して標高0.00m付近まで堆積し、西に向かって下がる（厚くなる）傾斜傾向となるが、その原因として、埋土の可能性が考えられる。同様の堆積状況はIV- 4区の西端でも確認されていることから、IV- 4区の途中から西に向かって堀の範囲に当たる可能性が高く、凡そ標高1.00～0.00mにこの粘質系堆積層が確認されている。堀の深さとしてはかなり浅いが、これは傾斜の端緒の部分と考えられる。



fig.148 IV- 2区石組水路（4期）(西から)

V- 1区 標高1.50m付近まで掘削を行った。また、南壁に沿って幅50cm程度のサブトレーナーを設定し、部分的に標高0.00mまでの堆積層を確認した。標高1.50m付近にて4期の可能性が高い遺構面を確認した。その下層の標高1.20m前後地点において、近世火災層および近世第2あるいは3面となる可能性の高い層位の一部、標高0.50m前後地点で8期中世第1面をそれぞれ確認した。また、その直下にて9期中世洪水砂を確認した。

V- 2区 標高1.50m付近まで掘削を行った。また、擾乱断面にて標高0.50m付近までの堆積層を一部において確認した。標高1.50m付近において、2期の土管排水施設と3あるいは4期の石組水路を同一面として2期1面で確認している。この面で確認された土管排水施設に伴う煉瓦には、明治27年～明治40年まで稼動していた貝塚煉瓦株式会社の刻印をもつものが含まれており、施設の建設年代を確定する指標となるが、煉瓦の再利用の可能性も示唆しておく。土管排水施設そのものも、東西方向に若干方向を異にする2系列が同時検出されているが、断面観察から、若干の時期差が窺える。また、同じ面で土管に先行する石組水路の残滓が確認されているが、セメント等補修痕のない様相から、4期の可能性が高い。同面の下層の標高0.80m付近の一部で、近世火災層あるいは近世第3面となる可能性の高い層位を確認した。

V- 3区 標高1.50m付近まで掘削を行った。また、擾乱断面にて標高0.00m付近までの堆積層を一部で確認した。標高1.50m付近において、4期の石組水路と白色系玉石を用いた整地層を確認した。この整地層については、部分的にサブトレーナーにて状況を確認したが、近世の整地層である可能性が高く、石組水路に伴う整地とも考えられる。また、同一面上で2期土管排水施設の一部と、それを壊して作られた近代便槽が確認されている。このような埋甕タイプの便槽は、戦災焼上で埋没していることから、昭和20年以前の町屋内で使われていたものと判断できるが、切り合い関係から、便槽より古い時代に土管が敷設されたことが確認された。なお、遺構面の下層については、IV- 5区同様、西端と東端で堆積層の様相が異なり、西側には粘質系の近世層が標高0.00mを超えてなお堆積しており、一方東側では、IV- 1、2、3区の東半およびV- 1、2区と同様の堆積状況である。

V- 4区 標高0.00m付近まで掘削を行い、標高1.50m付近において、3および4期の石組水路を確認した。また、その下層の標高0.00m付近

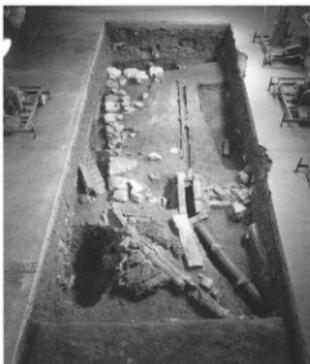


fig.149 V- 2区水路ほか〔2期〕(西から)



fig.150 V- 3区近世整地層(東から)

にて5期の石組水路を確認している。4期と5期の水路は、同じ位置に同一方向で造られているが、規模等が全く異なる。5期の水路については、兵庫城堀埋土を掘削して造られていると考えられるが、今回は平面形を確認するにとどめたため、深さ、構造の詳細などは不明である。上面精査時に陶磁器類のほか木質遺物も多く出土した。ゆえに、この同一方向の水路の確認によって、18世紀代の町割りが昭和20年まで踏襲されていた可能性が高まった。

VI- 1区

標高1.00m付近まで掘削を行ったが、2～5期の層位がすべて削平されており、現代盛土層直下の標高1.00m付近にて6期近世焼土層の可能性が高い層位を、また、その直下で7期近世第3面と考えられる遺構面を確認した。その下層については未確認であるが、堀埋土と考えられる粘質層には達していない。

VI- 2区

標高0.50m付近まで掘削を行ったが、VI- 1区と同様に、2～5期までの層位がすべて削平されており、現代盛土層直下の標高0.80m付近にて6期近世焼土層の可能性が高い層位を、その直下で7期近世第3面と考えられる遺構面を確認した。その下層については未確認であるが、堀埋土らしき粘質層には達していない。

3.まとめ

今回の試掘調査において、多くのデータが得られたと同時に、今後の課題も挙げられるようである。ここでは、現段階の成果として、項目ごとに結論づけておきたい。

①兵庫城堀および勤番所

関連する遺構の有無は不明であるが、堀と考えられる遺構をIII区、層位をIV- 3区の西半、IV- 4区、IV- 5区およびV- 3区西半、V- 4区において、標高1.00～0.50mにて確認した。ただし、堀の構造、掘削深度など、立体的なデータは得られていない。III・V区では、堀埋土の上面において、ピット、土坑、石組水路などの遺構を確認しており、これらは堀が埋没した18世紀以降に造られた町屋関連の遺構であると推測される。

②江戸時代町屋の範囲

江戸時代の遺構面については、標高1.00～0.00m付近において、2または3面の存在が予測でき、推定18世紀以降の面（近世第1面、第2面）と火災層直下の面（近世



fig.151 VI- 4区近世石組水路〔5期〕(西から)



fig.152 VI- 1近世遺構面〔7期〕(西から)

第3面) の3時期が想定されるが、火災層直下の面に関しては、IV、V、VI区でのみ確認された。近世第1面については、近代の遺構と一部切り合いながらも、ほぼ全域で確認されており、また、近世第2面については、V-4区でのみ明瞭に確認されているが、近世第1面とあるいは近似の時期、同一時期の可能性も否めない。

③中世遺構の範囲

I・IV・V区において確認したが、当該地ほぼ全域の標高1.00～0.00m付近に、1面以上の遺構面が存在すると考えられる。中世遺構面下層の洪水砂層については、この層位から出土する遺物と、I区の遺構から出土した遺物との間に明瞭な時期差が認められないことから、洪水以前の集落の遺構が残されている可能性も十分考えられる。

④近代遺構の範囲

土管・煉瓦を用いた明治時代の排水施設、セメント補修を施した石組水路などが挙げられるが、これらは調査地のほぼ全域で確認した。近世第1面との時期的前後関係を確認しにくく、場所によっては同時併存の可能性も否めない。

⑤近代～近世石組水路の範囲

III～V区において確認された。この『石組水路』については、V-4区で検出したように、18世紀の可能性が高い幅広の石組水路と同位置、同方向で、補修等を繰り返しながら、明治中期頃土管水路に一部変化しつつ存続し、最終的には昭和20年の神戸大空襲において、街全体が焦土と化すまで踏襲され続けた構造物であると考えられる。このことは、石組水路の埋土の大部分が戦災焼上層であることからも窺える。

22. 和田岬砲台 土壠確認調査

1. はじめに

史跡和田岬砲台は、幕末における外国船からの脅威に対する大阪湾岸の防備策として、勝海舟の指導により江戸幕府によって建造された台場（砲台）である。中央に直径約15m、高さ約11.5mの円筒形の石堡塔を築き、周囲に星形（稜堡式）の土壠を有する西洋式の台場であった。この砲台の設計には勝海舟の弟子である佐藤与之介があたったとされる。

同じ設計図を基に、和田岬以外に湊川（川崎）、西宮、今津の4箇所に円筒形の石堡塔が造られた。現存するものは和田岬砲台と西宮砲台の2基であるが、内部の木組み部分も含めて残存するのは和田岬砲台のみである。

上記の4砲台はいずれも石堡塔の周間に土壠が巡らされていたが、その形状は当時の記録から和田岬砲台のみが星形（稜堡式）の土壠で、その他は円形の土壠であったようである。現在は西宮砲台に、その一部が残存している。和田岬砲台の石堡塔は元治元年（1864）に完成したが、土壠は石堡塔完成後しばらくして着工されたようで、正確な時期は不明であるが慶応2年（1866）には完成していたようである。当時の図面などからそ



fig.153 調査地位置図 S=1:5,000



fig.154
史跡和田岬砲台
現況写真(南西から)

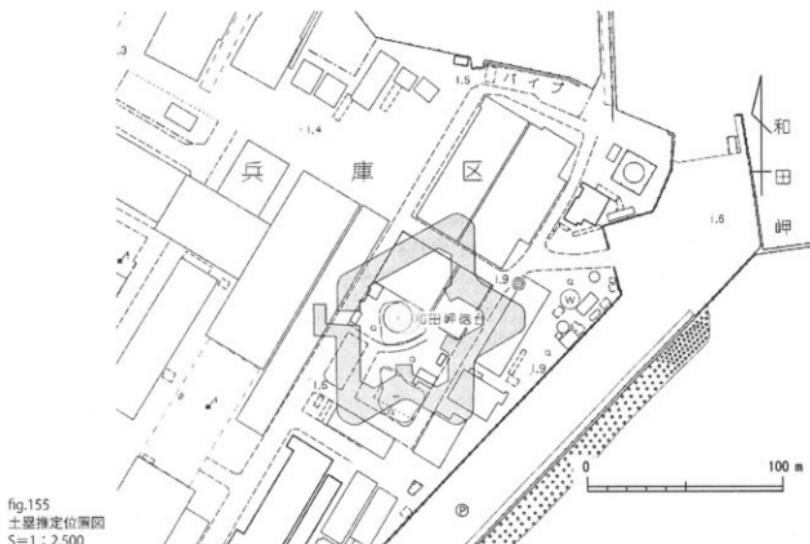


fig.155
土星推定位置図
 $S=1:2,500$

の規模は東西約120m、南北約90m、土壘の高さ約4mだったと考えられる。

完成後、この砲台は使用されることなく明治維新を迎える。その後、紆余曲折を経て、砲台敷地は石堡塔・土壘とともに明治30年には三菱合資会社（現在の三菱重工業株式会社）に買収された。三菱重工業株式会社神戸造船所が所蔵する構内図面では明治44年には土壘は消滅しており、明治末年頃には削平されたようである。

大正10年（1921）には石堡塔とその周囲6尺（約1.8m）幅の範囲が兵庫県下最初の国史跡として指定された。その後、大正末から昭和初めにかけて天井の土積を鉄骨トラスに変更するなど、大がかりな改修工事がおこなわれ、現在に至っている。

建設から約150年、昭和初期の大修理から80年が過ぎ、近年、内部の木造部の腐朽が進み、かつ石造部の石のひび割れなども顕著になったため、平成19年度から所有者である三菱重工業株式会社を事業者として、内部木組み部分の解体修理を主とする史跡和田岬砲台の保存修理工事事業が、文化庁・兵庫県・神戸市の補助金を得て実施されている。平成19・20年度は本格修理に先立つ調査工事を行い、それに併せて石堡塔をとりまいていた土壘の痕跡の有無について確認調査を行うこととした。

トレンチの位置は、「和田岬石堡塔外青壁之図」（神戸市立博物館蔵）などの現存する図を現在の三菱重工業株式会社神戸造船所構内一般図に砲台の大きさを基準に重ね合わせて土壘位置を推定し、土壘にはば直交するように設定した。

2. 調査の概要 砲台見学者用駐車場及び緑地帯に幅2m、長さ18mのトレンチを設定し、重機及び人力により調査を行った。調査完了後は、ランマーによる填圧を行いながら埋め戻し、駐車場部分についてはアスファルト再生合材による復旧を施した。便宜上、駐車場部分

を東トレンチ、緑地部分を西トレンチと呼称する。

東トレンチ 東トレンチでは土塁の内側ラインの検出が予想されたが緑地帯造成以前にあった工場建物による擾乱がひどく、土塁の痕跡は確認されなかった。ただし、トレンチ中央付近の擾乱土層の下に旧海浜の砂層と見られる黄褐色の礫混じり砂が存在した。

トレンチ南壁面隙の礫混じり砂層において、東西方向の松杭列が検出された。トレンチ内で見つかったのは5本分で、さらにこの杭列は続いていると予想されるが、列の片側は擾乱のため、またその反対側の続きはトレンチ外に延びるため確認することはできなかった。杭の直径は10cm前後で先端を尖らせている。上端は擾乱により全形態は確認しえないが、旧砂浜上面から打ち込んでいるものと思われる。杭の打ち込まれた間隔は55~70cmである。杭の先端はいずれも、湧水点直上の現地表下1.6m、標高0m付近まで打ち込まれている。杭の遺存状況は極めて悪く、取り上げることはできなかった。これらに伴う遺物も発見されなかったが、以上のように土塁の基礎構造の杭としては小規模であることから、この杭列は以前にこの地に建てられていた工場建物に伴う基礎の杭列と考えられる。

西トレンチ 西トレンチでは土塁の外側付近が検出されると予想されたが、このトレンチ内も擾乱が著しく、コンクリート製の建物基礎や雨水管・水道管などが密集しており、土塁の痕跡は確認されなかった。

見つかったコンクリート建物基礎の方向は現在の構内道路や工場などの建物とは方向

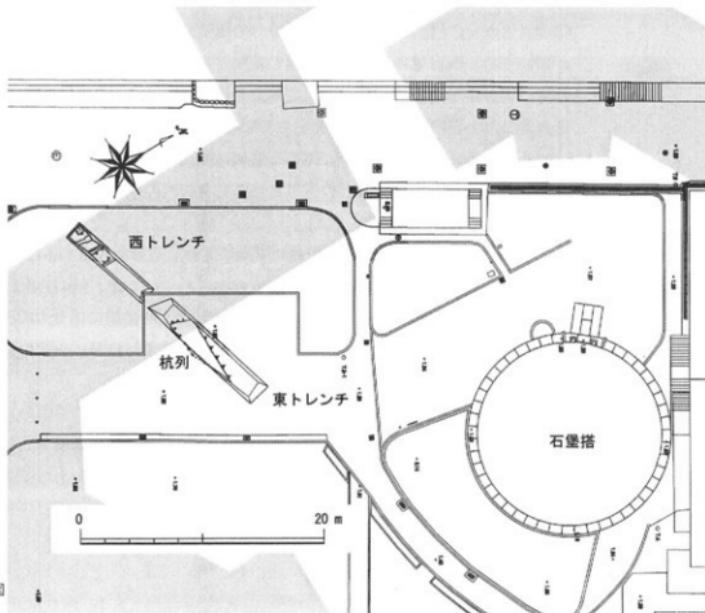


fig.156
トレンチ配置図
S=1:400

を異にしている。過去の三菱重工業株式会社神戸造船所構内図を辿っていくと、見つかった建物基礎の位置には、現在の周辺の建物とは方向が異なる「塗装場」という東西方向の建物が確認できる。平成5年（1993）には砲台周辺の緑地が整備されているので、この建物はそれ以前まで存在していた。さらにこの「塗装場」建物を辿ると、昭和9年には「官給品倉庫」が同じ場所に建てられていた。そして、この建物は和田岬灯台用地の境界塀に方位を同じくして接していることが構内図からわかる。さらに明治40年頃にまでさかのぼると、和田岬灯台用地と当時まだ残存していた和田岬砲台の土壘が方向を同じくして接していることがわかる。

のことから、「塗装場（官給品倉庫）」の西壁面は土壘外側のラインにほぼ重なることが想定され、現緑地内における土壘の範囲と方向を推定することが可能となった。この結果、現存する図面類と現在の三菱重工業株式会社神戸造船所構内一般図に重ね合わせて推定した土壘の位置は、ほぼ整合していることが確認された。

以上のように、砲台の土壘に関する遺構は検出されなかったが、西トレーニチ内の擾乱土中から、土壘ないし石壠塔の石材と見られる矢穴の残る花崗岩片が2点見つかっている。

3.まとめ

今回の調査では、直接和田岬砲台の土壘に関わる遺構を確認することはできなかった。杭列については、土壘推定部分の直下で検出されているが、杭の方向は「塗装場」建物の建物端の東西方向にほぼ一致しており、「塗装場」の建築に伴うものと推定される。土壘構築の基礎杭であれば、確認された杭よりもより太い杭が、一列のような規模ではなく湧水点を超えてもっと深く、密に打ちこまれているであろう。

また、かつて存在した工場建物の基礎が確認されたが、この建物の基礎と位置から土壘の位置と方向が推定できた。今後、史跡和田岬砲台保存整備事業に伴う周辺の環境整備の際に追加の試掘調査を行うことにより土壘の位置や構造をより正確に復元できる資料の確保に努めたい。



fig.157 西トレーニチ（西から）

23. 大開遺跡 第13次調査

1. はじめに

大開遺跡は六甲山南麓の沖積地に位置し、第1次調査において、弥生時代前期の環濠集落が確認されているなど、弥生時代～中世の集落遺跡であることが周知されている。



fig.158
調査地位図
S=1:2,500

2. 調査の概要

遺構・遺物

調査においては、鎌倉時代～室町時代の遺構・遺物が確認された。

ピット1基 (SP01)、土坑1基 (SK01)、落ち込み1基 (SX01)、溝数条が検出されており、溝はその多くが鉢溝と考えられる。SK01、SP01より、室町時代の土器の小破片が、また、数条の溝からも鎌倉時代のものと考えられる土器の小破片がそれぞれ出土した。

3.まとめ

今回の調査では、遺構面の下層の淡黄灰色シルト上面において遺構（弥生時代）が検出されなかったものの、中世の遺構が検出されたことにより、生産域（耕作地域）の拡がりを追認できたことは大きな成果と言えよう。

同遺跡は第1次調査における弥生時代前期の環濠集落の検出から、代表的な弥生時代の集落遺跡として周知されるようになった。一方、中世、特に、平安時代後期～室町時代の資料についても、質量ともに豊富で、第1次調査においても井戸、土坑、溝、ピットなどの遺構が検出されている。また、出土遺物についても、土師器、須恵器のほかに、瓦器、輸入陶磁器（白磁）も数多くみられ、中国製の褐釉陶器壺といった特殊なものも存在する。

また、同遺跡は福原京関連遺跡と考えられている楠・荒田町遺跡、祇園遺跡に近接した立地であることから、一般的な集落とはやや異なる様相がみられることも特徴と言えよう。

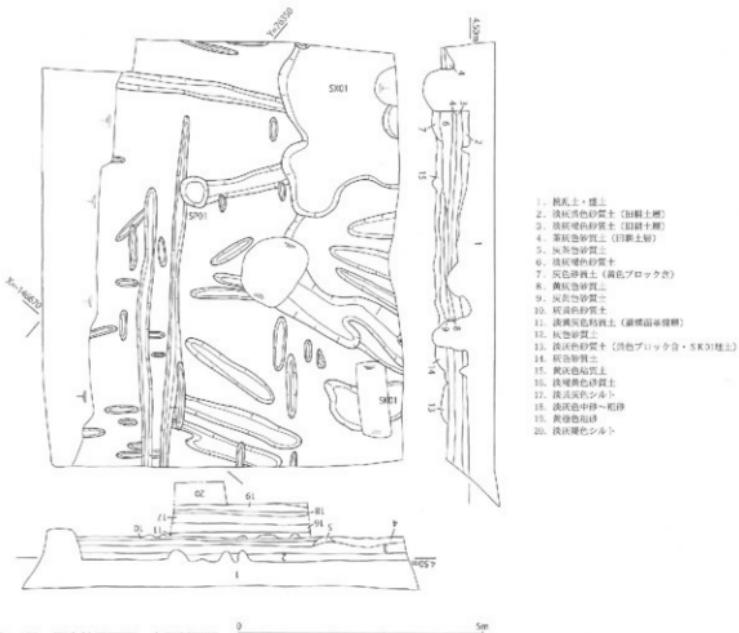


fig.159 調査地平面図・土層断面図



fig.160 調査地（北から）

24. 上沢遺跡 第56次調査

1. はじめに

上沢遺跡は兵庫区上沢通から長田区五番町にかけて所在し、六甲山系から続く丘陵末端の沖積地上に立地する。過去の調査において、縄文時代晚期から弥生時代・古墳時代・飛鳥時代・奈良時代・平安時代、さらに中世と、各時代の遺構・遺物が確認されている。

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、敷地内の掘削工事実施箇所について行い、4面の遺構面が確認され、縄文時代晚期～中世の遺構・遺物が検出された。



2. 調査の概要

確認された4面の遺構面は、第1・第2遺構面では中世もしくは中世以降、第3遺構面では古墳時代後期～奈良時代、第4遺構面では弥生時代頃の生活面と考えられる。

第1遺構面

中世以降の耕作地と考えられる。溝（鋤溝を含む）、土坑などの遺構が検出された。

近世の所産と考えられる石積みの側壁をもつ溝の裏込め部より、奈良時代を中心とする古代の瓦片が確認されている。

第2遺構面

遺構面の大部分は削平をうけており、調査地の北西部と南東部で鋤溝が検出された程度である。遺構面を覆う耕土層より、平安時代末～鎌倉時代の須恵器壺などが出土しており、中世の耕作地と考えられる。

第3遺構面

掘立柱建物・溝・土坑・ピットなどを検出した。この遺構面を覆う遺物包含層より、古墳時代～平安時代の遺物が確認された。

掘立柱建物

SB01は南北3間×東西2間（3.8m×3.6m）の総柱建物で、柱痕径が約0.3～0.4mと太く、柱間も狭いことから、倉庫のような重量物に耐えうる頑丈な構造の建物が想定できる。SB02は南北3間×東西2間（5.0m×3.4m）、SB03は南北4間×東西2間（5.7m×3.7m）、また、SB04～SB06は柱列が確認されただけだが、掘立柱建物の一辺である可能性が高いと判断した。そうであればSB04はその西辺で、柱間2間（4.8m）以上、SB05はその西辺で、柱間3間（6.2m）以上、SB06はその北辺で、柱間2間（3.4m）以上の掘立柱建物となる。いずれの建物も律令期のものと考えられるが、詳細は不明である。

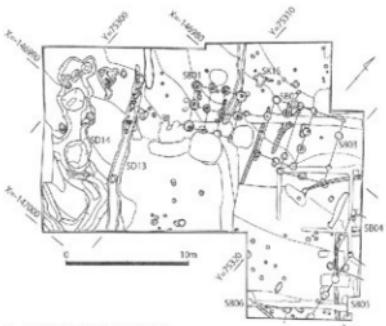


fig.162 第3遺構面平面図



fig.163 第3遺構面（西から）

SD13・14 SD13は幅約1mを測る溝で、切り合ひ関係から、SD14よりも新しい。埋土より、奈良時代の遺物が出土した。SD14は、幅約2m強の溝3条が合流し、南東に流下するかたちで検出された。形状は直で、深さも最南部で約0.5mを測るが、溝底面の2箇所に径約2mの土坑状の深まりを有する。古墳時代後期の遺物が出土したが、量的には少ない。

SK15 0.7×1.2mの不整形の土坑で、飛鳥時代のハソウが出土した。

ピット 挖立柱建物として確認した以外のものも多く、数箇所のピットの埋土より、律令期のものと考えられる上器片が出土したが、平安時代後期のものも含まれる。

第4遺構面 溝・土坑などを検出したが、土坑は倒木跡、溝は自然の水みちの可能性が高い。遺構面を覆う遺物包含層より、弥生土器もしくは縄文土器と考えられる土器の小破片やサヌカイト片などが出土した。

3.まとめ

今回の調査においては、特に、瓦（瓦当）の出土が注目すべき点である。また、第3遺構面を覆う遺物包含層より、奈良時代の瓦が出土しているが、この面で検出した建物は掘立柱建物で、瓦葺建物とは言い難い。一方、第1遺構面あるいは第2遺構面の溝（SD04）および周辺から多量の摩滅した瓦片が出土した。これらは土石流によって北方から流されてきたものであり、北方に瓦葺きの建物をもつ施設、つまり、寺院あるいは官衙的建物が存在する可能性があり、調査地の北側に位置する室内遺跡の調査（1997年・兵庫県教育委員会）においては、瓦のほか、仏像（塑像）の足および台部分などが出土している。郡衙等地方官衙には、近接して寺院が造営されることが多いことから考えれば、今回確認された建物群は、そのいずれかに関わる可能性を示唆できる。今回出土した瓦当には、摂津国内に同範の製品がみられるものと、播磨国内に同範の製品がみられるものがある。野条式瓦は播磨国府系瓦のひとつで、この瓦当の範型は播磨国で、保管・管理されていたものと考えられている。摂津・播磨と国域を越えるかたちで行われた瓦のやりとりの絆が興味深い。また、北東300mの地点の第31次調査においては、奈良時代の井籠組みの井戸が確認され、その底面から小型鏡や佐波理鏡などが出土し、一般集落ではみられない様相が窺える。また、同遺跡周辺においては、寺院に関連すると思われる字名が多く残されていることから、古代寺院の存在が想定され、地名から「房王寺廃寺」と呼称されている。

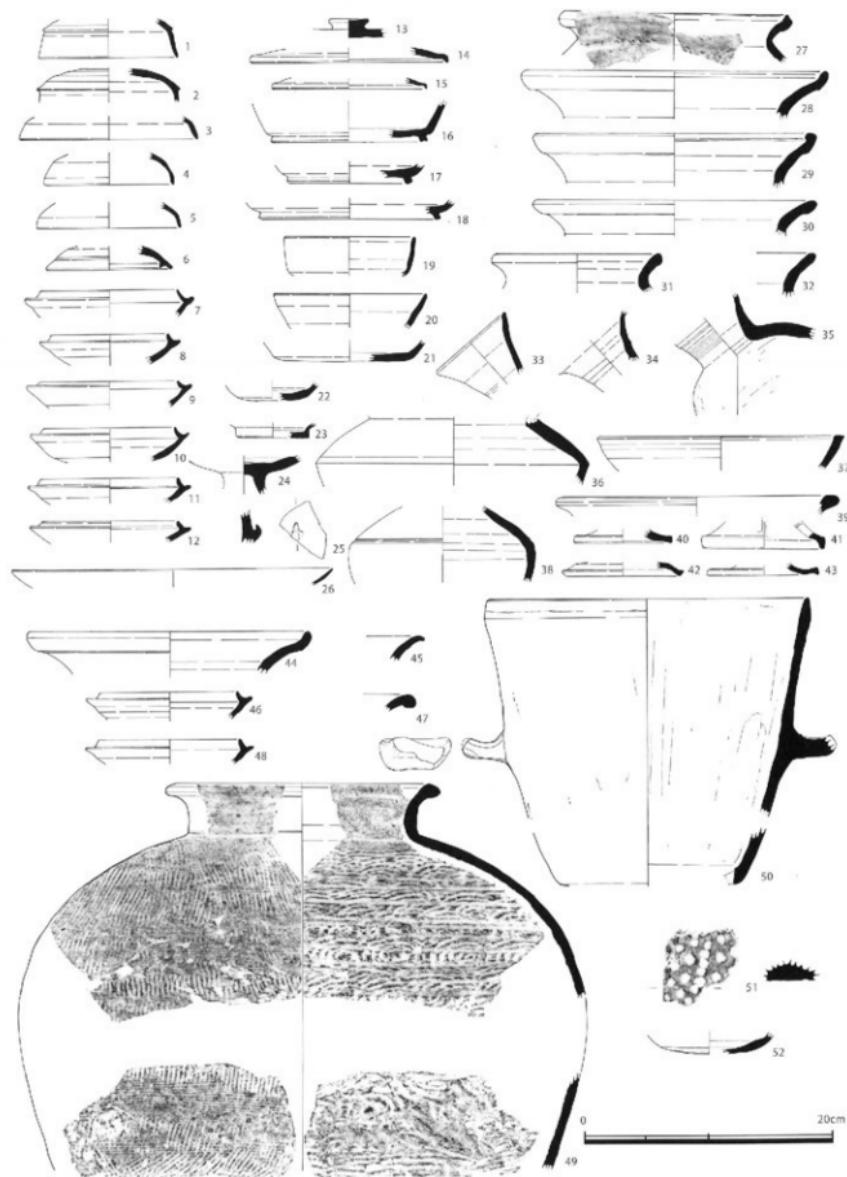


fig.164 出土遺物 1～43：5層、44・50：SB01-P2、45：SB01-P7、46・47・51：SB01-P1、48：SB01-P11、49：SB01-P2/P5・SP41、52：SB02-P7
(45・50：土師器、51：瓦、その他：須恵器)

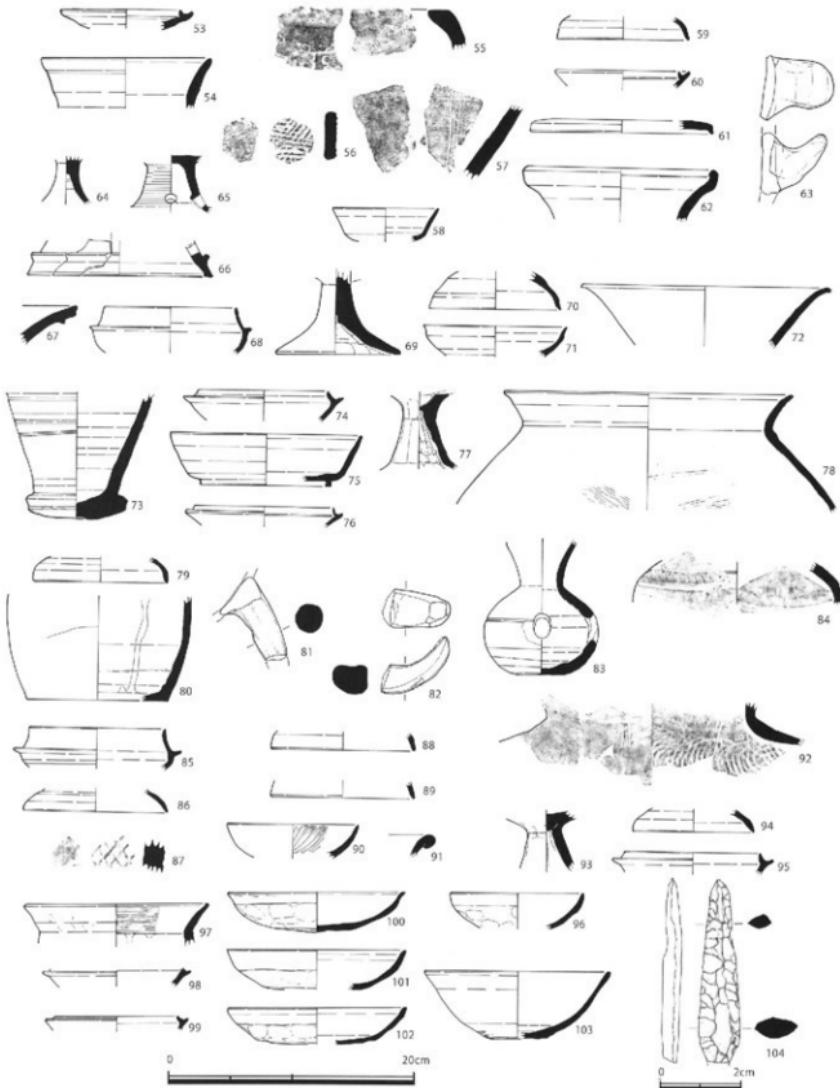


fig.165 出土遺物 2

53 : SD01, 54 ~ 63 : SD04, 64 : SD05, 65 : SD06, 66 : SD07, 67 : SD08, 68 : SD10, 69 : SD11, 70 ~ 72 : SD12, 73 ~ 75 : SD13, 76 : SD14, 77 ~ 78 : SD22, 79 ~ 81 : SK01, 82 : SK02, 83 ~ 84 : SK15, 85 : SP10, 86 : SP26, 87 : SP28, 88 ~ 91 : SP31, 92 : SP33, 93 : SP53, 94 ~ 96 : SP54, 97 ~ 98 : SP57, 99 : SP58, 100 ~ 102 : SP99, 103 : SP102, 104 : 4層(55 : 食良大林, 57 ~ 80 : 丹波丸, 63 ~ 69 ~ 72 ~ 77 ~ 78 ~ 81 ~ 82 ~ 90 ~ 93 ~ 96 ~ 97 ~ 100 ~ 102 : 土器器, 87 : 瓦, 104 : サメカイト, その他の: 脊椎器)

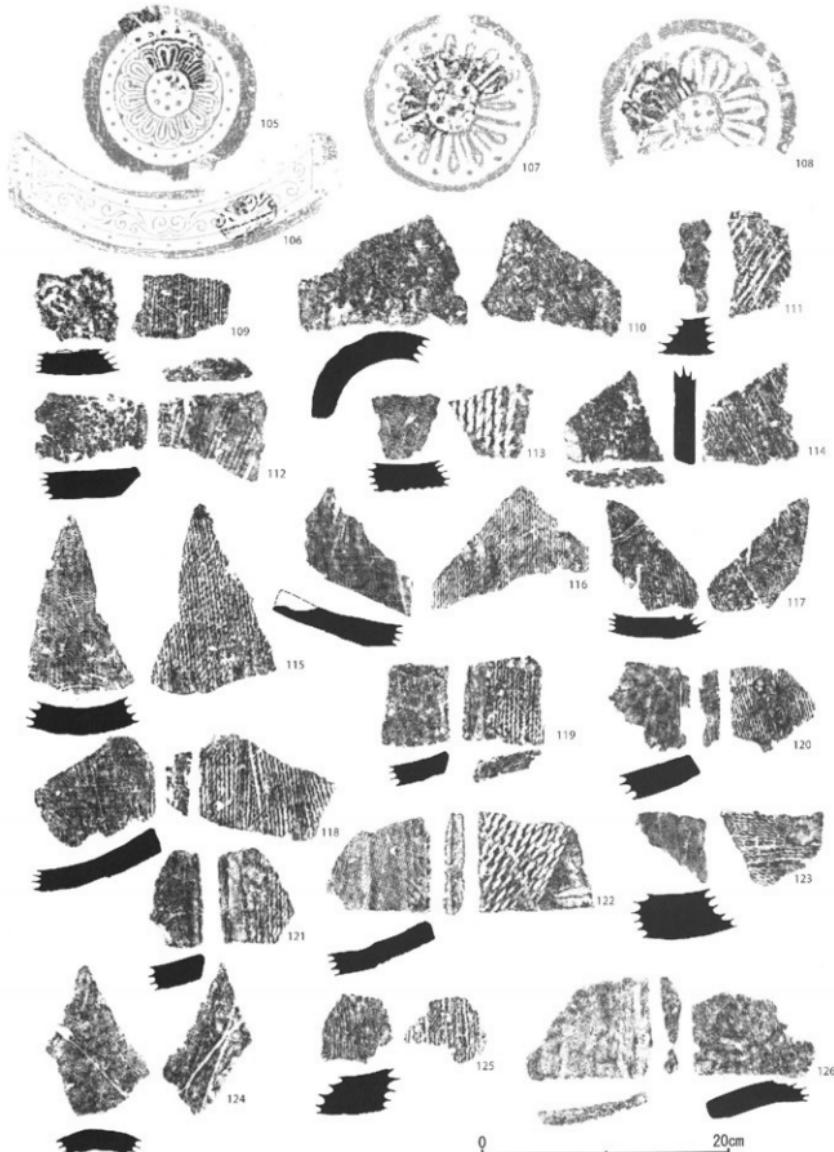


fig.166 出土遺物3

105～108：丸瓦、その他の半瓦（105：S301）、106～112・119：2箇、113・114・120・121・123・124：4箇、
115～118・121・122：5箇、125：S303、126：SD04出土。105・106の背景の添本は今平義次「播磨古瓦の研究」1995による野矢大工。
107の背景の添本は1997年里内遺跡および1999年芦原寺跡出土の瓦。108の背景の添本は鶴田謙「房主寺社出土の古瓦について」（1941）鶴田謙
室内遺跡出土瓦）

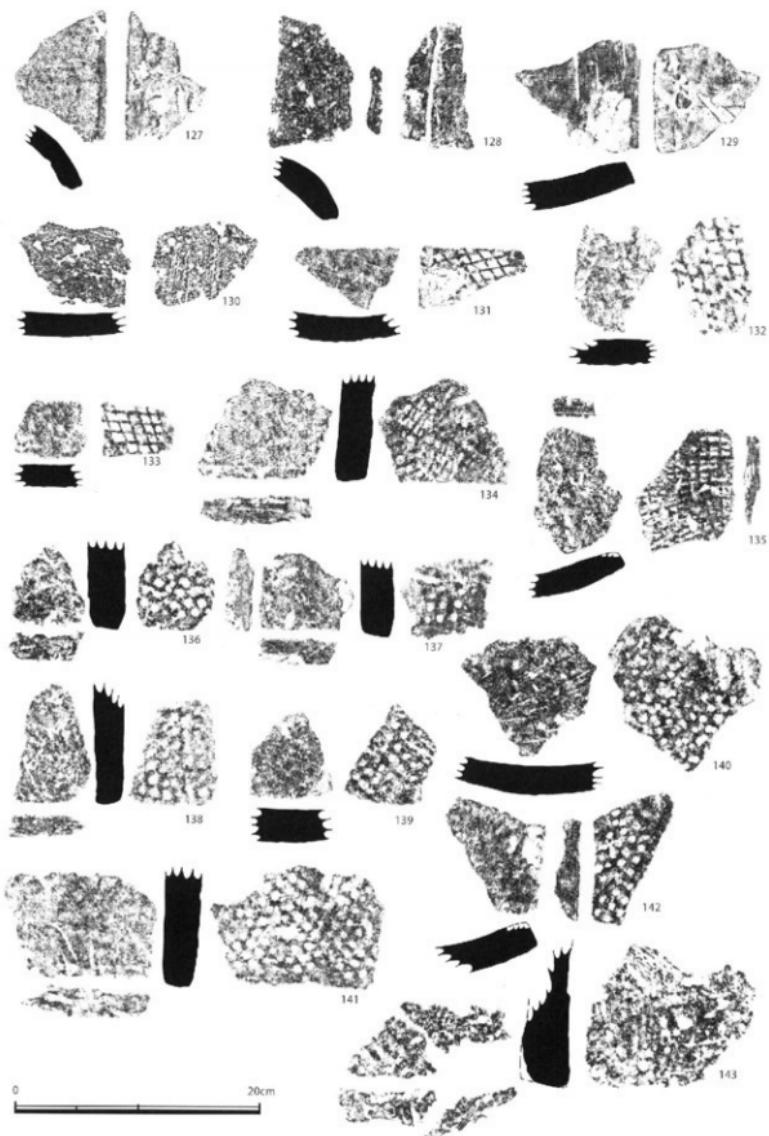


fig.167 出土遺物 4 127・128：丸瓦。129～143：平瓦 (127・129～133・136・137・140・141・143：388、128・135・139・140・143：X01、134：2：謫居土)

25. 日下部遺跡 第12次調査

1. はじめに

日下部遺跡は、武庫川の支流で北流する有野川西岸、八多川との合流点付近の河岸段丘および沖積地に所在し、これまでの調査において、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居・方形周溝墓、古墳時代後期の竪穴住居・溝、飛鳥時代の竪穴住居、平安時代後期・中世の掘立柱建物などが確認されている。

今回の調査は個人住宅の建設工事に伴うもので、敷地内の掘削工事を実施する箇所について行った。



fig.168
調査位置図
S=1:2,500

2. 調査の概要

調査区北部において、宅地造成以前の水田の段が検出されたが、これ以外の部分については、表土直下が遺構の検出される地山面となり、遺物包含層などの間層は存在しない。したがって遺構面は1面で、掘立柱建物・柱穴・土坑などを検出し、遺構内より、土器の小破片が少量出土した。時期の判明したものの多くは室町時代頃に属し、その他、古墳時代後期および鎌倉時代に属するものもごくわずかに認められる。

SB01

柱間2間×2間（東西3.5m×南北3.2m）の掘立柱建物で、柱穴内より土器の小破片がわずかに出土したが、室町時代の鍋と思われる土器片も含まれる。

SK03

東西2.6m、南北1.2m以上、深さ約0.2mを測る土坑で、多くの土に混じって、土器片が出土した。土器には土師器鍋などが含まれ、室町時代に属する。

ピット

約50基検出された。規模は大小さまざままで、柱痕の明瞭なものが多く確認された。

3.まとめ

今回の調査地の西および南側に隣接する道路敷部分の発掘調査においては、古墳時代後期・鎌倉時代・室町時代・江戸時代の遺構・遺物が検出されており、今回の調査地が擾乱等により遺物包含層の残存が悪いこともある、出土遺物は少ないものの、時代的にはほぼ同様のものと推察される。時期の判明した遺構は、概ね室町時代に属するが、掘立柱建物などの遺構も検出され、同時期の集落の存在が明らかになった。

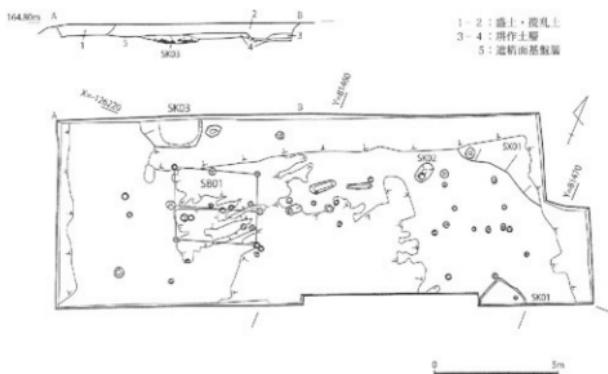


fig.169 調査区平面図・土層断面図



fig.170
調査区西半（東から）



fig.171
SK03（南から）

26. 中遺跡 第23次調査

1. はじめに

中遺跡は、武庫川の支流である八多川の西岸の河岸段丘上に立地し、過去の調査において、縄文時代～近世の遺構・遺物を検出している。

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、敷地内の掘削工事により埋蔵文化財が影響を受ける範囲について調査を実施した。尚、調査地は、平成8年度に実施された兵庫県教育委員会による調査地に隣接する。



2. 調査の概要

調査区を、便宜上、1～3区に区分して調査を進めた。尚、1区および2区東半部については、遺構面が工事掘削影響深度に達しないことから、上面までの調査を実施した。

基本層序

現地表面から0.5m前後までが、区画整理時の盛土で、その下層に旧耕土・床土が数層存在し、その下層に遺物包含層である淡灰色シルトが存在する。その下層の黄褐色シルトの上面が遺構面となる。

1区・2区東半

遺構面が工事掘削影響深度に達しないことから、遺物包含層までの調査を実施した。遺物包含層内より、奈良時代～中世の土師器、須恵器の破片が出土した。

2区西半・3区

溝2条（SD01・02）、土坑1基（SK01）、ピット13基を検出した。

SD01 幅0.15～0.5m、深さ0.05～0.08mを測る。土師器、須恵器の小破片が出土した。

SD02 幅0.4m前後、0.07mを測り、南側をSD01に切られている。出土遺物は確認されなかった。

SK01 長径0.78m、短径0.63m、深さ





fig.174 調査区平面図・
土層断面図

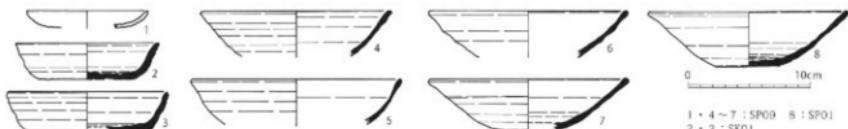


fig.175 出土遺物

0.23mを測る。埋土中より、須恵器壺および石製品の一部と考えられる遺物などが出土した。

ピット　規模はさまざまで、径0.2～0.35m、深さ0.1～0.35mを測る。一部には径0.18～0.25mの柱痕が確認できるものも存在した。多くのピットにおいて、土師器、須恵器の小破片が出土したが、SP01から完形の須恵器壺、SP09から須恵器壺、土師器皿が出土した。

3.まとめ

今回の調査においては、工事掘削影響深度の関係上、2区西半および3区にて遺構を検出し、遺構内および遺物包含層内より、奈良時代～鎌倉時代の遺物が出土した。

検出したピットの中には、調査地西側に隣接する兵庫県教育委員会による調査において検出された掘立柱建物の一部にあたるものも含まれる。また、時期の判明した遺構としては、SK01（9世紀前半）、SP01・09（いずれも平安時代末～鎌倉時代初頭）が挙げられる。



fig.176 SK01 (西から)



fig.177 SP01 (西から)

27. 中遺跡 第24・25・26・27次調査

1. はじめに

中遺跡は、武庫川支流の八多川西岸の河岸段丘上に位置する。過去の山陽自動車道建設に伴う調査、あるいは道場八多地区特定区画整理事業に伴う調査において、縄文時代～近世の遺構・遺物が検出されている。

今回の調査地は、4箇所（第24～27次調査）に分かれており、いずれも個人住宅建設に伴うもので、掘削工事により埋蔵文化財が影響を受ける範囲について調査を実施した。尚、調査地の西側が、平成8年度に兵庫県教育委員会により実施された調査区（堂ノ元地区6区）に近接する。

2. 調査の概要

今回の調査で、敷地のほぼ大半が調査対象となったのは第24次調査のみで、また、第25・27次調査においては、遺構面の削平によって、遺構が検出されなかつたほか、第26次調査においては、工事影響掘削深度が遺構面に達しないため、上層内までの調査となつた。唯一、遺構を検出したのが第24次調査で、便宜上、調査区を3分割（1～3区）し、1箇所ずつ順に調査を進めた。

基本層序

第24次調査地については、現地表面から西側で深さ0.1～0.2mまでは盛土で、その下層に旧耕土・床上が数層存在し、その下層に僅かに遺物を含む灰褐色砂質シルトが存在する。この灰褐色砂質シルトの下層が黄褐色混糖砂質シルトで、その上面で遺構を検出した。

他の調査地（第25・26・27次調査）については、第24次調査地と若干の差異がみられるものの、ほぼ同じ様相である。

遺構

第24次調査において、4棟の掘立柱建物、土坑2基、ピット約50基を検出した。

SB01

調査区の北西角で検出した掘立柱建物である。東西1間分、南北2間分を検出した。調査区の北西側へと続くものと考えられ、全体の規模は不明である。柱間は東西が2.2m前後、南北は2.5m前後で、主軸はN-35°-Eである。柱穴径は0.35～0.4m、深さは0.1～0.4mを測り、径0.15～0.2mの柱痕が確認されたものもある。出土遺物は確認されなかつた。

SB02

調査区の中央部付近で検出した掘立柱建物である。東西3間、南北2間の規模と考えられるが、調査区の南西側へ続く可能性もある。柱間は東西が1.7～2.8m、南北が2.7m前後、主軸はN-33°-Eである。柱穴径は0.18～0.55m、深さは0.08～0.5mを測り、径0.18～0.25mの柱痕が確認されたものもある。出土遺物は一部の柱穴より、土師器・



fig.178 調査地位図 S=1:2,500

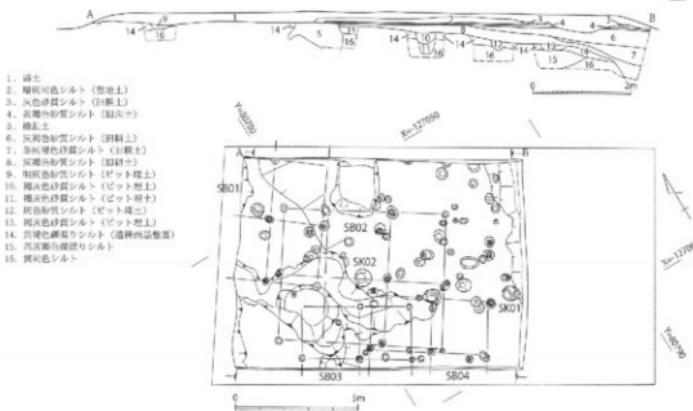


fig.179 第24次調査 調査区平面図・土層断面図

須恵器の小破片が出土した。

- SB03** 調査区の南北角付近で検出した掘立柱建物である。東西2間分、南北1間分を検出した。調査区の南側へと続くものと考えられ、全体の規模は不明である。柱間は東西が2.1～2.3m、南北が2.2m前後で、主軸はN-33°-Eである。柱穴径は0.25m前後、深さは0.05～0.34mである。一部の柱穴で、径0.13mの柱痕が確認された。出土遺物はなかった。
- SB04** 調査区の南東角付近で検出した掘立柱建物である。東西2間分、南北1間分を検出した。調査区の南側へと続くものと考えられ、全体の規模は不明である。柱間は東西が2.3～2.4m、南北が2.3m前後で、主軸はN-35°-Eである。柱穴径は0.3～0.7m、深さは0.25～0.38mである。1箇所を除き、径0.15m前後の柱痕が確認できた。一部の柱穴より、土師器・須恵器の小破片が出土した。

土 坑 調査区中央と東端部中央で、土坑2基（SK01・02）を検出した。長径0.73m、短径0.6～0.65m、深さ0.13～0.3mである。SK02より、土師器・須恵器の小破片が出土した。

ピット 約50基検出された。径0.15～0.6m、深さ0.1～0.55mと規模にややバラツキがある。径0.15～0.2mの柱痕が確認できるものも一部に存在した。数基のピットより、土師器・須恵器の小破片が出土した。

その他の遺物

24次調査においては、上記以外に旧耕土層等より、土師器・須恵器の小破片が出土したが、量的には少ない。また、第25・26・27次調査も同様で、旧耕土層中より、土師器・須恵器の小破片が出土した程度である。

3.まとめ

今回の調査では、限られた調査範囲ながら、第24次調査において、密な遺構の分布状況を確認できた。出土遺物が少ないと、詳細な時期は確認しにくいが、概ね、中世のものと考えられる。

一方、調査地の近接地では、平成7～9年度にかけて、兵庫県教育委員会による区画

街路部分の調査が実施されており、中世の柵列、掘立柱建物、溝、土坑、ピットなどの遺構、または遺物の検出が報告されているが、掘立柱建物の方向等に第24次調査のものとの共通点があり、これらの遺構とほぼ同じ時期と推察される。

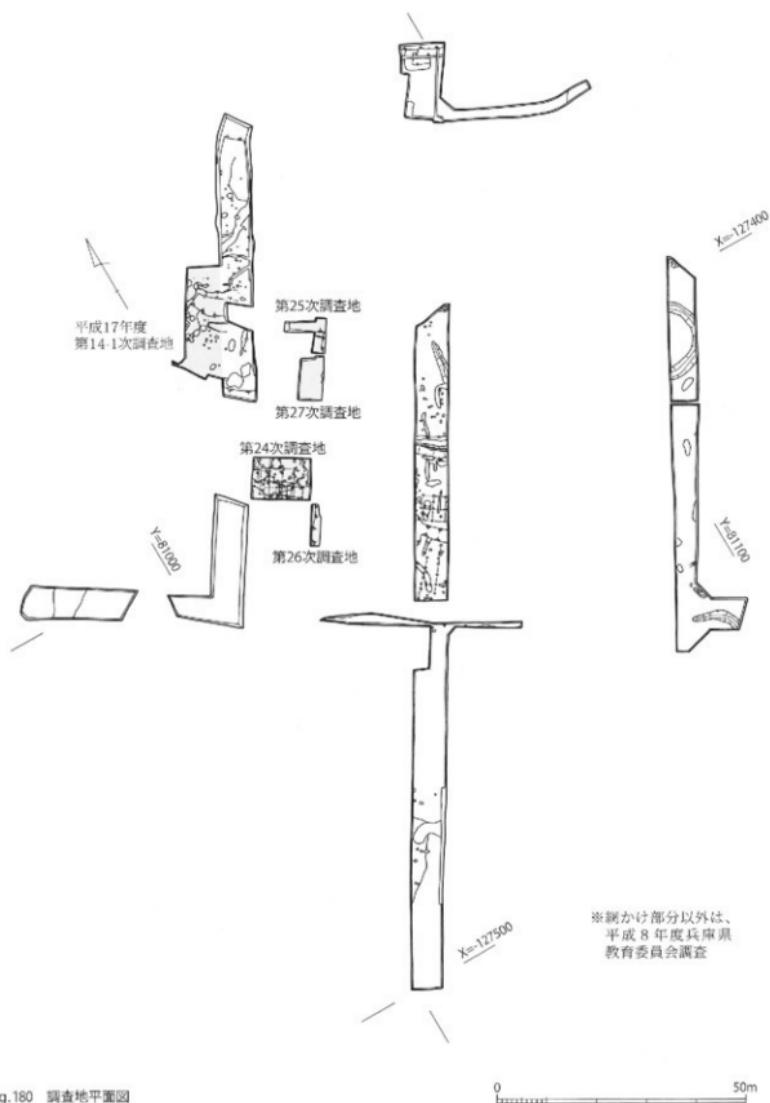


fig.180 調査地平面図

0 50m

28. 若松町東遺跡 第2次調査

1. はじめに

若松町東遺跡は苅藻川と妙法寺川間の沖積地上に立地し、若松町3・4丁目地区における震災復興市街地再開発事業に伴い発見された遺跡である。平成19年度に同事業に伴う第1次調査を実施し、縄文時代晚期～中世の遺構・遺物を検出した。

今回の調査は、第1次調査地に連続する区域において実施し、弥生時代～中世の遺構・遺物を検出した。

2. 調査の概要

第1次調査と同区域における調査となることから、第1次調査から連続した地区名(8区)で調査地を呼称し、便宜上、3分割にて調査を行い、それぞれを8-1区、8-2区、8-3区とした。調査においては、掘立柱建物1棟、溝7条、土坑(落ち込み)4基、ピット数基が検出された。

基本層序

G.L.-0.4mまでが震災および戦災の伴う整地層で、その下に近世～近代の耕土層、中世耕土層と続き、その下層に土壤化した暗褐色シルトが薄く堆積、さらに下層の灰黄色、または黄色を呈するシルト層上面で遺構を検出した。調査区の東側では下がり地形となり、土壤化層の下、遺構検出面との間に黒褐色シルトが堆積する。

SB801

8-2区で検出した東西1間(約2.2m)×南北1間(約2.1m)の掘立柱建物である。柱穴規模は、径約0.35～0.4m、深さ約0.5mを測り、2箇所の柱穴から弥生土器と考えられる上器の小破片が出土した。柱穴の間隔、配置から竪穴建物の主柱穴の痕跡の可能性も考えられる。

SD801

第1次調査の3区で検出したSD301、6区で検出したSD602に続く一連の溝である。今回の調査での検出長は約25mで、先の調査での検出分を合わせると約34mとなる。溝の上端幅は約1.0m、深さは0.2～0.4mで、北西から南東方向へわずかに蛇行しながら流れる。出土遺物は少なく、土器の小破片が数点出土



fig.181 調査地位位置図 S=1:2,500

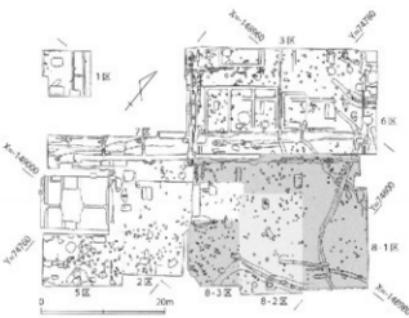


fig.182 1～3、5～8区平面図

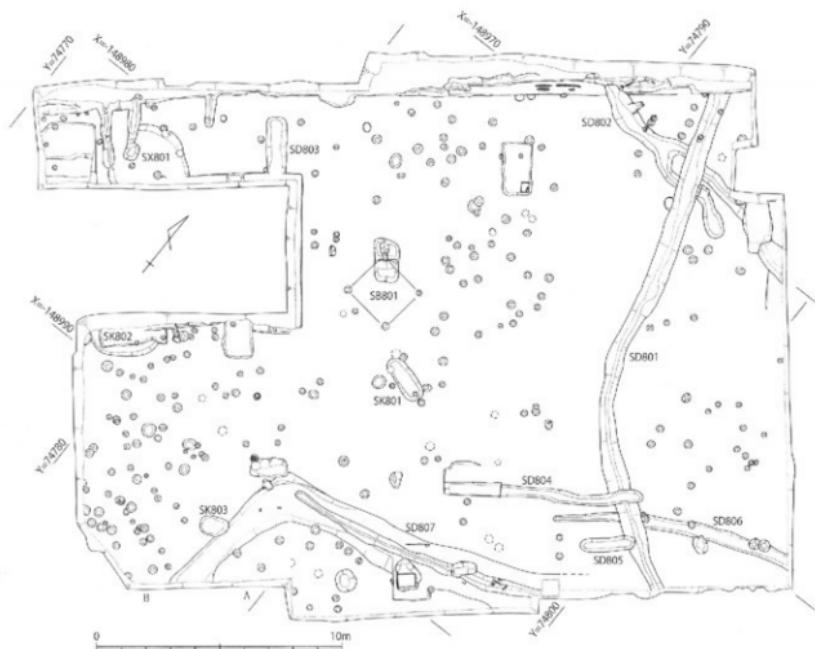


fig.183 調査区平面図・土層断面図

1. 土壌
2. 灰色帶土層（近世～近代耕土層）
3. 黄灰色シルト（中世耕土層）
4. 青褐色シルト
5. 青褐色砂質シルト（SD807埋土）
6. 青灰色シルト（SD807埋土）
7. 灰褐色シルト（SD807埋土）
8. 深褐色シルト（SD807埋土）



fig.184 8-2区（東から）



fig.185 8-3区（東から）

した程度である。また、埋土上面よりサヌカイト製石鐵1点が出土した。

- SD802 SD801に切られる溝で、西から東へと流れる。第1次調査の6区で検出したSD601と同一の溝で、今回の調査区内での検出長は約11m、一連の調査での検出長は約18mとなり、東にさらに延びる。SD801との交差部分で二股に分かれ、南側の1条は分かれた後、長径約1.0mの平面橢円形の浅い土坑状となって収束する。埋土より小破片の土器やサヌカイトが出土したのみである。



fig.186 8-1区(北西から)

- SD807 8-2区南端で検出したSD801に切られる東西方向の溝で、西側の8-3区で南に曲がり調査区外に延びる。最大幅約2.0m、西南側では深さ約0.1m、東側は約0.4mである。出土遺物は少なく、土器の小破片が数点出土した程度である。

- SK802 第1次調査2区において一部を検出して落ち込みで、双方を合わせると、長径約3.0m、短径約2.0m、深さ0.1～0.2mの規模となる。

3.まとめ

今回の調査では、掘立柱建物1棟、溝7条をはじめ、多くの遺構を検出できたものの、出土遺物に乏しく、明確な時期を決定しづらいが、遺構面直上の土壤化層等からの出土遺物からすると、検出した遺構の大半は弥生時代前期～中期に属する可能性が高く、それ以降のものについては、旧耕土と同様の土を埋土することから、中世に属するものと判断される。以上のような成果から、同遺跡の諸相解明が進むものと推察される。



fig.187
8-1区 SD801
(北西から)

29. 大橋町東遺跡 第1次調査

1. はじめに

大橋町東遺跡は、北方の高取山から流れる旧荔藻川や妙法寺川などの河川の堆積によって形成された沖積地に位置する。同遺跡は、平成19年度に新長田駅南地区再開発事業に伴って、新たに発見された遺跡で、今回、同事業に伴う第1次の調査となった。

2. 調査の概要

調査地は、街路設置部分を中心にして東西18m、南北73mの範囲で、便宜上、南北2分割し、それぞれI区・II区として順次調査を行った。調査では、2面の遺構面を確認し、第1遺構面においては中世、第2遺構面においては弥生時代～中世の遺構・遺物を検出した。

基本層序

現地表下の約0.6mの盛土の下に旧耕土が約0.1m堆積し、直下が遺構面の淡灰黄色シルトとなる。南側のII区においては、盛土の下に旧耕土・床土が約0.1～0.4m堆積し、その直下が第1遺構面の基盤層で古墳時代の遺物包含層となる暗灰色シルトの堆積がみられる。この暗灰色シルトは層厚約0.2mで、その下層に、第2遺構面の基盤層である淡灰褐色シルト砂および暗灰褐色土となる。

第1遺構面

畦畔状遺構、土坑、溝、耕作痕などを検出した。同遺構面直上の旧耕土層より、中世の遺物が出土しているものの、遺構からの出土は少なく、SK22より中世の須恵器の小破片が確認された程度である。

第2遺構面

竪穴建物2棟をはじめ土坑、ピット、溝などを検出した。

SB01

II区の南端で検出された南北辺3.8m、東西辺3.5m、深さ0.15m測る竪穴建物である。西辺に幅0.15m、深さ0.05mの周壁溝が認められる。主柱穴は4基で、柱間隔は南北約2.0m、東西約1.6mを測り、各々の径は0.5～0.6m、床面からの深さ0.3～0.6mである。また、北辺の中央部分には、不明瞭ではあるが竈と考えられる黄灰色粘土の痕跡がみられる。長さ0.9m、焚口の幅1.0mを測り、平面形馬蹄形に壁体から造り付けられている。竈内には土師器の壺が倒立して出土しており、支脚とされていた可能性がある。出土遺物が少ないものの、概ねTK23～47型式と思われる須恵器が含まれることから、この竪穴建物の時期は5世紀末～6世紀初頭頃と推測される。

SB02

II区の中央部で検出された南北辺6.2m、東西辺5.0m、深さ0.08～0.12mの竪穴建物である。北辺の一部に幅1.2m、残高8cmのベッド状遺構が設けられており、北西コーナー一部周辺の壁面には、幅0.1～0.15mの周壁溝が巡る。また、北東コーナー一部には1.8×0.9



fig.188 調査地位位置図 S=1:2,500

m、深さ床面から0.35mの隅丸方形の土坑が確認されている。柱穴は検出部分においては確認できず、おそらく攪乱部分に存在すると考えられる。出土遺物は少なく、時期を決定づける要素に乏しいが、形状の特徴などから、概ね弥生時代末～古墳時代初頭の可能性が考えられる。

SP03 I 区の北部西壁において検出した径 0.3m、深さ 0.7m のピットである。底部より須恵器の塊が完形で出土した。11世紀後半～末頃のものと考えられる。

SP21 II区の南部東壁沿いで検出した径0.9m、深さ0.1mのピットである。弥生時代後期末頃の土師器の甕が出土した。

3. 総まとめ

大橋町東遺跡は、今回はじめて本格的な調査が実施され、弥生時代後期～中世の遺構・遺物を検出した。特に、2棟の竪穴建物が検出されたことは、大きな成果と言えよう。同遺跡周辺には、狭い範囲の微高地に上に小規模な遺跡がいくつか存在することが確認されており、本遺跡もこのような遺跡のひとつであると考えられる。

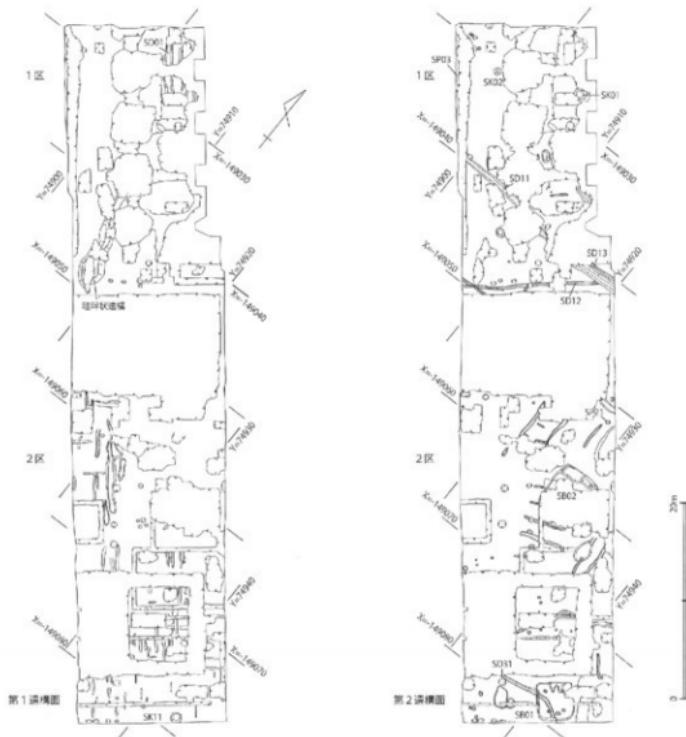


fig. 189 番育区平面図

30. 松野遺跡 第41次調査

1. はじめに

松野遺跡は、六甲山系南麓の沖積地に位置し、昭和56年度の第1～3次調査において、豪族居館と推定される建物群が確認され、全国的に注目を集めた遺跡である。その後、数次にわたる調査において、縄文時代晚期～中世の複合遺跡であることが明らかになった。

今回の調査は、工場建設に伴うもので、平安時代以降の水田遺構を検出した。

2. 調査の概要

当該地は攢乱が著しく、工事掘削範囲内のうち遺構面が遺存する箇所において調査を行った。遺存箇所は3箇所に分かれており、それぞれを1～3区として進めた。

基本層序

上層より、盛土（碎石・攢乱土含）、旧耕土層、暗灰褐色シルト（遺物包含層）、暗黃灰褐色粘質土（遺構面基盤層）となっている。

遺構・遺物

2区および3区において、水田畦畔の一部が検出されており、当該地が耕作地として利用されていたことが窺える。

出土遺物は少なく、当地において、水田が営まれていたことが判明した。水田遺構の時期については、上層の遺物包含層などから土器（上師器・須恵器・陶器）の小破片が数点確認された程度で、明確ではないが、平安時代もしくはそれ以降のものと推察される。

3. まとめ

今回の調査地は、第1～3次調査地から約50mの地点であることから、古墳時代の遺構の検出が期待されたが、攢乱箇所も多いことや、平安時代以降の水田遺構を検出したにとどまった。また、当該地は地下水位が高いことから、耕作地に適していた可能性も多い。



fig.190 調査地位置図 5=1:2,500

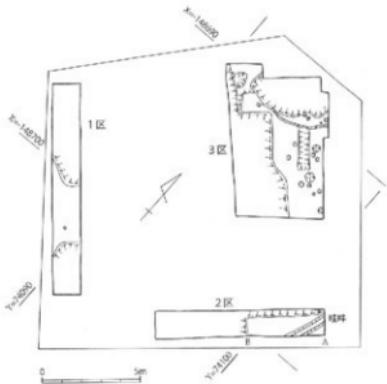


fig.191 調査区平面図・土層断面図

31. 松野遺跡 第42-1・2次調査

1. はじめに

松野遺跡は、六甲山系南麓を流れ出る妙法寺川と苅藻川によって形成された沖積地に立地し、過去の数次にわたる調査において、縄文時代晚期～中世の遺構・遺物が検出されている。

今回の調査は、新長田駅南地区市街地再開発事業のうち若松町6丁目地区の工事に伴うもので、2面（部分的）の遺構面が確認し、縄文時代～近世の遺構・遺物を検出した。

2. 調査の概要

本工事の工程の関係から、調査時期・箇所を2分割して実施した。

調査対象地の南半部を42-1次調査、北半部を42-2次調査として取り扱った。

基本層序

42-2次調査地においては、上層より層厚0.5～0.6mの盛土、数cmの旧耕土・床土、0.1～0.2mの灰褐色粘質土（第1遺構面基盤層）、0.2mの黄褐色シルト・黄灰色シルトとなり、黄褐色シルトが第1遺構面基盤層となる箇所も有する。また、42-1次調査地においては、42-2次調査地とほぼ同様であるが、旧耕土直下の黄色シルトおよび灰色シルトが遺構面基盤層となる。

42-1次調査 遺構面は1面のみ確認された。溝33条、土坑（落ち込み）3基、ピット30基を検出した。その多くは中世のものと考えられ、ピットのひとつ（Pt12）より12世紀前半頃の完形の須恵器塊が1点出土した。また、近世以降の遺構も数箇所検出されており、SD32、SK01、SX01・02などがこれらにあたる。

SD01 北西から南東にはしる溝で、最大幅約5m、深さ約0.5mを測る。唯一、弥生時代に属すると考えられる遺構で、II様式の蓋形土器や砂岩製の石包丁などが出土した。

42-2次調査 2面の遺構面を確認し、第1遺構面においては弥生時代中期～近世、第2遺構面においては縄文時代の遺構・遺物を検出した。

第1遺構面 溝18条、土坑4基、ピット20基、流路1条を検出した。42-1次調査と同様に、中世～近世のものが多く、土坑（SK01）より12世紀前半頃の完形の須恵器塊が1点出土した。また、42-1次調査地より続く溝（SD01）も検出されており、埋土よりII様式を中心とした土器類が出土した。その他、調査区中央部より北西端にかけて検出された流路より、縄文時代晚期のものと考えられる土器の小破片が出土した。

第2遺構面 調査区の中央部から南東部にかけて第1遺構面の下に僅かに遺物を含む淡灰褐色シルト層が堆積しており、この上面において部分的に遺物が集中する箇所（土器群）を確認



fig.192 調査地位図 S=1:2,500

した。確認された土器は、いずれも摩滅が著しく、時期の判別できなかったが、縄文時代の範疇である可能性が高い。

3.まとめ

今回の調査において、弥生時代中期と中世以降の遺構が確認され、集落あるいは生産域の拡がりが確認できたことは、大きな成果と言えよう。尚、詳細については、「松野遺跡第42-1・2次発掘調査報告書」(2010年刊行)を参照されたい。

図193 調査区平面図

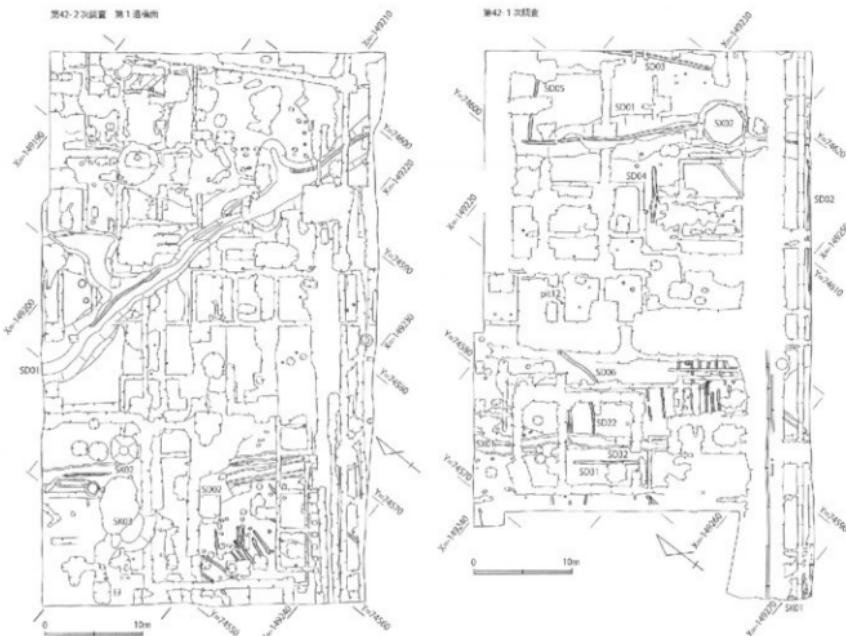


fig.193 調査区平面図



fig.194 42-2次調査第1造塗面 (空中から)



fig.195 42-1次調査東半部 (西から)

32. 松野遺跡 第43次調査

1. はじめに

松野遺跡は、六甲山系南麓の沖積地に立地し、縄文時代晚期～中世の複合遺跡である。

今回の調査は、若松公園の整備拡張に伴うもので、公園内の既存の遊具、バーゴラ等の撤去工事において、埋蔵文化財が影響を受ける範囲について実施した。

2. 調査の概要

工事より影響を受ける範囲が大きく3箇所に分かれているため、便宜的に1区～3区とし、調査を進めた。

基本層序

現代の盛土を除去すると、近世・近代の耕土が存在し、以下、灰褐色砂質土、黒褐色シルトと続き、その下層の暗灰褐色シルト上面で遺構が確認できる。明確な遺物包含層は認められない。遺構面より下層については砂層が厚く堆積しており、所々でその砂層を切り込んで自然流路が存在している。この自然流路中には遺物は存在しなかった。

遺構・遺物

溝5条、土坑1基、ピット11基を検出した。しかしながら、小規模なものが大半で、比較的規模の大きいものとしては、SD01（幅約2.5～4.0m、深さ約0.4m）とSK01（長径1.4m、短径1.15m、深さ0.18m）ぐらいである。

出土遺物は、遺構面直上層や遺構内から確認されているが、出土が確認された遺構は、SD01・04、SK01、SP14のみである。SD01より弥生時代中期の土器片、SK01・SP14より中世の土器片および須恵器の小破片、SD04より時期不詳の土器の小破片がそれぞれ出土した。

3.まとめ

今回の調査では、弥生時代中期の土器を含む溝（SD01）と耕作等に伴う可能性が考えられる時期不明の溝及び中世のピット、土坑などを検出した。SD01については、その用途は不明確であるが、集落の区画溝、あるいは耕作地への配水路などが想定される。また、遺構の密度が希薄なことから、当地が集落の縁辺部や耕作地である可能性が考えられる。



fig.196 調査位置図 S=1:2,500



fig.197 1区（東から）



fig.198 2区（北東から）



fig.199 3区（北西から）

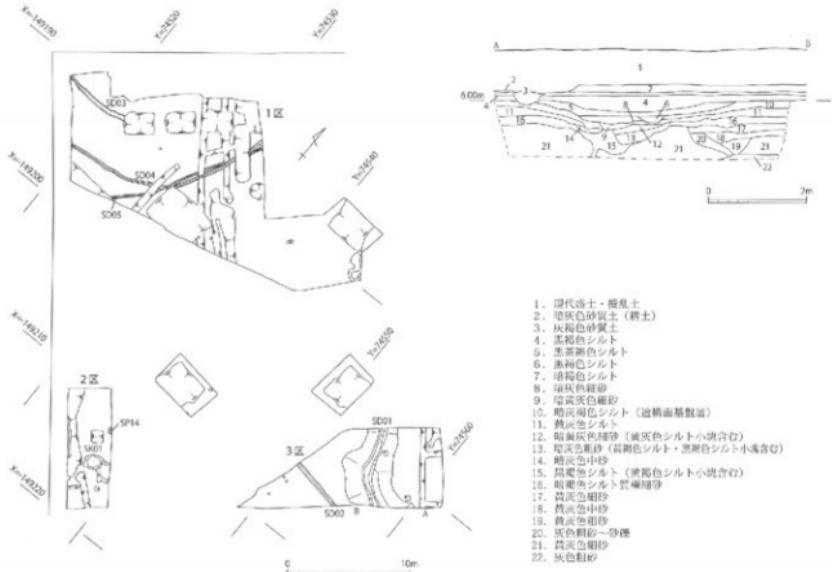


fig.200 調査区平面図・土層断面図

33. 垂水・日向遺跡 第35次調査

1. はじめに

垂水・日向遺跡は、福田川西岸の沖積地に位置し、過去の調査において、縄文時代中期～中世の遺構・遺物が検出されており、また、縄文時代早期～前期の相当層より、人間の歩行痕跡（足跡）も確認されており、永きにわたって、連綿と生活が営まれていたことが窺える。

今回の調査は、診療所の建設に伴うもので、古墳時代後期～平安時代頃の遺構・遺物を検出した。

2. 調査の概要

敷地内において、掘削工事を実施する箇所について調査を行った。検出した遺構は、溝状の落ち込み1基（SX01）のみである。

基本層序

上層より、現代盛土、淡灰色砂質土（旧耕土層）、灰色砂質土（旧耕土層）、暗灰色砂質土（中世前期旧耕土層）、淡黒灰色シルト（平安時代遺物包含層）、淡黄灰色シルト質極細砂（遺構面基盤層、奈良時代～平安時代頃の遺物を少量含む）の順となっており、さらに下層は、黄褐色シルト混じり砂質土、灰色砂質土、灰色砂礫（自然木を含む）の順で堆積がみられる。

SX01

浅い溝状の落ち込みで、幅1.5～3.0m、深さ約0.25mを測る。埋土中より、土師器・須恵器の小破片が出土したが、時期は不明である。しかしながら、埋土が上層の遺物包含層とほぼ同様の黒灰色系のシルト層であることから、平安時代の範疇に入る遺構と推察される。

出土遺物

遺物の多くは、遺物包含層である淡黒灰色シルトより出土した。平安時代の土師器・須恵器が数量的には多いが、古墳時代後期の土師器・須恵器、奈良時代～平安時代の土師質の飯蛸壺や時期不詳のサヌカイト剥片も含まれる。また、遺構面基盤層である淡黄褐色砂質土から、奈良時代～平安時代頃の飯蛸壺や製塩土器の破片が確認されている。

3.まとめ

今回の調査において検出された遺構はSX01のみであるが、平安時代を中心とした出土遺物が確認されており、近接地における集落の存在を示唆するものと言えよう。また、飯蛸壺や製塩土器の破片の出土、旧耕土中からではあるが、土錐の出土など、海の生業に関わる遺物がみられることは、同遺跡の立地を反映しているものと考えられる。



fig.201 調査地位置図 S=1:2,500



fig.202 調査区南半部 (北西から)

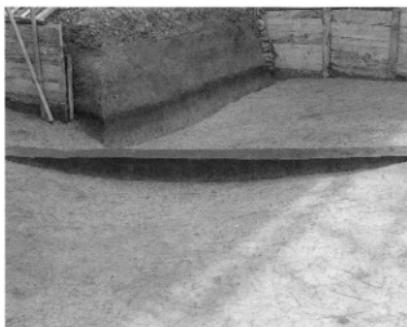
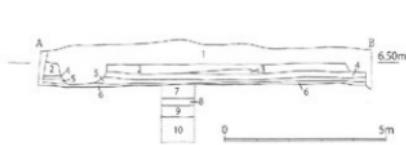


fig.203 SX01土層断面 (北東から)



1. 混合土
2. 淡灰色砂質土 (旧開土層)
3. 淡色砂質土 (旧耕土層)
4. 淡灰色砂質土 (中层削除耕土層)
5. 雨灰化シルト耐り砂質土
6. 淡黒灰色シルト (平安時代遺物混合層)
7. 淡黃灰色シルト帶地質 (遺物削除層・奈良時代～平安時代の遺物を少量含む)
8. 黄褐色シルト耐り砂質土
9. 淡色砂質土
10. 淡色砂質土 (内粘木を含む)

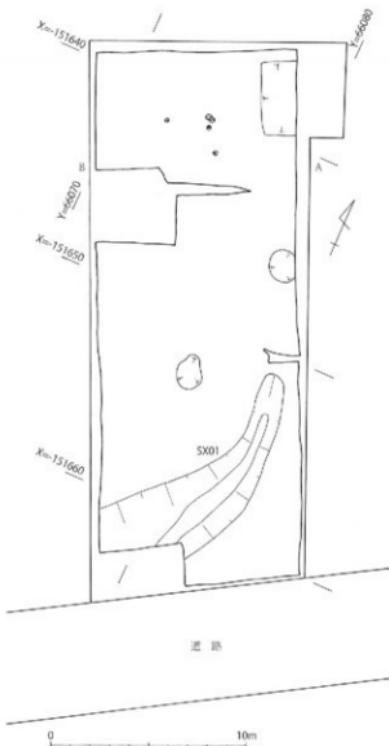


fig.204 調査平面図・土層断面図

1.はじめに

垂水・日向遺跡は福田川右岸に形成された平野に位置する、繩文時代早期から中世にかけての複合遺跡である。第34次調査では古代から中世にかけての遺構が確認され、第1面は平安時代から鎌倉時代にかけて、第2面は平安時代末、第3面は平安時代となる。各時代で土坑、溝跡、ピットなどの遺構が検出した。同定試料は第2面のSD03溝跡で出土した木製品である。第2面のSD03は、東半に十手が確認された事や土層堆積状況等から、流路ではなく集落の区画溝としての機能が想定され、木製品はSD03の下層より出土している。ここではその木製品の樹種同定を行った。

2. 試料と方法

試料はSD03から出土した木製品23点である。器種別では、曲物底板1点、丸杭2点、割板1点、角棒5点、丸材1点、割材13点である。

樹種同定は、神戸市教育委員会が採取した木材ブロックより切片を切り出し、プレパラートを作製した。切片は片刃剃刀を用いて、横断面（木口）、縦断面（胚目）、放射断面（板目）の3断面を採取し、ガムクローラルで永久封入した。これらのプレパラートを光学顕微鏡下で40～400倍で検鏡し、現世標本と対照して同定を行った。なお、プレパラートは神戸市教育委員会で保管している。

3. 結果

同定の結果、針葉樹のマツ属複雜管束亞属、モミ属、スギの3分類群と、広葉樹のツヅラジイが産出した。マツ属複雜管束亞属が最も多く16点で、モミ属が4点、スギが2点、ツヅラジイが1点であった。表12に器種分類別の樹種同定結果を、表13に樹種同定結果一覧を記す。

以下に同定された材の特徴を記載し、1分類群1点の光学顕微鏡写真を示す。

(1) マツ属複雜管束亞属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 fig. 205 1a-1c (R077-19)

仮道管と放射柔細胞および放射仮道管、垂直・水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞によって構成される針葉樹材である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁の肥厚は重環状を呈す。

マツ属複雜管束亞属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。陽樹で乾燥によく耐えるため、二次林に多くみられる。クロマツとアカマツは材質は類似し、重硬で切削等の加工は容易である。

(2) モミ属 *Abies* マツ科 fig. 205 2a-2c (R077-7)

仮道管と放射柔細胞によって構成される針葉樹材である。早材から晚材への移行は明瞭である。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状端壁となる。放射柔細胞の分野壁孔はスギ型で小さく、1分野に1～3個存在する。

日本に分布するモミ属には、北海道に分布するトドマツ、亜高山帯など高標高域に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミ、低標高域に分布するモミなどがありいずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易であり割裂性も大きい。

(3) スギ *Cryptomeria japonica* (L. f. L.) D. Don スギ科 fig. 205 3a-3c (R077-8)

仮道管および樹脂細胞、放射柔細胞によって構成される針葉樹材である。晩材は量が多い。放射組織は単列で、2～16細胞高になる。分野壁孔は孔口の大きく開いたスギ型で、1分野に2～3個存在する。

スギは大木高木へ成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で切削などの加工が容易な材である。

(4) ツヅラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科 fig. 205 4a-4c (R077-14)

年輪始めに大きな道管が接線方向に不連続に並び、晩材部にかけて漸次径を減じながら火炎状に配列する環孔材である。道管は單穿孔を有し、放射組織は単列同性のものと集合放射組織がみられる。

ツヅラジイは暖帶～熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さ、強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難でない。

4. 考察

同定の結果では、マツ属複雜管束亞属が最も多く産出した。いずれの器種からもマツ属複雜管束亞属は産出されたが、その8割以上が割材であった。また角棒では、モミ属やスギも利用されていた。

垂水・日向遺跡では、第1・3次調査の際に花粉分析も行われている。その結果、弥生時代前期に照葉樹が優先していた森林が、古墳時代後期にはアカマツが主の森林へと変化した事が確認された（松下、1992）。この結果を受けて、照葉樹林からアカマツ林への変化は、人間の継続的な活動によって引き起こされたものだとされている（神戸市教育委員会、1992）。

古墳時代以降の花粉分析は行われておらず、今回同定を行った平安時代末の周辺環境については詳細に確認されていない。しかし古墳時代以降も継続的に人間の活動が行われていた垂水・日向遺跡では、平安時代末でも遺跡周辺にアカマツが卓越し、アカマツを利用していた可能性が考えられる。

【引川文庫】

神戸市教育委員会（1992）『垂水・日向遺跡第1, 3, 4次調査』（神戸市教育委員会編）：286p.

松下まり子（1992）『垂水・日向遺跡の花粉化石と古環境』『垂水・日向遺跡第1, 3, 4次調査』（神戸市教育委員会編）：187-198p.

表13 樹種同定結果一覧

No.	出土遺構	器種	樹種	時期
R-077-1	SD03	角棒	モミ属	平安時代末
R-077-2	SD03	削材	マツ属複維管束亞属	平安時代末
R-077-3	SD03	削材	マツ属複維管束亞属	平安時代末
R-077-4	SD03	削板	マツ属複維管束亞属	平安時代末
R-077-5	SD03	曲物底板	マツ属複維管束亞属	平安時代末
R-077-6	SD03	削材	マツ属複維管束亞属	平安時代末
R-077-7	SD03	削板	モミ属	平安時代末
R-077-8	SD03	角棒	スギ	平安時代末
R-077-9	SD03	角棒	スギ	平安時代末
R-077-10	SD03	角棒	モミ属	平安時代末
R-077-11	SD03	削材	モミ属	平安時代末
R-077-12	SD03	削材	マツ属複維管束亞属	平安時代末

No.	出土遺構	器種	樹種	時期
R-077-13	SD03	角棒	マツ属複維管束亞属	平安時代末
R-077-14	SD03	削材	ツブラジイ	平安時代末
R-077-15	SD03	削材	マツ属複維管束亞属	平安時代末
R-077-16	SD03	削材	マツ属複維管束亞属	平安時代末
R-077-17	SD03	削材	マツ属複維管束亞属	平安時代末
R-077-18	SD03	削材	マツ属複維管束亞属	平安時代末
R-077-19	SD03	削材	マツ属複維管束亞属	平安時代末
R-077-20	SD03	丸材	マツ属複維管束亞属	平安時代末
R-077-21	SD03	削材	マツ属複維管束亞属	平安時代末
R-077-22	SD03	削材	マツ属複維管束亞属	平安時代末
R-078	SD03-Ⅱ	丸材	マツ属複維管束亞属	平安時代末

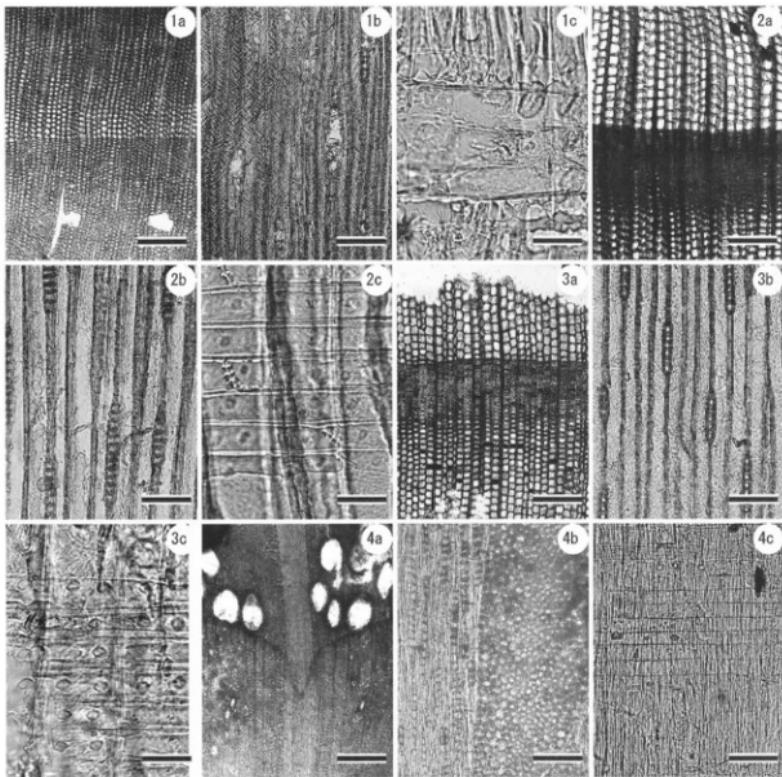


fig.205 垂水・日向遺跡第34次調査出土木製品の光学顕微鏡写真

1a-1c.マツ属複維管束亞属(R077-13) 2a-2c.モミ属(R077-8) 3a-3c.スギ(R077-8) 4a-4c.ツブラジイ(R077-14)
a:横断面(スケール=250 μm) b:接線断面(スケール=100 μm) c:放射断面(スケール=1-3.25 μm・4.50 μm)

34. 潤和遺跡 第4次調査

1. はじめに

潤和遺跡は、明石川の支流である伊川の右岸に位置し、弥生時代～鎌倉時代の遺構・遺物が検出されている。

今回の調査は、宅地造成に伴うもので、工事により埋蔵文化財に影響を受ける箇所において実施し、中世頃の遺構・遺物を検出した。

2. 調査の概要

今回の調査は、給排水埋設工事が行われる箇所において実施し、中世頃の溝状遺構2条を検出した。

基本層序

上層より、現代盛土層、耕土層、暗灰色砂質土、灰黄色砂質シルト(遺物包含層)、淡黄灰色シルト(遺構面基盤層)となっている。

遺構・遺物

中世の溝状遺構を2条(SD01・02)のみを検出した。SD01は幅0.45m、深さ0.1m、SD02は幅0.3m、深さ0.1mをそれぞれ測る。SD01の埋土より、須恵器の小破片が出土した。また、遺物包含層からも土器(土師器・須恵器・陶器)の出土がみられるが、いずれも小破片で中世頃のものと考えられる。

3.まとめ

今回の調査では、中世頃の溝状遺構を検出したが、僅かな面積での調査であったことから、詳細を把握することはできなかった。しかしながら、集落あるいは耕作地の一部の可能性が考えられることから、同遺跡の様相を知るまでの成果になりうるものと言えよう。

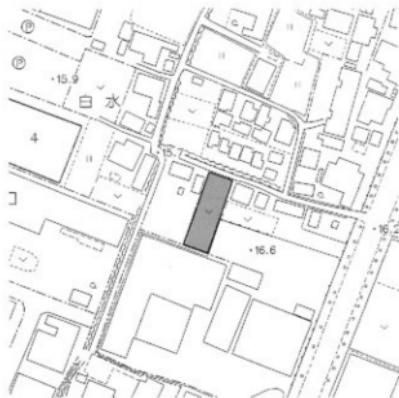


fig.206 調査地位置図 S=1:2,500

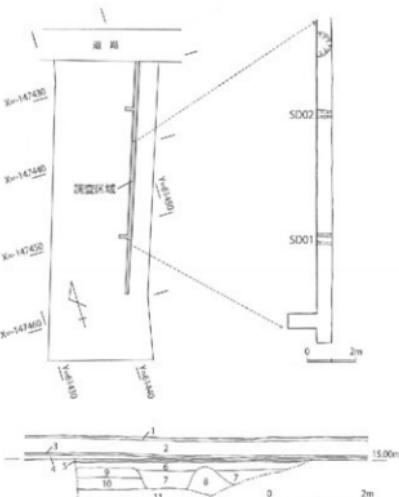


fig.207 調査区平面図・東側壁面土層断面図

35. 日輪寺遺跡 第10・11・12次調査

1. はじめに

日輪寺遺跡は、明石川とその支流の櫛谷川に挟まれた丘陵上に位置し、過去の調査において、弥生時代後期～古墳時代初頭および中世の集落遺跡であることが判明している。

今回の調査は、宅地造成に伴うもので、平成19年度より継続して行われたもので、先年度中に確認した遺構の記録保存作業を実施し、4月5日に完了した。尚、平成20年度に『日輪寺遺跡第10・11・12次発掘調査報告書』を刊行しており、詳細については、こちらを参照されたい。

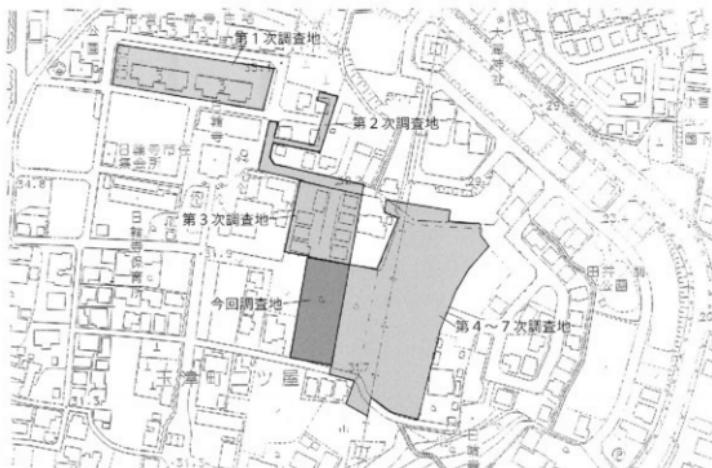


fig.208
調査位置図
S=1:2,500

2. 調査の概要

現地調査としては、上記の作業のみで、その後、出土遺物の整理作業および報告書編集作業を実施した。

手順としては、出土遺物の水洗作業→復元作業→図化作業→写真撮影を経て、現地調査のデータの整理作業とともに報告書編集を行った。編集・作成作業の中で得られた所見・評価等については、上記報告書を参照されたい。

3.まとめ

今回の調査においては、同一遺構面で弥生時代後期～古墳時代初頭および中世の遺構・遺物を検出したが、過去の一連の調査に比べて、比較的中世遺構・遺物が多いことが特徴と言えよう。同遺跡が、かねてより「普光山日輪寺」の寺域であると指摘されている事との関連を示唆できるが、堂塔跡のような具体的な施設の発見はなかった。

中世から戦国時代にかけて、災害と戦乱による彷徨を余儀なくされた伝承を持つ日輪寺は、現在の「普光山日輪寺」が位置する地点を中心に、かつての伽藍が多く存在した可能性が高く、第7次調査地にまたがって検出された中世の溝状遺構（SD07）が、ある時期の寺域の東限を示す施設である可能性が高い。

また、出土遺物に東播系窯産と考えられる平安時代瓦が多く含まれており、その生産

年代が11世紀末～12世紀初頭まで遡ると考えられることから、これまで不明瞭であった「普光山日輪寺」の創建年代を検証する上で重要である。また、今回出土した瓦の中でも、特に、軒丸瓦・軒平瓦の瓦当文様には、同遺跡の北方約7kmに位置する神出古窯址群で出土した瓦当と同文のものが複数存在し、また、それらが京都における院政期の御廟寺遺跡から出土する瓦群とも同文関係にあることは、特に注目すべき点と言えよう。



fig.209 調査区（北東から）

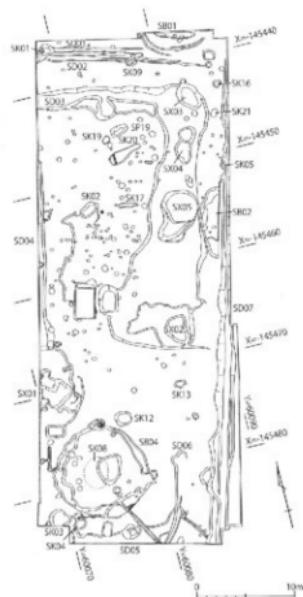


fig.210 調査区平面図



fig.211 SK08出土 複葉八弁蓮華軒丸瓦



fig.212 SK08出土 中心三葉花弁均整唐草文軒平瓦

36. 日輪寺遺跡 第13次調査

1. はじめに

日輪寺遺跡は明石川と櫛谷川に挟まれた丘陵上に位置し、弥生時代後期～古墳時代初頭と中世に盛行した遺跡であることが周知されている。

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、過去の調査と同様に、弥生時代後期～古墳時代初頭および中世の遺構・遺物が確認された。



2. 調査の概要

弥生時代後期後半の竪穴建物をはじめ、中世のピットなどが、同一遺構面で検出された。丘陵上であることから堆積層はほとんどなく、攤乱土・盛土の下層が灰色礫混り砂質土（旧耕土）、淡橙黄色礫混り砂質土（床土）で、その下層（黄色礫混り粘質土）上面が遺構面となっている。

遺構・遺物 竪穴建物 2 棟、掘立柱建物 1 棟、ピット 38 基を検出した。また、遺構内より弥生時代後期～古墳時代初頭および中世の遺物が出土した。

SB01 一辺約 5 m の隅丸方形と考えられる竪穴建物である。埋土より弥生時代後期後半の遺物が出土した。

SB02 径約 9.6 m と推定される円形の竪穴建物で、ベッド状遺構、周壁溝を有する。床面が焼けていることや埋土に焼土や炭化材・炭などが含まれることから、焼失建物の可能性が高い。また、ベッド状遺構を除去すると別の周壁溝が検出され、建物の建て替えまたは拡張が行われた際にベッド状遺構が付帯されたことが窺える。出土遺物から弥生時代後期のものと考えられる。さらに、この建物は南側に隣接する第 5 次調査地において検出された SH23 に連続する（同一）ものと考えられる。

SP01・02 直径約 0.35 ~ 0.4 m、深さ約 0.3 m を測り、埋土より弥生時代後期の土器の小破片が出土した。また、西側に隣接する第 9 次調査地において検出された SB05（掘立柱建物）の一部を構成するピットの可能性も考えられる。

3.まとめ

今回の調査においては、弥生時代後期後半の堅穴建物や中世のピットなどを検出し、同時期の集落のさらなる拡がりを確認することができた。また、SP01・02については、埋土より弥生土器の出土がみられるものの、SB05（第9次調査）の一部と考えた場合、16世紀後半に属する遺構となる。また、近接地域での調査によって確認されたピットの大部分は、中世以降のものであることから、さまざまな検討を要するところである。

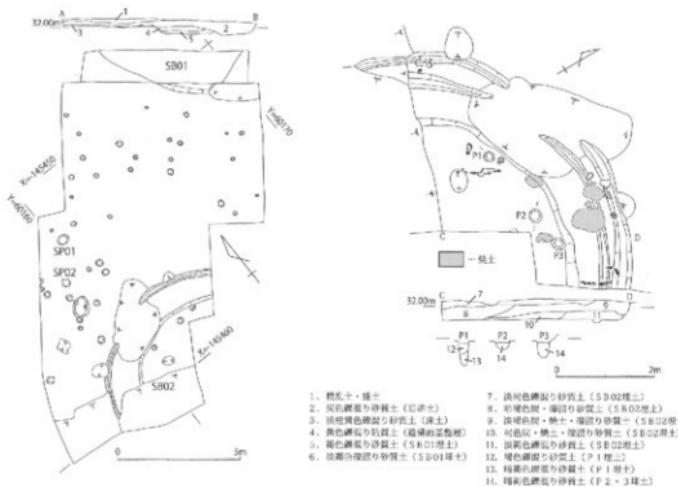


fig.214 調査区およびSB02 平面図・土層断面図



fig.215 調査区 (北から)

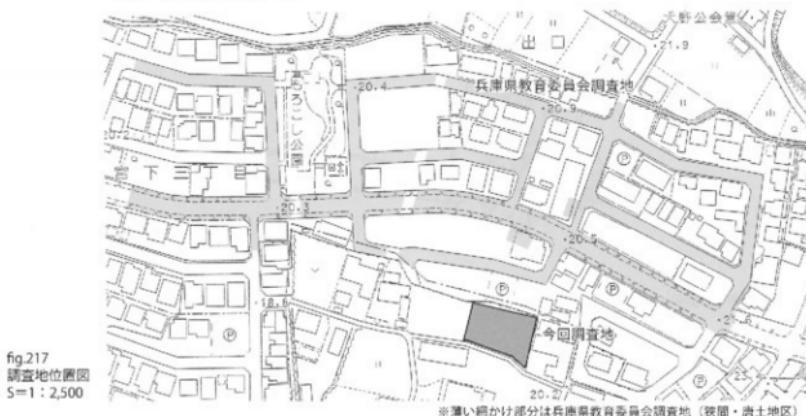


fig.216 SB02 (北から)

37. 玉津・田中遺跡 第37次調査

1. 遺跡の位置 玉津・田中遺跡は、明石川流域沖積地、その左岸に立地する遺跡で、縄文時代晩期～近世の複合遺跡で、弥生時代中期を中心とする集落遺跡としてよく知られている。

今回の調査は、宅地造成に伴うもので、弥生時代中期～古墳時代後期の遺構・遺物を検出した。調査区の北側は、区画整理事業に伴い兵庫県教育委員会により街路部分の調査が行われており、竪穴建物など、弥生時代中期末～古墳時代後期の集落に関わる遺構が、数多く確認されている。



2. 調査の概要 今回の調査は、敷地内の掘削工事を実施する箇所において行った。便宜上、調査区を4箇所（1～4区）に区分し、調査を進めたが、擾乱箇所が多く、遺構面が遺存するのは2区と4区であった。同区では、一部に遺物包含層が残存するが、基本的に現在の表土直下が遺構面となり、竪穴建物（SB01・02）・溝（SD01～04）・土坑（SK05・06・07ほか）・ピットなどの遺構を検出した。

SB01 南北4.8mを測る方形の竪穴建物で、幅約0.2m周壁溝を有する。埋土中より、須恵器、土師器の破片や淡緑色のガラス小玉1点などが出土した。また「碧玉」製管玉1点も出土したが、出土箇所がSB02・SD01と切り合う部分のため、出土遺構を確定できなかった。

SB02 東西4.5mを測る隅円方形の竪穴建物で、擾乱や他の遺構との切り合い等により、残存する部分が少ない。床面上より、古墳時代後期の土師器・須恵器が集中して出土した。

SD01 幅約0.6m、深さ0.3mを測り、SB01・02を切るかたちで検出した。埋土より、土師器・須恵器の破片が数多く出土した。

SD03・04 SD03は幅2m以上・深さ0.6m、SD04は幅約3.5m・深さ約1.0mを測り、切り合いからSD04が古い。いずれも、区画整理以前において同位置に存在した可能性が高く、長期間にわたって区画溝として運用されていたと考えられる。

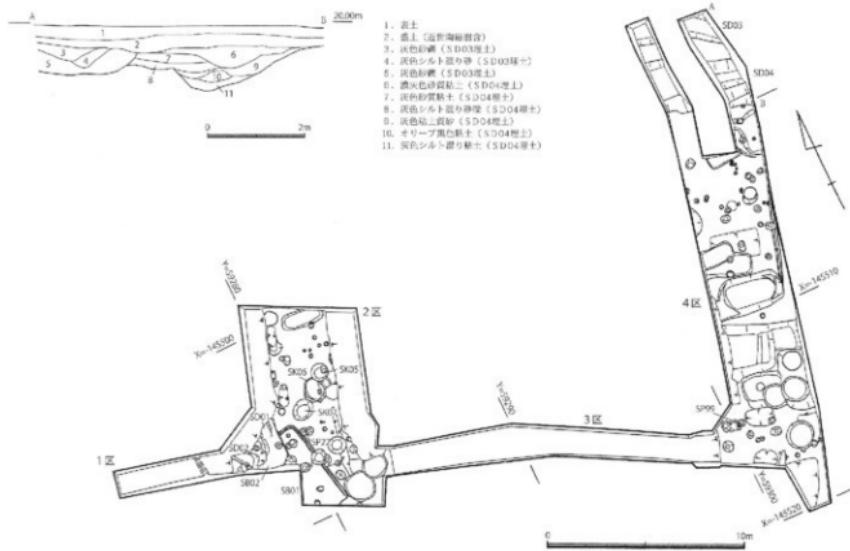


fig.218 調査区平面図・土層断面図



fig.219 2区（北から）



fig.220 4区（南から）

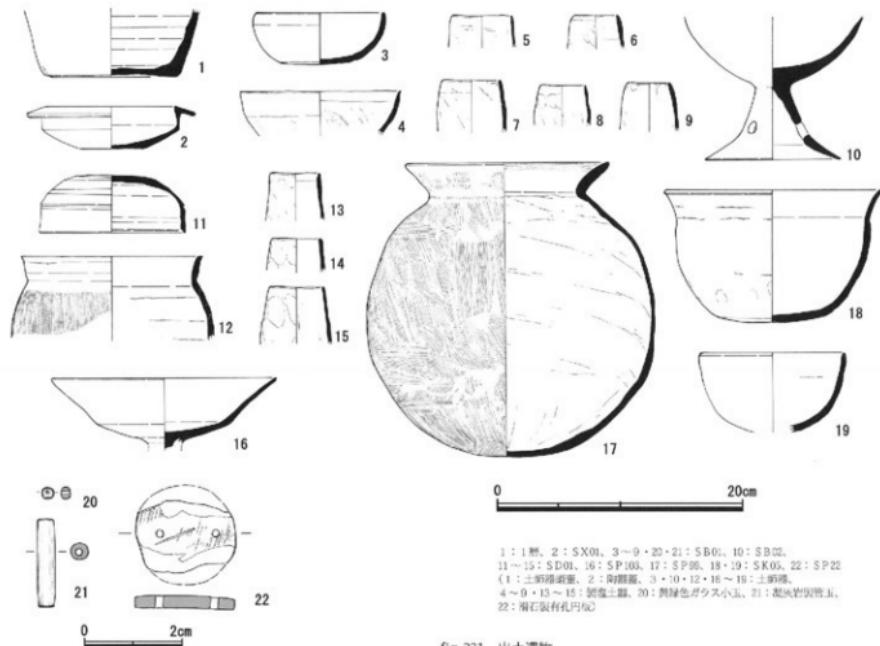


fig.221 出土遺物



fig.222 SD01・SB01
(北から)

SK05～07

SK05は径約0.9m、深さ3.5mを測る円形土坑で、弥生時代中期の鉢が出土した。SK05に接し並ぶように、やや規模の大きいSK06・07が検出されており、ともに弥生時代中期の土器片が出土した。

SP22 径約0.4m、深さ0.35mを測る円形のピットで、SB01・SP23に切られるかたちで検出した。埋土下位より、滑石製有孔円板1点が出土している。

SP99 径約0.6m、深さ0.35mを測る不整円形のピットで、底部に壺形土器が正位置で掘えられていた。

3.まとめ

1区・3区は擾乱により大きく破壊されて遺跡が残らないが、壁面の観察でも多くの遺構が確認できる。本来調査区全体に濃密な形で遺構が遺存していたものと考えられる。

今回の調査地には近世から近代の屋敷2軒があったという情報があったが、この時代の遺物をもつ井戸群が2地点で確認され、このことが裏付けられた。

また、北の道路敷設とともに先年の調査で確認されたのと同様、堅穴住居をはじめ、弥生時代中期から古墳時代後期の遺構が多く確認され、この時期の集落の範囲が確実にこの地点まで、そしてさらに南へ広がるものと推定される。水田が作られるだろう西の低地に面する微高地はさらに200mほど南に続いており、地形的に見てこの微高地の範囲がこの時期の集落の広がりに重なるものと推測できよう。

出土した遺物の整理により、各遺構の時期的な位置づけが可能となり、より細かな遺跡の変遷が明らかになると思われる。



fig.223 SK02・06・07（北から）

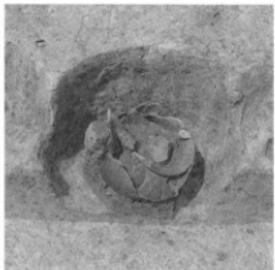


fig.224 SP99（南から）

38. 出合遺跡 第40次調査

1. はじめに

出合遺跡は、明石川中流域右岸の沖積地と段丘上に立地し、過去の調査において、旧石器時代～鎌倉時代の遺構・遺物が検出されている。昭和52年に土地区画整理事業に伴う第1次調査が実施され、奈良時代の掘立柱建物や古墳時代中期後半の前方後円墳（出合亀塚古墳）、円墳3基、方墳1基がみつかった。特に、段丘上は古墳が数多く存在し、平成19年度の第37次調査において11基の円墳を検出している。

今回の調査は、集落整備基盤事業（圃場整備事業）に伴うもので、工事により埋蔵文化財が影響を受ける範囲について、平成17年度より継続して実施している。尚、平成22年度に『出合遺跡第34・35・37・39・40・43・44次発掘調査報告書』を刊行しており、詳細については、こちらを参照されたい。

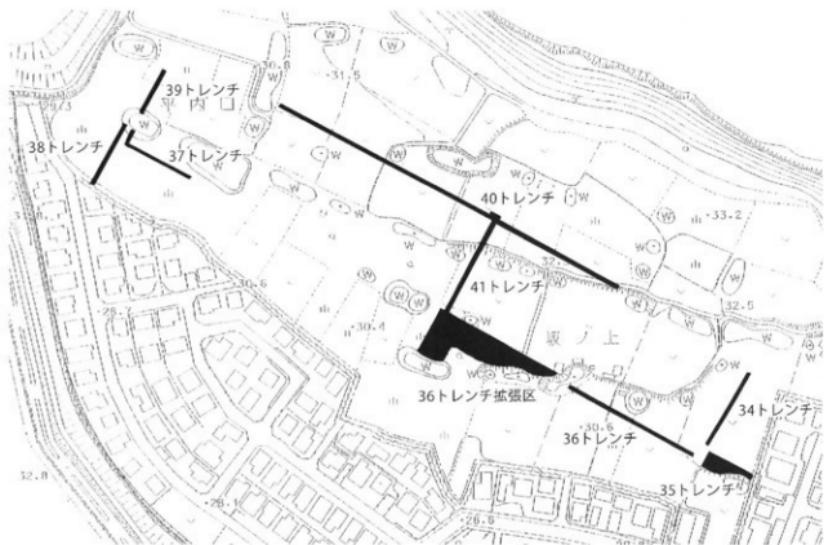


fig.225 調査地位位置図 5=1:2,500

2. 調査の概要 新設されるバイオラインと排水路及び造成により削平される部分について実施した。尚、トレンチの番号は、同事業の第34次調査で付した番号からの通し番号で、第34～41トレンチが対象となる。調査においては、円墳2基（1・4号墳）、方墳2基（2・3号墳）をはじめ、飛鳥時代～中世の掘立柱建物（SB01～16）などが検出された。

基本層序 全般的に耕作地造成時の削平が著しく、現代耕土の直下が、黄灰色砂質シルトの基盤層で、その上面で遺構が検出された。また、ごく一部の箇所において、遺物包含層（暗灰褐色砂質シルト）が遺存している。



fig.226 調査区平面図
円墳（1・4号墳）

1号墳は第36トレンチ拡張区、4号墳は第35トレンチにおいて検出した。いずれも墳丘、埋葬施設は削平されており、周溝のみが遺存する。検出面における周溝の規模は、1号墳が幅3~4m、深さ0.3~0.5m、4号墳が幅約2.3m、深さ約0.35mで、墳丘部分の直径は、1号墳が約14m、4号墳が約10mを測る。周溝の埋土より、古墳時代後期~平安時代後期の土器、瓦などが出土したが、古墳築造時期を示すものは確認できなかった。

方墳（2・3号墳）

2号墳は第36トレンチ拡張区、3号墳は第40トレンチにおいて検出した。いずれも墳丘、埋葬施設は削平されており、周溝のみが遺存する。検出面における周溝の規模は、2号



fig.227 36トレンチ拡張区・1号墳および2号墳（西から）



fig.228 40トレンチ中央部（東から）

墳が幅1.8～3.0m、深さ0.3～0.5m、3号墳が幅1.3～1.8m、深さ約0.15mで、墳丘部分は、2号墳が一辺8.0～8.5m、3号墳が一辺約8mを測る。周溝の埋土より、奈良時代～平安時代の土器片が出土したが、古墳築造時期を示すものは確認できなかった。また、2号墳の周溝内より、円筒埴輪片が数片出土しているが、本来埴丘に樹立していたにしては少量であり、2号墳に伴うものかどうかは不明である。

掘立柱建物 第34・36（拡張区）・40・41トレンチにおいて、計16棟検出した。調査区域の制約から、全体規模を把握できなかったものもあるが、SB03〔東西3間（6.8m）×南北5間（11.7m）〕からSB06〔東西2間（3.1m）×南北3間（3.3m）〕まで、さまざまな規模のものが検出された。建物の主軸方向、柱穴埋土からの出土遺物、柱穴の規模、間隔などの特徴から、SB03・04が中世、それ以外が飛鳥時代～奈良時代に属するものと考えられる。

3.まとめ

今回の調査においては、古墳（円墳・方墳）のほか、飛鳥時代～奈良時代の掘立柱建物、中世の掘立柱建物などを検出し、古墳群が营造された場所に、律令期において集落が形成される状況が確認できた。

古墳は方墳2基、円墳2基を検出したが、墳丘が削平されており、その詳細は不明であるが、周辺の過去の調査における類例からすると、規模等に大きな差異は無く、おそらく古墳時代後期に属するものと推察される。今回の調査区にて検出した古墳群は、從前より知られている出合古墳群と、平成19年度の調査において7基の円墳（古墳時代後期）が確認された堂の上古墳群との間に位置し、大きく見ると同じ段丘上に立地する一つの古墳群と考えられ、「出合古墳群坂ノ上文群」と呼称するのが妥当であろう。

掘立柱建物は16棟検出し、そのうち2棟は中世のものと考えられるが、残り14棟については、総柱のものと側柱のものがあり、例えは、床のある倉庫と床のない（土間）の住居といった用途の違いによって使い分けていた可能性が考えられる。今回の調査が限られた範囲であったため、検出した建物はいずれも2間×3間程度の小規模なもので、付属屋と推定され、主屋と考えられる大規模な建物は確認できなかった。仮に、主屋が存在するならば、この地域の有力者の邸宅の可能性が考えられる。



fig.229 1号墳・2号墳（北側上空から）

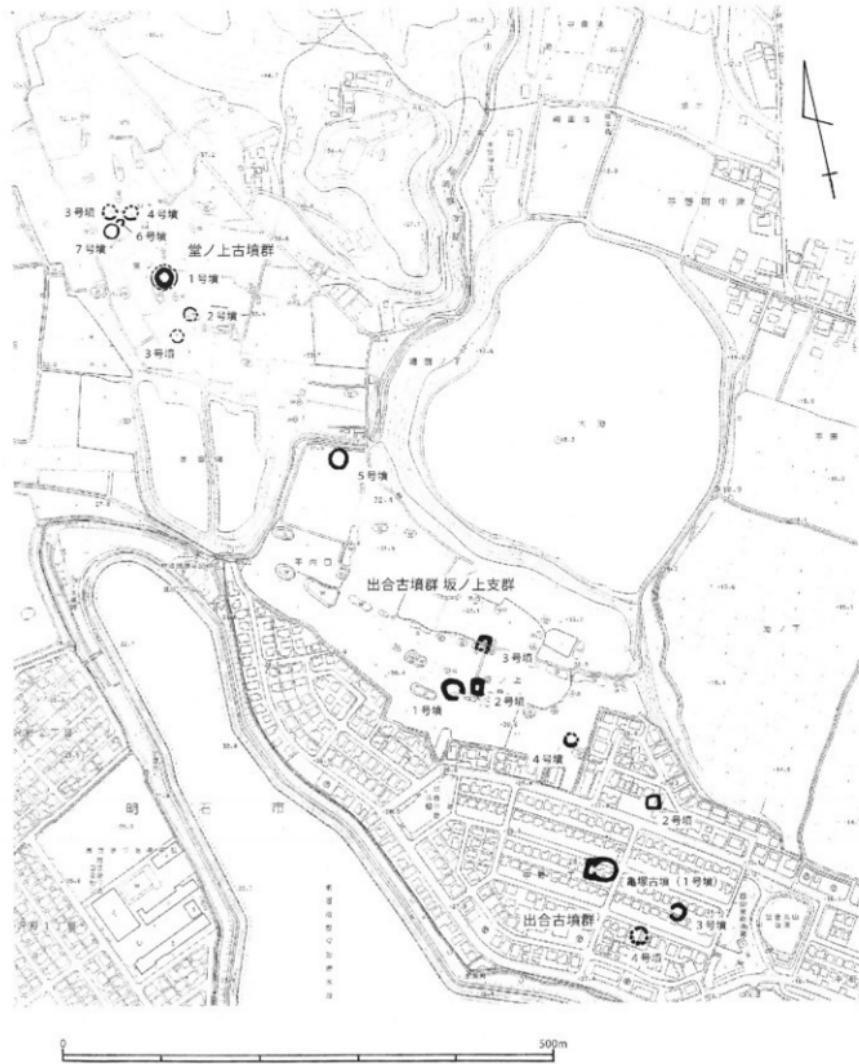


fig.230 出合遺跡発見の古墳の位置

39. 出合遺跡 第41次調査

1. はじめに

出合遺跡は明石川下流右岸の沖積地および段丘上に立地し、弥生時代集落、段丘上の古墳群、古代～中世集落といったさまざまな様相を持つ。

今回の調査は、宅地造成に伴うもので、敷地内において掘削工事が予定される箇所について実施した。尚、工事影響深度（現地表面-1.2m）までの調査となっている。

2. 調査の概要

便宜上、5箇所（Tr1～5）に区分して進めた。そして、工事影響深度内において、2面の遺構面が確認され、古墳時代～近世の遺構・遺物を検出した。

基本層序

現耕作土の下層に4～5層程度の水田土壌および表土層（2a層～6a層）が存在し、その上位から掘り込まれる溝が検出された（第1遺構面）。さらに、6b層の下層には、土壌化の進んだ7a層があり、その下層上面において、家畜の蹄跡が多数検出された（第2遺構面）。

第1遺構面

現耕作土下層の数層の耕作土層を切り込むかたちの溝3条（SD01～03）が検出された。検出された溝は、現況の畦畔にほぼ重なるものであり、土地区画が現在まで受け継がれていることを確認できた。中世あるいは近世段階の畦畔に沿う側溝であると推定できる。

第2遺構面

上記の7a層からは、古墳時代後期～中世の土器片が出土しているが、この下層上面で多数の牛の蹄跡が検出され、畜耕が行われていた状況を確認した。Tr4においては、柱穴状の遺構も検出されている（但し、調査深度の関係上、検出のみで掘削を行っていない）。

3.まとめ

今回の調査においては、主として、耕作に関わる遺構が確認され、古代より連続と耕作地として利用されていたことが確認できた。しかしながら、工事影響深度（現地表面-1.2m）までの調査であることから、下層において、中世以前の遺構面が存在する可能性高い。



fig.231 調査位置図 S=1:2,500



fig.232 調査区平面図・土層断面図

40. 出合遺跡 第42次調査

1. はじめに

西区玉津町・平野町に所在する出合遺跡は、昭和62年に第1次調査が実施されて以来、今回で42次となる。これまでの調査で、弥生時代～中世の集落遺跡であることが判明している。

同遺跡は、明石川の西岸に位置するが、支流である櫛谷川、伊川との合流点に近く、あらゆる点において恵まれた立地条件であることから、神戸市内でも屈指の遺跡が密集する地帯として知られている。周辺には、吉田南遺跡、玉津田中遺跡など、同地域における中核的集落遺跡とともに、弥生時代前期にまで集落形成の歴史が遡ることのできる、当該地域でも特に古い歴史をもつ遺跡のひとつである。

また、同地域は、現在でも農村集落としての景観を比較的良好な状態で残しているが、弥生時代に開始された水田の開発の名残が、中世、近世を経て、今日の農村の領域と重複して残存していることは、明石川流域における土地開発の歴史を時系列的に紐解く上で、興味深い事例でもある。

今回の調査（第42次調査）は、個人住宅建設を原因とするもので、2面の遺構面が確認され、弥生時代中期～中世の遺構・遺物が検出された。

2. 調査の概要

住宅建設時の掘削工事によって影響が及ぶ箇所において調査を行った。便宜上、調査区をⅠ～Ⅲ区に区分して進めた。

基本層序

時系列的理解としては、現在の地表面以下に、江戸時代耕作土→中世生活面→古墳時代前期遺構面（第1遺構面）→古墳時代前期よりさらに古い遺構面（第2遺構面）→弥生時代中期の湿地性堆積層の順となる。

第1遺構面

fig.235に示した遺構を検出した。検出した遺構のうち、SD101・102およびSK101は、竪穴建物の付帯施設の可能性がある。

SD101・102

幅0.56～0.70m、深さ0.32～0.33mを測り、

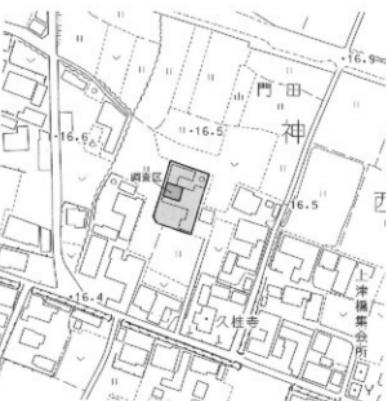


fig.233 調査地位置図 S=1:2,500



fig.234 第1遺構面 SD101周辺 (東から)

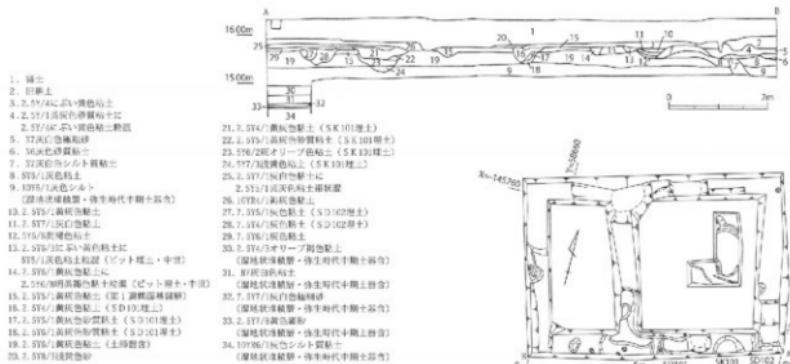


fig.235 調査区平面図（第1段構面）・土層断面図

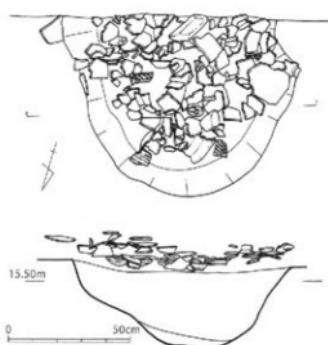


fig.236 SK101平面・断面図



fig.237 SK101 (北東から)

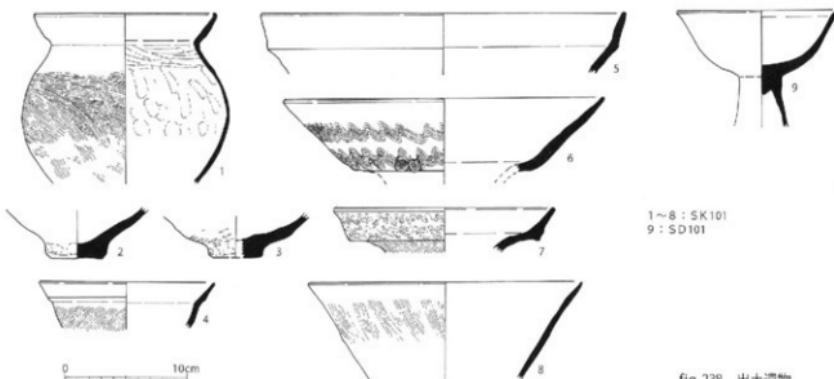


fig.238 出土遺物

埋土より古墳時代前期の土器片が出土した。

SK101 検出範囲で幅1.05×0.73m、深さ0.55mを測る。埋土より古墳時代前期の土器片が大量に出土した。

ピット 数箇所検出された。規模はまちまちで、径0.18～0.70m、深さ0.15～0.25mを測る。

第2遺構面 fig.239に示した遺構を検出した。検出した遺構のうち、SX201は竪穴建物の床面の可能性も考えられる。

SX201 南端に周壁溝のある溝状の落ち込みを有することから、竪穴建物の一部とも考えられるが、確証はない。埋土中に薄い炭層の堆積とともに、炭化した木材片なども確認された。

SD201 幅約0.20m、深さ約0.10mを測る。ほぼ直角に屈曲するが、性格等は不明である。

SP201・202

幅0.15～0.30m、深さ0.05～0.10m程度の小規模のピットである。建物の一部である可能性は低い。

第2遺構面下層

湿地状堆積層が、第2遺構面形成層より下層にて確認された。同層位より、弥生時代中期頃の土器片が出土した。

3.まとめ

今回の調査においては、調査範囲が限定されていたため、断片的な情報の収集にとどまった感はあるが、2面の遺構面の存在が確認でき、特に、古墳時代前期の遺構については、遺構の残存状態から、遺構密度の高い区域である可能性が高いことがわかるなど、一定の成果を得ることができた。

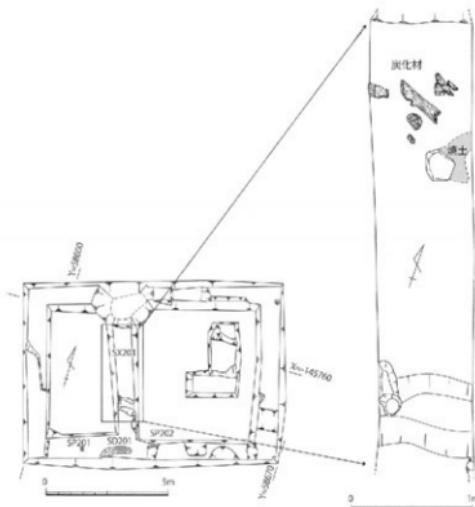


fig.239 調査区平面図（第2遺構面）・SX201平面図



fig.240 SX201 (東から)

41. 出合遺跡 第43次調査

1. はじめに

出合遺跡は、明石川中流域西岸の沖積地と段丘上に立地し、旧石器時代～鎌倉時代の複合遺跡である。

今回の調査は、圃場整備事業に伴うもので、弥生時代後期と古墳時代以降の遺構・遺物を検出した。尚、平成22年度に『出合遺跡34・35・37・39・40・43・44次調査発掘調査報告書』を刊行しており、詳細については参照されたい。

2. 調査の概要

今回の調査は、新設される排水路部分について実施した。同事業に伴う過去の調査箇所において付した通し番号から、第42トレンチと呼称し、便宜上、1～4区に細区分して調査を進めた。尚、同地区においては、工事影響深度までの調査となり、遺構面に達しなかった箇所もある。

1区

現代耕作土の直下が暗灰色粘質土（旧耕土）となり、少量の古墳時代～中世の土器片が含まれる。その下層は、褐色系の細砂～中砂の堆積が連続し、現地表面-0.9mで砂礫層を検出した。旧河道の埋没土と考えられる。なお、上面で遺構は検出されなかった。

2区

現代耕作土以下、灰褐色シルト質細砂（旧耕土）（第2層）、暗灰茶褐色シルト質極細砂（第3層）、暗茶灰色シルト質極細砂（第4層）、暗灰色シルト質極細砂（第5層）、暗灰色細砂（第6層）、暗灰色中砂（第7層）、灰色砂礫（第8層）の順に堆積がみられる。このうち第3層において、多量の弥生時代後期の土器と少量の古墳時代以降の須恵器がみとめられたが、下層において遺構は検出されなかった。また、工事影響深度が第5層以下に及ばないため、一部断ち割りトレンチを設定して下層の確認を行った。その結果、第5層、第6層においても比較的多くの弥生時代後期の土器が含まれ、流路状の遺構の堆積の可能性が考えられる。

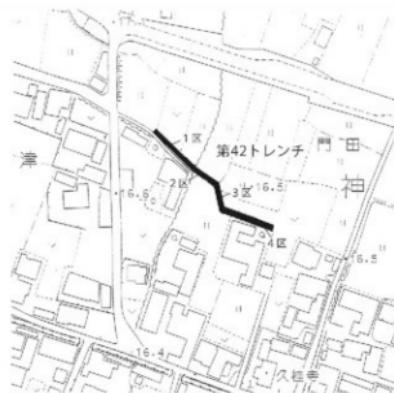


fig.241 調査位置図 S=1:2,500

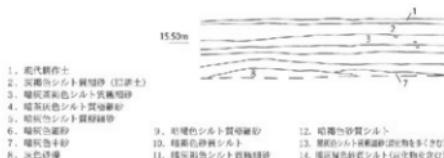


fig.242 2区北側壁面上土層断面図

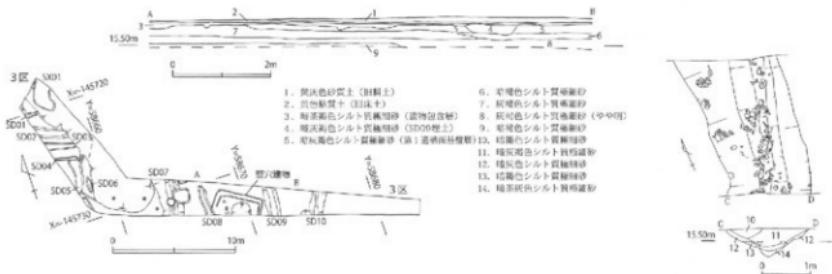


fig.243 3・4区平面図・土層断面図およびSD07平面・断面図

3・4区 3・4区はほぼ同一の層序を呈し、現代耕作土以下、黄灰色砂質土（旧耕土）、暗茶褐色シルト質極細砂（遺物包含層）、暗灰褐色シルト質極細砂上面（第1遺構面）において遺構を検出した。第1遺構面の調査終了後、下層確認のため、一部断ち割りトレーナーを設定して確認を行い、約0.4m下の暗褐色シルト質極細砂上面において第2遺構面を検出した。しかしながら、工事影響深度に到達しないため、層位の確認のみに留めた。

3区において溝6条（SD01～06）、ピット2基、落ち込み状遺構1基（SX01）、4区において竪穴建物1棟、溝4条（SD07～10）、土坑2基、ピット2基を検出した。

竪穴建物 一辺約4mの方形の竪穴建物と推定される。深さが約0.15mしか遺存しておらず、また、攪乱等により、炉跡や主柱穴なども不明である。壁面より0.3～0.4m内側に、幅約0.1mの周壁溝が廻る。埋土中より、弥生時代後期と考えられる甕が出土した。

溝 SD01～04は東西方向、SD05～10は南北方向に走る。規模はさまざま、幅0.3～1.7m、深さ0.05～0.6mを測る。埋土より須恵器、土師器あるいは弥生時代後期の土器片が出土したが、その中でも、SD07・10からの出土数が多く、SD07より弥生時代後期の甕、甕などの完形に近いものが、また、SD10より、弥生時代後期の壺、甕、高杯の完形に近いものが、それぞれ確認されている。

3.まとめ 今回の調査においては、2区で弥生時代後期の土器を含む流路を、また3・4区で弥生時代後期の竪穴建物や溝、古墳時代以降の溝などを検出した。弥生時代後期においては、3・4区が1・2区に比べてやや微高地であったと考えられ、そのような箇所において遺構が集中することが明らかとなった。また、出土遺物は、遺構のみならず、遺物包含層からも多くみられ、大規模集落の存在を示唆するものである。



fig.244 4区（西から）

42. 垂水・日向遺跡 第34次調査〔遺物整理作業〕

1. はじめに

垂水・日向遺跡は、福田川西岸の沖積地に位置し、過去の調査において、縄文時代中期～中世の遺構・遺物が検出されており、また、縄文時代早期～前期の相当層より、人間の歩行痕跡（足跡）も確認されており、永きにわたって、連綿と人々の生活が営まれていたことが窺える。

第34次調査は、共同住宅建設に伴うもので、平安時代～鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。尚、現地調査は平成19年度に完了しており、今年度において、遺物整理作業を実施した。尚、現地調査成果の詳細については、「平成19年度神戸市埋蔵文化財年報」に掲載されている。合わせて参照されたい。

2. 作業の概要

図面・写真等の記録類および出土遺物について整理作業を実施した。主として、SK01・SD03から出土遺物の整理（復元・実測・写真撮影など）を実施し、SD03出土の木製品については樹種同定分析も行った。



fig.245 調査位置図 S=1:2,500

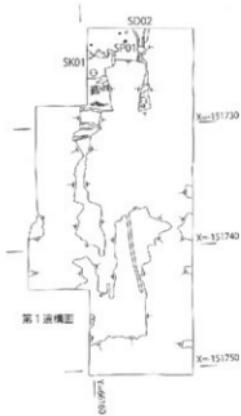


fig.246 調査区平面図

3. 作業の成果

出土遺物の多くは SD03 のもので、その大半が 12 世紀後半～13 世紀初頭に属する土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器（白磁・青磁）の塊（碗）・皿類であるが、移動式竈、墨書き土器、飯蛸壺なども含まれており、一括資料として良好なものである。

一方、木製品の樹種同定の結果、素材にマツ属複雜齊東亜属を使用しているものが多く確認された。同遺跡の第 1・3 次調査の木材化石分析において、弥生時代前期に照葉樹林が優先していた森林環境が、古墳時代後期にはアカマツ主体へと変化したことが確認されており、平安時代～鎌倉時代においても、アカマツが卓越し、素材に利用されていた可能性が窺える。

4. SD03

出土遺物

SD03 は調査区北側で検出した、幅約 2.5m、深さ約 0.8m を測る東西方向の溝で、東半に溝に直交する陸橋状の地山を削りだした土手が存在することなどから、集落内の区画溝として機能していたものと考えられる。また、同時期の遺構は溝より北側に存在し、集落の南限となる可能性がある。

出土遺物は、完形品を含む須恵器塊・瓦器塊・白磁碗や土師器皿・瓦器皿などで、多くは北側（集落）から投棄されたか、あるいは流れ込んだ状態で検出された。下層からは木製品も出土している。また、特徴ある遺物として、墨書き土器が出土している。

これらの遺物について、実測を行った個体を中心として、種別ごとに検討を行い、SD03 全体の遺物組成についても言及してみたい。

①土師器

土師器には、皿（小皿・大皿）・壺・鍋・釜・竈がある。

小皿（1～17）は、口径 8.0～9.8cm、器高 1.3～1.9cm で、体部～底部はユビオサエ、口縁部はヨコナデ調整を施す。底部に糸切り痕がみられる個体（11～17）もある。須恵器の焼成不良と見受けられる個体も含まれる。

大皿（18～27）は、口径 13.8～16.8cm、器高 2.3～3.0cm で、平らな底から内湾気味の口縁部が短く立ち上がる。器表面の摩滅が著しく、調整が不明瞭な個体が多い。

壺（28～37）は、口径 13.0～15.2cm、器高 2.85～3.95cm で、大皿よりも若干深い器形をなし、人き目の平らな底部と直線的に伸びる口縁部をもつ。底部には糸切り痕がみられる。焼成が良好で比較的堅密な個体も存在する。

煮炊具は、鍋（41）と鉢釜（40）が出土している。鉢釜は播磨的な要素ではなく、河内からの搬入か影響の下に製作されたものであろう。調整は器表面の剥離が著しく不明瞭だが、胎土に砂粒を多く含むことから A 型式で 12 世紀後半にあたると思われる。（註 1）

また、未実測であるが、SD03 の中央～東セクション上層から、京都における土釜 C の口縁部が出土している。12 世紀前半のものと思われる。（註 2）

2 個体の移動式竈（38・39）が出土している。平安時代～鎌倉時代の事例としては、垂水・日向遺跡第 1 次調査 3～3 区 SP02（註 3）、大開遺跡 SE434（註 4）、祇園遺跡第 2 次調査、芦屋市寺田遺跡第 167 地点 1 区（註 5）などがあげられる。

②須恵器

須恵器には、塊・壺・捏鉢・甕・壺の器種が存在する。

皿（42～45）は、口径 8.0～8.8cm、器高 7.7～8.7cm である。糸切りの底部から、口縁部が短く直線的に立ち上がる。

塊（50～90）は、口径 15.4～19.4cm、器高 4.1～6.0cm で、いくつかのタイプに分類

できる。器壁の薄い体部から口縁部が肥厚するもの、比較的厚い器壁のもの、器高が浅く扁平なもの、口径が約19cmと大型のものなどがある。

捏鉢（46～49）は、口径が26.6～29.0cm、器高は9.1～11.2cmである。体部は直線的で外反はない。口縁端部は上下に若干拡張する。

時期は、塊と捏鉢の特徴から、森田編年の第Ⅱ期第2段階（12世紀末葉～13世紀初頭）に位置づけられよう。（註6）

③瓦器

瓦器は、皿と塊が出土している。

皿（104～108）は、口径8.6～9.9cm、器高1.8～2.1cmを測る。底部と体部の境が不明瞭で口縁部が斜めに立ち上がるタイプと、口縁部がヨコナデにより薄く仕上がるタイプがある。両タイプとも口縁部をヨコナデで調整し、内面には平行線のヘラミガキによる暗文が見られるが、きわめて細いものもある。口縁部内面にも圓錐状のヘラミガキによる暗文がわずかに観察できる。いずれも炭素の吸着は不良である。

塊（109～121）は、口径14.2cm～15.3cm、器高4.8cm～5.6cmである。粘土紐の接合痕が観察できる資料もある。外面は、ヘラミガキによる暗文ではなく指頭圧痕が顕著で、口縁部に1段あるいは2段のヨコナデ調整を施す。内面は体部に粗い圓錐状の暗文、見込みに斜格子および平行線（太いものと細いもの2種）の暗文が入る。高台は断面三角形である。以上の特徴から、これらの塊は和泉型と考えられる。（註7）

ただし、1点のみ和泉型以外の個体（121）も存在する。小破片で全体の器形等は不明であるが、口縁部内面に沈線を有し、内面のヘラミガキは若干間隔が開くが丁寧に施されている。器壁は薄めで、外面のヘラミガキは疎らである。楠葉型の可能性が高い。

時期は、外面にヘラミガキが存在しないことから13世紀前半、あるいは見込みの格子状ヘラミガキの存在を重視すれば尾上編年（註8）のⅡ～3期（12世紀末）に該当するといえよう。楠葉型の瓦器塊に関しては、内面のヘラミガキの特徴からは橋本編年（註9）のⅡ～2期、外面のミガキの特徴からはⅡ～3期にあたり、時期は12世紀中葉から後半が与えられる。なお、土師器・須恵器・瓦器の供膳形態（皿・塊・坏）で復元値も含めて口径と器高がわかる資料に限って、口径・器高の関係グラフを示す。

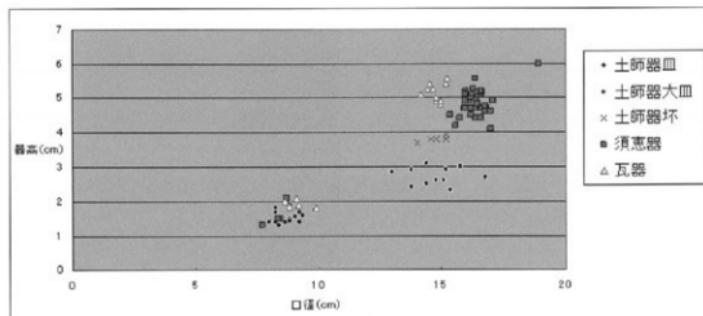


fig.247 土師器・須恵器・瓦器の径高分布

④輸入陶磁器 輸入陶磁器は、皿と碗、壺が出土している。

白磁皿（98）は、口径10.0cm、器高2.5cm、平底で体部は内湾気味に立ち上がり、見込みには沈線がめぐる。

碗は、白磁（100～102）と青磁（103）がある。口径14.8～16.35cm、器高6.4～7.0cmで、見込みに沈線が巡るものと、釉を輪状に剥いだものが見られる。

壺（95～97）は、四耳壺と考えられるが、小片に割れており復元できなかった。明らかに厚さの異なる破片があるため、もう1個体存在する可能性がある。

⑤墨書き土器 6個体の墨書き土器（74～77・101・102）が出土した。

墨書きはそれぞれ、須恵器塊体部外面に「上」の1個体、須恵器塊底部に「十」、「〇」を3箇所、花押？の3個体、白磁碗高台内に「十」、花押？の2個体である。

須恵器塊と磁器碗の底部に記された花押？は、同じものと思われるが、残念ながら個人名等を特定するに至っていない。

重水・日向遺跡では、第1次調査においてもA地区5～3区の掘立柱建物SB08を構成する柱穴SP14から墨書き土器が出土している。須恵器塊外面に文字か記号かを記されたもので、平安時代末期から鎌倉時代前半の時期が考えられている。（註10）

⑥出土遺物の組成について

以上、SD03出土遺物について種別ごとにみてきたが、これらの遺物は一括性がうかがえるため、土器の種類別組成や器種別組成のデータから、他の事例と比較することによって、この遺構がもつ意義を類推してみたい。

同遺跡内で比較する場合は遺構の特徴が、同時期の他の遺跡と比較する場合はその遺跡（集落）の特徴がそれぞれ認識できるといった判断からである。

なお、遺構自体は調査区外にまだ続くこと、調査区内においても攪乱により削平されて箇所を有することを断っておきたい。このため、完結した遺構からの全出土遺物を対象とすることはできず、計量した数値も絶対ではないが、一括性の高い出土状況であることから、ある程度の傾向を把握できるものと思われる。

（1）方法 組成をみるにあたって、遺物の計量の方法にはいくつかあるが、今回は口縁部計測法と破片数計算法を併用した。口縁部計測法は、5mm間隔で描いた同心円を15°間隔に放射状に分割し、計測する個体を該当する口径の同心円上に置き、残存率を測る。その総数を24で除し、個体数を割り出す方法である。破片数計算法は、計測に用いた破片総数から比率を求めるものである。（註11）

種類を須恵器・土師器・瓦器・輸入陶磁器に分類、器種を塊（碗）・皿・鉢・甕・壺・煮炊具に分類した。部位は口縁部・体部・底部に分けた。ただし、計量は接合前の破片であるため、口径や器種の誤認が生じている場合がある。また、明らかな混入品や土製品、甕などは計量から省いている。

（2）組成 計量の結果、総破片数は2,891点を数えた。種類別の比率は、土師器が50.3%、須恵器が39.2%、瓦器が8.5%、輸入陶磁器が2%となり、土師器が半数を占める。

尚、供膳形態に限定した場合の比率は、土師器皿が5.7%、土師器壺が42.6%、須恵器壺が39.5%、須恵器皿が0.6%、瓦器壺が9%、瓦器皿が0.9%、磁器碗が1.6%となる。

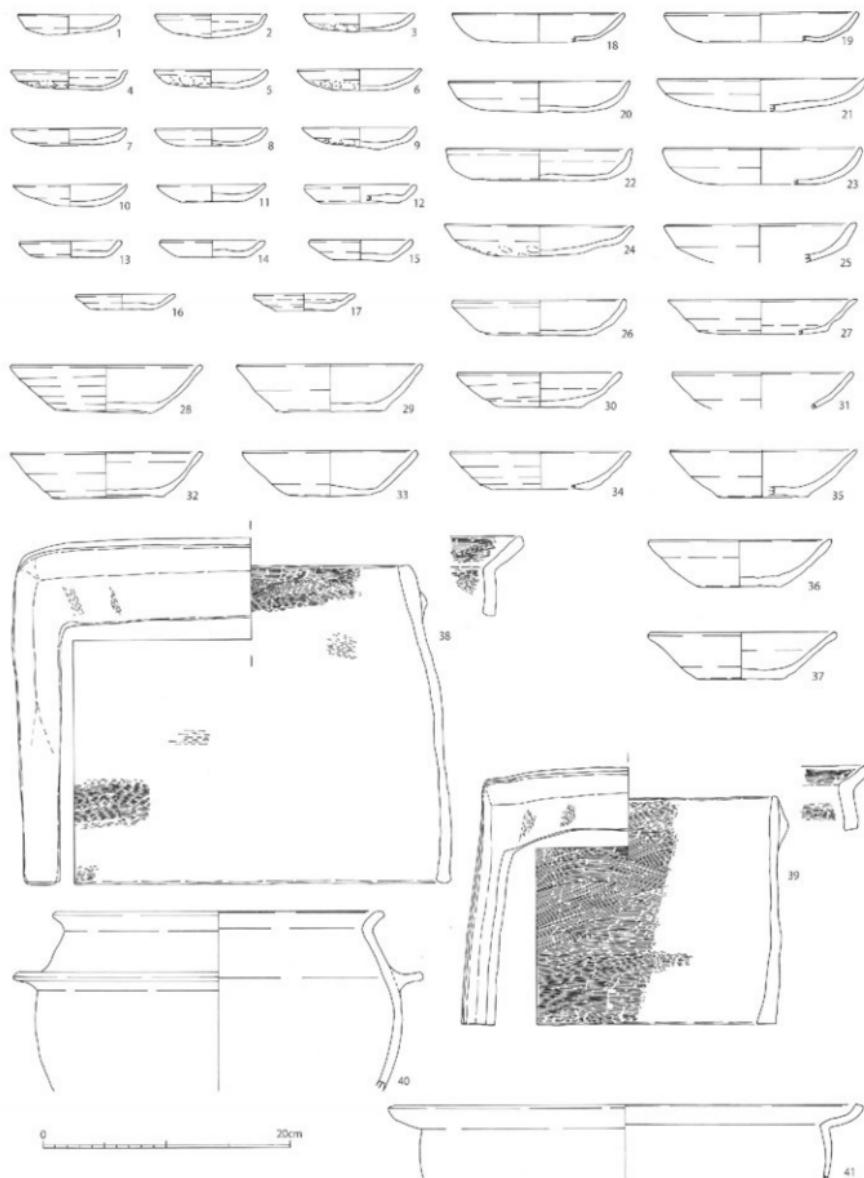


fig.248 SD03出土遺物（土師器）

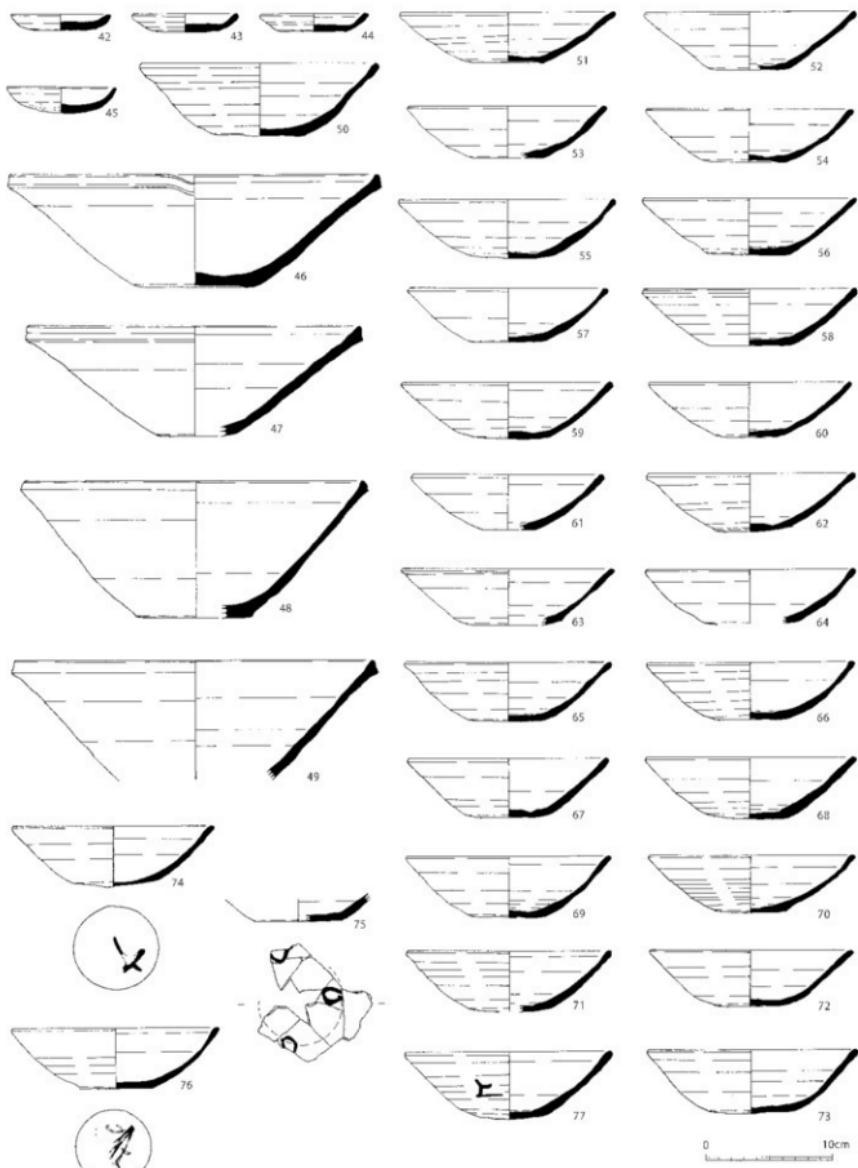
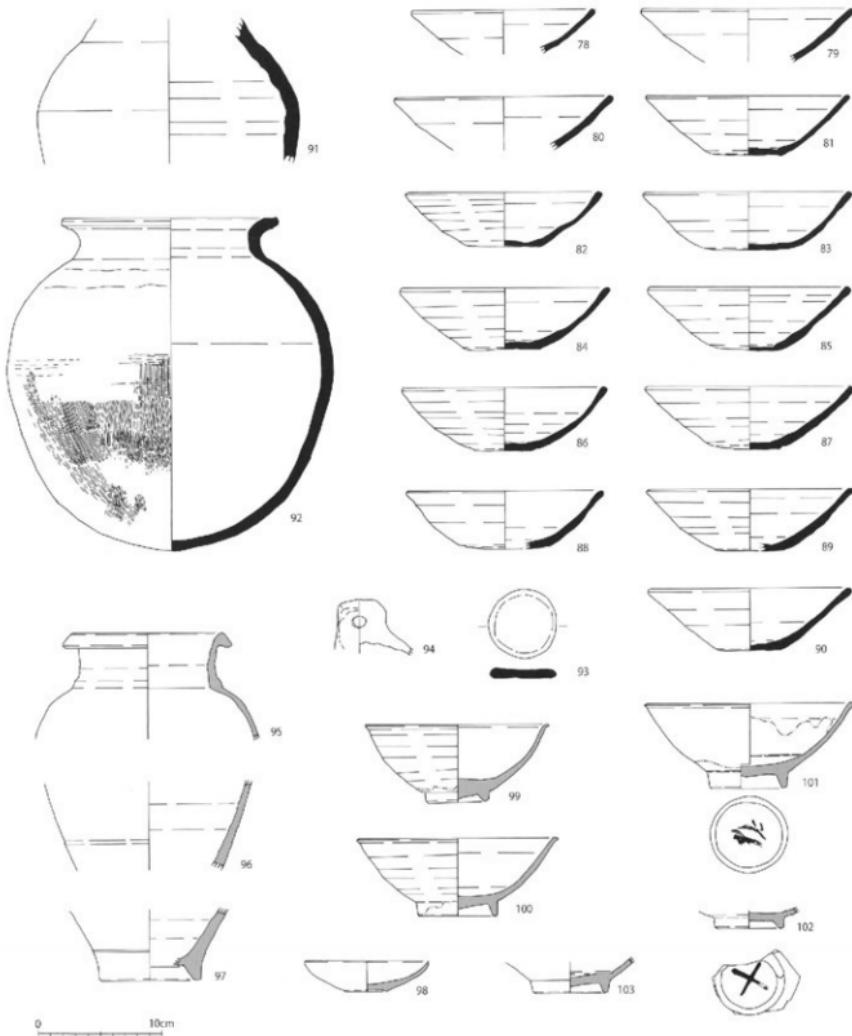
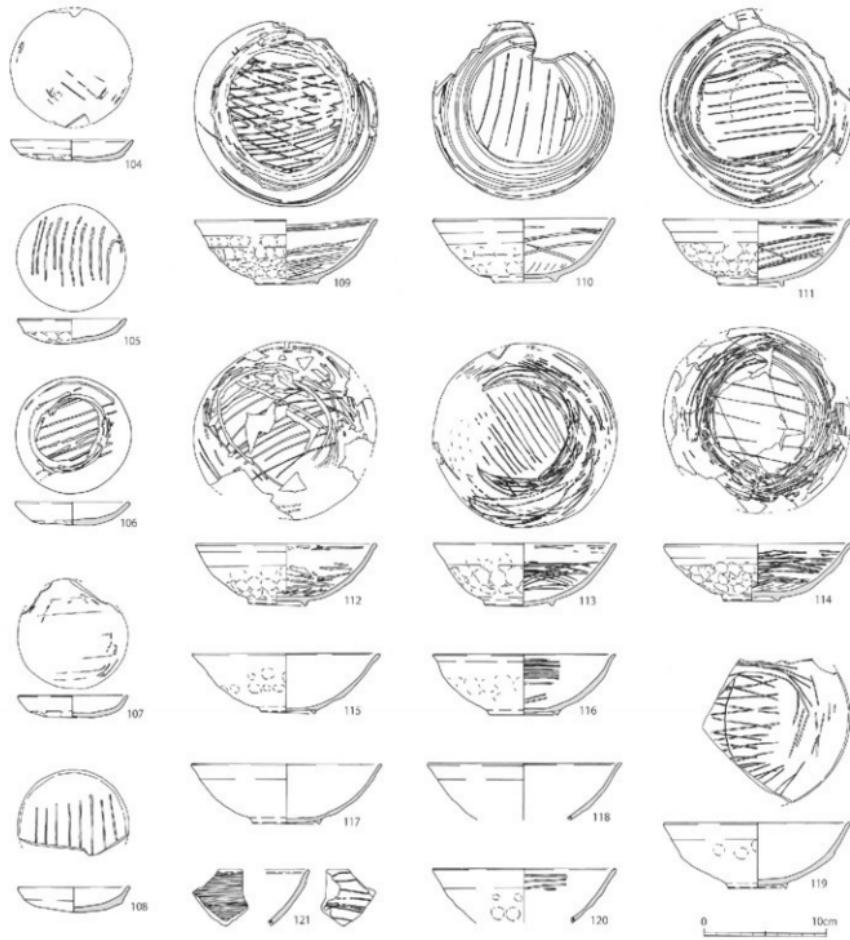


fig.249 SD03出土遺物(須惠器)



78～92：須田窯
93：須志窯工製品
95～103：新入陶器
94：土加賀土器

74～77 (fig.249) × 101・102：須志土器



- 1 ~ 15 : 土质器小口
 16 ~ 27 : 土质器大口
 28 ~ 37 : 土质器杯
 38 ~ 39 : 土质器侈口式瓶
 40 : 土质器蹲釜
 41 : 土质器鼎
 42 ~ 45 : 土质器鼎
 46 ~ 49 : 泥质器裡
 50 ~ 60 : 泥质器
 91 : 泥质器
 92 : 泥质器
 93 : 泥质器
 94 : 泥质器
 95 ~ 97 : 泥质器
 98 : 白质器
 99 ~ 102 : 白质器
 103 : 青质器
 104 ~ 108 : 瓦器
 109 ~ 121 : 瓦器
 120 : 瓦器
 121 : 瓦器
 122 : 瓦器
 123 : 瓦器

fig.251 SD03出土遺物(瓦器)

表14 種類・器種別破片数

	壺・塊(碗)	皿	鉢	甕	煮炊具	壺	計
土師器	141	1056	0	0	258	0	1455
須恵器	980	16	85	48	0	4	1133
瓦器	222	23	0	0	1	0	246
陶磁器	40	2	0	0	0	15	57
合計	1383	1097	85	48	259	19	2891

表15 種類・器種別口縁部数 () 内は復元個体数

	壺・塊(碗)	皿	鉢	甕	煮炊具	壺	計
土師器	59(5.0)	183(23.08)			18(1.92)		260
須恵器	375(33.2)	11(3.38)	31(2.42)	1(0.04)		2(0.17)	420
瓦器	68(6.92)	23(5.21)					91
陶磁器	23(2.08)					3(0.17)	26
計	525	217	31	9	18	5	797(83.59)

口縁部破片数は797点を数え、その破片数での資料からは、上師器が32.6%、須恵器が52.7%、瓦器が11.4%、輸入陶磁器が3.3%と、須恵器が半数を占めるような結果となる。

残存率の数字までは煩雑になるので示さないが、24で除して得られた復元個体数でみると、土師器壺が6%、土師器皿が27.6%、須恵器塊が39.7%、須恵器皿が4%、瓦器塊が8.3%、瓦器皿が6.2%、輸入陶磁器碗が2.5%、貯蔵具・煮炊具で5.6%となる。

総破片数では土師器壺・皿で41.4%、上師器皿に限っても36.5%と多いが、これを個体数に置き換えると約33%と下がり、須恵器皿・瓦器皿が増える。これは、土師器壺・皿が小破片になりやすいということを意味しているようである。また、計測で得られた個体数に比べ、実測を行った個体数と比較すると、やはり計測での個体数は絶対量より少ないことがわかる。

以上のような結果がえられたが、これは計量して組成をみるという視点から導かれた遺物が持つ様々な情報のひとつに過ぎない。たとえ比率がごく僅かであっても、ある遺物が存在するという事実に注視しなければならない場合もある。

(3) 他の事例

以上の結果を受けて、第34次調査地の土器組成における特徴を見るため、他の事例を挙げて比較検討を行いたい。(fig. 252参照)

もちろん、各資料についてより正確を帰するのであれば、計測方法や視点も統一すべきであろうが、遺物量・遺物の状態、遺構の性格などにより、その時点での適切な分析がなされていると思われるため、誤差の範囲と認識したい。

A. 垂水・日向第1次SK04(註12)

幸いにも、垂水・日向遺跡では、第1次調査のSK02およびSK04で口縁部破片数計算

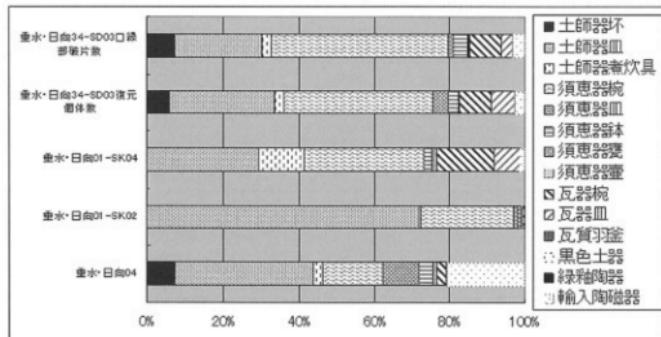


fig.252 垂水・日向遺跡内の組成比較

法により組成分析が試みられている。SK04はB地区南半で検出、約半分は調査区外になる。土師器・須恵器・瓦器・白磁・瓦が出土しており、13世紀前半頃と推定されている。

口縁部破片数での比率は、土師器皿が29.3%、須恵器壺が32.0%、須恵器皿が0%、瓦器壺が15.3%、瓦器皿が6.7%、白磁碗が1.3%、須恵器鉢・壺が3.3%、土師器鍋が12%となる。

SD03資料と比較すると、須恵器の比率が低く、瓦器の比率が高いことがわかる。

B. 垂水・日向遺跡第1次 SK02 (註13)

SK02は東半が削平されているが、12世紀初頭の須恵器・土師器等が出土している。

口縁部破片数での比率は、土師器皿が72%、須恵器壺が25%、須恵器皿が1%、瓦器壺が0.5%、土師器鍋が0.5%、須恵器鉢・壺が1%となる。時期の異なる第34次調査のSD03や第1次調査のSK04と比較すると、明らかに土師器の割合が高く、瓦器がほとんど含まれていないことが特徴としてあげられる。

C. 垂水・日向遺跡第4次 (註14)

11世紀末～12世紀前半の建物群が検出されている。具体的な数値提示はないが、壺に関しては須恵器が圧倒的に多く、小皿については手づくねの土師器小皿が半数以上をしめると述べられている。また、第1次調査との差については、「各地点の遺構の性格、時期差などの要因がかかわってくるもの」とされている。実測・報告段階で取捨選択がされていると思われるが、参考程度に実測図をもとに個体数を計量し比率を求めた。

特徴としては、瓦器がほとんどみられず、輸入陶磁器が多い点が上げられる。

以上の事例から、垂水・日向遺跡においては、12世紀前半と12世紀末以降では、土器組成に変化があることが判明した。特徴的なのは瓦器で、12世紀前半まではほとんど見られないが、12世紀末以降に比率を高める。第1次 SK04と第34次 SD03との比較では、須恵器と瓦器の比率に若干違いがあるが、傾向は類似しているといえよう。それぞれ土坑と溝と形態は異なるものの、組成の比率的には遺構の違いによる大きな差は看取できない。

⑦まとめ

今回の整理作業の結果、SD03出土遺物は、12世紀後半～13世紀初頭の土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器などの塊（碗）・皿を中心とするもので、一括資料として良好なものであることが判明した。遺物の組成を比較検討することでは、遺構に関する情報の一部を得ることができた。また、6個体の墨書き器の存在は、集落や遺構の性格、位置づけにおいて重要な資料となった。今回の発掘調査では、建物など集落の中心となる遺構は検出されなかったが、これらの遺物の出土状況からは、ごく近接地に建物等が存在することを想定できる。

時代的には平氏政権から鎌倉幕府への変換期にあたり、所属する時期によっては遺跡の持つ意味合いも大きく異なる。これまでの調査結果と今後の発掘調査で得られる資料をもとに、文献資料も取り入れながら垂水・日向遺跡を検討しなければならない。また、周辺の同時期の遺跡と比較検討することも必要であろう。今回は資料の提示にどもったため、触れることができなかつた部分も含めて、今後の課題としておきたい。

註

- 1 森島康雄1990『中河内の羽釜』『中近世土器の基礎研究IV』
- 2 鶴柄俊夫1997中世食器の地域性6畿内周辺歴民博研究報告第71集
- 3 神戸市教育委員会1992『神戸市垂水区垂水・日向遺跡 第1, 3, 4次調査（日向地区・陸ノ町地区）』
- 4 村尾政人・白谷朋世1998『大開遺跡発掘調査報告書 福原京併行期の遺構と遺物』大開遺跡調査団・株式会社埋文
- 5 芦屋市・芦屋市教育委員会2005『寺田遺跡第150～153, 157～160, 166～168地点』
- 6 森田稔1995「8. 中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 7 高槻市文化財調査報告書第13冊上牧遺跡発掘調査報告書1980
尾上実・森島康雄・近江俊秀1990「6. 瓦器碗」『概説 中世の上器・陶磁器』中世土器研究会
- 8 尾上実1983南河内の瓦器碗「藤澤一夫先生古稀記念占文化論叢」
- 9 註7と同じ
- 10 註3と同じ
- 11 宇野隆夫「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告第40集』
同論文中に、以下の指摘がなされている。口縁部計測法の欠点は、小破片である場合の数値が不安定になりやすいこと、体部・底部の破片が無視されるため計量した絶対量が個体識別法による場合より少なくなること。前者の欠点は、同タイプの小破片を並べてまとめて記録することである程度回避することができる。
- 12 註3と同じ
- 13 註3と同じ
- 14 註3と同じ

III. 平成20年度の保存科学調査・作業の概要

平成20年度に神戸市教育委員会で実施した保存科学業務について、概要を以下に記す。

遺構の保存科学

土層転写

埋蔵文化財の発掘調査において、土壤の堆積状況を観察することは重要な調査である。これを記録する手法としては通常、土層断面の図化や写真撮影など、記録保存が主流となるが、土層そのものを持ち帰る手法として土層転写法を用いる。平成20年度は雲井遺跡第28次調査において縄文時代早期の土石流を検出しており、これを主眼に置き、古代、中世から太平洋戦争空襲時の火災層、そして現代の地表面に至る土層断面転写を実施した。対象となる土層は粗い砂を中心となる。転写には変性ポリウレタン系合成樹脂（トマックNS-10）を用いた。工程は、対象となる壁面を平滑化した上で樹脂塗布とバックアップのためのガーゼの貼り込みを2回繰り返した。硬化まで一昼夜待ち、剥がし取った。その後、余分な土砂を洗い流した上で合板パネルに貼り付けた。貼り付けには2液式のエポキシ系合成樹脂（アラルダイトAER2400+ハードナーHY837）を用いた。貼り付け後、表面にアクリル系合成樹脂（サンコールSK-50）を塗布した。これは土砂の剥落止めと、色調の調整の効果を狙ったものである。完成したパネルは土層の再観察や展示に用いている。



fig.253 土層転写作業



fig.254 転写作業完了後状況

遺物の保存科学

赤色顔料の観察

古代の器物を赤く彩る際に用いられた赤色顔料には、朱（辰砂： HgS ）・ベンガラ（酸化第二鉄： Fe_2O_3 ）・丹（酸化鉛： Pb_3O_4 ）などがあり、これらが考古遺物に残存している例がしばしば見られる。平成20年度の調査において出土した遺物の中にも赤色顔料が確認できるものが存在したため、これらについて調査を行なった。

まずは肉眼観察～ルーペ～実体顕微鏡により、顔料付着の有無について調査を実施した。次いで任意の部位から採取した微量のサンプルをガムクロラールで固定したプレパラートを作成した。これを金属顕微鏡を用いて100～400倍まで拡大し、顔料粒子の色調、形状を観察した。最後にはサンプリングした資料について走査型電子顕微鏡（SEM）によって5,000倍程度まで拡大し、個々の粒子形状について観察を行なっている。



fig.255 調査対象資料S-1、2、4



fig.256 同左



fig.257 S-1-1 彩料付着状況 (60倍)

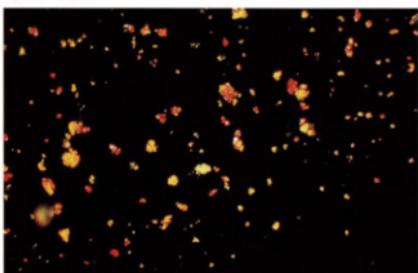


fig.258 S-1-1 落射光 (125倍)

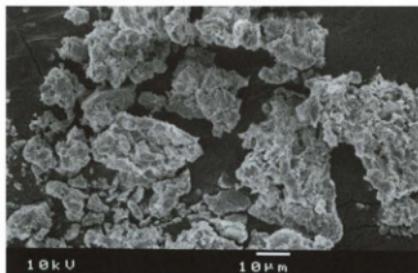


fig.259 S-1-1 SEM反射電子像 (700倍)

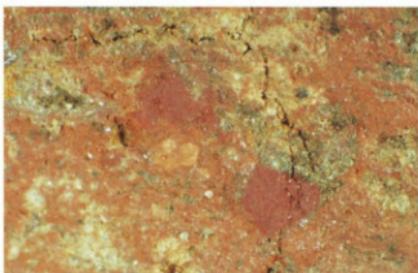


fig.260 S-2-2 彩料付着状況 (25倍)

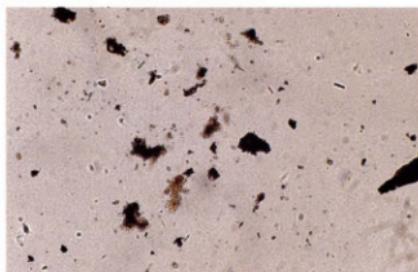


fig.261 S-2-2透光 (125倍)

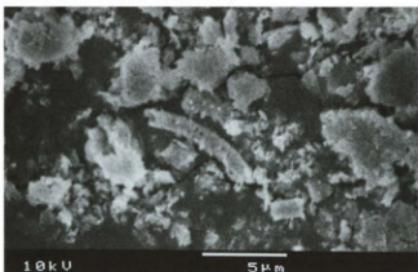


fig.262 S-2-2 SEM反射電子像 (3,500倍)



fig.263 S-3 土師器小型広口壺

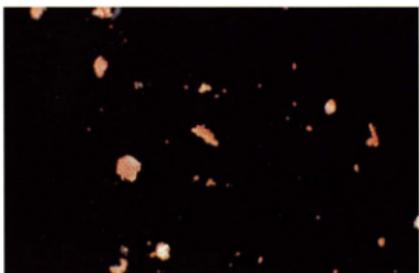


fig.264 S-3-4 落射光 (63倍)

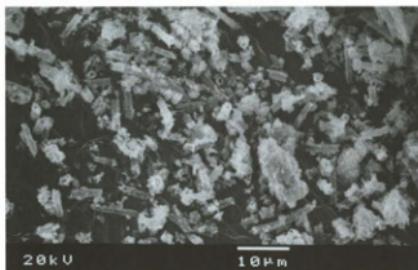


fig.265 S-3-4 SEM 反射電子像 (1,050倍)

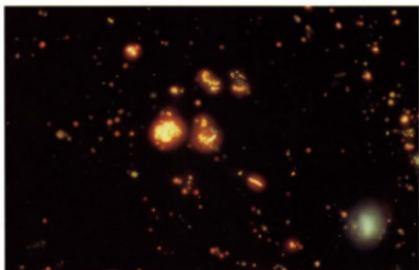


fig.266 S-4-2 落射光 (125倍)

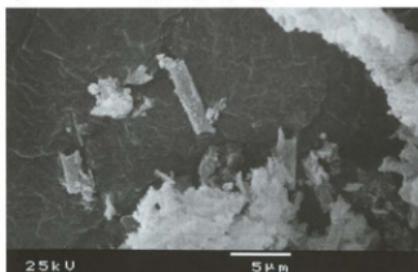


fig.267 S-4-2 SEM 反射電子像 (2,500倍)



fig.268 S-5 土師器壺

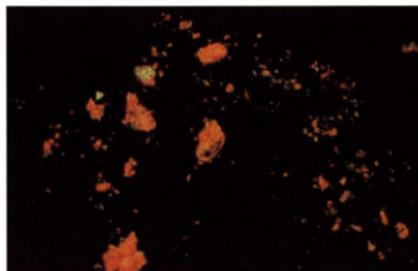


fig.269 S-5-1 落射光 (125倍)

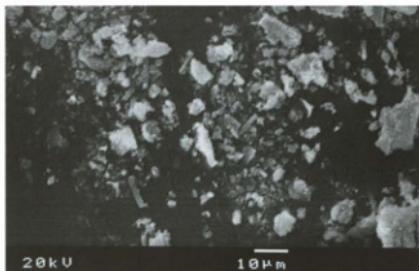


fig.270 S-5-1 SEM 反射電子像 (700倍)

本来、顔料の分析調査では蛍光X線分析装置・X線回折分析装置などを用い、素材元素から化合物の分子構造までを分析しクロスチェックするが、今回はこれら理化学分析機器を用いない肉眼と拡大観察のみでの調査であるため、顔料の色調や粒子の形状、大きさについての観察結果にもとづき所見を記すこととする。

雲井遺跡第28次 雲井遺跡は縄文時代早期から鎌倉時代にかけての複合遺跡である。そのうち縄文時代後期（北白川上層式3期）の耳栓（S-1）、弥生時代中期（畿内第IV様式期）の不明土製品（S-2）と小型広口壺（S-3）、古墳時代前期の二重口縁壺（S-4）、古墳時代の短頸壺（S-5）について、肉眼およびルーペで赤色顔料らしき付着物を確認した。なお、色調に黒化の状況が認められなかったため、鉛丹の可能性は少ないと推測した。

耳栓（S-1:直徑3.2cm）は全面に赤彩されていたようで、平滑な表面には残存しないが、傷などの凹部に刷り込まれたように残る（fig. 257）。肉眼観察での色はマンセル方式（以下同様）による赤7.5YR4/8を呈する。fig. 258は表面より採取した赤色顔料の顕微鏡写真である。淘汰の良い、径およそ5μm以下の粒子が存在する。色調には不透明の淡橙色を呈するものと、透過性のルビー色を呈するものがあり、前者はベンガラ、後者は水銀朱であると考えられる。ベンガラ粒子と考えられるものは、SEM画像により板状が呈することが観察された（fig. 259）。裏面でサンプリングした資料においても同様の結果が得られ、板状粒子ベンガラと水銀朱が併用されていたことが判明した。

不明土製品（S-2）は匙状を呈するもので、全面に赤彩が施されている。彩色の状況は、表面に刷毛状工具でなでつけられたような一定方向の条痕が見られ、部分的に塗彩層は厚さを持っている（fig. 260）。内眼観察での色は赤色10R4/8である。顕微鏡観察（fig. 261）では微細な粒子にまじって、細長い粒子を確認した。さらにSEM画像（fig. 262）で確認したところ、中空円筒状の所謂「パイプ状ベンガラ」が確認できた。掲載写真的ものは直径1μm、長さ約7μmを測る。周囲には径5μm内外の板状粒子が散在しており、2種類のベンガラを混和して使用していたようである。

小型広口壺（S-3:fig. 263）は内外面ともに赤彩が施されるが、頸部くびれ部分には幅3.5mm程度で、全周のおよそ230°にわたる無彩色帶がある。10倍ルーペで拡大観察すると、元々あった赤彩が擦り消されたような状況が見て取れ、紐などをかけて使用していた可能性がある。色は赤色10R4/6を呈する。器外面の4箇所より採取したサンプルの顕微鏡観察では、いずれにおいてもパイプ状ベンガラの粒子が観察された（fig. 264）。SEMでの観察（fig. 265）においては、パイプ状ベンガラが密度濃く観察され、同時に板状粒子が存在した。パイプ状ベンガラ粒子は直径1～1.5μm、長さは最大8μm程度、板状粒子は径2μm程度を測る。

古墳時代前期の土師器二重口縁壺（S-4:fig. 268）は口縁部のみの破片であるが、内外全面に赤彩が見られる。顔料の残存状況が良好な部位の色調は、赤10R5/6である。顕微鏡観察（fig. 266）では、内外面ともにパイプ状ベンガラの存在が確認できた。SEMによる観察（fig. 267）では、最大のもので直徑1.5μm、長さ6.5μmのパイプ状粒子と、板状の粒子が確認された。

古墳時代の土師器壺（S-5:fig. 268）は胴部のみ残存し口縁部を欠く。器表面はかなり

磨滅し顔料はほとんど失われており全体の彩色の状況は不明であるが、器外面調整時についた凹部などに赤彩が残存する。色調は赤7.5R4/8を呈する。検鏡サンプルは外面の一部より微量に採取した。結果、fig.269に見るよう、細かい朱色粒子にまじってパイプ状ベンガラが存在することが判明した。SEM (fig.270) での観察では、直径 1 μm 強、長さ 10 μm までのパイプ状ベンガラ粒子が観察された。その他のベンガラ粒子の形状について、詳細は不明であった。

以下に付着赤色顔料についての微細形態調査の結果をまとめる。

縄文時代後期：板状粒子ベンガラ+水銀朱
弥生時代中期：板状粒子ベンガラ+パイプ状ベンガラ
古墳時代前期：板状粒子ベンガラ+パイプ状ベンガラ

この結果はあくまでも多種多量な出土遺物のうち、ごくミクロな様相でしかないので、何らかの変遷や傾向を表すものとは言えない。その中で、S-1については西日本において縄文時代後期の水銀朱の使用は希薄であり、相対して北海道を中心とする東北日本では一定量の出土を見るため、他地方よりの搬入品である可能性も否定できない。いずれにせよ、水銀朱の出土例としては出現期にさかのぼるものと言え、貴重な発見である。

一方、ベンガラの使用は旧石器時代にまでさかのぼる。その中でパイプ状ベンガラについては西日本でも滋賀県などにおいて縄文時代後期の出土例が確認されている。

日暮遺跡第32次

SK 201埋甕

日暮遺跡の調査では、祭祀行為にともなうと思しき平安時代後期の土坑が検出されている。坑内には土師器甕が正位に埋置されていた。1986年の第1次調査において同様に土器埋納坑が検出されており、内部に銭貨や穀粒を埋納する例が存在することから、今回も同様の可能性があると考え、土器内に充填した土壤をそのままにして埋蔵文化財センターに持ち帰った。

まずはX線透過により内部の調査を行なった。結果、内底に銭貨が1点存在することが判明し、この画像をもとに、土砂を慎重に除去した。出土した銭貨は銅貨であり、腐食により銘文は判読できなかった。しかし直徑が19.5mmを測り、遺構の年代からも「承和昌寶(初鑄835年)」と推定される。また器内面下半には黒色の付着物が見られ、特に銅銭と器壁の間際に纖維状の有機物が残存する。銅銭以外に何か内容物が存在した可能性もあるが、詳細は不明である。



fig.271 SK 201出土 土師器甕

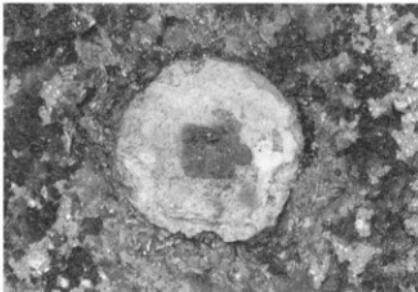


fig.272 S-5-1 同左 瓢内埋納銅錢

種子圧痕 (II)

土師器裏の器外面下部には、植物種子と考えられる圧痕が5箇所確認できた (fig. 273)。これらは圧痕1～4の群と圧痕5に分かれる。これらを実体顕微鏡で観察した結果、圧痕1～3には基部に小梗と思しき筋状の構造が認められ、花序を形成するものと考えられる (fig. 274)。また、圧痕5には先端部分に連続するように見える針状突起が (fig. 276, 277) 存在する。これは圧痕5に付属する芒の可能性がある。また圧痕2の基部には第1小花の護穎と思しき構造を認めた。さらに、いずれの圧痕の護穎表面にも網目状の紋様を確認した (fig. 275)。これらの観察の結果、いずれもイネ科圧痕である可能性が高い。

また法量計測にあたり、シリコーン合成樹脂を用いてポジティプレプリカを作成し、計測を行なった。計測値は表16・fig. 278のとおり、粒長平均7.33mm (標準偏差=±0.22)、粒幅平均3.37mm (標準偏差=±0.07) となる。比較のため、野生種および日本と中国の在来品種の平均値も記した。これによると粒幅は栽培品種にグルーピングされることがわかる。また粒長は相対的に長粒であり、長／幅の比率においては栽培品種と野生種の中間的な数値を示す。近世・近代の栽培品種に比較すればやや野生種に近い可能性もある。ただし今回調査した資料は耕圧痕である。分類をより有効にするためには、胚乳そのものについて調査する必要があり、今回の結果はあくまでも予測的なものと言わざるを得ない。

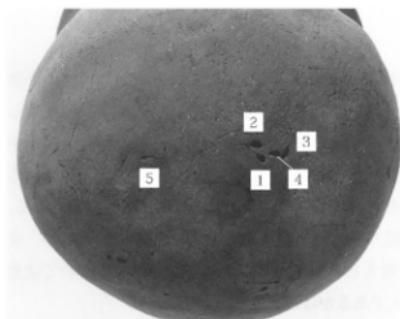


fig.273 SK 201出土 土師器裏底面

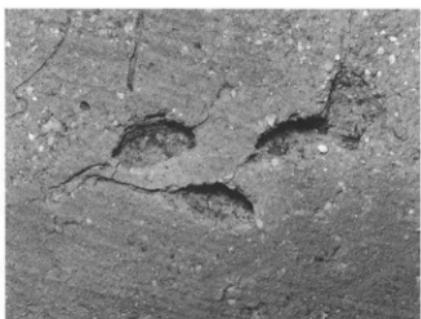


fig.274 圧痕1～4 (2.5倍)



fig.275 圧痕4 (7.5倍)



fig.276 圧痕5 (2.6倍)



fig.277 圧痕5レプリカ (4倍)

	系統品種	粒長 ±S.D.	粒幅 ±S.D.	粒厚 ±S.D.	長／幅 ±S.D.	形(%)
日本温熱 栽培 稻江種	1	7.37	3.33	2.37~	2.21	—
	2	7.52	3.44	2.38~	2.19	—
	3	6.99	3.42	2.02~	1.89	1.27~
	4	7.51	3.36	1.85~	2.24	1.28~
	5	7.25	3.28	—	2.21	6.78
	田代(±5平均値)	7.33	3.37	2.16	2.19	—
野生種	W1822(中國)	6.13	2.81	2.60	2.19	—
	W1865(中國)	7.30	2.87	1.89	2.47	—
	W2036(ビルマ)	6.59	2.78	1.84	2.26	—
	W1294(北島)	6.26	3.10	0.15	4.33	—
	W1294(北島)	7.53	2.66	1.89	2.70	—
	W1294(北島)	6.19	3.10	0.67	4.11	—
日本 在来品種	稲穀 (高木・天孫)	5.93	3.27	2.16	1.82	—
	白玉 (高木・高木2)	6.18	3.17	0.17	3.68	—
	白玉 (高木・高木2)	6.56	3.67	2.26	1.79	—
	白玉 (高木・高木2)	6.12	3.09	0.60	5.04	—
	白玉 (山田・高木2)	6.33	3.39	2.23	1.89	—
	白玉 (山田・高木2)	6.11	3.17	0.68	4.66	—
日本 在来品種	白玉 (高木・昭治3)	6.36	3.36	2.00	1.75	—
	白玉 (高木・昭治10)	6.30	3.44	2.22	1.84	—
	白玉 (高木・昭治10)	6.14	3.19	0.67	4.66	—
	白玉 (高木・昭治15)	5.96	3.23	2.14	1.85	—
	白玉 (高木・昭治15)	6.21	3.12	0.68	4.66	—
	白玉 (山田・昭治26)	6.20	3.42	2.29	1.82	—
中国 在来品種	白玉 (山田・昭治26)	6.30	3.15	0.69	4.99	—
	白玉 (山田・昭治31)	6.54	3.69	2.32	1.78	—
	白玉 (山田・昭治31)	6.20	3.14	0.69	4.66	—
中国 在来品種	洋相種	7.76	2.98	2.01	2.84	—
	洋相種	9.30	3.15	0.68	1.51	—
	結香種	7.17	2.77	1.83	2.59	—
	結香種	6.19	3.05	0.68	4.59	—

表16 種法量一覧

(参考: 1991年好喜久生編『東アジアの種子植物と古代耕作文化』)

大型植物化石

また、土坑埋土からは炭化した大型植物化石が2点混入していた。これらはコムギ胚乳 (fig.279) と、オオムギ胚乳 (fig.280) であると考えられる。コムギ胚乳は炭化し黒色を呈する。法量は粒長5.39mm・粒幅3.43mm・粒厚2.29mmを測る楕円形。腹面の正中線に溝が存在し、背面正中線基部には胚の痕跡と考えられる凹みが観察できる。考えられるものは炭化し黒色を呈する。先端を欠損しており、細長いラグビーボール形である。法量は残存粒長5.25mm・粒幅2.58mm・粒厚1.94mmを測る。腹面には正中線上に溝が、また背面の基部正中線上には胚の痕跡と考えられる凹みが存在する。これらについては意識的に埋納されたものか、無意識の混入であるかは明瞭でない。



fig.279 炭化コムギ胚乳 (8倍、左：腹面、右：背面)

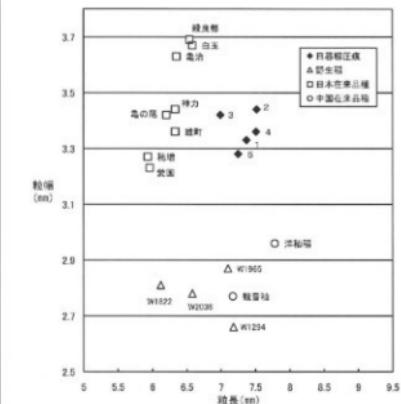


fig.278 粒粒長／幅散布図



fig.280 炭化オオムギ胚乳 (8倍、左：腹面、右：背面)

遺跡名	次数	主な出土遺物	点数
北青木	6	鉢津 鉄釘	4
本山北畠	3	鉄釘 銅錢	5
住吉宮町	45	鉄刀 鉄鎌 鉄具 鉛滓	29
住吉宮町	46	鉄剣 鉄刀子 鉄鎌	13
六甲川上流域水車群	1	鋼塊 鉄釘	4
日暮	32	鋼錢 鉄釘	3
日暮	33	鉄釘 銅錢 鉛滓	27
雲井	28	ヤリガンナ 鉛滓	6
雲井	30	鉄釘	1
楠・荒田町	43	鉄釘 鉛滓	12
楠・荒田町	44	佛印	3
兵庫津	48	鉄釘 煙管 銅製品	19
兵庫津	49	鉄釘 銅錢 煙管 銅簪	11
兵庫津	試掘	鉛滓 銅製品	3
上沢	56	鉄釘 銅錢 鉛滓	9
日下部	12	鉄刀子 鉄釘	3
中	24	鉄釘	2
若松町東	1	鉄釘 鉛滓	5
若松町東	2	ヤリガンナ	1
大橋町東	1	鉄釘 鉛滓	3
松野	42-1	鋼錢	3
松野	42-2	鉄釘 銅錢 煙管 鉛滓	10
松野	43	鋼錢	1
玉津田中	37	鉄釘 銅茶托	4
出合	40	鉄釘 鉛滓	12
出合	42	鋼錢	1
計194点			

表17. 平成20年度出土金属製品

遺跡名	次数	主な出土遺物	点数
北青木	6	木札 角棒	3
兵庫津	試掘	絲	1
上沢	56	容器底板 桁	2
玉津田中	37	容器底板 桁 加工材	6
計12点			

表18. 平成20年度出土木製品

遺跡名	次数	分析項目	資料数
本山中野	3	樹種同定(生材)	8点
		大型植物化石	2ブロック
楠・荒田町	43	花粉分析	3ブロック
上沢	55	樹種同定(生材)	11点
垂水日向	34	樹種同定(生材)	23点
芝崎	4	樹種同定(生材)	35点
玉津田中	36	樹種同定(生材)	21点

表19. 平成20年度自然科学分析委託

(注) 種子圧痕の調査にあたり、㈱パレオ・ラボ 佐々木由香氏より助言を頂戴した。

平成20年度 神戸市埋蔵文化財年報

平成23年3月 印刷

平成23年3月 発行

発行 神戸市教育委員会文化財課

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

TEL 078(322)5799

印刷 丸山印刷株式会社

高砂市神爪1丁目11番33号

TEL 079(432)1515

